

野多目A遺跡 4

— 野多目 A 遺跡群第 4 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第527集

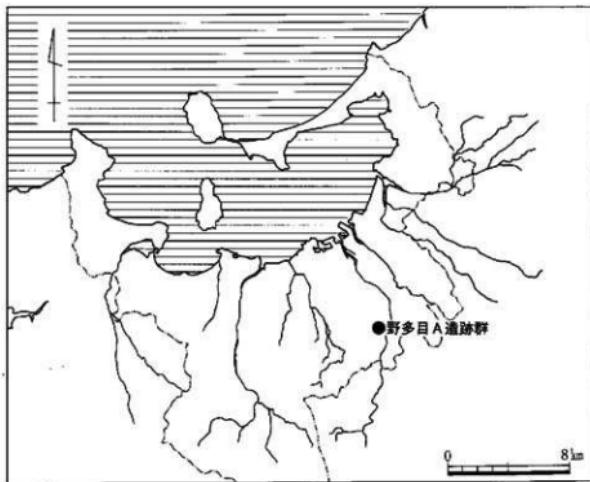
1997

福岡市教育委員会

野多目A遺跡 4

— 野多目 A 遺跡群第 4 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第527集



1997

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くより大陸との対外交流の場所として栄え、その結果大陸よりもたらされた数多くの文化財が今なお地下に眠っています。福岡市教育委員会では、埋蔵文化財を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。本書におさめた野多目A遺跡群第4次調査は、南区野多目の市営住宅建設にともなって行ったもので、弥生時代から古墳時代にかけての集落や、『筑前国統風土記拾遺』中の「古村」に相当すると見られる中近世の集落などを確認することができました。

調査に際し、地元の皆様には快くご理解とご協力を頂き、調査を円滑に進めることができましたことをお礼申し上げます。

調査に関わられた方々に対し、深く感謝の意を表するとともに、この報告書が地域の皆様に幅広く活用され、文化財保護のご理解を深める一助とならんことを願います。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　　言

- 本書は平成7年5月22日から平成8年2月29日にかけて福岡市教育委員会が行った、南区野多目1丁目地内所在の野多目A遺跡群第4次発掘調査報告書である。
- 発掘調査は、福岡市建築局管理部住宅計画課が計画した、公営野多目住宅（仮称）建設事業に伴う事前調査として実施した。
- 調査で検出した遺構は、その性格を問わず発見順に連番号を与えた。また、遺構の性格を示す記号としてSB（掘立柱建物）、SC（竪穴住居跡）、SD（溝状遺構）、SE（井戸）、SK（土坑、土壙墓）、SX（性格不明遺構）を用いた。また、建物等の柱穴には別途番号を与え、これはPit-（番号）で表記した。
- 本書に使用した遺構実測図の作製は、吉武学（福岡市教育委員会）、立石真二、吹春憲司が行った。
- 本書に使用した遺物実測図の作製には主に田中克子があたり、吉武がこれを補った。
- 本書に使用した図の製図は、吉武、田中、大神真理子が行った。
- 本書に使用した写真の撮影は、吉武が行った。
- 本書に使用した方位は全て磁北である。
- 本書の執筆は、遺物を田中が行い、吉武が補足した。その他は吉武が行った。なお、出土遺物のうち、陶磁器については「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV－博多－福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊 福岡市教育委員会 1984）に基づいて記述した。また、近世国産陶磁器の一部については、九州陶磁文化館の人橋康二氏の教示を得た。
- 本書の編集は吉武が行った。
- 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。なお、遺物実測図右下の番号は、上段が通し番号、下段が遺物登録番号（検索用）である。

調査番号	9514		遺跡略号	NMA 4	
調査地地籍	南区野多目1丁目地内		分布地図番号	0141	
開発面積	9,082m ²	調査対象面積	9,082m ²	調査面積	6,687m ²
調査期間	1995年（平成7年）5月22日～1996年（平成8年）2月29日				

本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
II.	遺跡の位置と環境	2
III.	調査の記録	7
1.	調査の概要	7
2.	縄文時代の遺物	7
3.	弥生時代の遺構と遺物	8
(1)	溝状遺構	8
(2)	土坑	8
4.	弥生時代末～古墳時代初頭の遺構と遺物	9
(1)	掘立柱建物	10
(2)	竪穴住居跡	12
(3)	溝状遺構	42
(4)	土坑	49
5.	古代の遺構と遺物	50
(1)	溝状遺構	50
(2)	テラス状遺構	54
(3)	土坑	59
6.	中・近世の遺構と遺物	60
(1)	掘立柱建物	61
(2)	溝状遺構	81
(3)	井戸	88
(4)	土坑	97
7.	時期不明の遺構	121
8.	その他の遺構と遺物	121
IV.	おわりに	128

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig. 2	野多目遺跡群各調査地点位置図 (1/4,000)	4
Fig. 3	第4次調査区位置図 (1/2,000)	5
Fig. 4	第4次調査区域図 (1/1,000)	6
Fig. 5	縄文時代包含層出土遺物 (1/3)	7
Fig. 6	SD-01横断面図 (1/40)	8
Fig. 7	SK-41実測図 (1/40)	8
Fig. 8	SK-41出土遺物実測図 (1/3)	9

Fig. 9	弥生時代末～古墳時代初頭の遺構配置図（1/600）	9
Fig.10	据立柱建物実測図 I (1/80)	11
Fig.11	SB-126・129・130出土遺物実測図 (1/3・1/1)	12
Fig.12	SC-07実測図 (1/60)	13
Fig.13	SC-07出土遺物実測図 I (1/3)	14
Fig.14	SC-07出土遺物実測図 II (1/3・1/2)	15
Fig.15	SC-08実測図 (1/60)	17
Fig.16	SC-08出土遺物実測図 I (1/4)	18
Fig.17	SC-08出土遺物実測図 II (1/3)	19
Fig.18	SC-08出土遺物実測図 III (1/3)	21
Fig.19	SC-08出土遺物実測図 IV (1/3)	22
Fig.20	SC-08出土遺物実測図 V (1/3)	23
Fig.21	SC-08出土遺物実測図 VI (1/3)	25
Fig.22	SC-08出土遺物実測図 VII (1/3・1/2・1/1)	26
Fig.23	SC-09実測図 (1/60)	27
Fig.24	SC-09出土遺物実測図 I (1/3)	28
Fig.25	SC-09出土遺物実測図 II (1/3・1/4)	29
Fig.26	SC-11実測図 (1/60)	30
Fig.27	SC-11出土遺物実測図 (1/3)	30
Fig.28	SC-12実測図 (1/60)	31
Fig.29	SC-12出土遺物実測図 (1/3・1/1)	33
Fig.30	SC-13実測図 (1/60)	34
Fig.31	SC-13出土遺物実測図 I (1/3)	36
Fig.32	SC-13出土遺物実測図 II (1/3)	37
Fig.33	SC-13出土遺物実測図 III (1/3)	38
Fig.34	SC-13出土遺物実測図 IV (1/3・1/4)	39
Fig.35	SC-13出土遺物実測図 V (1/2)	40
Fig.36	SC-14実測図 (1/60)	41
Fig.37	SC-14出土遺物実測図 (1/3)	41
Fig.38	SD-04・10・37①～③断面図・土層断面図 (1/40)	42
Fig.39	SD-04出土遺物実測図 (1/3)	42
Fig.40	SD-10出土遺物実測図 I (1/3)	44
Fig.41	SD-10出土遺物実測図 II (1/3・1/2・1/1)	45
Fig.42	SD-37出土遺物実測図 I (1/3)	47
Fig.43	SD-37出土遺物実測図 II (1/3・1/4)	48
Fig.44	SK-15・17実測図 (1/40)	49
Fig.45	SK-15出土遺物実測図 (1/3)	49
Fig.46	SD-50平面実測図 (1/600)	50
Fig.47	SD-50土層断面図 (1/40)	51
Fig.48	SD-50出土遺物実測図 I (1/3)	52

Fig.49 SD-50出土遺物実測図Ⅱ (1/3・1/1)	53
Fig.50 テラス状遺構実測図 (1/200)	54
Fig.51 テラス状遺構出土遺物実測図Ⅰ (1/3)	55
Fig.52 テラス状遺構出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	56
Fig.53 テラス状遺構出土遺物実測図Ⅲ (1/3)	57
Fig.54 テラス状遺構出土遺物実測図Ⅳ (1/3)	58
Fig.55 テラス状遺構出土遺物実測図Ⅴ (1/3)	59
Fig.56 SK-59実測図 (1/40)	59
Fig.57 SK-59出土遺物実測図 (1/3)	59
Fig.58 中・近世の遺構配置図 (1/600)	60
Fig.59 掘立柱建物実測図Ⅱ (1/80)	61
Fig.60 掘立柱建物実測図Ⅲ (1/80)	63
Fig.61 掘立柱建物実測図Ⅳ (1/80)	64
Fig.62 掘立柱建物実測図Ⅴ (1/80)	65
Fig.63 掘立柱建物実測図Ⅵ (1/80)	67
Fig.64 掘立柱建物実測図Ⅶ (1/80)	68
Fig.65 掘立柱建物実測図Ⅷ (1/80)	69
Fig.66 掘立柱建物実測図Ⅸ (1/80)	71
Fig.67 掘立柱建物実測図Ⅹ (1/80)	72
Fig.68 掘立柱建物実測図Ⅺ (1/80)	73
Fig.69 掘立柱建物実測図Ⅻ (1/80)	75
Fig.70 掘立柱建物実測図Ⅼ (1/80)	76
Fig.71 掘立柱建物実測図Ⅽ (1/80)	77
Fig.72 掘立柱建物実測図Ⅾ (1/80)	78
Fig.73 SB-127・128・143・147・148・153・156出土遺物実測図 (1/3)	79
Fig.74 SB-159・160・163・166・167・170・171出土遺物実測図 (1/3)	80
Fig.75 SD-30土層断面図 (1/40)	81
Fig.76 SD-30出土遺物実測図Ⅰ (1/3・1/2)	82
Fig.77 SD-30出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	83
Fig.78 SD-24・37④～⑦・40・43・44・67横断面図・土層断面図 (1/40)	84
Fig.79 SD-24・37④～⑦出土遺物実測図 (1/3)	85
Fig.80 SD-40出土遺物実測図 (1/3)	86
Fig.81 SD-43・44・67出土遺物実測図 (1/3・1/1)	87
Fig.82 SE-32実測図 (1/40)	89
Fig.83 SE-32出土遺物実測図 (1/3)	89
Fig.84 SE-70実測図 (1/40)	90
Fig.85 SE-70出土遺物実測図Ⅰ (1/3)	91
Fig.86 SE-70出土遺物実測図Ⅱ (1/4)	92
Fig.87 SE-70出土遺物実測図Ⅲ (1/4)	93
Fig.88 SE-70出土遺物実測図Ⅳ (1/4)	94

Fig.89	SE-70出土遺物実測図V (1/4)	95
Fig.90	SE-75実測図 (1/40)	96
Fig.91	SE-75出土遺物実測図 (1/3)	96
Fig.92	SK-19・20・21・22・33実測図 (1/40)	98
Fig.93	SK-20・33出土遺物実測図 (1/3)	99
Fig.94	SK-34実測図 (1/60)	100
Fig.95	SK-34出土遺物実測図 (1/3)	101
Fig.96	SK-63実測図 (1/60)	102
Fig.97	SK-63出土遺物実測図 (1/3・1/4)	102
Fig.98	SK-64実測図 (1/60)	103
Fig.99	SK-64出土遺物実測図 (1/3)	104
Fig.100	SK-65実測図 (1/60)	104
Fig.101	SK-65出土遺物実測図 I (1/3)	105
Fig.102	SK-65出土遺物実測図 II (1/4)	106
Fig.103	SK-66実測図 (1/60)	107
Fig.104	SK-66出土遺物実測図 I (1/3)	108
Fig.105	SK-66出土遺物実測図 II (1/4)	109
Fig.106	SK-68実測図 (1/60)	110
Fig.107	SK-68出土遺物実測図 (1/3)	110
Fig.108	SK-69・71・73・76・77・78・79実測図 (1/40)	112
Fig.109	SK-71・73出土遺物実測図 (1/3)	113
Fig.110	SK-80・81・82実測図 (1/40)	114
Fig.111	SK-80・81出土遺物実測図 (1/3)	115
Fig.112	SK-83・85・90・91実測図 (1/40)	116
Fig.113	SK-83・85出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)	117
Fig.114	SK-95・96・97・98・102・103・104・106実測図 (1/40)	119
Fig.115	SK-96・102・103出土遺物実測図 (1/3)	120
Fig.116	SK-05実測図 (1/40)	121
Fig.117	SD-02出土遺物実測図 I (1/3)	122
Fig.118	SD-02出土遺物実測図 II (1/3・1/1)	123
Fig.119	SD-03出土遺物実測図 (1/3・1/1)	125
Fig.120	SK-53・107出土遺物実測図 (1/4・1/3)	127
Fig.121	その他の出土遺物実測図 (1/3・1/1)	127
Fig.122	出土土器の様相	129

付図 野多目A遺跡群第4次調査遺構配置図 (1/200)

図版目次

- | | | |
|--------|---|---|
| PL. 1 | 1. 調査区北半部（上空から） | 2. 調査区南半部（上空から、上方が北） |
| PL. 2 | 1. 調査区北半部（南東上空から） | 2. 調査区南半部（北西上空から） |
| PL. 3 | 1. 調査区北西部（上空から、上方が北） | 2. 調査区北東部（上空から、上方が北） |
| PL. 4 | 1. 調査区南西部（上空から、上方が北） | 2. 調査区南東部（上空から、上方が北） |
| PL. 5 | 1. SD-01（南西から） | 2. 調査区北半中央部（上空から、上方が北） |
| PL. 6 | 1. SB-124～133（上空から、上方が北） | 2. SC-07～09・11～14、SD-10（上空から、上方が北） |
| PL. 7 | 1. SC-07遺物出土状況（南から）
3. SC-08遺物出土状況（南西から）
5. SC-09遺物出土状況（南西から）
7. SC-11（東から） | 2. SC-07完掘状況（西から）
4. SC-08完掘状況（南東から）
6. SC-09完掘状況（南西から）
8. SC-12遺物出土状況（南西から） |
| PL. 8 | 1. SC-11・12完掘状況（西から）
3. SC-13遺物出土状況（北西から）
5. SC-13完掘状況（南東から）
7. SD-04（南東から） | 2. SC-11・12完掘状況（南から）
4. SC-13完掘状況（北西から）
6. SC-14（南西から）
8. SD-37土層断面（南から） |
| PL. 9 | 1. SD-50北半部（南西から） | 2. SD-50南半部（南西から） |
| PL. 10 | 1. SD-50土層断面A-B（南西から）
3. SD-50土層断面E-F（南西から）
5. SD-50土層断面I-J（南西から）
7. SD-30南半部（西から） | 2. SD-50土層断面C-D（南西から）
4. SD-50土層断面G-H（南西から）
6. SD-30北半部・40（南西から）
8. SD-30土層断面（西から） |
| PL. 11 | 1. SB-121～123（上空から、上方が北） | 2. 調査区南側の掘立柱建物群（上方が南） |
| PL. 12 | 1. 調査区南西の掘立柱建物群①（上方が南） | 2. 調査区南西の掘立柱建物群②（上方が南） |
| PL. 13 | 1. SD-37上層断面（南から）
3. SD-40土層断面C-D（南西から）
5. SE-70井戸偏検出状況（南から）
7. SE-70井戸偏光掘状況（南から） | 2. SD-40土層断面A-B（南西から）
4. SE-70上層土層断面（南から）
6. SE-70井戸偏検出状況（南から）
8. SE-75（北西から） |
| PL. 14 | 1. SK-20（南東から）
3. SK-34（南西から）
5. SK-63（西から）
7. SK-64（北から） | 2. SK-33（西から）
4. SK-34遺物出土状況（南西から）
6. SK-63遺物出土状況（西から）
8. SK-65（南東から） |
| PL. 15 | 1. SK-65南半部遺物出土状況（南東から）
3. SK-66（南東から）
5. SK-68遺物出土状況（南西から）
7. SK-71（東から） | 2. SK-65北半部遺物出土状況（南東から）
4. SK-68（南西から）
6. SK-69（南西から）
8. SK-73（北西から） |
| PL. 16 | 1. SK-76（南西から）
3. SK-80（南西から）
5. SK-85（南西から）
7. SK-95（南西から） | 2. SK-80（南から）
4. SK-82（南から）
6. SK-90（南西から）
8. SK-96・106（南西から） |
| PL. 17 | 出土遺物 I | |

- PL.18 出土遺物 II
- PL.19 出土遺物 III
- PL.20 出土遺物 IV
- PL.21 出土遺物 V
- PL.22 出土遺物 VI
- PL.23 出土遺物 VII
- PL.24 出土遺物 VIII
- PL.25 出土遺物 IX
- PL.26 出土遺物 X
- PL.27 出土遺物 XI
- PL.28 出土遺物 XII
- PL.29 出土遺物 XIII
- PL.30 出土遺物 XIV

I. はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市南区野多目1丁目地内において公営住宅の建設計画がおこり、平成6年7月4日付けで埋蔵文化財の事前審査依頼が、建築局管理部住宅計画課から教育委員会文化財部埋蔵文化財課に提出された。申請地は福岡市埋蔵文化財分布地図の上では野多目A遺跡群に含まれており、先に民間の宅地造成が計画され、既に試掘調査を行って遺跡の存在を確認していた地区にあたっていた。平成5年3月9日と5月11日の2回にわたって行った試掘調査では、地表下約30~70cmで堅穴住居跡、溝、柱穴などの遺構を検出し、弥生時代、古墳時代及び中世を中心とした遺物が出土した。その後、この民間開発は中止となり、福岡市が土地を買収し、頭初の計画が起こされたものである。埋蔵文化財課では遺跡の保存を考慮し、事業の計画中止や、設計変更を含めて住宅計画課と協議を重ねたが、計画の中止・変更は困難な状況にあり、また建物の構造上地下の遺構への影響は避け難く、やむなく記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成7年度の令達事業として行うこととなり、平成7年5月22日から平成8年2月28日にかけて実施した。また、整理報告書作製は、平成8年度に行つた。

2. 調査の組織

調査は以下の組織で行った。調査中は周辺住民の皆様にご理解、ご協力を頂き、調査を円滑に進めることができた。ここに記して感謝を申し上げたい。

調査委託 福岡市建築局管理部住宅計画課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 尾花 剛（前任）、町田英俊（現任）

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

埋蔵文化財第2係長 山口康治

調査庶務 埋蔵文化財第1係 西出結香

調査担当 埋蔵文化財第2係 荒牧宏行（試掘担当）

埋蔵文化財第1係 浜石哲也、長家 伸、榎本義嗣（事前協議担当）

埋蔵文化財第2係 吉武 学（調査担当）

調査作業 秋山豊、池田省三、大谷政道、岡中一臣、越智信孝、金沢春雄、金子國雄、熊本義徳、小林義徳、渋谷博之、高崎秀巳、高田勘四郎、高田勲、中川敏男、西田昭、二宮白人、羽岡正春、萩尾行雄、平井武夫、吹呉憲司、藤田圭三、藤野保夫、松原高博、森垣隆視、森本勇夫、米倉國弘、有田恵子、石川洋子、石谷香代子、泉本タミ子、岩本三重子、金子澄子、唐島栄子、米田理恵子、境フジ子、酒井康恵、篠原恵子、杉村百合子、澄川アキヨ、田中トミ子、寺嶋道子、中川原美智子、中村フミ子、鍋山治子、西村晴香、西山洋子、播磨千恵子、藤野信子、福場真由美、北条こずえ、水田ミヨ子、森山キヨコ、結城フヂコ

調査員 田中克子、立石真二

整理作業 安部国恵、有島美江、井澤早苗、大神真理子、太田富美子、富田輝子、宮坂環

II. 遺跡の位置と環境

野多目A遺跡群は、福岡平野を北流する那珂川西岸に形成された河岸段丘上に位置している。那珂川西岸には、浸食によって形成された残丘や沖積微高地がいくつか形成されており、こうした自然の高まりの上に大小規模の遺跡の存在することが近年の調査で明らかとなってきた。野多目A遺跡群は、その契機となった野多目小学校建設に伴う調査を含め、既に4次にわたる調査が行われており、周辺の野多目B・C・D遺跡群、和田B遺跡などの調査により、周辺の土地利用の状況が次第に明らかとなってきた。このような地形の利用の開始は旧石器時代に遡り、野多目C遺跡群では三稜尖頭器・台形石器などが出土している。縄文時代中期～後期初頭および晩期には、福岡平野では珍しい貯蔵穴を持つ集落が形成される。稲作開始期には初期水田を伴う集落が形成され、その後集落は、弥生時代前期末～中期初頭、古墳時代後期、古代、中～近世にそれぞれ形成されていることがこれまでの調査により明らかとなっている。今回の調査ではこれに更に、弥生時代末～古墳時代初頭、中世末～近世初頭の集落の調査例を追加することができた。

既往の調査には以下のものがあり、全て福岡市教育委員会によって実施されている（市報は福岡市埋蔵文化財調査報告書の略）。なお遺跡名は福岡市文化財分布地図の呼称に従った。

野多目A遺跡群第1次調査「野多目前田遺跡調査概報」市報第85集 1982

小学校建設に伴い1979～1980年に調査。古代の溝、13～14世紀の水出（溝、堰、橋）を確認し、内行花文鏡、古墳時代の祭祀遺物（ミニチュア土器、土製模造鏡、土製勾玉・玉類）、古代の多量の瓦類・墨書き土器、中世の輸入陶磁器などが出土した。

野多目A遺跡群第2次調査「野多目遺跡群－稲作開始期の水田遺跡の調査－」市報第159集 1987

公園住宅建設に伴い1983～1984年に調査。弥生時代開始期（突堤式土器単純期）の水田（水路、井堰、水口、土坑等）、中世の溝・掘立柱建物を確認し、上器、石器、木器が出土した。

野多目A遺跡群第3次調査「野多目A－野多目A遺跡群第3次調査報告－」市報第263集 1991

民営住宅建設に伴い1989年に調査。中世の集落（掘立柱建物、道路、溝）、近世の溝を確認し、縄文時代・古墳時代・中世・近世の遺物が出土した。本地區（第4次調査）と同一の段丘面上に位置しており、遺物の時期的なあり方が近似している。

野多目A遺跡群第4次調査 本報告

野多目B遺跡群第1次調査「野多目台－野多目B・利田B遺跡第1次調査報告－」市報第413集 1995

公園住宅建設に伴い1992年に調査。縄文時代後期前半の旧河川・溝状遺構、弥生時代前期の水出水路、8世紀代の土壙墓を確認し、各時代の土器や石器の他、縄文時代の堅果類などが出土した。

野多目C遺跡群第1次調査「野多目括渡遺跡」市報第93集 1983

公園建設に伴い1980・1981年に調査。盛土保存されたためプランの確認に留めている。旧石器時代の包含層、縄文時代中～後期の貯蔵穴・溝・河川、弥生時代前期後半～中期初頭の住居跡・竪穴、古墳時代の住居跡、古代（7～9世紀）の掘立柱建物などを多数確認した。

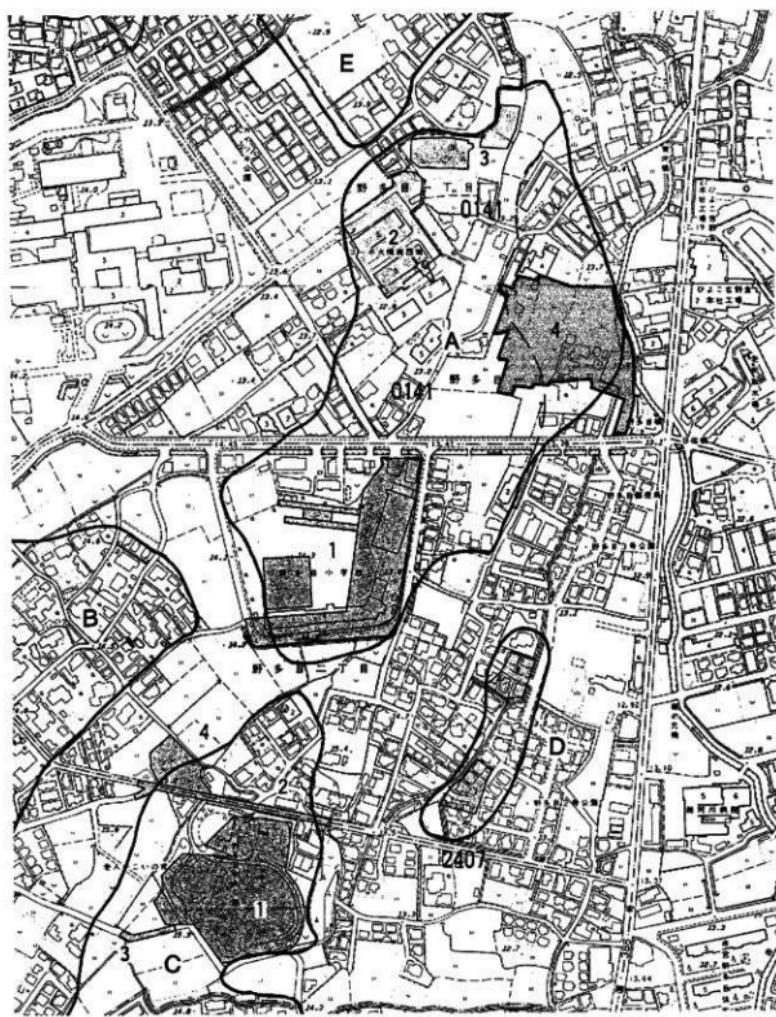
野多目C遺跡群第2次調査「野多目括渡遺跡Ⅱ」市報第136集 1986

下水道建設に伴い1984年に調査。縄文時代中期後半～後期初頭の貯蔵穴、古墳時代のピット群（削平された竪穴住居跡）・溝、古代の流路などが確認され、縄文土器・石器、古墳時代～古代の須恵器・



1. 野多目 A 遺跡群第4次調査地点
2. 野多目 A 遺跡群
3. 高宮 B 遺跡
4. 中村町遺跡
5. 野間 A 遺跡
6. 野間 B 遺跡
7. 若久 A 遺跡
8. 若久 B 遺跡
9. 大橋 A 遺跡
10. 大橋 B 遺跡
11. 大橋 C 遺跡
12. 大橋 D 遺跡
13. 大橋 E 遺跡
14. 和田藏寺遺跡
15. 三宅 A 遺跡
16. 三宅 B 遺跡
17. 三宅 C 遺跡
18. 和田 A 遺跡群
19. 和田 B 遺跡群
20. 野多目浦ノ池遺跡
21. 野多目 B 遺跡群
22. 野多目 C 遺跡群
23. 野多目 D 遺跡群
24. 所形原遺跡
25. 花畠 C 遺跡
26. 朝内片古墳群
27. 老司 A 遺跡
28. 老司 B 遺跡
29. 老司瓦窯跡
30. 老松神社古墳群
31. 老司古墳
32. 北上塙古墳群 A群
33. 中尾古墳
34. 老司池 D 遺跡
35. 野口遺跡
36. 鶴田遺跡
37. 浦ノ田 1号墳
38. 老司池 A 遺跡
39. 梶音堂遺跡群
40. 郡珂遺跡群
41. 井尻 A 遺跡
42. 諏訪 A 遺跡群
43. 井尻 B 遺跡群
44. 井尻古墳
45. 井尻 C 遺跡群
46. 横手遺跡群
47. 佐遺跡群
48. 上佐作遺跡群
49. 須玖遺跡群
50. 弥永原遺跡群
51. 肇弥都 A 遺跡群
52. 肇弥都 B 遺跡群
53. 弥永遺跡群
54. 下白水大塚古墳
55. H 拝冢古墳
56. 柏田遺跡

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



A 野多目A遺跡群 B 野多目B遺跡群 C 野多目C遺跡群
 D 野多目D遺跡群 E 三宅B遺跡
 (遺跡内の番号は各遺跡の調査次数を示す)

Fig. 2 野多目遺跡群各調査地点位置図 (1/4,000)

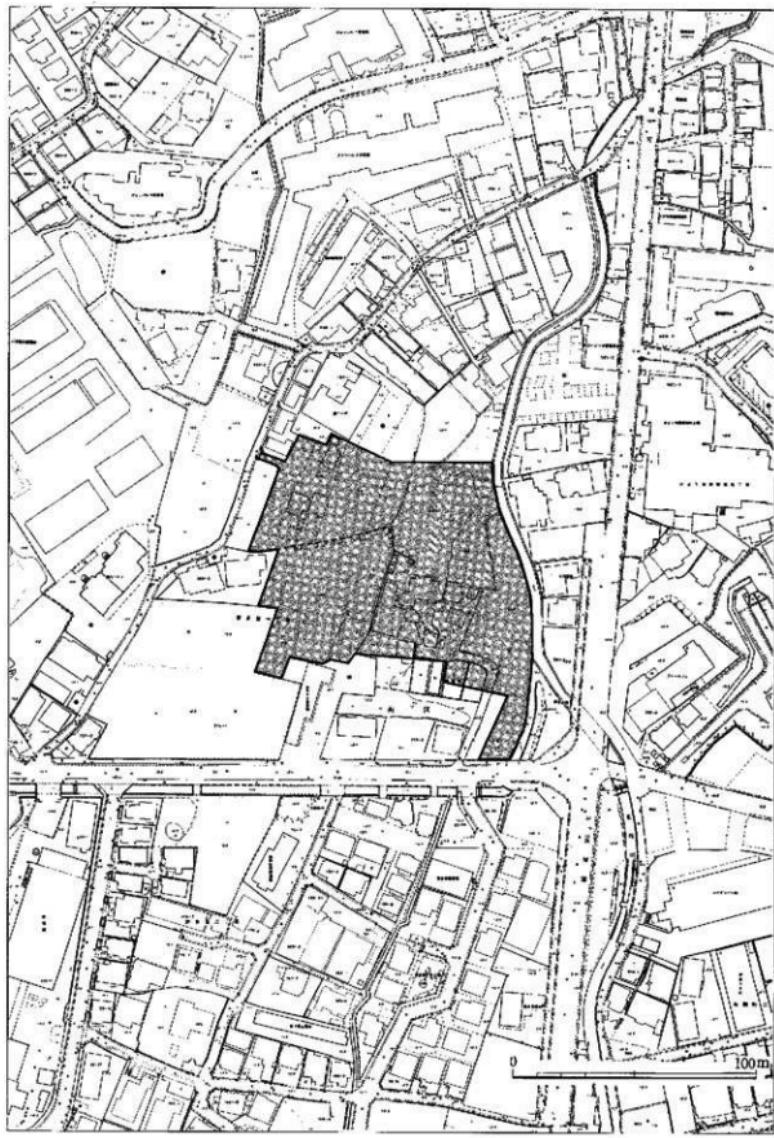


Fig. 3 第4次調査区位置図 (1/2,000)

土師器・瓦などが出土した。

野多目C遺跡群第3次調査「野多目括渡遺跡Ⅲ」市報第160集 1987

道路建設に伴い1985年に調査。縄文時代晩期の貯蔵穴・溝状遺構・河川、中世の溝状遺構を確認し、土器・石器の他、イチイガシを中心とする堅果類が多量に出土した。

野多目C遺跡群第4次調査「野多目括渡遺跡4」市報第333集 1993

民営宅地造成に伴い1991年に調査。縄文時代後期初頭の貯蔵穴・流路、古代の土坑、古墳時代～古代の遺物包含層を確認し、阿高式系土器を中心とする縄文土器がまとまって出土した。

野多目D遺跡群第1次調査「野多目古屋敷遺跡－住宅・都市整備公団野多日岡地建設に伴う文化財調査－」市報第103集 1984

公団住宅建設に伴い1982年に調査。古代の溝3条、17～18世紀の溝1条を確認し、土師器、須恵器、近世陶磁器の他、古代の瓦等が出土した。

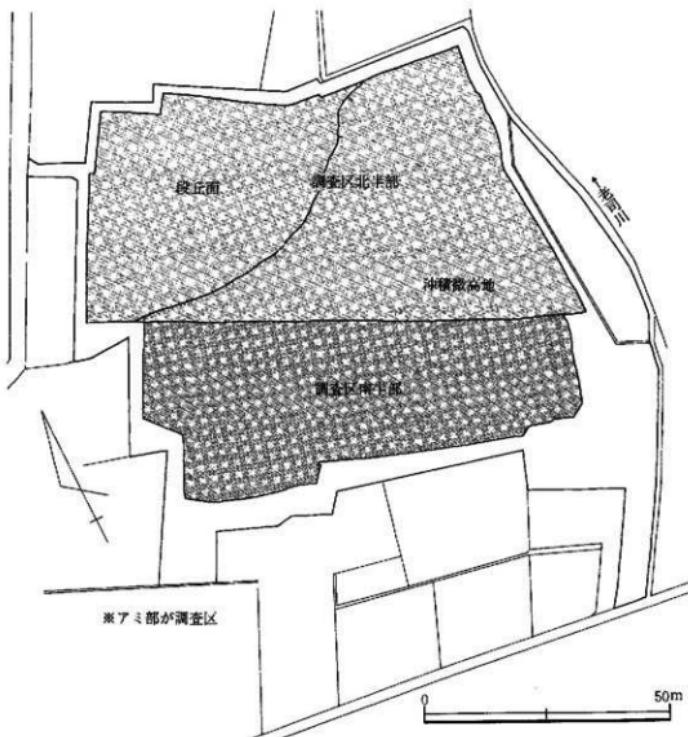


Fig. 4 第4次調査区域図 (1/1,000)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

発掘調査は平成7年5月22日から開始した。排土処理の関係上、調査区を南北に分割して調査することとし、まず北半部分から着手した。北半部の調査終了後、10月16日～10月28日にかけて排土の移動及び南半部の表土剥ぎを行い、平成8年2月29日をもって調査を完了した。

調査区は不整な多角形を呈し、南北最大長81m、東西最大長102mを測り、実質の調査面積は6,687m²である。調査区内は全体的に削平を受け、なおかつ最近の造成により厚いところで2m近い盛土がなされていた。現地表面の標高は約13.5mを測る。盛土の下は旧水田ないしは畑の耕作土で、これを除去するとすぐに遺構面となる。調査区の北西部の約1/4は河川によって浸食された中位段丘面、他は沖積微高地に区分され、両者の間には約1mの比高差がある。前者は河川の浸食及び後世の地形改変によって大きく形を変えており、調査区内では1/4周ほどの円形を呈する。野多目△遺跡群第2・3次調査と同一の段丘面に相当するものと考えられ、この段丘面上に主に弥生時代末～古墳時代初頭の集落が展開している。後者の微高地は砂ないしシルト層により形成され、平坦ではなく緩い地形の起伏があり、南東側では老司川の河道に向かって落ちている。沖積微高地上には主に中世～近世初頭の集落が分布しており、その一部は段丘面上にも及んでいる。

検出した遺構は、弥生時代前中期の溝状遺構1条、中期末～後期初頭の土坑1基、弥生時代末～古墳時代初頭の掘立柱建物6棟、竪穴住居跡7軒、溝状遺構3条、土坑3基、古代の水路1条、テラス状遺構1ヶ所、土坑（柱穴？）1基、中世～近世初頭（16世紀～17世紀）の掘立柱建物40棟、溝状遺構7条、井戸3基、土坑33基で、他に所属時期の定かでない溝状遺構や土坑が多数ある。

これらの遺構からは、日常土器の他、古墳時代初頭の製塙土器・ミニチュア土器、古代の製塙土器・越州窯系青磁、中・近世の大量的スリ鉢・柄杓形の銅製品などが出土した。また、老司川に向かって落ちる傾斜面に形成された小規模の包含層や後世の遺構に混入した状態で、縄文時代後～晩期の黒色磨研土器・石器（偏平打製石器、剥片鐵、つまみ形石器等）が、搅乱坑から古代の軒丸瓦などが出土した。

2. 縄文時代の遺物

調査区南東隅の老司川へ落ちる傾斜面で確認した遺物包含層から出土した土器である。遺物は量的には極めて少ないが、新しい時期のものは混入しておらず、旧老司川の河道内に堆積したプライマリーな包含層と思われる。縄文時代に属すると考えられる遺物は他の新しい時期の遺構からも少量出土したが、それらは各遺構の中に含めて説明を加えている。



Fig. 5 縄文時代包含層出土遺物 (1/3)

包含層出土遺物 Fig. 5

1～3は縄文時代後期の土器である。1は精製土器で、浅鉢形土器の口縁部片である。「く」字形に屈曲して開き、口縁部外面に2条の凹線文を施す。内外面を研磨しており、橙褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。2は粗製深鉢形土器の口縁部片である。外面は粗い板ナデ調整、内面はつぶし状のナデ調整である。暗褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を多量に含む。焼成は不良で脆い。3も粗製土器で、突帯文土器の底部片であろう。下端が外方へ張り出し、断面台形状を呈する。ナデ調整で、暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良である。底径8.8cm。

3. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 溝状遺構

SD-01 Fig. 6 PL. 5

調査区西端に位置し、後世の溝SD-02、04などに切られている。流路の方向は磁北から 40° 東偏し、ゆるやかに蛇行する。幅0.6m、深さ0.07mで、遺構覆土は黒色粘質土である。

出土遺物には弥生時代前期末の板付II式土器が少量あるが、細片が多く図化できなかった。この遺構を切るSD-02に混入した状態で比較的まとまった資料が出土しており、当遺構の時期決定の手がかりとなる。(121ページ参照)

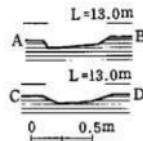


Fig. 6 SD-01
横断面図 (1/40)

(2) 土坑

SK-41 Fig. 7

調査区北東寄りの沖積微高地に検出した土坑である。平面プランは東西にやや長い隅丸方形を呈し、長径1.5m、短径1.3m、深さ0.35mを測る。底面は平坦で、底面の北寄りの位置から土器がまとめて出土した。

SK-41出土遺物 Fig. 8

4～7は弥生土器である。4は如意形口縁の壺形土器の口縁部片である。口縁端部の全幅に板小口で刻目を施す。外面ナデ調整、内面は器面が剥落して調整不明。

黄褐色を呈し、胎土に粗砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

口径は21.4cmに復元できる。5は壺形土器の底部で、底部中央には焼成後の穿孔がある。外面はハケ目、内面はナデ調整を施す。

明褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。底径9.2cm。6は底部の小片である。暗褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含み、焼成は不良である。底径9.6cm。7も底部の小片で、黄褐色を呈し、胎土に粗砂粒を多量に含み、焼成は不良である。

出土土器の一部に弥生時代前期末の土器を含むが、底部の形状から弥生時代中期末～後期初頭の遺構であると考えられる。

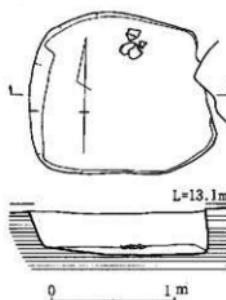


Fig. 7 SK-41実測図 (1/40)

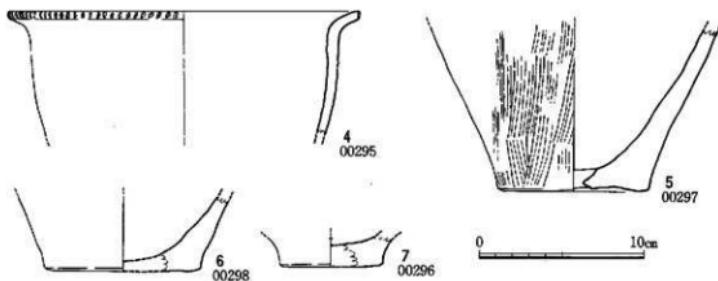


Fig. 8 SK-41出土遺物実測図 (1/3)

4. 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構と遺物 Fig. 9

当該期の遺構は掘立柱建物 6 栋、竪穴住居跡 7 軒、溝状遺構 3 条、土坑 3 基、及びピット多數がある。いずれも遺構覆土は黒褐色土で、覆土が灰褐色土の中・近世遺構とは容易に判別しうる。これらの遺構群は調査区北半部に偏って分布しており、溝状遺構 1 状を除き、全てが段丘面上に位置している。この中で注意すべきは 7 軒の竪穴住居跡と溝状遺構 SD-10・掘立柱建物 SB-134との関係である。これらは切り合いから見て、竪穴住居跡と溝で区画された掘立柱建物へ変遷するものと考えられる。SD-10は北端でSC-07を切るが、SC-07上で東に向きを変え、方形に巡っているものと考えられる。当然、SC-08を切る形になるが、遺構の覆土が極めて近似しているため、調査時にSD-10のプランを把握することができなかった。

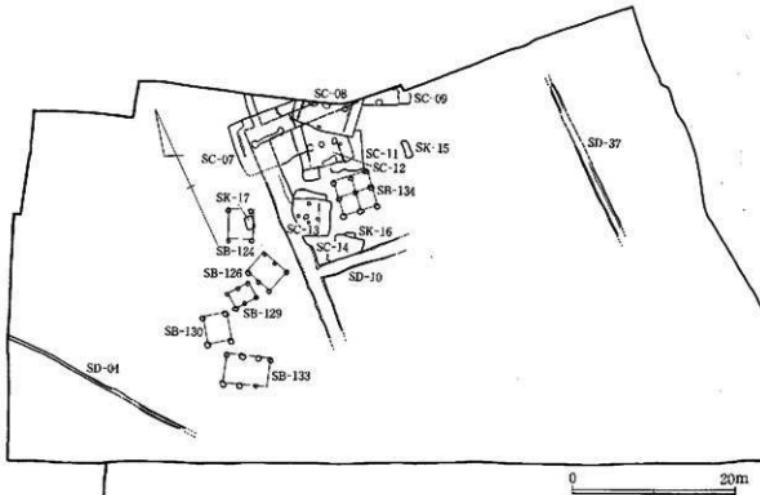


Fig. 9 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構配置図 (1/600)

(1) 堀立柱建物

SB-124 Fig.10 PL. 6

調査区北西部に検出した堀立柱建物である。1間×1間で、南北にやや長く、主軸はN-26°-Eを向く。南北長3.0m、東西長2.8mを測る。柱穴掘り方は径47~60cmの円~梢円形プランを呈し、深さは13~31cmである。柱穴覆土は黒褐色土で、柱痕跡はない。柱穴掘り方からは土器の小片が少量出土したが、図化できるものはない。

SB-126 Fig.10 PL. 6

SB-124の南に2m置いて位置する。桁行2間、梁行1間で、南北に長く、桁行方位をN-23°-Wにとる。桁行全長は3.55mで、柱間は北から1.71、1.84m、梁行は3.09mである。柱穴は径36~68cmの梢円~方形プランで、深さ27~57cmである。柱痕跡は確認できない。柱穴覆土からは土器片少量が出士した。

SB-126出土遺物 Fig.11

8は弥生土器の底部片である。平底で、赤褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成は不良である。底径6.0cm。遺構の時期を示す遺物ではない。

SB-129 Fig.10 PL. 6

SB-126の南東に隣接する。東西に長い2間×1間の建物で、桁行方位はN-85°-E。桁行全長は2.99mで、柱間は東から1.46、1.53m、梁行は1.96mである。柱穴は径42~57cmの円~梢円形プランで、深さ23~52cmである。柱痕跡はない。出土遺物には土器片少量のほか、縄文時代の石器がある。

SB-129出土遺物 Fig.11

9は縄文時代早期の鉢形鏡である。片脚を欠く。漆黒色で良質の黒曜石製。混入品である。

SB-130 Fig.10 PL. 6

SB-129の南東に約1m離れて検出した、南北にやや長い1間×1間の建物である。調査時には気づかなかったが、4隅の柱穴はいずれも2つが切り合っており、2棟の建物が重複しているものと考えられる。長軸方位はN-16°-Eに向き、南北長3.18m、東西長2.92mを測る。柱穴は径52~80cmの円~隅丸方形プランをなし、深さ32~40cmである。ひとつの柱穴に柱痕跡を認めることができ、柱の径は17~18cmである。土器片少量と石鏡1点が出土した。

SB-130出土遺物 Fig.11

10は黒曜石製の打製石鏡である。粗雑なつくりで、脚の抉りは浅い。大剝離面と主要剝離面を残しているが素材となった剝片のエッヂは残っておらず、広義の剝片鏡に分類される。

SB-133 Fig.10 PL. 6

SB-130の南約1mに検出した東西に長い堀立柱建物で、柱穴のひとつを搅乱坑によって失う。桁行3間、梁行1間で、桁行方位をN-58°-Wにとる。桁行全長は5.25mで、柱間は東から1.34、1.96、1.95mである。梁行は3.44m。柱穴は径56~86cmの隅丸~長方形プランをなし、深さ29~52cmである。柱痕跡はひとつの柱穴に認められ、柱の径は15~16cmである。土器片が少量出土したが図示し得ない。

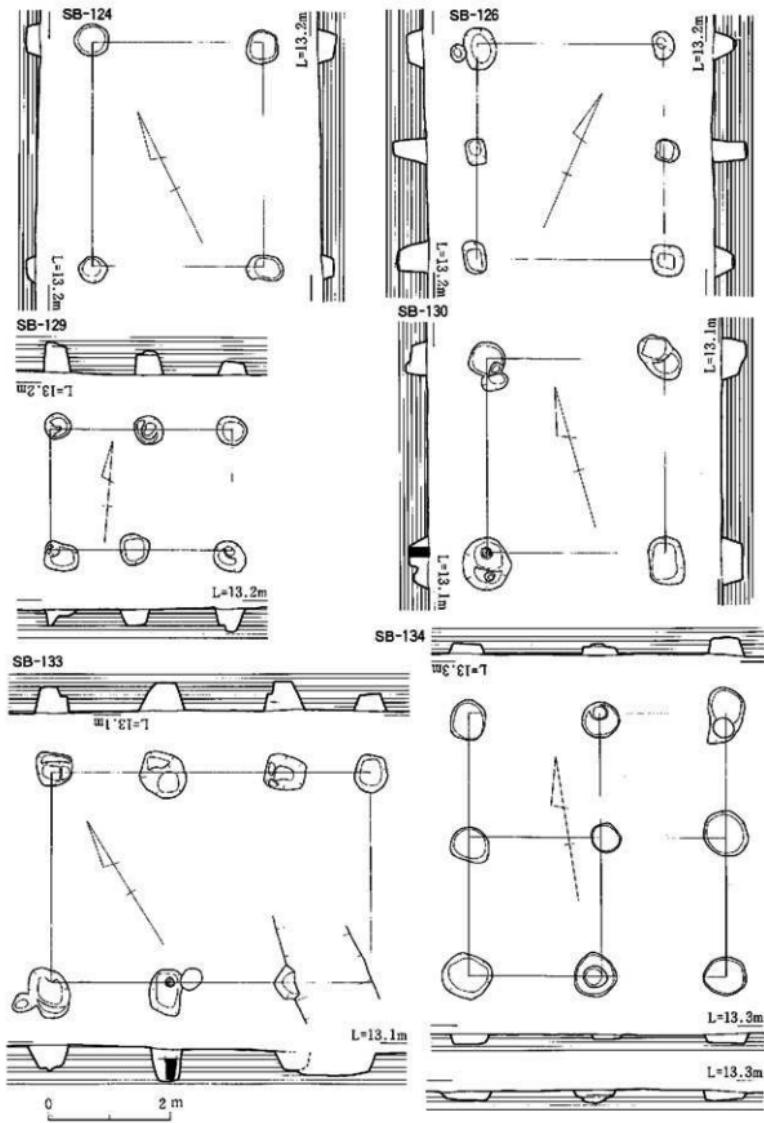


Fig.10 摶立柱建物実測図 I (1/80)

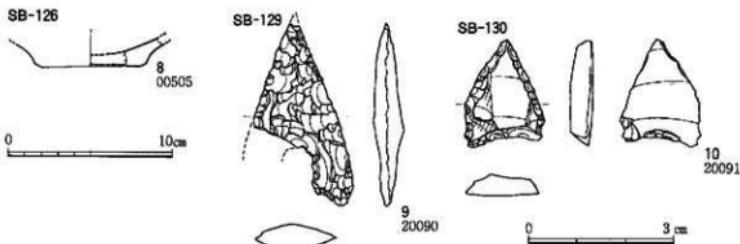


Fig.11 SB-126·129·130出土遺物実測図 (1/3·1/1)

SB-134 Fig.10 PL. 6

調査区北端の中央寄りに検出した。2間×2間の総柱建物に復元した。南北にやや長く、主軸方位をN-9°-Eにとる。南北全長は4.33mで、柱間は北から2.06、2.27mである。東西全長は4.21mで、柱間は東から2.11、2.10mである。柱穴は径50~84cmの略円形プランを呈し、深さ6~30cmで、中央の東柱が特に浅い。柱痕跡は認められない。少量の土器片が出土したが、固化できるものはない。

(2) 壺穴住居跡

SC-07 Fig.12 PL. 7

調査区北端のやや西寄りに検出した壺穴住居跡である。南西隅を搅乱坑に大きく切られ、南東側には試掘トレンチが入っている。SD-10に中央を切られるが、調査時には切り合いを把握できずに同時に掘り下げた。SD-10はこの住居跡の中で東に向きを変えているものと思われるが、コーナー部は確認できなかった。また東端の一部をSC-08に切られている。平面プランは東西に長い隅丸長方形を呈し、東西最大長8.5m、南北最大幅6.8mを測り、深さは最大0.3mを残す。住居跡の覆土は①褐色粘質土②暗褐色粘質土③黄褐色粘質土④暗褐色粘質土に黄褐色粘質土を含む⑤黄褐色粘質土に暗褐色粘質土ブロックを含む⑥黄褐色粘質土で、地山土は黄褐色粘質土である。床面の東西にL字形のベッド状遺構がある。東側のベッドは中途でSD-10によって切られているが、幅1.1m、床面との比高0.1mで、北端が少し西へ張り出す。西側のベッドは床面との段差がなだらかで、上端幅0.8m、下端幅1.1m、床面との比高0.1mで、北端が東へ張り出す。ベッドは地山削り出しである。壁際の周溝は住居跡の北辺と南辺にあり、幅0.2m前後、深さ0.1mである。板等を立てた痕跡は認められない。床面中央には断面浅皿形の浅い炉跡があり、覆土には炭化物と焼土が詰まっていた。径0.5mの円形プランで、深さは0.1mである。炉跡の周辺には焼けた顯著に固くしまった部分等は認められない。床面には大小26のビットが認められた。住居跡中央の長軸上に炉跡を挟んで対置する深めのビット2つが主柱穴と見られるが、柱痕跡は確認できなかった。主柱穴は不整な円形プランを呈し、径0.7~0.9m、深さ0.7~0.85mである。主柱穴の間には幅0.4mの溝が掘られている。この溝は東に向かって深く、東端で0.4m、西端で0.2mの深さを測る。炉跡がこの溝を埋めた後に作られていることから見て、住居跡造営時に柱を立てる等の目的で板に掘られた溝ではないかと考えられる。南辺の中央寄りには大きめのビットがいくつか切り合って検出され、住居の出入りに関わる施設と考えられる。床面には炉跡以外に焼土、炭化物等は認められない。床面は全て地山削り出しで、貼り床はない。

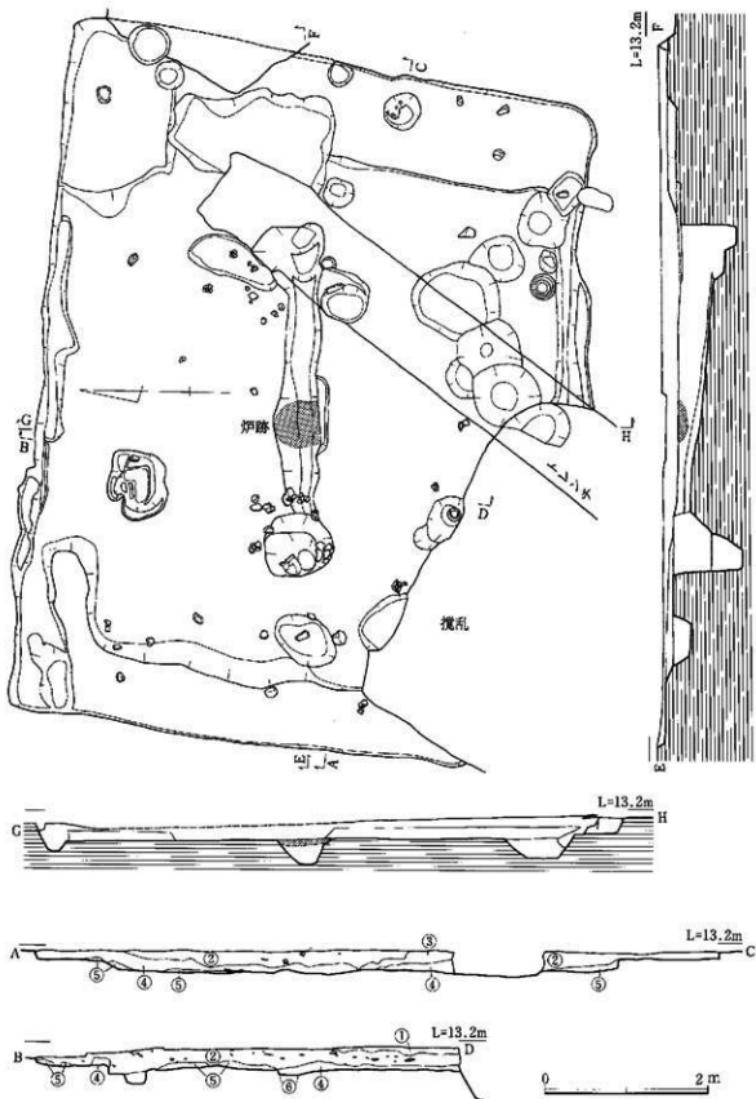


Fig.12 SC-07実測図 (1/60)

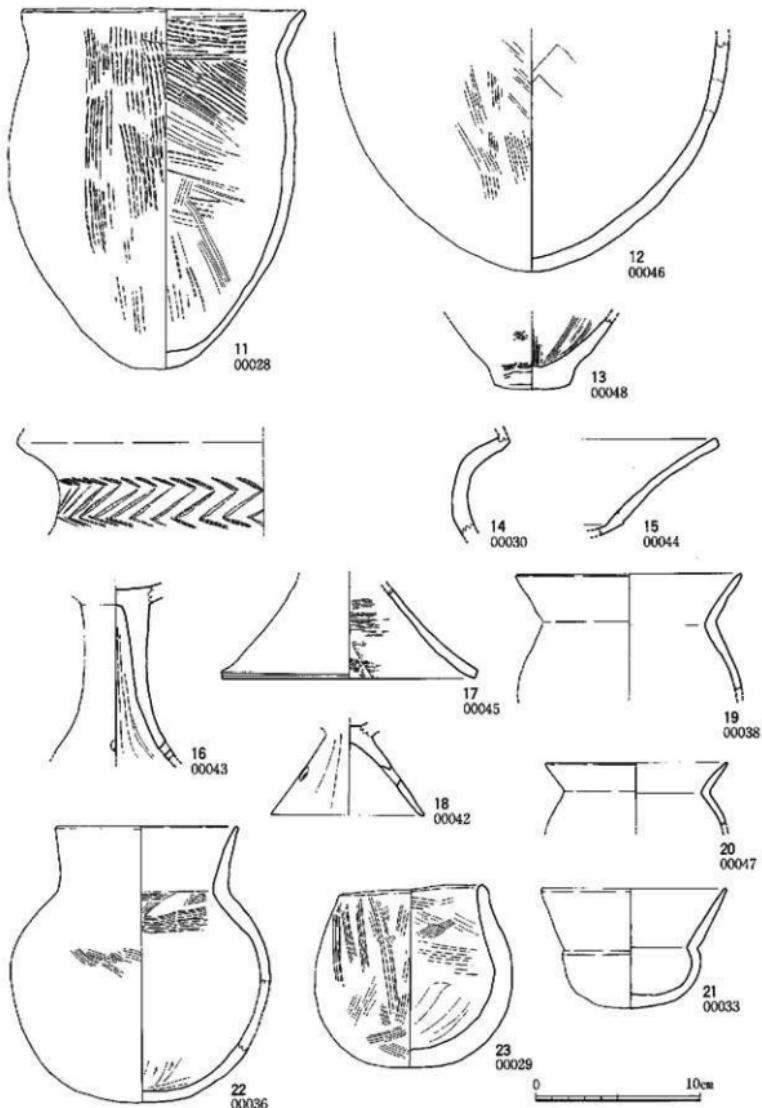


Fig.13 SC-07出土遺物実測図 I (1/3)

SC-07出土遺物 Fig.13,14 PL.17,28,30

コンテナ4箱分の遺物が出土した。弥生土器・古式土師器多数、砥石片1点、鉄片7点がある。

土師器には壺、壺、高坏、器台、小形壺、碗、鉢、手捏ね土器がある。11は壺形土器で、丸底で肩部に張りがなく、口縁は緩く「く」字形に屈曲して開き口唇部を面取りする。内外面ともハケ目調整で、内面底部付近はナデ調整する。外面向に茶が付着する。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。口径17.0cm、器高22.0cm。12は壺もしくは壺で、胴部中位以下の破片である。厚手で丸底。外面ハケ目、内面は器面が剥落しているがヘラ削りか。淡橙褐色で、胎土に砂粒が多く、焼成は不良。13は壺形土器の底部片で、不安定な平底である。外面はやや右上がりのタタキ、内面は継ぎのハケ目を施す。暗赤褐色で、胎土は精良、焼成良好である。外来系。14は二重口縁壺の頭部片である。内外とも横ナデ調整で、頸部外面に板小口で羽状文を押圧する。黄白色を呈し、胎土には粗砂粒を多

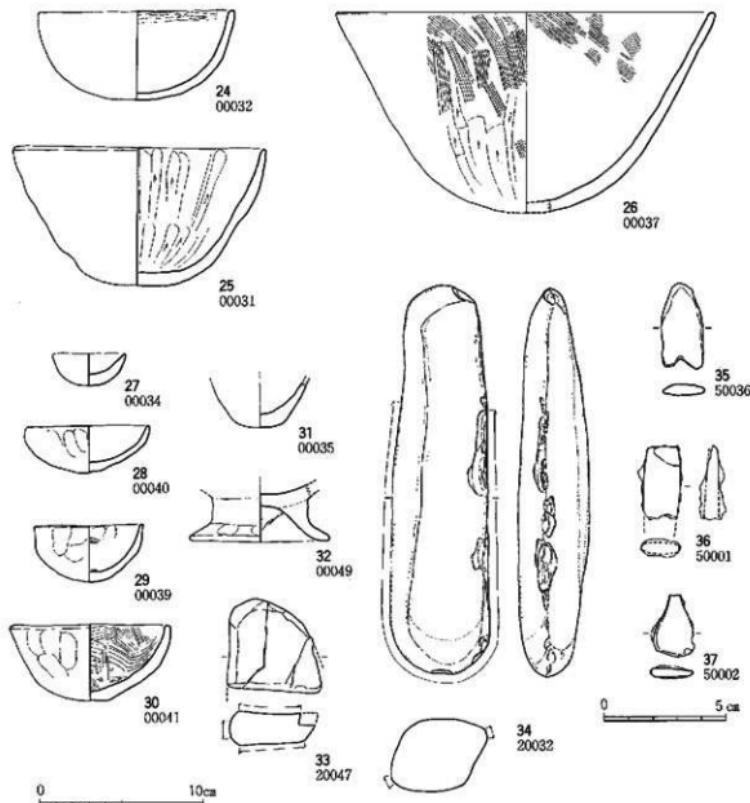


Fig.14 SC-07出土遺物実測図Ⅱ (1/3-1/2)

量に含み、焼成不良。山陰系の土器である。15~17は高坏である。15は口縁部片で、器面が剥落して調整不明。黄褐色で、胎土は精良、焼成不良。16は脚筒部で内面にシボリ痕がある以外は調整不明。下半のランダムな位置に2孔を穿つ。淡赤橙~淡黄橙色で胎土は精良、焼成不良。17は裾部片で、端部は面取りされ、沈線1条が巡る。内面横位のハケ目調整で、外面ナデ調整か。明褐色で、胎土は精良、焼成は極めて悪い。底径15.6cm。18は小形器台の脚部で、中位の相対する2方に穿孔している。橙褐色で、胎土は精良、焼成良好。底径9.3cm。19は小形の壺形土器で、器面があれて調整不明。淡褐色で、胎土は砂粒を多量に含み、焼成は不良。口径13.7cm。20は小形壺で、やはり調整は不明。暗褐色で、胎土は砂粒を多量に含み、焼成は不良。口径11.0cm。21も小形壺で、体部が小さく、口縁が大きく開く。器面が剥落して調整は不明で、明赤褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は不良。口径11.2cm、器高7.3cm。22は壺形土器で、球形胴部に短く聞く口縁が付く。外面は胴部がハケ目、内面は頸部がハケ目、底部がヘラ削りで、他は不明。黄白色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。口径11.1cm、器高17.0cm。23は無頸の壺形土器で、胴部は球形で、口縁はそのまま丸くおさめる。外面はハケ目の後、下半のみをナデ、内面は上半がハケ目、下半はナデ調整である。黄白色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好である。24~26は鉢形土器である。24は半球形をなし、外面ナデ、内面は口縁端部を横ハケ目調整し以下を縦位にナデ調整する。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。口径12.0cm、器高5.4cm。25は不安定な平底から内湾して体部が聞く。外面ナデ、内面は指頭によるナデ調整を施す。淡褐色で、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。口径15.3cm、器高8.4cm。26は大型品で、底部は丸く、体部は直線的に聞く。外面は縦位のハケ目で下半をヘラ削り、内面は斜位のハケ目で下半ナデ調整である。赤褐色で、胎土は精良、焼成は不良。口径23.0cm、器高12.3cm。27~31は手捏ねの鉢形土器である。27は淡橙色で、胎土は精良、焼成やや不良。28は外面に指頭痕が残り、淡褐色で、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良。29は外面に指頭痕、内面に指頭痕と一部ハケ目が残り、淡褐色で、胎土に砂粒が多く、焼成不良。30は外面に指頭痕を残し、内面ハケ目調整。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良。31は底部片で、黄褐~黒色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良。32は底部片で、中ほどで折れて聞く脚が付く。中部九州系の壺形土器か。器面が剥落して調整不明。黒褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。底径8.5cm。

33は砥石片で、下半を欠失する。表裏両平坦面と側面の一部に研磨痕がある。石材は粘板岩系か。34は棒状の叩き石で、横断面が菱形を呈し、鋭角をなす2側面に敲打痕がある。

35~37は鉄片で、図示した以外に4点の鉄片が出土している。35は鐵、36はノミ状製品の可能性がある。

既に述べたように、当遺構出土遺物には本来これより時期の下るSD-10に伴うものが含まれており、SC-07の時期は切り合いから古墳時代初頭と見られる。

SC-08 Fig.15 PL. 7

SC-07の東に検出した竪穴住居跡で、住居跡全体の1/3強が調査区外にある。南西隅でSC-07を切っている。また、SC-07上で東に折れたSD-10がこの住居跡を東西に切るものと考えられるため、検出時に数度に渡りSD-10のプランの確認を行ったが、ついにこれを把握することができなかった。SC-08の平面プランは東西に長い隅丸長方形と見られ、東西長7.9mを測り、深さは最大0.4mを残す。住居跡覆土は①②暗褐色土(①がやや固い)③褐色土④暗褐色土⑤暗褐色土と黄褐色土の混在土⑥より黄褐色土の混入が少ない⑥暗褐色土に黄褐色土ブロックを含む⑥より黄褐色土が少なく遺

物を多量に含む⑦暗褐色土に炭化物・焼土を少量含む⑧暗褐色土と黄褐色土の混在土⑨暗褐色土に炭化物を多量に含む⑩暗褐色土に大粒の炭化物・焼土を含む。地山土は黄褐色粘質土である。床面の東西にベッド状造構がある。東側のベッドは幅1.1m、床面との比高0.15m、西側のベッドは幅0.9m、床面との比高0.1mで、ベッドは地山削り出しである。壁際の周溝は住居跡の東辺と南辺にあり、幅0.1m前後、深さ0.05m前後である。溝内に板等を立てた痕跡は明瞭でない。床面中央には炉跡がある。断面形が浅い皿状を呈し、径0.8~0.85mの楕円形プランで、深さは0.05mである。住居跡中央の長軸上に炉跡を挟んで対置する深めのピット2つが主柱穴と見られる。柱痕跡はない。主柱穴は不整な楕円形プランを呈し、径0.45~0.8m、深さ0.45~0.5mである。南辺の中央部には小さな方形の掘り込みがある。0.4×0.3mの不整な長方形プランで、深さ0.15mを測る。住居の入り口に間わる施設であろう。床面の南東には住居跡を掘削した際に生じたと見られる不整形の浅い窪みが見られ、この部分には汚れた地山土で貼り床を施している。

当住居跡は火災によって焼失したものと見られ、床面全体に炭化材と焼土が堆積していた。炭化材は概ね住居跡の中心に向かって周囲から倒れ込んだ状態で出土しており、上屋を復元する上で参考になろう。

住居跡からは大量の遺物が出土したが、その大半は、住居跡がある程度埋没した段階でまとめて投棄された状態で出土している。

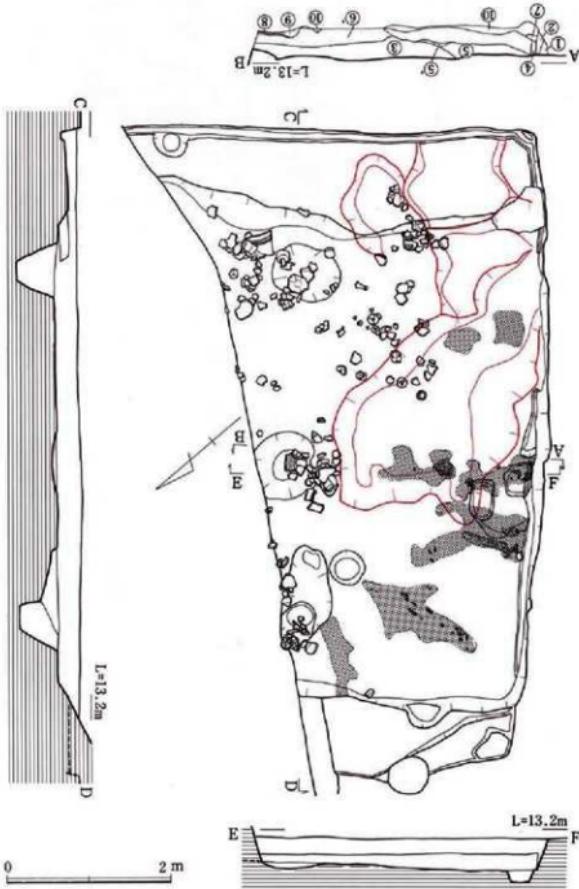


Fig.15 SC-08実測図 (1/60)

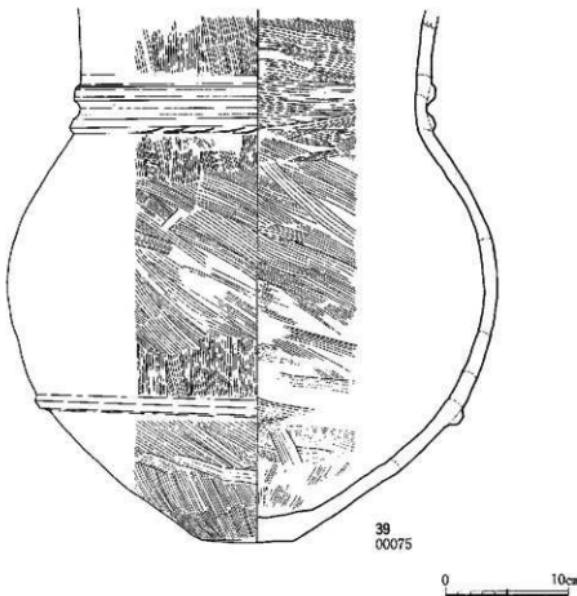
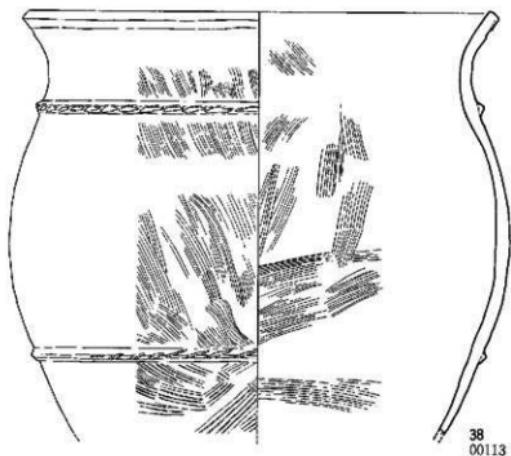


Fig.16 SC-08出土遺物実測図 I (1/4)

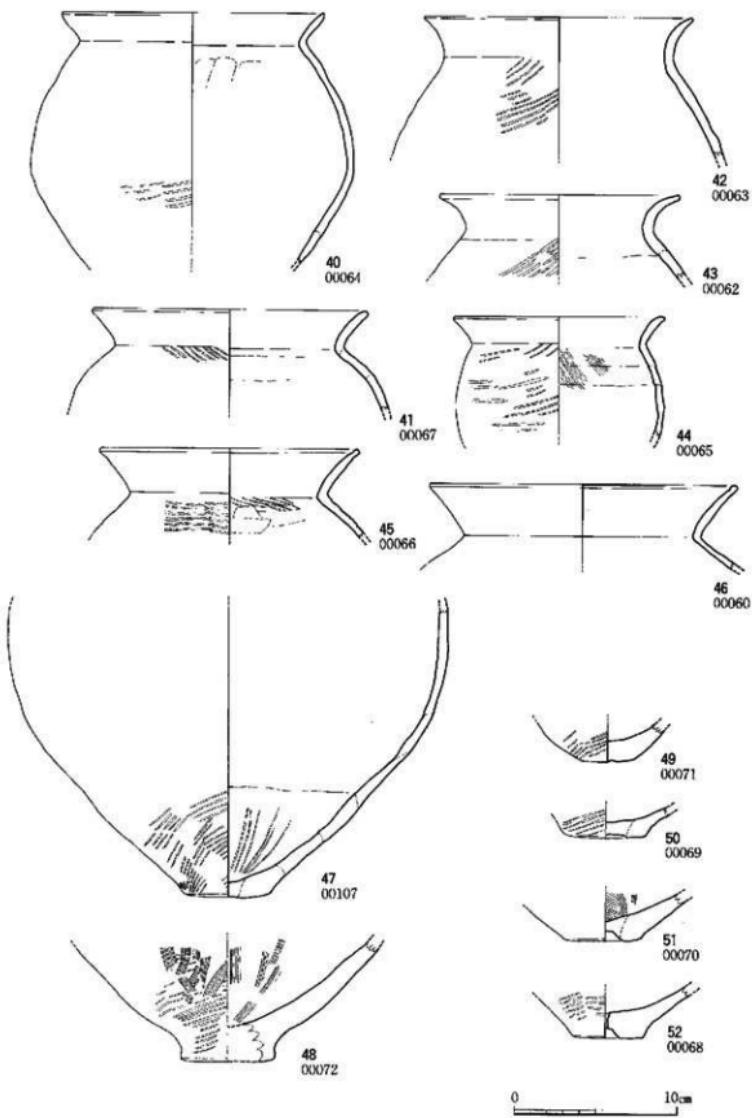


Fig.17 SC-08出土遺物実測図 II (1/3)

SC-08出土遺物 Fig.16~22 PL.17~19,28

コンテナ約12箱分の遺物が出土した。弥生土器・古式土師器多数、砥石3点、鉄片・鉄滓8点がある。

土器には壺、壺、高壺、器台、鉢、手捏ね土器、小形壺、台付鉢、製壠土器がある。

38、40~46、53~57は壺形土器である。38は大型の壺形土器で、口縁は緩く屈曲して開き、端部は面取りされる。頸部と胴部下位に断面三角形の突帯をまわし、板小口で斜めに刻み目を押す。内外面ともハケ目調整で、口縁端部を横ナデする。淡褐色を呈し、胎土には砂粒を多量に含み、焼成は不良である。口径37.9cm。40~46は胴部外面にタタキ目を残す壺形土器の一群である。40は口縁が「く」字形に屈曲して直線的に開き、胴部は肩が張る。外面は器面が荒れているが一部にタタキ目を残し、内面はナデ調整。淡橙色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良である。口径16.0cm。41は口縁がやや外反して開く。外面頸部に右下がりのタタキ目を残し、内面は調整不明。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は極めて悪い。口径16.9cm。42・43は口縁が丸く外反して開く。ともに外面に左下がりのタタキ目を残し、内面は器面の残りが悪いがヘラ削りか。口縁端部は横ナデ調整。42は淡橙~淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良。43は淡橙褐色を呈し、胎土は砂粒が多く、焼成はやや不良である。44はやや小ぶりの壺で、外面タタキ、内面ハケで、口縁部は横ナデ調整。淡黄褐色で、砂粒を多量に含み、焼成は不良。45は口縁が強く屈曲して開き、口唇部を少しつまみ上げる。胴部外面タタキ、内面はヘラ削りで頸部に斜位のハケ目、口縁内外横ナデ調整である。褐~暗褐色を呈し、胎土に雲母粒・細砂粒を少量含み、焼成は不良である。大和型庄内壺と見られる。46も45と同様の器形で、調整不明。黄白色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成は不良である。口径19.0cm。53はなで肩の胴部に屈曲して短く聞く口縁が付く。口唇部は平坦。胴部内外面ともハケ目調整で、口縁部は横ナデする。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。口径24.0cm。54・55は「く」字形に口縁が屈曲して開く。ともに器面の残りが悪く、54の口縁横ナデ以外は調整不明。54は淡橙白色、55は淡褐色を呈し、ともに胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良。口径は54が15.0cm、55が14.0cm。56は口縁の屈曲が丸味を持ち、内面に稜がない。口唇部内面を若干窪ませる。外面は斜位のハケ目調整で、肩部に横位のハケ目を2段に回す。内面はヘラ削り調整で、口縁内外面は横ナデ調整である。胴部外面に縫が付着している。外面黄白色、内面淡赤褐色を呈し、胎土には粗砂粒を多量に含み、焼成は良好である。口径17.3cm。57は長胴壺で、頸部のくびれが少なく砲弾形をなす。粗雑な作りで、内外面をハケ目調整し、頸部内面にヘラ削りを加える。淡白褐色を呈し、胎土は砂粒を多量に含んで粗く、焼成はやや不良である。口径17.5cm、器高24.6cm。

39、58~64は壺形土器である。39は大型の二重口縁壺で、口縁部を欠く。底部は不安定な小さい平底で、頸部外面に2条の、胴部下位に1条の断面台形突帯を巡らす。内外面ともにハケ目調整で、外面淡赤褐色、内面褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。58は口縁が直立気味に開き、口唇部内面に浅い窪みを回す。頸部外面に断面三角形の突帯を貼付する。胴部外面ハケ目、内面ナデ調整で、口縁部は横ナデ調整である。褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好である。59は口縁が強く外反して開き、端部は丸くおさめる。内外面をハケ目調整した後、口縁部内外を横ナデ調整する。外面黄褐色、内面黒褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。口径16.2cm。60は胴部のみの残欠で、胴部の最大径は中位より若干下にある。底部は欠くが不安定な平底であろう。外面はタタキの上から研磨状にヘラナデしており、頸部付近にハケ目を施す。内面は下半がハケ目、上半は粗いナデ調整で、粘土帶の痕を残す。外面淡灰褐色、内面黒色を呈し、焼成はやや不良である。外来系。61は倒卵形の胴部に、外反して長めに聞く口縁部が付く。胴部最大径は上位に

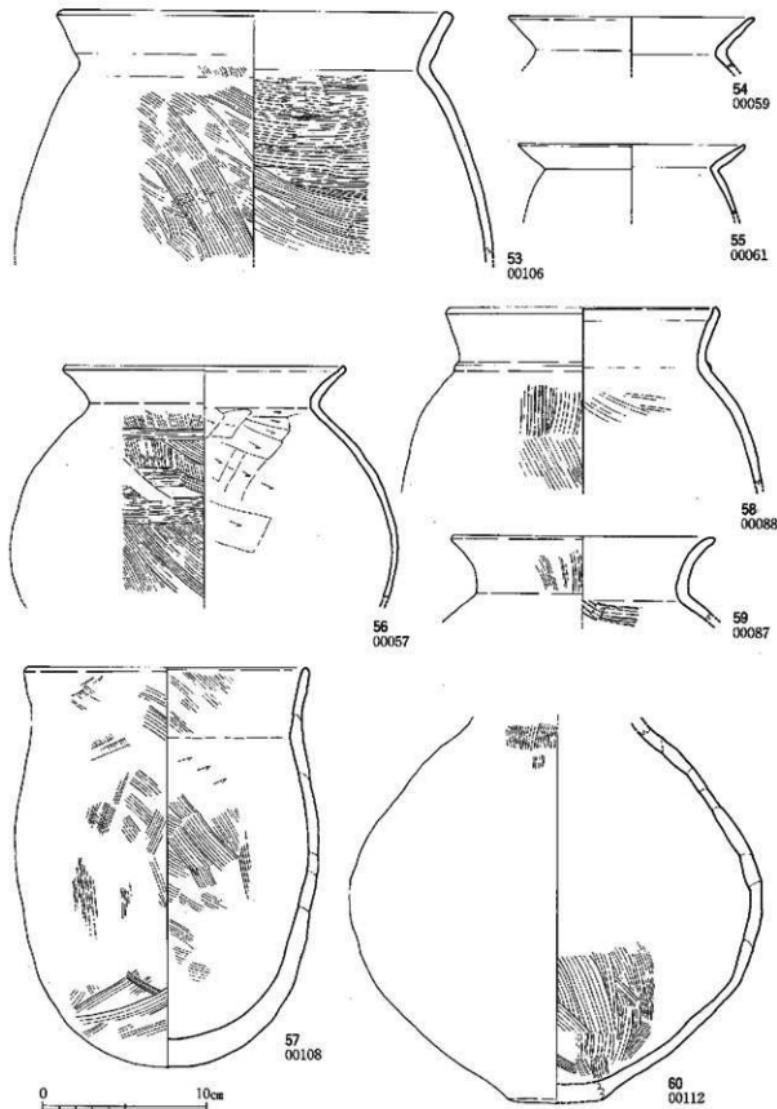


Fig.18 SC-08出土遺物実測図Ⅲ (1/3)

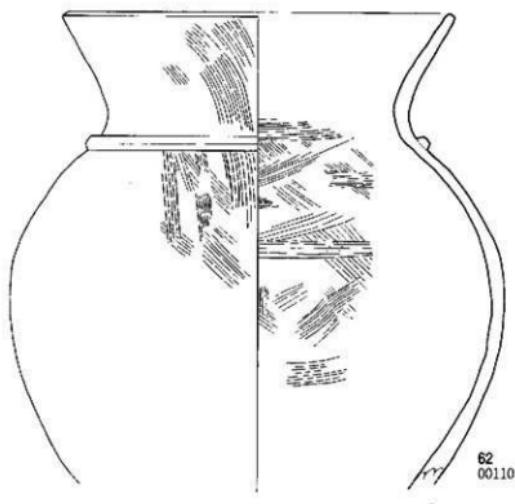
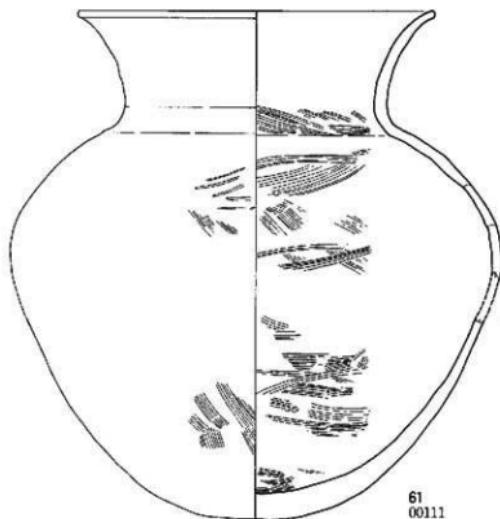


Fig.19 SC-08出土遺物実測図IV (1/3)

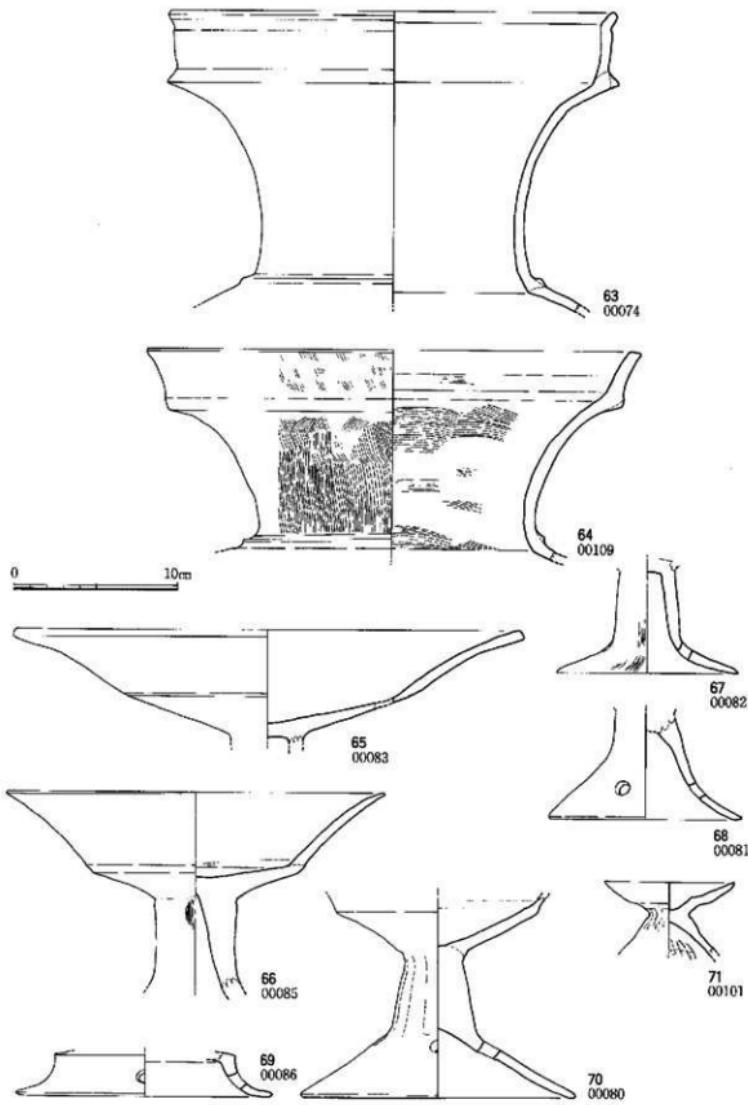


Fig.20 SC-08出土遺物実測図V (1/3)

ある。外面は上半にタタキ目をナデ消した痕が残り、下半はハケ目調整、内面はヘラ削りの後、軽くハケ目調整する。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。口径21.1cm、器高31.1cm。62は口縁がまっすぐ開き、胴部はなで肩である。頸部直下に断面台形の突帯を貼付する。器面の残りが悪いが、内外面ともハケ目調整と見られ、外面下半はナデ調整か。淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み粗く、焼成はやや不良である。口径24.0cm。63は二重口縁壺で、頸部以上を残す。外反する長めの頸部に直立する口縁を付ける。口縁端部は外反し、口縁下端と頸部に断面三角形の突帯を貼付する。器面が剥落し調整は不明である。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。口径27.2cm。64も二重口縁壺で、63に比して頸部が短い。口縁は外傾し、端部は面取りしている。口縁下端と頸部に断面三角形の突帯を貼付する。内外面をハケ目調整した後、口縁部を横ナデ調整する。淡褐色を呈し、胎土は比較的精良で、焼成はやや不良である。口径30.2cm。

47~52は壺壺類の底部片で、平底をなす一群である。伝統的な在来の系統の土器には見られないタイプである。47は小さい不安定な平底で、胴部中位まで残存している。底部をドーナツ状に作り、粘土を充填している。外面底部付近にタタキ目が残り、他はナデ消している。内底はヘラ状工具によるナデ調整。淡褐~淡橙色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。48は厚みのある円盤状の平底をなし、外面は底部付近にタタキ目が残り、上からハケ目を施す。内面はハケ目調整。暗橙黃色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み粗く、焼成はやや不良。49は底部が退化して、ほとんど丸底に近い。外面タタキ、内面は器面が剥落しているがハケ目調整か。褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。50は底部中央が少し窪む。ドーナツ状に作り、粘土を充填しており、外面にタタキ目が残るが、内面は器面が著しく剥落している。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多量に含み、焼成は良好である。51は底部中央がかなり窪んで上げ底状となる。底部の成形手法は50と同様である。外面ナデ、内面ハケ目調整。淡褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。52は底部中央に焼成前の穿孔がある。内面から穿孔し、外底器面の一部が剥げ落ちており、ある程度乾燥させた段階で穿孔したものと見られる。外面タタキ、内面は調整不明。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

65~70は高杯形土器である。65は坏部で、浅く広く開き、端部は面取りされる。屈曲部外面に浅い沈線1条を回す。脚筒を坏底にさし込んで接合している。器面が剥落しており、調整は不明である。淡黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成不良。口径31.0cm。66は坏部がやや深いタイプで、脚は広がりのない柱状を呈し、坏底に差し込んで接合している。脚筒の4ヶ所に穿孔がある。坏部内面と脚部外面の一部にハケ目、脚内面にシボリ痕を認めるが、他は器面が剥落して調整不明である。淡黄色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。口径23.2cm。67は柱状の筒部にラッパ状に開く裾部が付く。坏底への接合は差し込みによる。裾部上端の3方に孔を穿つ。外面の一部にハケ目が残るが、他は調整不明。赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。底径11.2cm。68は脚筒部から裾部への移行がなだらかで、ラッパ状に開くもので、3方に穿孔している。坏底に脚筒を貼り付けた後、粘土で補強している。器面が剥落して調整は不明で、淡褐色を呈し、砂粒を多量に含み、焼成は不良である。底径11.8cm。69は脚が段を有して開くもので、小片のため穿孔の数は不明である。著しく器面が剥落しており、調整は不明。淡橙白色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良。底径15.6cm。70は口縁部を欠く。筒部は中実で、坏底に貼り付けて接合する。脚は直線的に伸び、4方に穿孔する。器面が剥落し調整が不明だが、筒部外面はヘラ整形か。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良である。口径12.3cm、底径16.8cm。

71は器台である。坏部が段を持って開き、坏底にラッパ状に開く脚を貼り付けている。内外面とも

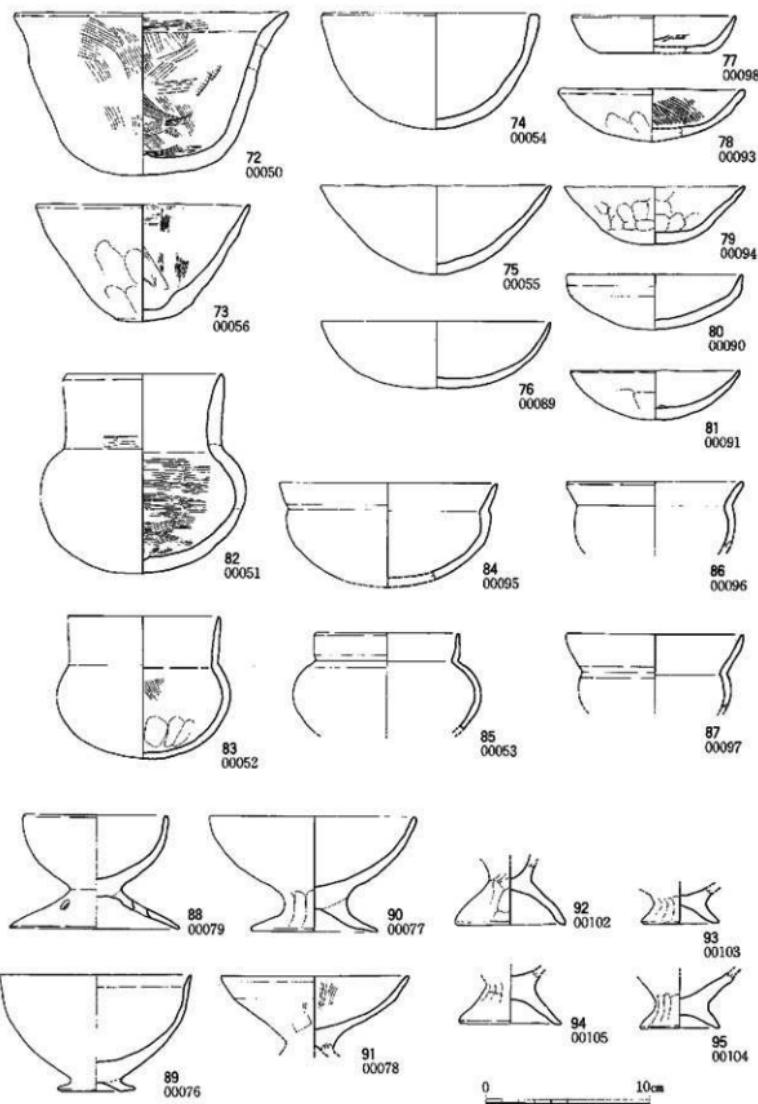


Fig.21 SC-08出土遺物実測図VI (1/3)

ヘラ状工具によるナデ調整が認められる。淡黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。

72~81は鉢形土器である。72は平底気味の丸底をもち、口縁端部が外反する。内外面ともハケ目調整。外面明橙褐色、内面黒色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。口径16.7cm。器高9.9cm。73は丸底で、体部は直線的に開く。外面に指頭痕、内面にハケ目が認められる。橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。口径13.2cm、器高7.2cm。74は半球形をなし、口縁端部は平坦である。内外面ともナデ調整。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好である。口径13.3cm、器高7.1cm。75は体部が緩く内湾して開くもので、器両が剥落して調整は不明である。黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。口径14.0cm、器高5.5cm。76は体部が強く内湾して開くもので、調整は不明である。明赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良。77は平底で、体部は屈曲して立つ。器面の残りが悪いが、内面はハケ目調整か。褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。口径10.0cm、器高2.3cm。78は体部がやや内湾する。外面に指頭痕、内面にハケ目が認められる。淡褐色を呈し、胎土に少量の砂粒を含み、焼成はやや不良。口径10.4cm、器高3.2cm。79は体部が波打って開く。内外面とも指頭痕が残る。明赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。口径11.0cm、器高3.6cm。80は76と同様の器形で、器面が剥落して調整不明。明赤褐色を呈し、胎土は精良、焼成は不良である。口径10.9cm、器高3.5cm。81も同様の器形をなし、外面に指頭痕、内面に丁寧なナデの痕が見られる。明赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好。口径10.4cm、器高3.0cm。

82~87は小形壺で、82、83は球形の胴部に直立する口縁が付くもの、他はつぶれた偏球形の胴部に外傾する口縁が付くものである。また、85は口縁が直立気味で、両者の中間的器形をなす。82は頸部外面ハケ目、胴部外面下半ナデ、胴部内面ハケ目、口縁部横ナデ調整である。橙褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。口径9.5cm、器高12.2cm。83は胴部内面にハケ目と指頭痕があるが、他は調整不明。赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良。口径9.3cm、器高8.8cm。84は調整は全く不明。橙褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良。口径13.0cm、器高6.4cm。85も調整不明で、淡橙

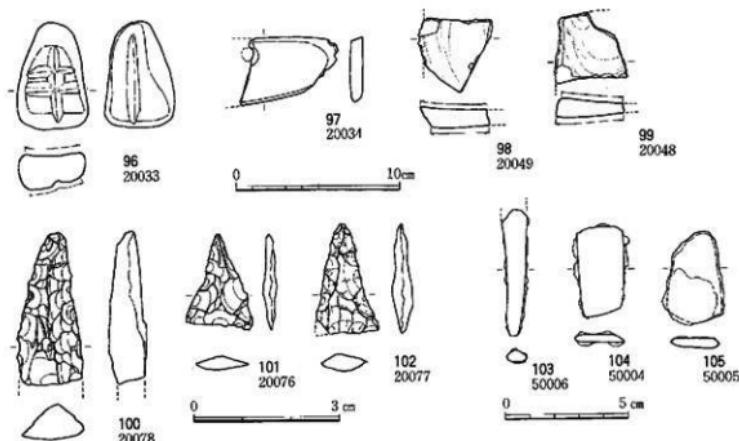


Fig. 22 SC-08出土遺物実測図VII (1/3・1/2・1/1)

色を呈し、胎土は精良で、焼成不良。口径8.7cm。86も調査不明。黄白色を呈し、胎土は精良で、焼成不良。口径10.8cm。87も調査は不明で、橙黃白色を呈し、胎土が精良で、焼成良好。口径10.8cm。

88~91は台付鉢である。脚部が大きいものと小さいものがある。88は大きく開く脚に3方から穿孔する。器面が剥落して調整は不明である。淡黄白色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良。口径8.8cm、器高7.0cm、底径10.4cm。89は脚が短く低いもので、口縁端部が外反する。調整はやはり不明である。黄白色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成不良。口径11.7cm、器高7.2cm、底径4.8cm。90も脚が小さいタイプで、脚部に指頭によるナデ調整が見られる以外は調整不明。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良である。口径12.5cm、器高7.0cm、底径7.7cm。91は脚を欠損する。内外面の一部にハケ目を認めることができる。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は甘く脆い。

92~95は製塙土器である。いずれも脚部のみの破片である。指頭による成形あるいはナデ調整を行っており、2次的な加熱を受けている。92は淡赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良。底径6.8cm。93は黒色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良。底径4.8cm。94は淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。底径6.3cm。95は褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良である。底径4.9cm。

96~102は石製品である。96は小形の砥石で表裏両平坦面を作業面とし、「+」と「|」形の溝がそれぞれにある。鉄器の刃先を研ぐのに用いたものであろうか。砂岩系の石材を用いている。97は石庖丁片である。穿孔は両面から行っている。カクセン石を含む堆積岩系の石材である。98、99は砥石片である。板状で小形のもので、両平坦面を作業面に用いている。砂岩系の石材を用いている。100は黒曜石製の尖頭器で、下半が折れている。101、102は石鐵である。三角形を呈する粗雑な造りのもので、石材は101が黒曜石、102は安山岩である。

103~105は鉄片である。103は棒状の、他は板状のもので、他にも5点の鉄片・鉄滓が出土した。

これらの遺物は古墳時代初頭に属する。しかし、既に述べたようにSC-08を切るSD-10の遺物が含まれているものと考えられること、土器の大半は住居跡焼失後に投棄されたものであることから、出土土器にはかなりの時期幅があるものと考えられる。

SC-09 Fig.23 PL. 7

調査区北端でその一部を確認した竪穴住跡である。SC-08の東に隣接し、これに切られている。住跡の主要部分は調査区外にあり、全体の1/3弱を調査したにとどまる。平面プランは東西に長い

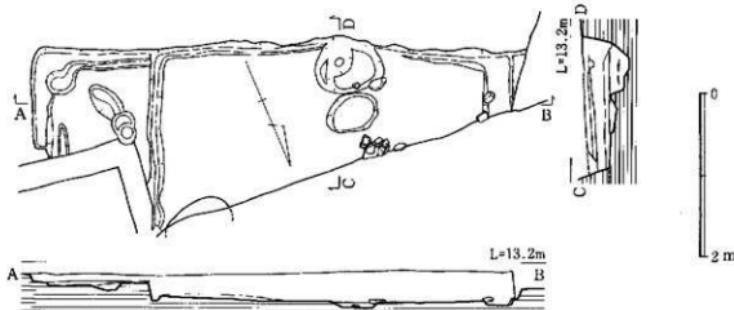


Fig.23 SC-09実測図 (1/60)

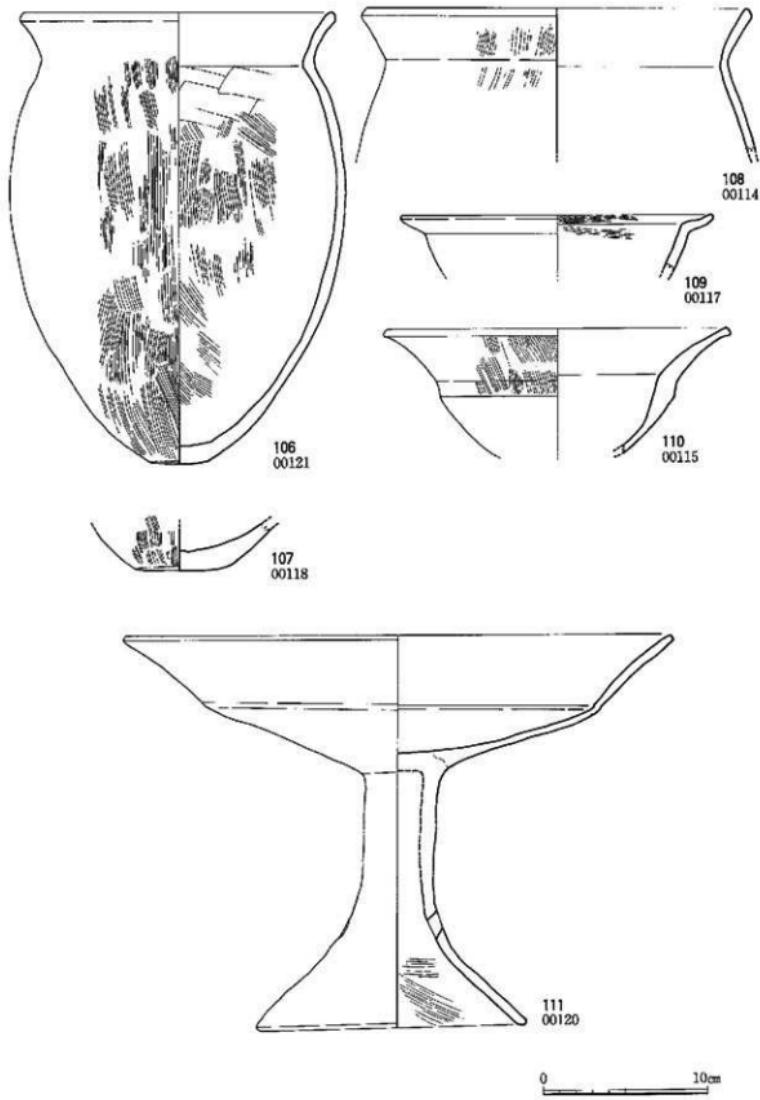


Fig.24 SC-09出土遺物実測図 I (1/3)

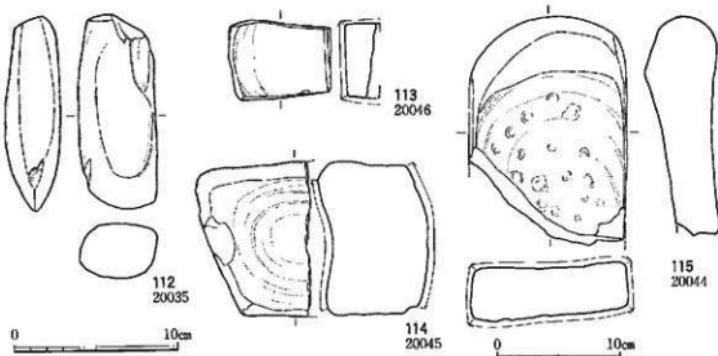


Fig. 25 SC-09出土遺物実測図 II (1/3・1/4)

隅丸長方形と見られ、現状で東西長6.1m、深さは最大0.4mを残す。住居跡の覆土は暗褐色粘質土を主体とし、自然に埋没した状況であった。地山土は黄褐色粘質土である。床面の東西にベッド状遺構がある。東側のベッドは幅1.4m、床面との比高0.15mである。西側のベッドは一部が確認できたのみで規模は不明である。ベッドは地山削り出しである。壁際の周溝は住居跡の東辺と南辺にあり、ベッドと床面の境にも溝を設ける。溝は幅0.15~0.4m、深さ0.1m弱で、西側ベッドと床の境を走る溝のみ幅がやや広い。溝には板等を立てた痕跡は確認できなかった。炉跡は調査区外の住居跡中央部にあるものと思われる。床面には大小6のピットが認められた。床面北東隅で一部を確認したピットが主柱穴のひとつと見られるが、詳細は不明である。南辺の中央には浅い上坑がある。床面には焼土、炭化物等は認められない。床面は全て地山削り出しで、貼り床はない。

SC-09出土遺物 Fig. 24, 25 PL. 19, 28

コンテナ1箱分の遺物が出土した。弥生土器多数、石斧1点、砥石3点、鉄滓9点がある。

弥生土器には甕、鉢、高坏がある。106は長胴の甕で、底部は小さく不安定な平底をなす。口縁は「く」字形に屈曲して開き、屈曲部内面に稜を持つ。口縁端部は丸くおさめる。脇部内外面ハケ日調整で、頭部内面にヘラ削りを加える。口縁部内外面は横ナデ調整している。白褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良である。口径19.2cm、器高27.7cm、底径3.7cm。107は底部片で、丸味のある平底である。外面ハケ日、内面ナデ調整。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。底径5.5cm。108は甕の口縁部で、「く」字形に屈曲して開くが、屈曲部内面の稜は106ほど明瞭ではない。外面ハケ目調整で、内面は器面の残りが悪いがナデ調整か。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良である。口径23.9cm。109は鉢の口縁部片である。口縁が強く屈曲し内湾気味に短く開く。内面ハケ目調整で、外側は明確でないがナデ調整か。黄褐色で、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良である。口径19.0cm。110も鉢で、口縁は外反して長く開く。外面ハケ日調整、内面ナデ調整で、外側には煤が付着しており煮炊きに使用されている。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。口径21.2cm。111は高坏で、口縁の一部を欠く。坏部は口縁がやや長く伸びる。柱状の脚筒部を坏底に差し込んで粘土で補強しており、脚部には相対する2ヶ所に穿孔がある。脚部内面にハケ目が残るが、他は器面が著しく剥落しており調整が不明である。橙褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。口径35.6cm、器高24.2cm、底径16.5cm。

112は磨製石斧である。縦斧で、基部を欠く。筋理のある気泡の多い石材を用いている。113～115は砥石である。113は板状の小形品の一部で、正面と両側面の3面に研磨痕がある。裏面を欠く。砂岩系の石材を用いている。114は分厚い砥石で、右半部を欠く。表裏両平坦面を使用しており、片面は凹、他方は凸面をなす。火成岩系の石材である。115は板状の大型品で、下半を欠く。表裏両平坦面と側面の4面を使用している。平坦面は使用によって窪んでいる。砂岩系の石材である。

この他、鉄滓9点がある。鉄片は出土していない。

出土遺物は弥生時代終末頃に位置付けられるが、磨製石斧などの古い時期の遺物を一部含む。

SC-11 Fig. 26 PL.7,8

調査区北端のSC-08の南側に検出した整穴住居跡で、SC-08と後述のSC-12に大きく切られ全容は明らかでない。平面プランは南北に長い隅丸長方形と見られ、現状で南北長5.0m、東西長4.1mを測り、深さは0.1mで他の住居跡に比べ浅い。覆土は暗褐色土で、地山土は黄褐色粘質土である。床面の北側にベッド状造構があり、幅1.1m、床面との比高0.05mで、地山削り出しである。壁際の周溝は床面の北、東、南辺にあるが、断続的に溝が途切れる部分が多い。溝の幅は0.05～0.25mでバラつきがあり、深さは0.05m未満で極めて浅い。中央部をSC-12に切られ、炉跡は明らかでない。床面には大小8のビットが認められた。住居跡中央の長軸上に位置するビット

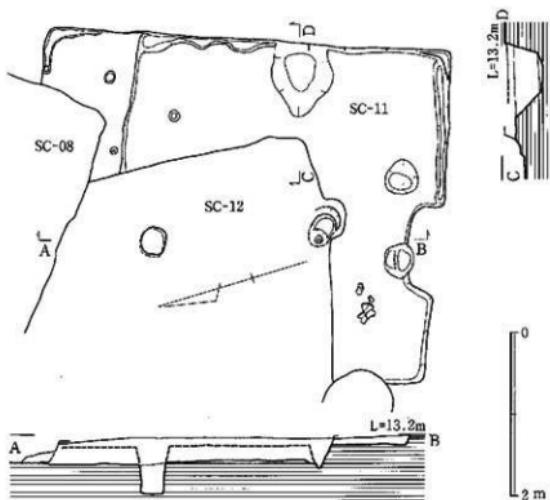


Fig. 26 SC-11実測図 (1/60)

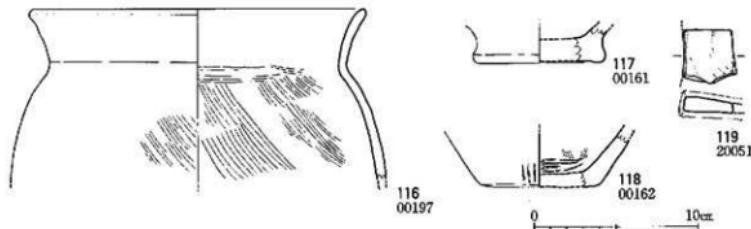


Fig. 27 SC-11出土遺物実測図 (1/3)

トが2つあるが、南側のビットは浅く、これを主柱穴とするには疑問が残る。柱痕跡は確認できなかった。南辺のほぼ中央には、内側に半円形に突出する張り出しがある。東辺の中央やや南寄りには不整縁円形プランの土坑があり、長径0.9m、短径0.75m、深さ0.3mを測る。床面には焼土、炭化物等は認められない。床面は全て地山削り出しで、貼り床は認められない。

SC-11出土遺物 Fig.27

150点の遺物が出土した。弥生土器と砥石1点がある。

116は甕である。口縁は緩く屈曲して開き、端部は丸い。肩部内部には棱がない。胴部内外面に斜位の、頸部内面に横位のハケ目を施す。口縁部は横ナデ調整か。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。口径20.4cm。117は底部片で、下端が外方へ張り出す円盤状の平底である。器面剥落のため調整は不明。淡橙色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良。弥生時代前期の土器で、混入品であろう。底径8.2cm。118も底部片で、平底である。内外面ハケ目調整。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。底径7.1cm。

119は砥石片である。薄い板状の小形品の一部で、割れ口以外の全ての面に研磨痕がある。砂岩系の石材を用いている。

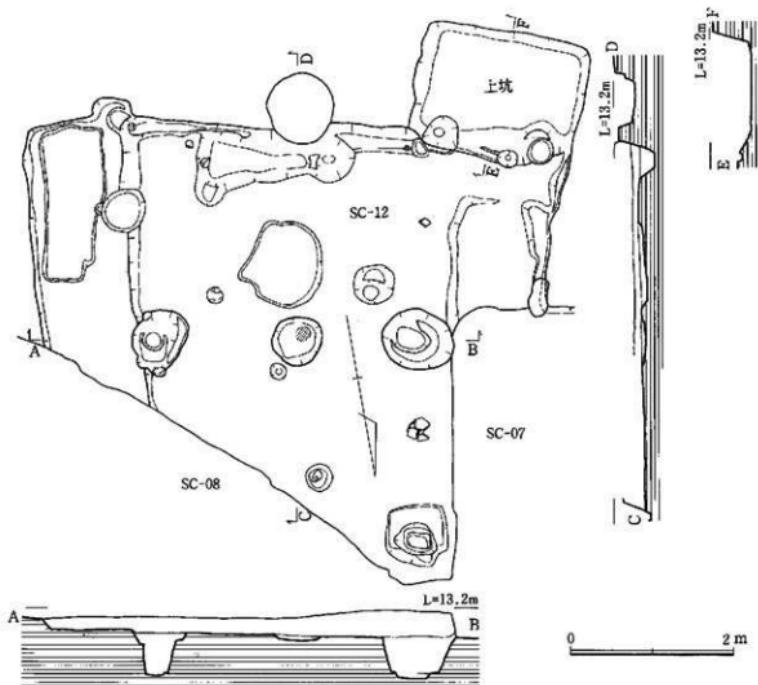


Fig.28 SC-12実測図 (1/60)

SC-12 Fig.28 PL.7,8

調査区北端中央部でSC-07、08、11と切り合う堅穴住居跡である。SC-11を切り、他に切られる。南西隅で土坑と切り合うが前後関係は不明で、調査時には同時に掘り下げ、遺物は全てSC-12で取り上げている。住居跡北辺が確認できず、全体形は不明であるが、東西にやや長い隅丸長方形プランであろう。東西長6.3m、南北長5.7m以上で、深さは最大0.3mを残す。覆土は暗褐色土で、地山土は黄褐色粘質土である。床面の東西にベッド状遺構がある。東側のベッドは幅1.2m、床面との比高0.15mで、南側に不整長方形プランの浅い窪みがある。西側のベッドは幅1.1m、床面との比高0.1m強で、壁際が一部段状になる。ベッドは地山削り出しである。壁際の周溝は住居跡の南辺にのみあり、幅0.1~0.2m、深さ0.05m前後で浅い。床面中央には、断面浅皿形の炉跡があり、炉床に焼土が認められた。炉跡は径0.6mの略円形プランをなし、深さは0.05m強である。炉跡の周辺は踏みしめられて床が固く締まっている。床面には大小のピットが認められた。住居跡の長軸上に炉跡を挟んで東西に対置する深めのピット2つが主柱穴と見られるが、柱痕跡は確認できなかった。主柱穴は不整な楕円形プランを呈し、径0.5~0.9m、深さ0.55mである。住居跡南辺には、中央にピットがひとつ、これから東に伸びる細長い土坑がひとつある。ピットは径0.4~0.55m、深さ0.2m、土坑は長径1.4m、短径0.7m、深さ0.25mである。床面には炉跡以外に焼土、炭化物等は認められなかった。床面は全て地山削り出しで、貼り床はない。

SC-12の南西隅に切り合って検出された土坑は、東西に長い隅丸長方形プランを呈し、規模は東西2.1m、南北1.5m、深さ0.5mである。遺物はSC-12といっしょに取り上げており詳細な時期は不明だが、SC-12に近い時期が考えられる。

SC-12出土遺物 Fig.29 PL.19

コンテナ1箱分の遺物が出土した。縄文土器、弥生土器、古式土師器、土製品、鉄滓4点の他、縄文時代の黒曜石製石器・チップ多数が出土した。黒曜石には姫島産黒曜石2点が含まれている。

124は縄文土器である。器面が著しく剥落して不鮮明だが、外面は凹線文もしくは指痕痕、内面はつぶし状のナデ、外底には鯨の脊椎骨の圧痕が残る。赤褐色を呈し、胎土に雲母粒と砂粒を多量に含み、焼成は不良である。阿高式系土器と見られる。

120~122は鉢である。120は小形品で、半球形をなし深い。器面が剥落して調整は不明である。淡黄白色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。口径11.0cm、器高4.7cm。121はやや浅めの器形をなす。内外面ともハケ目調整である。橙褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良。口径18.8cm、器高6.0cm。122は大型品で、半球形で深い器形である。外面は上半がハケ目、下半がナデ調整、内面はハケ目調整である。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。口径26.0cm、器高12.9cm。123は底部片で、平底である。器面剥落のため調整不明。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良。底径5.4cm。125は台付鉢の脚部で、脚の中位に穿孔4つがある。内外面ともハケ目調整である。淡褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。底径13.6cm。

126は土製品である。粘土で凹盤状の薄い板を作るが、平坦ではなく歪みがある。外縁の調整は不充分で凹凸がある。片方の面の外縁に粗雑な凹線を巡らせる。凹線内の傷は調査時のものである。ナデ調整で、淡褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。径11.5~12.5cm、厚さ1.0cm。

127~131は石鎚で、いずれも良質の黒曜石製である。127は基部の抉りの浅い鎚で、薄い。先端部を欠く。128は分厚い作りで、基部を欠く。129~131は剝片を素材にし、縁辺に2次加工を加えて鎌形に整形しており、素材の大剝離面と主要剝離面を残している。素材のエッヂは残しておらず、広義の剝片鎚に分類される。131のみ片脚を欠く。132はつまみ形石器である。縦長剝片の両側から抉りを

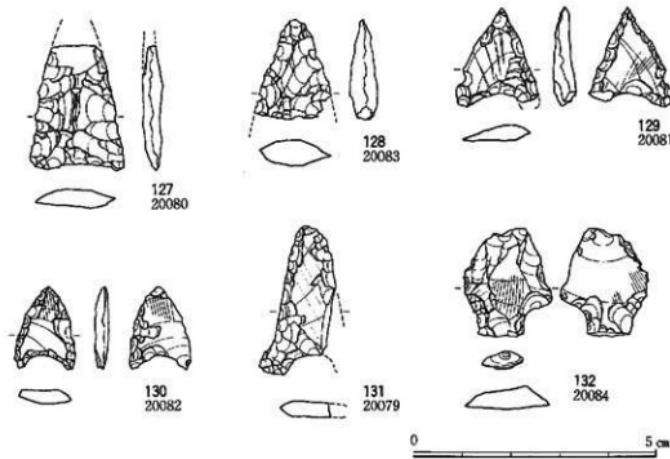
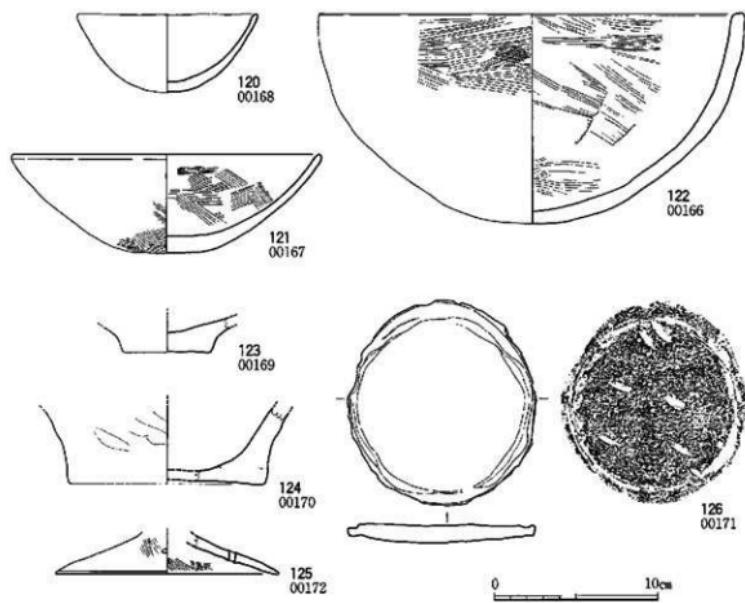


Fig.29 SC-12出土遺物実測図 (1/3・1/1)

入れ、背面側から加力して折っている。抉りはやや片側に偏っている。

時期的に古い遺物が混じるが、弥生時代末～古墳時代初頭に位置付けられよう。

SC-13 Fig.30 PL.8

SC-12の南西に1.5m離れて位置する竪穴住居跡である。西隣を溝状造構SD-10に切られる。2軒の住居跡が切り合っているが、検出時にこれを把握できず、2軒を同時に掘り下げた。2軒の住居跡はいずれも隅丸長方形プランと見られ、1軒は南東～北西、他の1軒は南西～北東に長く、土層観察から前者が後者を切るものと考えられる。

前者の住居跡は、長辺5.05m、短辺4.7mで、深さは最大0.4mを残す。住居跡の覆土は①暗褐色土②暗褐色土と黄褐色土の混在土（土器片を多量に含む）③暗褐色土（土器片を含まない）④暗褐色土⑤暗褐色土に黄褐色粘質土ブロックを含む⑥⑦に近似し黄褐色土をより多く含む⑦黒褐色土⑧黄褐色土に暗褐色土を含む⑨⑩に近似する⑩黄褐色土⑪⑫に近似するで、地山上は黄褐色粘質土である。床面の南東側にベッド状造構がある。ベッドは北東側で幅1.3m、床面との比高0.15mであるが、南東側ではベッドの形が不明瞭で、緩い起伏と化している。ベッドは削り出しで、一部を地山土で盛って形を整えている。壁際の周溝は住居跡の北東辺の一部にあり、幅0.1m前後、深さ0.05mである。炉

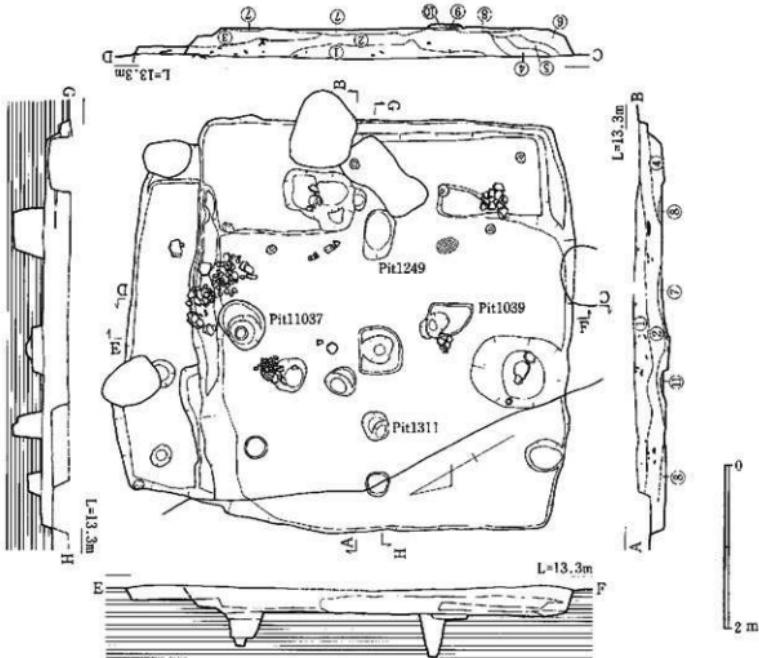


Fig.30 SC-13実測図 (1/60)

跡は確認できなかった。住居跡長軸上の深めのピット 2 つ (1311, 1249) が主柱穴と見られるが、柱痕跡は確認できなかった。主柱穴は円形～楕円形プランを呈し、径 0.3～0.6m、深さ 0.35m である。南西辺の中央から北西に少し寄った位置に楕円形プランの土坑がある。北東～南西に長く、長径 1.2m、短径 0.85m、深さ 0.2m を測る。床面は固く締まっており、南に偏して焼土が 1 ケ所認められた。

後者の住居跡は短辺 4.3m で、長辺は不明、深さ 0.15m である。覆土は暗褐色土と黄褐色土の混在土である。北東側にベッド状遺構があり、幅 0.7～0.8m、比高 0.05m。地山削り出しである。主柱穴は長軸上の 2 つ (1037, 1039) と見られ、楕円形プランで、径 0.25～0.6m、深さ 0.4～0.53m である。

住居跡がある程度埋没した③層の上面から②層にかけて、土器小片を中心に大量の遺物が北側から投棄された状態で出土した。

SC-13出土遺物 Fig.31～35 PL.19, 20, 28～30

住居跡覆土からは合わせてコンテナ 5 箇分の遺物が出土した。遺物には、弥生土器多数、砥石 12 点、磨石 1 点、鉄片 87 点、鉄滓 14、楕円形、鉄塊系遺物などがある。住居跡内では鍛冶炉は確認できなかった。住居跡廃棄後に製鉄関連遺物を投棄したものと見られる。

弥生土器には、壺、壺、高杯、鉢の器種がある。

133～141 は壺形土器である。胴部の膨らみが少なく長胴形をなすもの (135, 137 等) と、胴部に張りがあり球形をなすもの (138～141) がある。133 は小形で、胴部の張りがほとんどない。淡赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良である。口径 14.0cm。134 も胴部の張りが少なく、口縁は「く」字形に屈曲し、屈曲部内面に稜がある。胴部外表面ともハケ目調整で、口縁部を横ナデ調整する。褐～暗褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。口径 16.8cm。135 は長胴の壺で、底部が凸レンズ状の不安定な平底をなすものである。口縁は「く」字形に屈曲して外反するが、内面の棱ははっきりしない。胴部外表面はタタキ目の上から軽くハケ目調整を行い、下半部には削り気味のヘラナデを加えている。内面はハケ目調整で、底部には指頭痕が残る。口縁部は明瞭ではないが横ナデ調整か。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。口径 20.5cm、器高 33.2cm、底径 7.3cm。136 は口縁部で、外面全体にタタキ、胴部内面に粗いハケ目調整を施す。口縁部内面は横ナデ調整か。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。口径 25.0cm。137 は長胴の壺で、口縁部を欠く。底部は小さい平底で、下彫れの器形をなす。胴部外表面はハケ目調整した後、下半をヘラ削りし、内面はハケ目調整で、底部に指頭痕を残す。淡黃白色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。138 は小形品で、口縁部は短く外反する。淡赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。口径 14.2cm。139 は口縁部がやや長く外反するもので、器面が剥落して調整は不明である。淡棕赤色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は極めて悪い。口径 21.0cm。140 は口縁部の屈曲がやや緩やかである。外面ハケ目、内面は指頭痕をハケ目で消し、下半はその上からナデ調整を加える。淡黃白色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。口径 23.6cm。141 は口縁が強く屈曲し、外反して短く開く。外表面ともハケ目調整で、外面は上からナデ調整を加える。口縁部は横ナデ調整である。暗赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。口径 20.3cm。

142 は壺形土器か。張りのある球形の胴部に短く開く口縁部が付く。器面が剥落しており調整は不明である。赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。口径 13.5cm。143 は直口壺である。器面が剥落して調整は不明。褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良である。口径 13.0cm。

144～147 は壺ないし壺の底部片である。144 は平底で壺形土器の底部と見られる。底部中央が若干窪む。窪溝が著しく調整は不明である。黃褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。底径

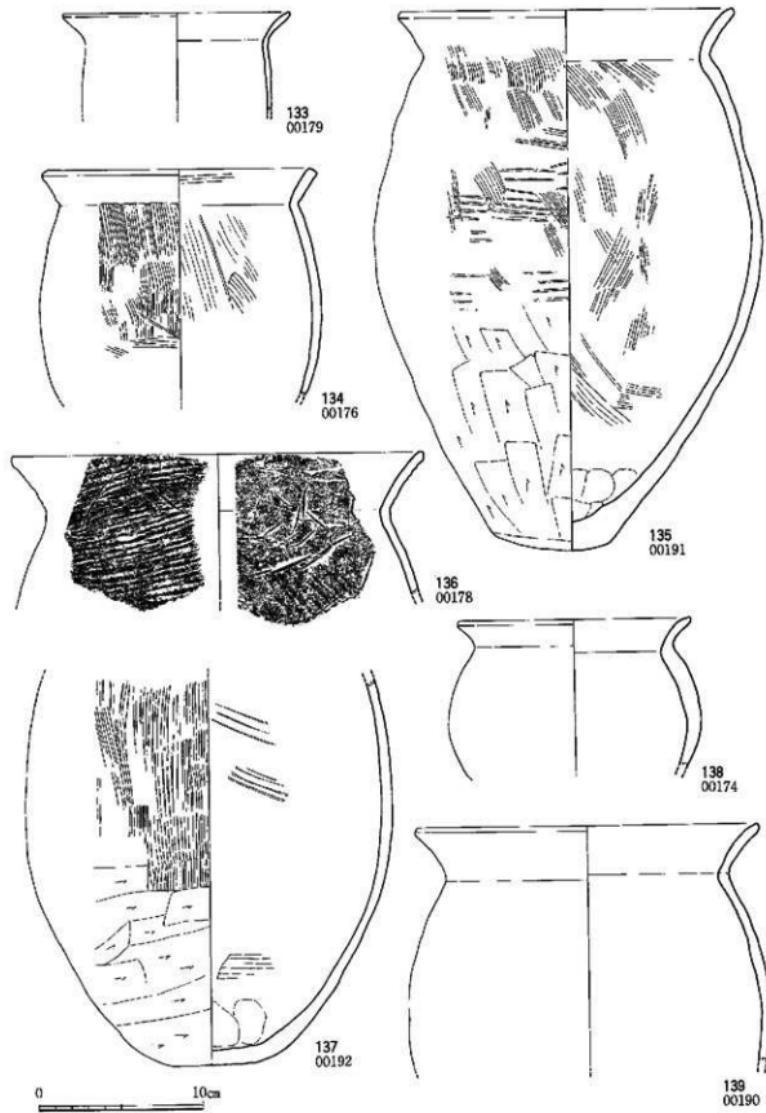


Fig.31 SC-13出土遺物実測図 I (1/3)

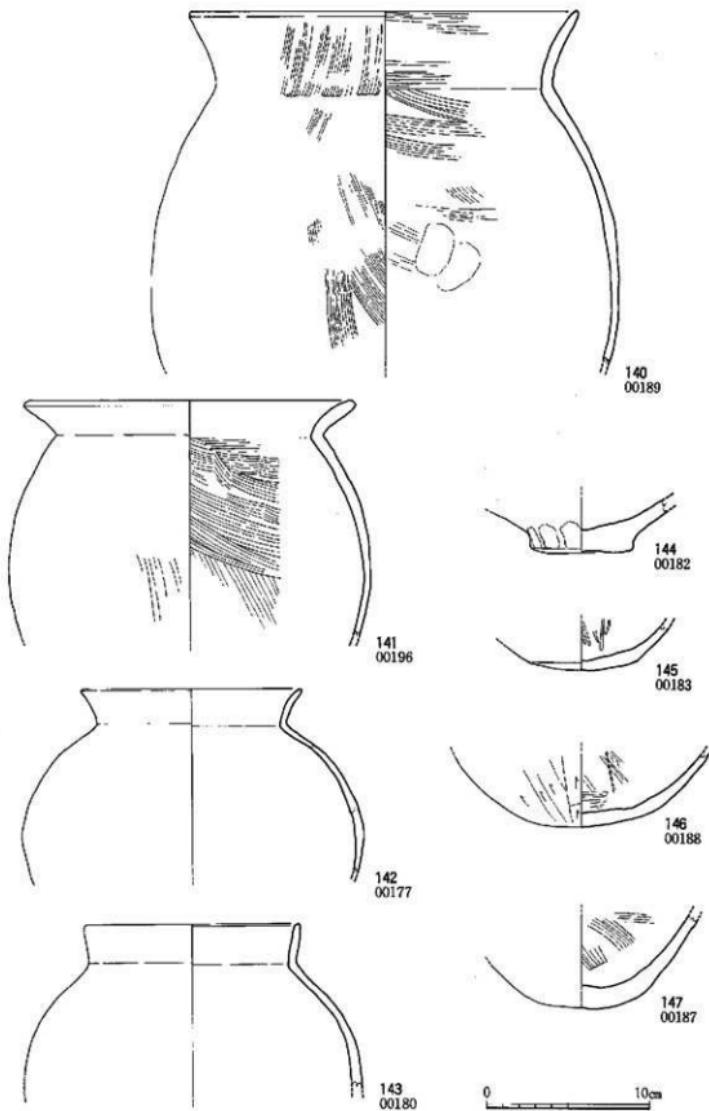


Fig.32 SC-13出土遺物実測図 II (1/3)

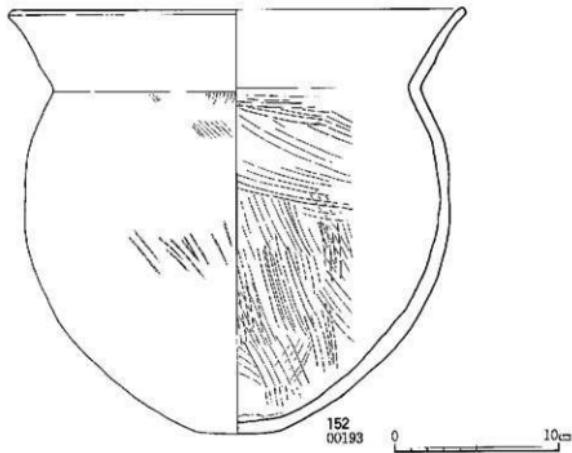
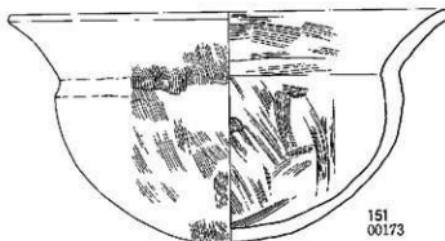
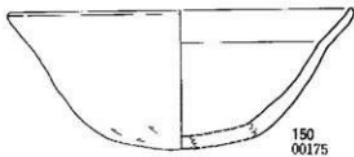
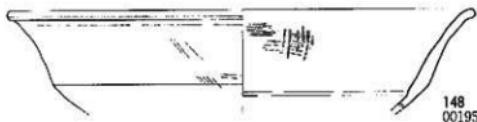


Fig.33 SC-13出土遺物実測図Ⅲ (1/3)

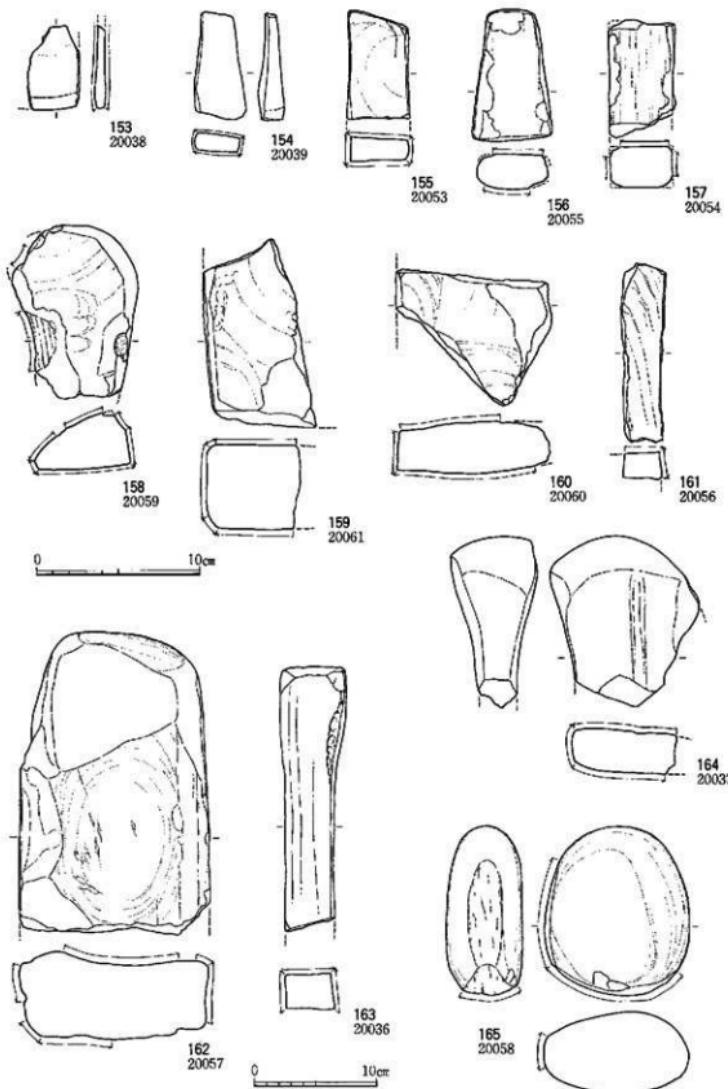


Fig.34 SC-13出土遺物実測図IV (1/3・1/4)

6.2cm。145は平底の痕跡を留める丸底で、内面にハケ目が残るが他は調整不明。淡黄白色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良。146は丸底で、外面ヘラ削り、内面ハケ目調整。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。147も丸底で、外面ナデ、内面ハケ目調整。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。

148は高坏形土器である。坏部の小片で、口縁部は屈曲し、外反して短く伸びる。内外面ハケ目調整で、内面に暗文を加える。赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成が不良である。口径28.6cm。

149～152は鉢形土器である。149は半球形の椀形をなし、端部が肥厚する。内外面ともハケ目調整で、口唇部から外面上半にかけて横ナデ調整を加える。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良。口径16.9cm。150は平底のなごりを残す丸底で、口縁部には僅かに屈曲がある。外面タタキ、内面ナデ調整で、底部外面にはヘラ削りを加える。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。口径21.2cm、器高8.5cm。151は丸底で、胴部が半球形をなし、口縁がやや長く伸びる。内外面ハケ目調整で、口縁部外面を横ナデ、内面を横ハケ目調整する。淡黄白色を呈し、胎土に砂粒を

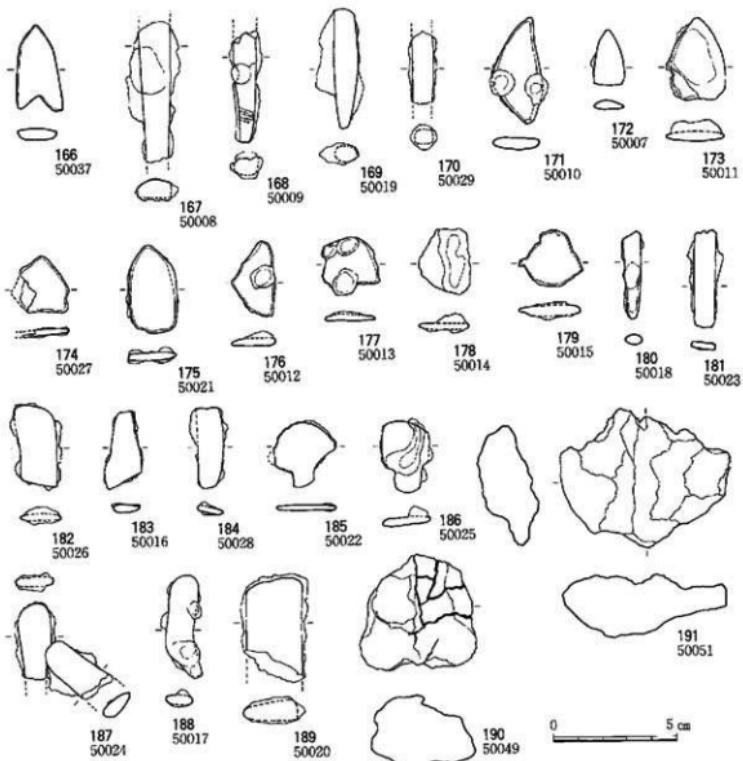


Fig.35 SC-13出土遺物実測図V (1/2)

多く含み、焼成はやや不良。口径27.0cm、器高14.2cm。152は口径が器高を上回るため鉢形土器に含めた。丸味のある小さな平底を持つ。口縁部は「く」字形に屈曲し、直線的に開く。外面はタタキの後粗いハケ目調整、内面は粗いハケ目調整で、内底部に指頭痕が残る。口縁部内面はハケ目調整か。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良。口径28.0cm、器高26.0cm、底径5.4cm。

153~164は砥石、165は磨石である。153は小型板状形の砥石の一部で、両平坦面を作業面に用いている。粘板岩系の石材。154は小型板状形の完品で、両平坦面と側面の4面を使用している。粘板岩製で、住居跡床面より出土した。155は小型柱状形をなし、下半を欠く。4側面に研磨痕が残る。粘板岩製。156は撥形に開く小型柱状形を呈し、表裏両平坦面を使用している。石材は安山岩系か。157は小型柱状形で、下半を欠失し、縫合部は剥落している。正面と両側面の3面を使用しており、裏面は未使用である。砂岩系の石材。158は横断面三角形の不定形の砥石で、ほぼ全ての部分を砥石として用いている。特に左側縁は集中的に使用され、弧状に窪む。また左上面に2条、右側面に1条の溝状の窪みがある。砂岩製。159は大型品の一部と見られ、表裏両平坦面と側面、及び角を面取りするように研磨している。安山岩系の石材を使用。160も大型品の一部で、板状を呈し、両平坦面と側面の3面が使用により浅く窪む。砂岩系の石材を用いている。161は大型品の一部で、正面と右側面に研磨痕がある。砂岩製。162は大型の砥石もしくは石皿で、下半を欠き、一部表面が剥落している。全側面に使用痕があるが、部分的に未使用部分が残っている。表面は皿状に浅く窪み、左側面には溝状の窪みがある。石材は安山岩系か。163は大型柱状形で、下半を欠く。裏面以外の3側面を使用し、正面には浅い溝状の窪みがある。砂岩系の石材か。

164は大型板状で、下半を欠く。表裏両面と側面を使用しており、著しい研磨により中央部が痩せ細る。正面には溝状の細長い窪みがある。砂岩系の石材であろう。165は磨石である。自然の転石を用い、下面と左側面に使用痕がある。安山岩系の石材を使用している。

166~191は鉄器である。166は鐵である。167~170は鎌の基の可能性があり、168には木質が付着する。鉄片にはほぼ三角形を呈する板状のもの(171~179)、細棒状のもの(180)、細板状のもの(181)、不整形な板状のもの(182~186)、やや厚みを持つもの(187~189)等がある。190は鐵塊系遺物でクラックが入る。191は楕円形鍛冶滓で、他にも1点楕円形滓の可能性を持つものがある。図示した以外に57点の鉄片と、鐵滓多数が出土している。

出土土器は、弥生時代後期後半新段階の特徴を有しており、今回調査した堅穴住居跡の中では最も古く位置付けられる。また、大量の製鐵関係の遺物が出土したが、フイゴ羽口・燧体等の炉に関わる遺物は認められなかった。

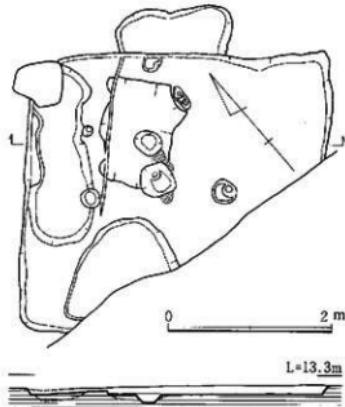


Fig. 36 SC-14実測図 (1/60)

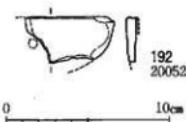


Fig. 37 SC-14出土遺物実測図 (1/3)

SC-13の南に0.7m置いて検出した竪穴住居跡である。南側をSD-10に切られ、北東側で土坑SK-16を切る。平面プランは隅丸方形を呈し、3.7×3.4mで、南東→北西にやや長い。深さは0.1mを残す。覆土は暗褐色土で、地山は黄褐色粘質土である。ベッド状遺構、周溝は認められない。床面中央には焼土がある。床面には大小6つのピットが認められたがいずれも浅く、主柱穴は不明である。床面の北西に偏って、3つの浅い落ち込みが見られたが、住居跡掘削時に生じた窓みと見られ、汚れた地山土で埋め、床を貼っている。

SC-14出土遺物 Fig.37

覆土から少量の土器片と石庖丁片が出土した。土器は細片ばかりで固化できるものがない。

192は石庖丁の一部である。安山岩系の石材を用いている。

出土遺物からは時期を決め難いが、遺構の切り合い関係から、弥生時代末頃に位置付けることができる。

(3) 溝状遺構

SD-04 Fig.38 PL.8

調査区西隅に検出した小規模の溝状遺構で、磁北より37°西偏して南流する。直線的に掘られており、幅0.4m、深さ0.3m前後で、横断面は逆台形を呈する。覆土は暗褐色粘質土である。

SD-04出土遺物 Fig.39

コンテナ1/2箱の遺物が出上した。弥生土器、土師器がある。

193、194は古式土師器の甕形十器である。193は口縁部が内湾気味に開くもので、端部内側を少しづつませる。器表面が剥落して調整は不明である。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良。口径14.0cm。194は口縁部が内湾して開く。やはり調整は不明で、黄白色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良。口径17.5cm。以上の遺物から、遺構の時期は古墳時代前期におくことができる。

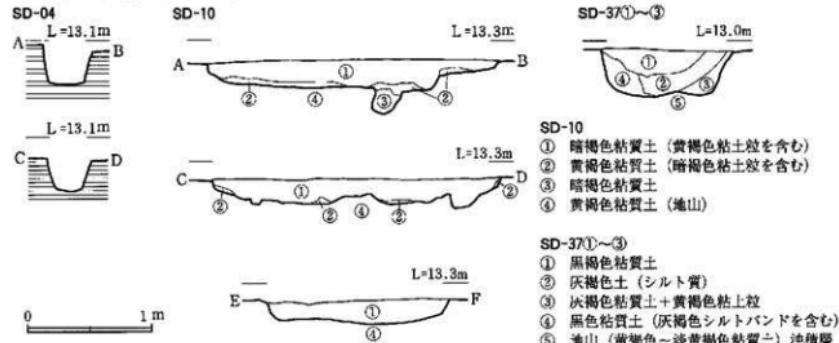


Fig.38 SD-04・10・37①～③断面図、土層断面図 (1/40)



Fig.39 SD-04出土遺物実測図 (1/3)

SD-10 Fig.38 PL.6

調査区北中央に検出した溝状遺構である。竪穴住居SC-13、14を切る。北端では、土層観察および出土土器から見て、SC-07、08を切ることは間違いないものと見られ、遺構検出時に数回にわたり平面プランの確認を試みたが、ついに確認することができなかった。SD-10は南北方向の溝1条と、これに「T」字形に連結する東西方向の溝2条からなる。南北方向の溝は磁北から3°東にふれ、幅2.4m、深さ0.2mで、横断面形状は浅い逆台形状をなし、底面は平坦で浅い凹凸がある。北端は東西方向の溝と交差する地点から幅を狭め、幅1.0mとなる。東西方向の溝のうち、南側のものは幅1.5m、深さ0.2mで、形状は南北溝に等しい。北側の東西溝は規模が不明である。覆土は暗褐色粘質土が主体を占め、自然に埋没した状況を示している。SD-10は調査区北西の段丘面上の東側の一部を区画するがごとく掘られており、東邊と南邊は段丘落ち際に中世末に掘削された溝SD-30に切られている。

SD-10出土遺物 Fig.40,41 PL.20,29,30

コンテナ7箱の遺物が出土した。古式土師器多数、砥石1点、鉄器・鉄片7点がある。

古式土師器には壺、壺、高壺、小型器台、小型壺、鉢、手捏ね土器、製塙土器がある。

195~199は壺形土器で、いずれも口縁部付近の破片である。195~198は頸部内面が丸味を持ち、稜線を形成しないもので、口縁はやや内湾気味に開く。器面の残りが悪く、調整は明瞭ではないが、195、196は胴部内面にヘラ削りが認められる。195~198の色調は、順に褐色~淡橙色、淡黄白色、淡白褐色、淡黄色である。胎土は198のみ精良で、他は砂粒が多く含む。焼成は195のみ良好で、他は極めて悪い。口径は順に、15.2cm、14.5cm、16.5cm、16.0cmである。199は頸部内面に棱を持ち、口縁部が直線的に伸びて、端部が上方に肥厚するものである。器面が剥落しており調整は不明で、暗赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良。口径17.5cm。

200~203は壺形土器である。200は單口縁壺で、外側は調整不明、内面は口縁部にハケ目、頸部に指頭痕、副部にヘラ削り調整を施す。淡白褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良。口径16.4cm。201は口縁部が袋状に内傾する二重口縁壺で、器面が剥落しており調整は不明。淡紅褐色を呈し、胎土は精良で、焼成が極めて悪い。口径10.6cm。202、203は二重口縁壺である。202は胴部外側ハケ目、内面ヘラ削り、口縁横ナデ調整で、淡白褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良。口径19.8cm。203は調整が不明で、外側灰黒色、内面淡黄色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良。口径19.7cm。

204~209は底部片である。204は小さな平底で、底部をドーナツ状に作り粘土を充填しており、焼成前に行った径0.8cmの穿孔がある。調整は不明。淡黄白色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は不良。205は小さな平底の名残りが残る丸底で、外側にタタキを施す。外側赤褐色、内面淡褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良。206、207は平底で、底部に粘土を充填しており、中央部がやや膨らむ。ともに淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成はやや不良である。208は小さな平底で、外側にタタキを施す。淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良。209は丸底で、外側板状工具によるナデ、内面ナデ調整。淡橙色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。

210は高壺形土器で、脚を壺底に差し込んで接合している。壺部は底が小さく、口縁部は内湾してやや長く伸びる。脚屈曲部の相対する2ヶ所に穿孔がある。脚部外側にハケ目、内面にシボリ痕が残るが、他は器面が剥落している。淡橙褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。

211、212は小型器台である。ともに脚部を欠き、調整は不明である。211は明橙褐色、212は淡橙黄色を呈し、ともに胎土は精良で、焼成は不良である。211は口径8.4cm。

213は脚付鉢か。体部は内湾して開く。脚部外側に指頭痕、内面に指頭痕と横位のハケ目がある。

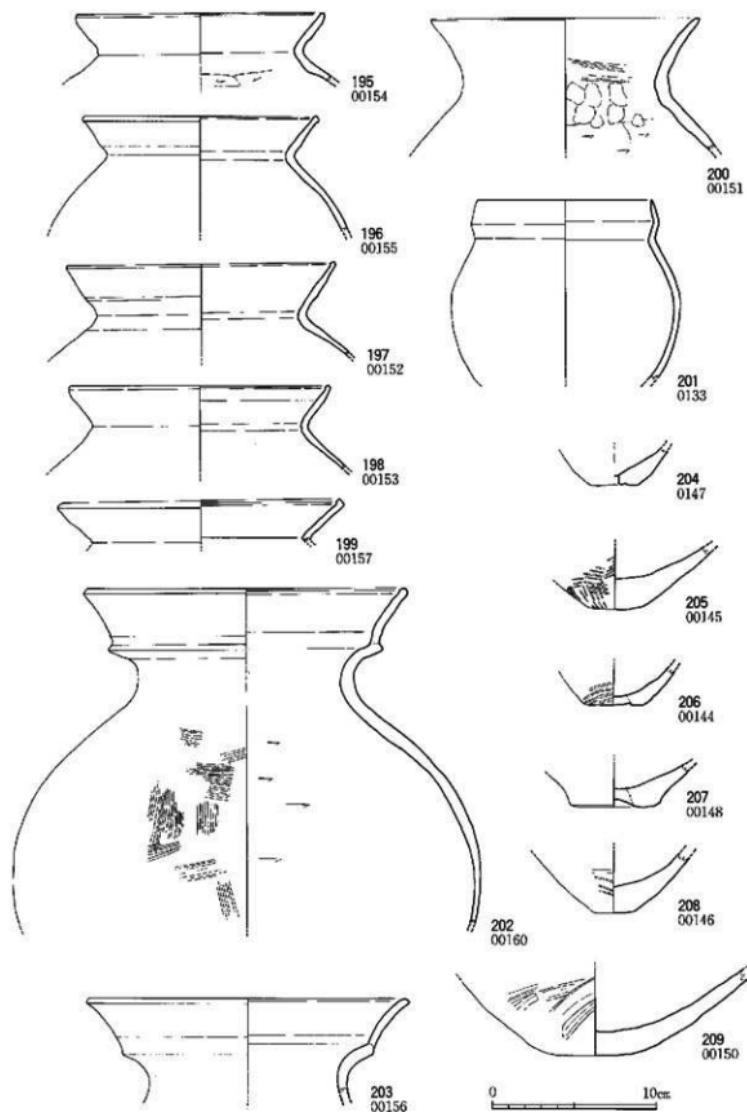


Fig.40 SD-10出土遺物実測図 I (1/3)

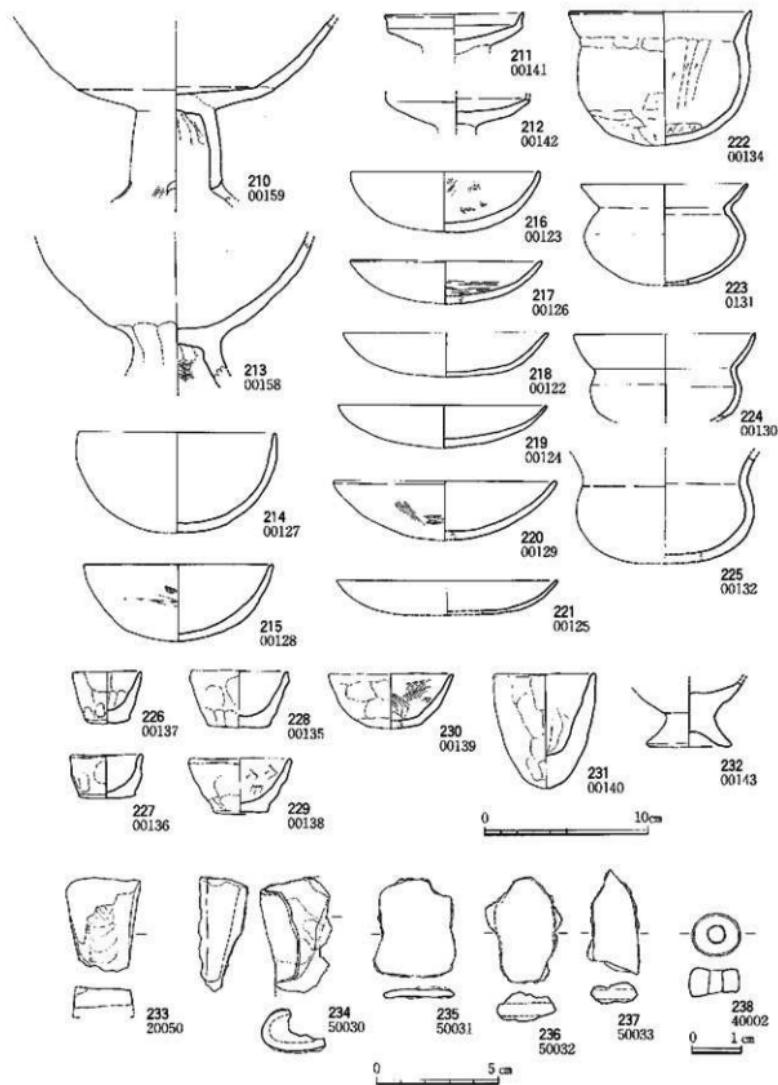


Fig.41 SD-10出土遺物実測図 II (1/3-1/2-1/1)

体部はナデ調整か。脚内面は黒色、他は橙褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。214～221は鉢形土器である。器形が深めのもの（214）、浅いもの（217～221）、中間的なもの（215、216）がある。214は調整が不明で、黄白色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は不良。口径12.0cm、器高6.1cm。215は外面ハケ目、内面ナデ調整で、外面淡橙色、内面黒色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良。口径11.6cm、器高4.7cm。216は外面調整不明、内面ハケ目調整で、淡橙色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。口径11.6cm、器高3.7cm。217は外面調整不明、内面ヘラミガキで、暗褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良。口径11.7cm、器高2.6cm。218は調整が不明で、淡褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良。口径12.5cm、器高2.7cm。219も調整不明で、赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良。口径12.7cm、器高2.6cm。220は外面ハケ目、内面ナデ調整で、外面黄褐色、内面淡橙色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良である。口径13.7cm、器高3.6cm。221は調整不明で、淡黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は極めて悪い。口径13.5cm、器高2.1cm。

222～225は小型壺である。222は厚手で、外面は頸部に指頭痕があり、ナデ調整で、下半はヘラ削り。内面は指ナデ調整。淡橙黄色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良である。口径11.2cm、器高8.3cm。223、224はいわゆる小型丸底壺で、ともに調整は不明である。223は赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。口径10.2cm、器高6.2cm。224は淡褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良。口径11.2cm。225は口縁部が緩く屈曲して外反するもので、調整は不明。淡褐～淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良である。

226～231は手捏ね上器である。猪口形の器形をなし、231のみ尖り氣味の丸底で、他は平底ないしは丸味のある平底である。いずれも指頭により成形するが、228は内面ナデ、229は内面板ナデ、230は内面ハケ目調整をそれぞれ行っている。226は淡赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良。227は外面黒褐色、内面明褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。228は淡赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好。229は淡橙色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良。230は淡褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良。231は淡褐～灰黒色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

232は製塙土器の底部片である。器面が剥落して調整は不明。淡黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。

233は砥石片である。小型板状で、砂岩製である。

234～237は鉄製品である。234は鉄斧もしくは鉄製錐先の一部か。鉄板の一端を折り返して袋状に作っている。235～237は鉄片である。

238は臼玉である。滑石製で、径0.85～0.9cm、厚さ0.45cmを測る。

出土遺物及び遺構の切り合い関係から、SD-10は古墳時代初頭に位置づけられる。

SD-37①～③ Fig.38 PL.8

調査区北東に検出した溝状遺構SD-37のうちSD-50以北の部分である。軸をほぼ磁北に取って南へ傾斜し、北端を中世末の溝SD-30に、南端を古代の溝SD-50にそれぞれ切られる。幅は南端で1.0m、北端で0.7mを測り、深さは0.4mで、横断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で中央がやや窪む。覆土は粘質土～シルトで、基盤土は沖積粘質土層である。

SD-37①～③出土遺物 Fig.39 PL.20,29

コンテナ2箱の遺物が出土した。弥生土器・土師器多数、石庖丁1点、砥石2点がある。

土器には壺、壺、高杯がある。239は弥生時代前期末の壺形土器である。口縁は外反して開き、端

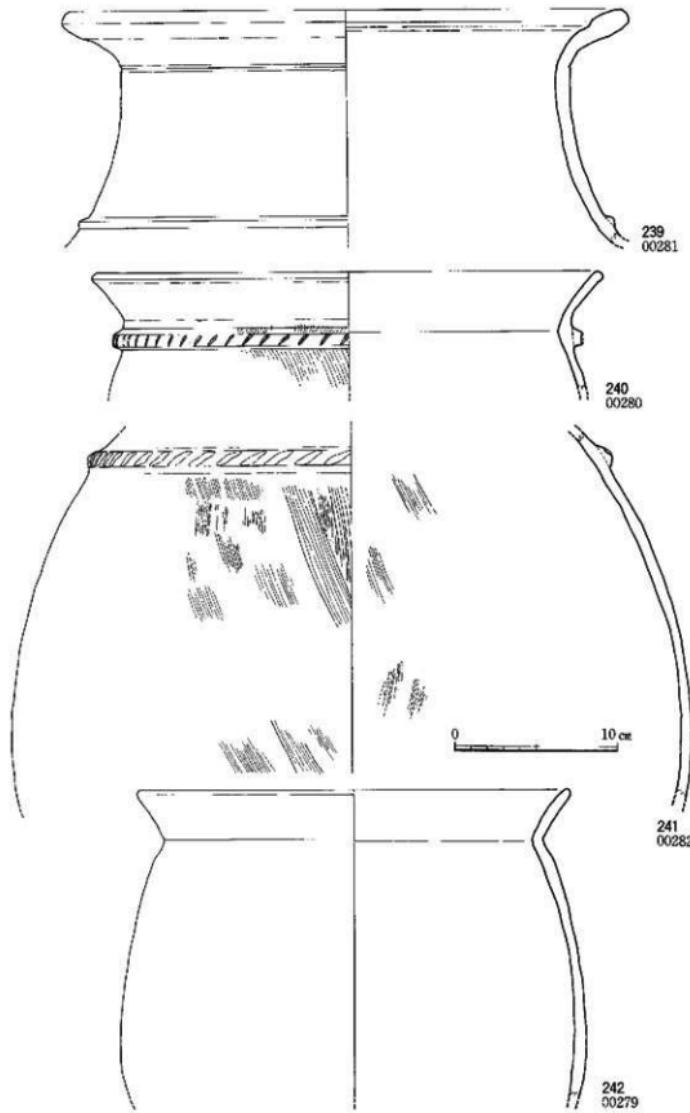


Fig. 42 SD-37出土遺物実測図 I (1/3)

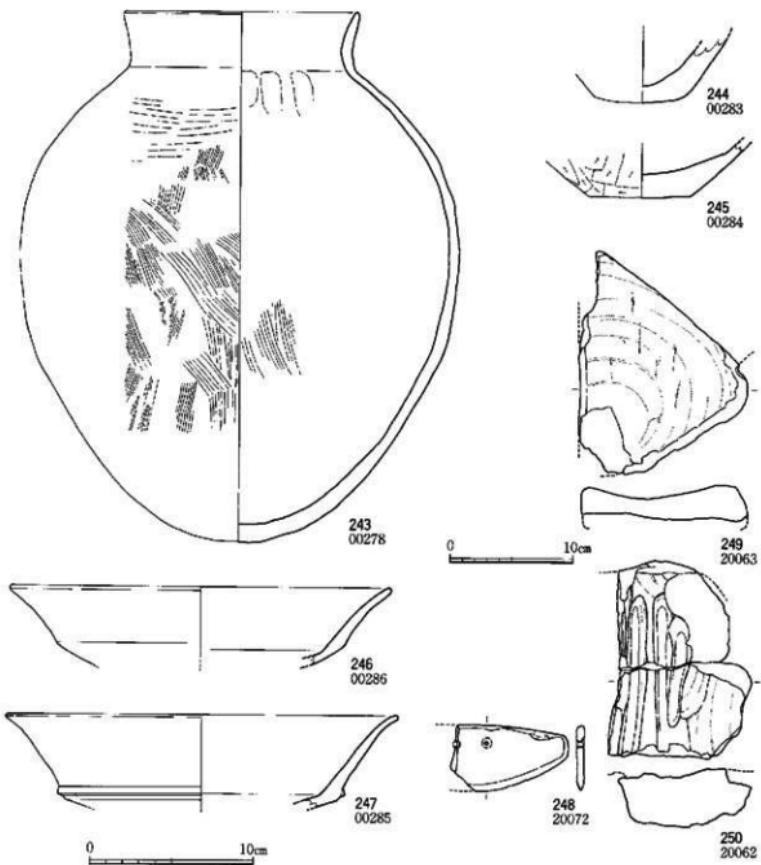


Fig. 43 SD-37出土遺物実測図 II (1/3-1/4)

部内面が肥厚して段をなす。外面の口縁直下に沈線が巡り、肩部には断面三角形の突帯が貼付される。器面が著しく剥落しており調整は不明である。淡黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良である。口径33.6cm。240は甕形土器である。頸部に断面白台形の突帯を貼り付け、先端を尖らせた鋸角な板小口で刻目を入れる。外面はハケ目調整で、内面はナデ調整か。口縁部内外は横ナデ調整する。淡橙黄色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。口径31.2cm。241は壺の胴部片であろう。肩部に断面三角形の突帯を巡らせ、細棒の側面を押圧して刻目を加える。器面の残りが悪いが、内外面ともハケ目調整と見られる。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。242は甕形土器である。口縁が「く」字形に屈曲し、胴部はなで肩で、長胴になる器形と考えられる。器面の残りが悪いが、外面ハケ目、内面ヘラ削り調整か。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不

良である。口径26.2cm。243は直口壺である。倒卵形の丸底の肩部に、短く聞く口縁部が付く。外面は肩部にタタキ、以下にハケ目調整を施し、内面はハケ目調整で、頸部と底部に指頭による調整を加える。明赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良である。口径14.4cm、器高32.3cm。244は底部片で、凸レンズ状の座りの悪い平底である。内面はナデ調整だが他は調整不明。淡黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。245も底部片で、平底である。外面ヘラ削り、内面ナデ調整。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。246、247は高坏の口縁部片である。246は調整が不明で、淡橙褐色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。口径23.2cm。247は屈曲部外面に断面三角形の突帯が巡り、黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。口径14.0cm。

248は石庖丁片である。穿孔と刃の研ぎ出しが両面から行っており、穿孔部から折れている。片岩系の石材を使用している。249は石皿の表面が剥げ落ちたものである。使用により浅く窪む。安山岩製。250は玉砥石である。激しい使用により、中央部が薄くなっている。正面に5条、裏面に1条の溝状の溝みが残っている。砂岩製。

遺物には時期の古いものが混じるが、古墳時代初頭の遺構であろう。

(4) 土坑

SK-15 Fig.44

調査区北端の中央に位置する土坑である。3つのピットに切られる。平面プランは南北に長い不整な隅丸長方形を呈し、南北2.4m、東西0.8m、深さ0.25mを測り、底面は平坦である。覆土は暗褐色土である。

SK-15出土遺物 Fig.45

少量の土器片が出土した。

251は鉢で、底部が分厚く、中央が窪んで上げ底状になっている。口縁は内屈して短く立つ。淡赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。器面があれていますが、外側はタタキの後、ヘラ削りを加えたものか。内面はヘラミガキを施す。口径17.0cm、器高7.0cm、底径6.0cm。

出土土器が少なく明確ではないが、遺構の時期は弥生時代末～古墳時代初頭と見られる。

SK-17 Fig.44

調査区北端から南へ16m、西端から28mに位置する土坑で、掘立柱建物SB-124と重なっている。南北に長い隅丸長方形プランをなし、南北1.55m、東西0.95m、深さ0.1mで浅く、底面は平坦である。覆土は暗褐色土で竪穴住居跡等に近似しており、住居跡に近い時期の遺構と考えられる。土器片5点が出土したが、全て細片で図化できるものがない。

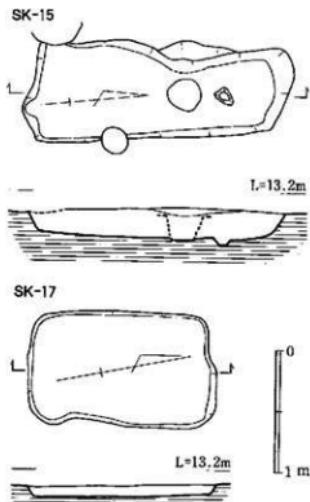


Fig.44 SK-15-17実測図 (1/40)

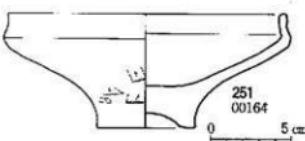


Fig.45 SK-15出土遺物実測図 (1/3)

5. 古代の遺構と遺物

(1) 溝状遺構

SD-50 Fig.46,47 PL.9,10

調査区の東端に検出した水路状の遺構である。南西から北東へ向かって直線的に掘られており、主軸は磁北から 32° 東に偏している。調査区内で75mの長さを確認した。北半部は全掘したが、南半部は調査期間の都合で平面プランの検出と部分的なトレンチ調査に留めた。南半部は削平されて残りが悪い。幅は最大で4.6mを測り、深さは最大1.4mを残し、横断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で、底面の幅は2.2m前後である。溝は砂→シルト→粘質土の順に堆積しており、特に下層の砂の堆積が分厚く、かなりの水量があったことを示している。壁面・底面には水流で抉られてできた窪みがある。基盤土は上層から粘質土、シルト、砂で、溝覆土の砂層は基盤土が流出して堆積したものと見られる。

SD-50出土遺物 Fig.48,49 PL.20,29

コンテナ9箱の遺物が出土した。大半を弥生土器、古式土師器が占めており、他に黒色土器A類の小片3点があるが、細片で図化できない。

252は弥生時代前末期の壺形土器の口縁部片である。口縁は外反し、外面に粘土帯を貼付して肥厚させ、段をつくる。口唇部の上下端には刻み目が入る。口縁内面がハケ目調整で、他はナデ痕跡である。黄褐色を呈し、胎土に粗砂粒を多量に含み、焼成は良好。口径38.0cm。253~255は壺の底部片である。いずれも安定のよい平底で、淡褐~赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。253は底部中央に焼成後の穿孔がある。底径は順に8.2、9.0、8.8cmである。256は壺の底部であろう。黄褐色を呈し、胎土に粗砂粒を多く含み、焼成はやや不良。底径8.2cm。257は壺の底部で、小さな平底である。外面はタタキ、内面はナデ調整で、底部中央には粘土を充填した痕跡がある。淡黄白色を呈し、粗砂粒を含み、焼成は良好。底径3.8cm。外来系の土器である。258は上師質の土器の底部片である。幅広の高台状の低い脚が付く。器面が剥落して調整は不明で、淡橙色を呈し、砂粒を多く含み、焼成は不良である。底径4.1cm。器形は古代の土師器皿に似るが、類例の知れない土器である。259は鉢の脚か。1孔が残るが、全体の孔の数は不明である。内面のハケ目以外は調整不明である。淡橙褐

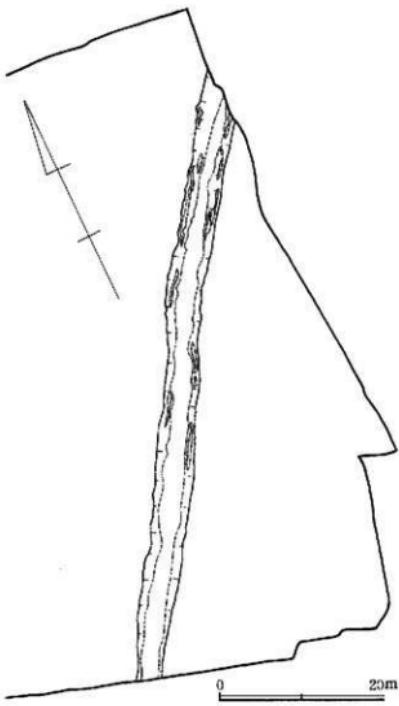


Fig.46 SD-50平面実測図 (1/600)

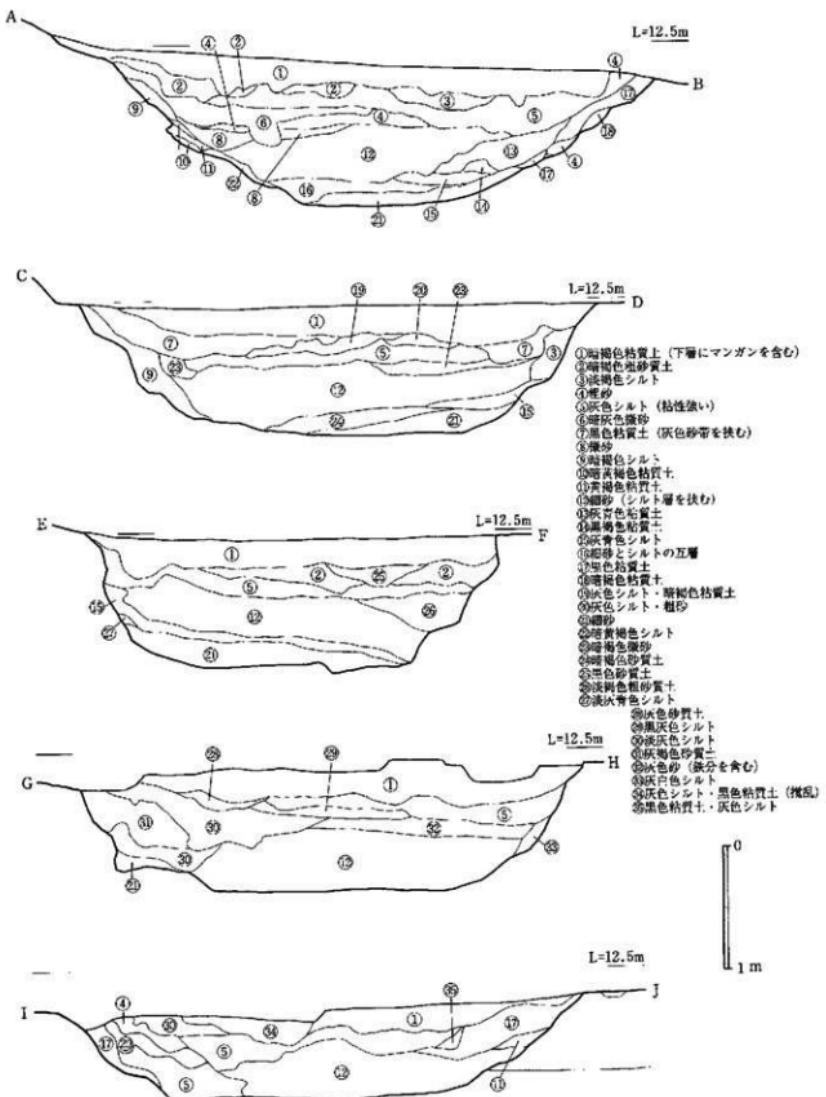


Fig. 47 SD-50 土層断面図 (1/40)

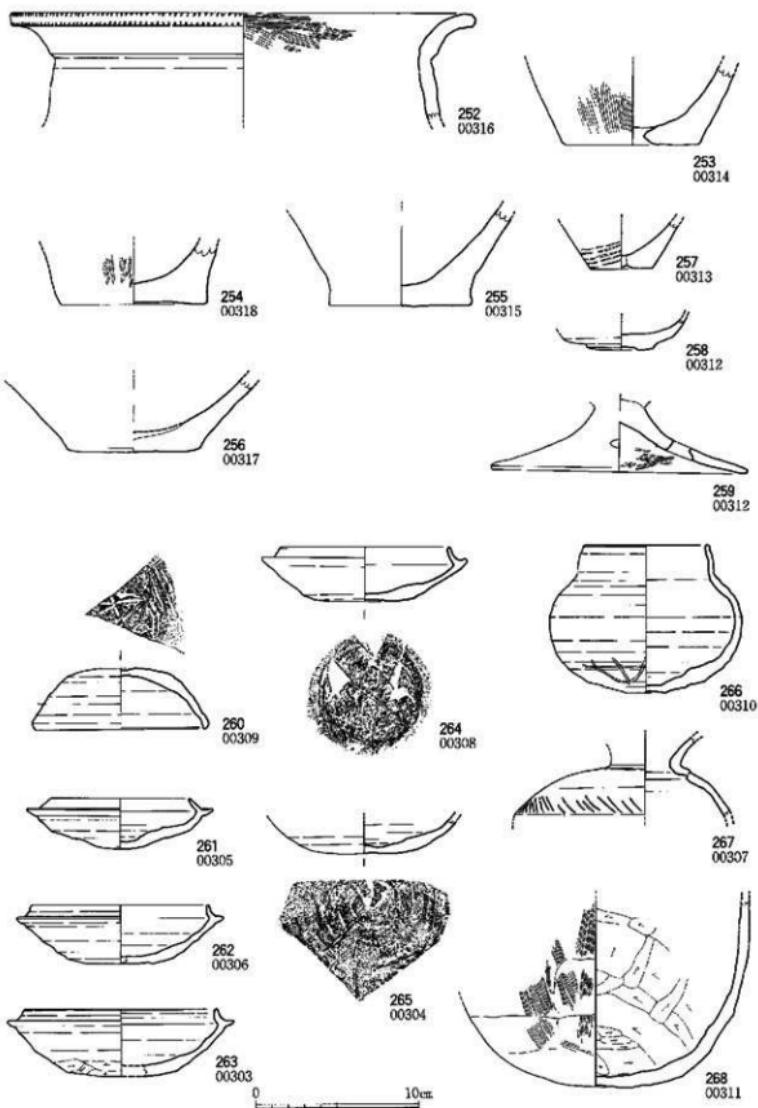


Fig.48 SD-50出土遺物実測図 I (1/3)

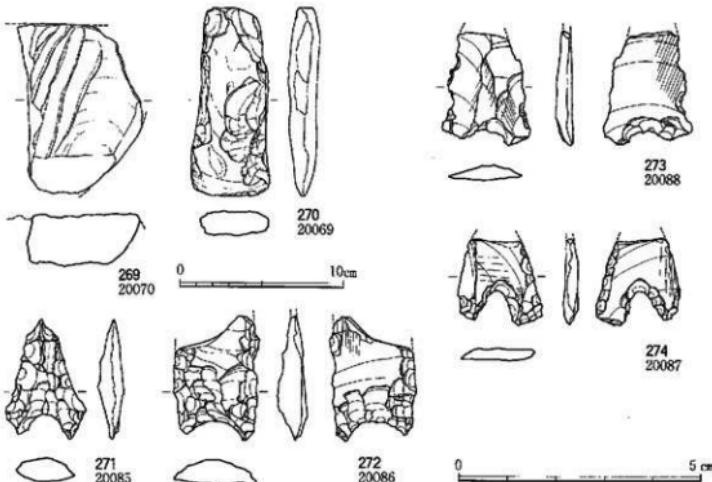


Fig.49 SD-50出土遺物実測図Ⅱ (1/3-1/1)

色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。底径15.8cm。

260~267は須恵器である。260~265は蓋坏。260は蓋で、小型で口縁端部は丸い。大井部はヘラ切りのまま未調整で、ヘラ記号がある。天井部内面にはナデ調整を加える。口径10.2cm、器高3.8cm。261~265は身で、口縁のかえりは内傾して短く、端部は丸い。261は外底の1/3以上に回転ヘラ削りを加え、口径8.4cm、器高3.0cm。262は外底がヘラ切りのまま未調整で、内底にナデ調整を加える。口径10.8cm、器高3.6cm。263は外底の約1/2に手持ちヘラ削り、内底にナデ調整を加え、口径11.8cm、器高4.0cm。264は外底ヘラ切りの後ナデ調整か。ヘラ記号を入れる。内底にはナデ調整を施す。口径10.2cm、器高3.3cm。265は外底がヘラ切りのまま放置され、ヘラ記号がある。内底にはナデ調整を加える。266は小型壺である。ロクロ水引きの後、胴部外面に回転ヘラ削りを加え、底部はヘラ切り離しのまま放置し、ヘラ記号を施す。口径7.7cm、器高9.0cm。267は平瓶で、肩部にヘラ先で刻目を入れるが全周せず、上からナデしており、ヘラ削りの際の傷であろう。口縁を胴部に被せて接合し、上からナデする。素地上の練りが不充分で、胎土が構造を呈する。焼成は甘く、土師質を呈する。

268は土師器壺の底部片である。丸底で胴部が下膨れである。外面に細かいハケ目、内面に雑なヘラ削りを施す。橙褐色を呈し、胎土に粗砂粒を多く含み、焼成は良好である。

269~274は石器である。269は玉砥石の破片で、板状を呈し、正面に3条、裏面に1条の溝がある。砂岩製。270は磨製石斧である。縦斧で、打欠と研磨で整形しており、刃部に刃こぼれがある。片岩系の石材。271は黒曜石製の石鏃で、厚みがある。272は広義の剥片鏃で、表裏に素材の剥離面を残すが、縁辺にエッジは残していない。先端部を欠く。黒曜石製。273、274は狭義の剥片鏃で、素材の剥離面とエッジを残している。先端部を欠失する。黒曜石製。271~274の黒曜石は腰岳産と見られる。

出土した土器は大半が7世紀以前のものであるが、258や黒色土器A類の小片の出土から見て、古代に属するものと考えられる。

(2) テラス状遺構 SD-30 Fig.50

調査区北端の段丘面の落ち際に検出した平坦面と、これを覆う古代の遺物包含層である。中世末～近世初頭の溝SD-30に切られており、これの掘削途中で包含層の存在に気づいたため、遺物はSD-30④の番号で取り上げた。遺構は、段丘面の落ち際に段状に削り出して平坦面を設けたもので、規模は14m×6mである。遺物包含層は、段丘寄りに厚く、SD-30寄りに薄く堆積しており、固く締まっている。包含層の下面では浅い窪みと少數のピットを検出したが、建物等は確認できなかった。

遺物包含層には鉄滓やフイゴ羽口を主体とする製鉄関連遺物が大量に含まれており、テラス内もしくは段丘面上で製鉄を行っていたものと考えられる。

出土遺物 Fig.51～55 PL.21,29

コンテナ9箱の遺物が出土した。須恵器、土師器、黒色土器、越州窯系青磁等の輸入陶磁器、瓦、磚、フイゴ羽口、鉄滓が出土している。

275～277は須恵器である。275は壺で、外底はヘラ切りのまま未調整で板圧痕が残る。口径12.6cm、器高3.3cm、底径7.7cm。276は高台付壺で、体部との境寄りに断面逆台形のやや低めの高台が付く。底径8.8cm。277は壺の口縁部片である。口径12.0cm。

278～281は土師器である。278は壺で、底部はヘラ切りである。口径13.5cm、器高3.3cm、底径8.8cm。279～281は高台付壺で、いずれも体部と底部との境にやや高めの高台が付き、体部が直線的に開くタイプと思われる。高台径は順に9.0cm、8.2cm、7.4cmである。282～285は内面のみに炭素を吸着させた黒色土器A類の碗である。

高台は比較的高く、擬形に開く。器面の磨滅が著しく、調整は不明瞭であるが、283の内面にはヘラミガキの痕が残る。高台径は順に6.8cm、8.5cm、9.6cm、7.8cmである。

286～292は越州窯系青磁碗である。286～288は胎土中に黒斑を含み、釉下に化粧土を施す粗製品である。釉調は黄味の強い淡オリーブ色を呈し、体外面下半は露胎となる。286・288は円整状高台であるが、286は中央部を再度削り、蛇の目高台風にしている。内底には白色の目跡が残る。286は口径18.0cm、器高6.5cm、底径7.3cm。287は口径19.0cm。288は底径10.4cm。289～291は素地が精製されず、胎土中

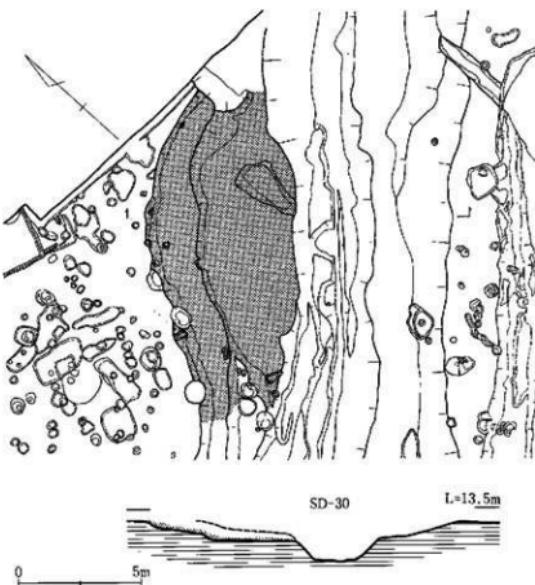


Fig.50 テラス状遺構実測図 (1/200)

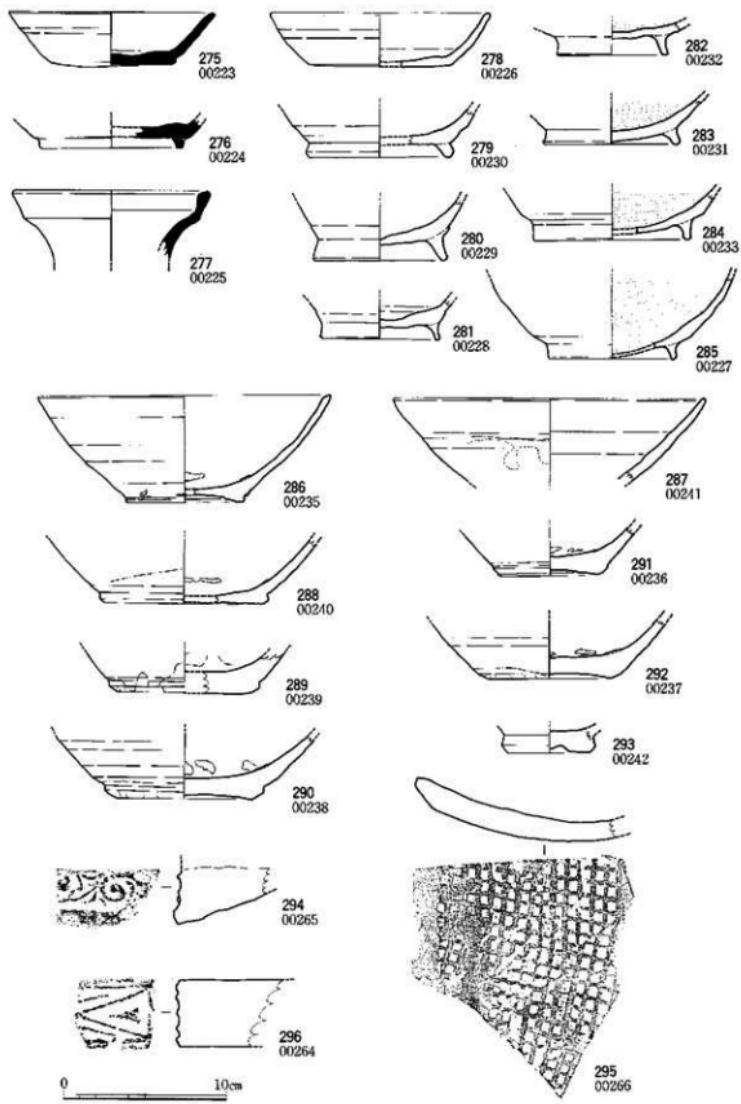


Fig.51 テラス状造構出土遺物実測図 I (1/3)

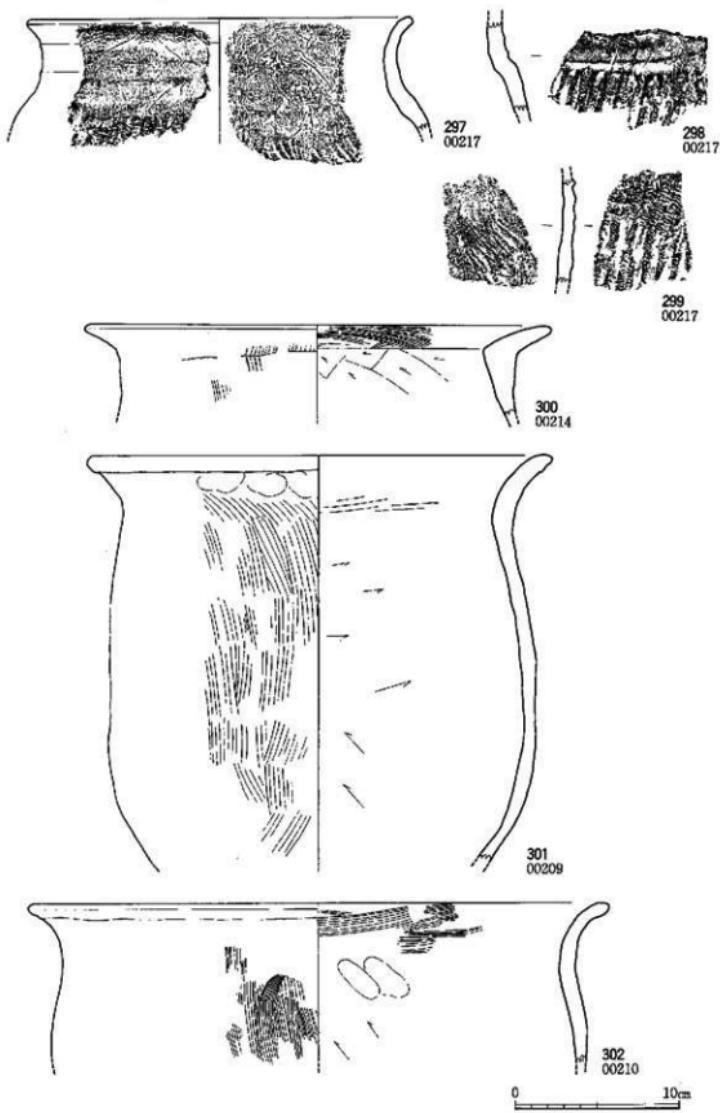
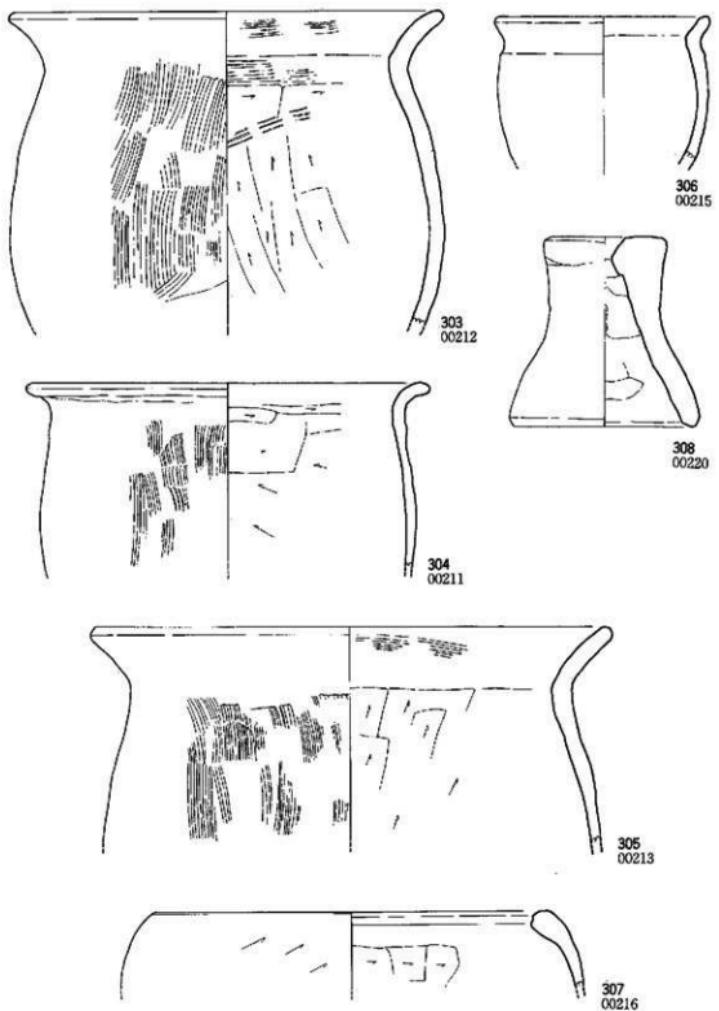


Fig.52 テラス状造構出土遺物実測図 II (1/3)



0 10cm

Fig.53 テラス状造構出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

に微細な白色粒子を含む半精製品である。体外面の下半は露胎で、化粧土はない。いずれも平底又はやや上げ底気味の平底で、外底縁を面取りする。291は外底中央部を削り、蛇の目高台風につくる。内底と外底縁に日跡が残る。釉調は淡オリーブ色を呈し、いずれも発色が悪い。底径は順に8.0cm、8.2cm、5.8cm。292は精製品で、胎土はきめが細かい。やや上げ底状の平底で、体外面下半は露胎で、釉調は不透明で黄味の強い淡オリーブ色を呈し、内底と外底縁に日跡が残る。底径は7.3cm。293は長沙窯系青磁碗で、外底部の中心を雑に「の」字形に削り出す輪状高台である。胎土は淡灰白色を呈しやや軟質で、釉は剥落しており、化粧土の有無は不明。底径5.8cm。

294は軒平瓦の瓦当片で、内区に唐草文を施す。295は半瓦片で、凸面には格子目タタキ、凹面には板ナデ調整を施す。296は磚の一部と見られ、側面に幾何学文を施している。厚さ4.0cm。297~299は玄界灘式製塩土器で、同一個体と思われる。体部外面に板目の浮き出た粗い平行タタキ、内面に放射線状文（貝殻？）のアテ具痕が残り、口縁内外は横ナデ調整を施す。赤褐色を呈し、白色の砂粒・霰母粒を多量に含む。二次的な加熱を受けている。297の口径は23.5cm。300~306は土師器壺である。いずれも外面から口縁内面にハケ口調整、胴部内面にヘラ削りを施す。淡橙~暗褐色を呈し、胎土には白色の粗砂粒を多量に含む。300、303、305、306は口縁部の屈曲が比較的シャープで、胴部との境に稜がある。口径は順に28.6cm、28.4cm、35.4cm、26.5cm、24.8cm、31.8cm、13.2cmで、306は他と比べてかなり小形である。307は移動式カマドと思われる。口縁は内湾し、端部が肥厚する。内外面ともヘラ削りを施す。淡橙色を呈し、胎土にはほとんど砂粒を含まない。口径は22.0cm。

308は弥生時代後期の器台である。流入品である。

309~313はフイゴの羽口である。いずれも炉駆に差し込む先端部で、融解し、鉄が付着している。

314~319は石器である。314は石庖丁片で、輝綠凝灰岩製。315は円錐を用いた叩き石で、玄武岩製。316は磨製石斧で、縦斧。刃部を欠き、石材は蛇紋岩か。317、318は偏平打製石器である。317は短母形、318は撥形を呈する。石材は317が安山岩、318は結晶片岩である。319は砥石片である。小型板状

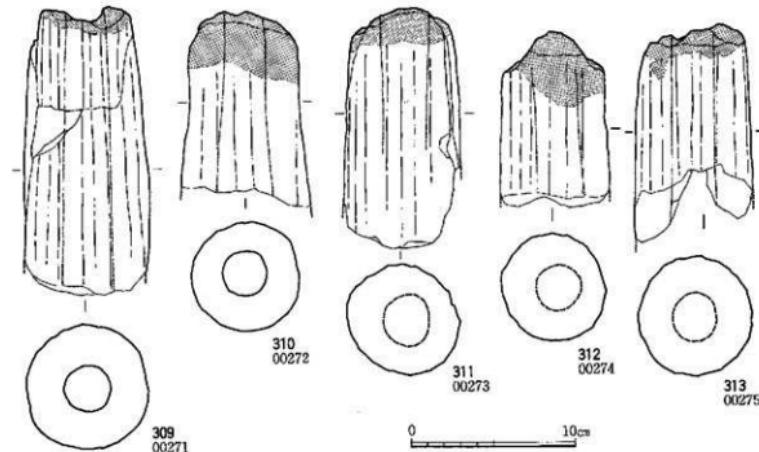


Fig. 54 テラス状造構出土遺物実測図IV (1/3)

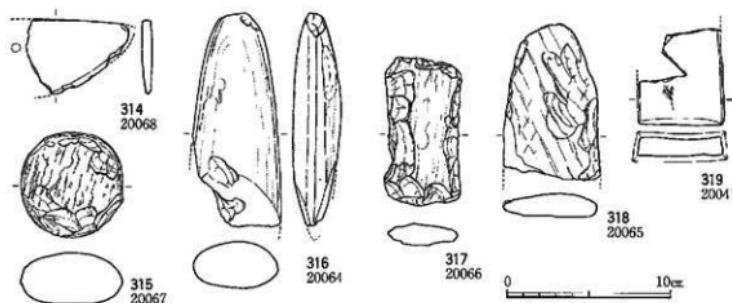


Fig. 55 テラス状造構出土遺物実測図 V (1/3)

で、粘板岩系の石材を用いている。

この他、鉄滓がコンテナ2箱分出土した。

石器類を中心に古い時期の遺物が混じるが、9世紀前半代に位置づけられよう。

(3) 土坑

SK-59 Fig. 56

テラス状造構の南西隅に検出した造構で、柱穴の可能性がある。平面プランは略円形で、南北に僅かに長い。径0.7~0.75m、深さ0.9mである。

SK-59出土遺物 Fig. 57

106点の遺物が出土した。土師器、黒色土器等が少量ある。320は土師器壺で、外底は回転ヘラ削りを施す。橙褐色を呈し、胎土は精良。口径12.8cm、器高3.2cm、底径7.0cm。321は土師器皿で、磨滅が著しく、彌整は不明。赤褐色を呈する。口径16.0cm、器高1.4cm、底径11.5cm。322は黒色土器A類の碗で、内面にヘラ磨きを施す。高台径7.2cm。323は土師器壺で、口縁屈曲部内面に後を有する。胴部外面と口縁内面はハケ目、胴部内面はヘラ削り、口縁外面は横ナナ調整である。口径29.0cm。テラス状造構同様、時期は9世紀前半代である。

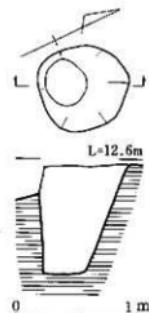


Fig. 56 SK-59実測図 (1/40)

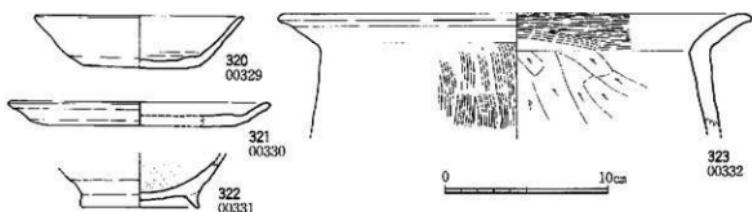


Fig. 57 SK-59出土遺物実測図 (1/3)

6. 中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構は、調査区の南側の冲積微高地を中心に分布しており、一部が段丘面上にも広がっている。時期的には16世纪末から17世纪初頭にかけてのものが主体を占める。

報告する遺構は、掘立柱建物40棟、溝状遺構7条、井戸3基、土坑33基であるが、他に多数の柱穴があり、復元できなかった建物が多数存在するものと考えられる。また、出土遺物が少ないものや、遺構の時期が明確でないものは報告から省いた。出土した遺物は日常容器のほか、大量のスリ鉢がある。スリ鉢は小片が多く、出土量の割に考古学的完形に復元できたものが少ない。また、使用した痕跡のないものが多く、使用から廃棄に至るまでの行為に通常と異なるケースが想定される。他の特記すべき遺物として、青銅製の柄杓がある。

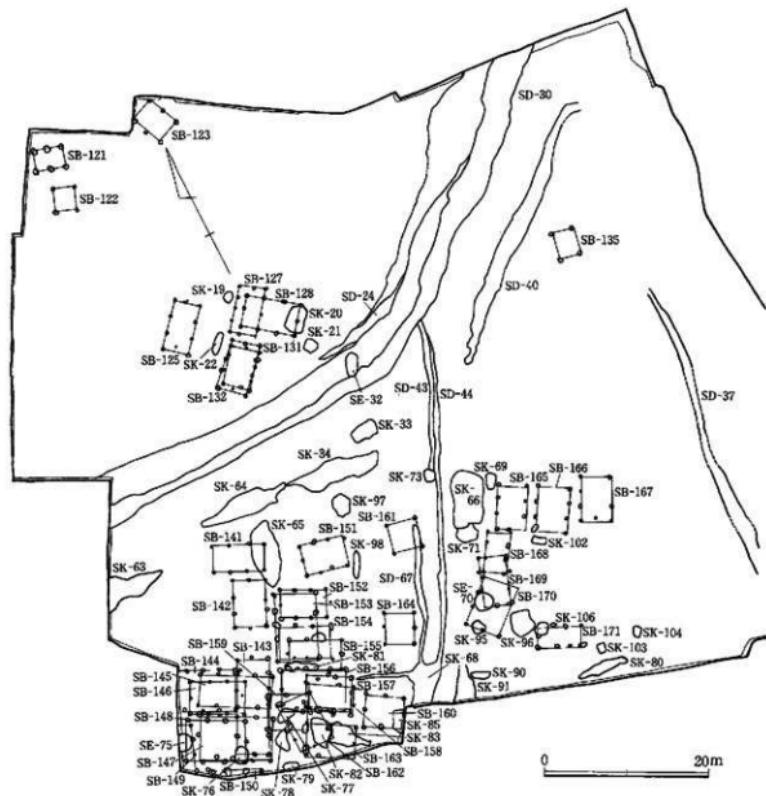


Fig.58 中・近世の遺構配置図 (1/600)

(1) 挖立柱建物

SB-121 Fig. 59 PL.11

調査区の北西隅に検出した掘立柱建物である。東西に長い桁行2間、梁行1間の建物と考えられるが、西側に伸びる可能性もある。桁行方位をN-75°-Wにとる。桁行全長は3.40mで、柱間は1.70mの等間である。梁行は2.45mを測る。柱穴は平面プランが円～隔丸方形を呈し、径は36～90cm、深さ26～44cmである。柱痕跡は認められない。柱穴覆土から合わせて14点の土器片が出土したが、全て細片のため図示し得ない。

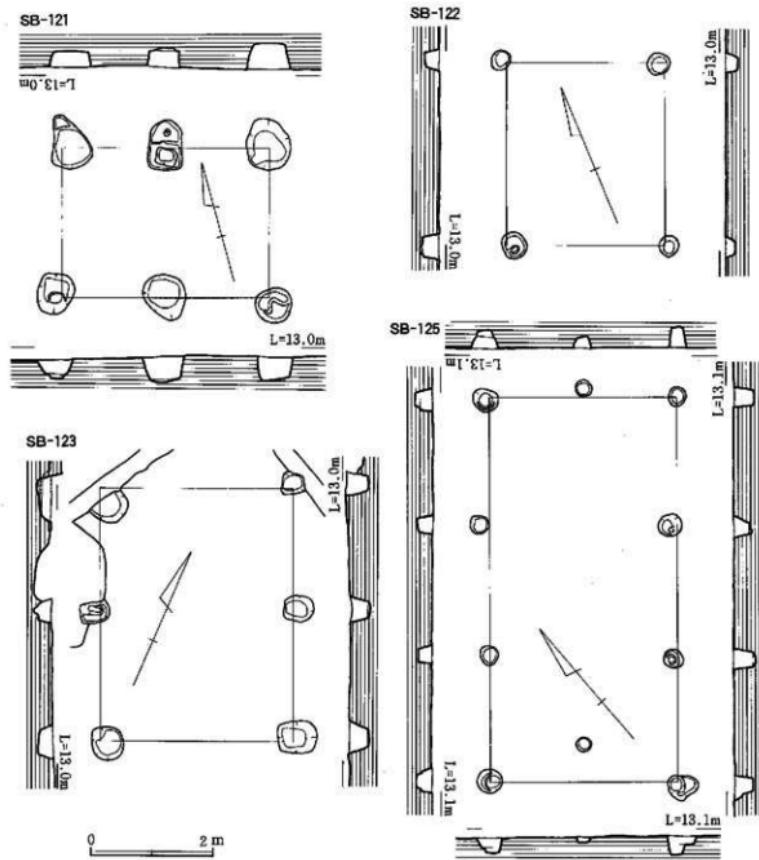


Fig. 59 挖立柱建物実測図 II (1/80)

SB-122 Fig.59 PL.11

SB-121の南側2.5mに位置する掘立柱建物である。1間×1間で、南北にやや長い。主軸方位をN-23°-Eにとる。南北全長3.0m、東西長2.6mを測る。柱穴は径34~44cmの円形プランをなし、深さ16~31cmである。柱痕跡はない。土器片8点が出土したが、図化できるものはない。

SB-123 Fig.59 PL.11

SB-121の東に8m置いた調査区北壁際に検出した。南北棟の建物で、桁行方位をN-21°-Wにとる。現状で桁行2間、梁行1間である。桁行全長は4.12mで、柱間は北から1.96、2.16mである。梁行は3.17m。柱穴は径38~62cmの円~隅丸方形プランをなし、深さ18~38cmである。柱痕跡はない。土器片が51点出土したが、細片のため図示できない。

SB-125 Fig.59 PL. 6

調査区北端から25m、西端から19mに位置する。桁行3間、梁行2間で、桁行方位をN-40°-Eにとる。桁行全長は6.26mで、柱間は北から2.10、2.12、2.04mではほぼ等間である。梁行全長は3.08mで、柱間は東から1.55、1.53mの等間である。柱穴は径22~48cmの円~梢円形プランをなし、深さ10~34cmである。柱痕跡はない。遺物は全く出土していない。

SB-127 Fig.60 PL. 6

SB-125の東に4m離れて位置し、これに方位が等しく、桁行方位はN-40°-Eである。桁行4間、梁行2間である。桁行全長は5.91mで、柱間は北から1.31、1.65、1.56、1.39mである。梁行全長は3.16mで、柱間は東から1.58、1.60mのはほぼ等間である。柱穴は径26~62cmの円~梢円形プランをなし、深さ6~36cmである。柱痕跡はひとつの柱穴に認められ、径10~11cmの円形である。

SB-127出土遺物 Fig.73

土器片が20点出土した。324~326は土師器小皿で、いずれも底部糸切り。324は口径8.5cm、器高1.2cm、底径6.7cm。外底に板压痕が残る。325は口径10.4cm、器高1.4cm、底径8.0cm。326は底径8.7cm。

SB-128 Fig.60 PL. 6

SB-127と重複する掘立柱建物で、桁行3間、梁行2間で、桁行方位をN-53°-Wにとる。桁行全長は6.73mで、柱間は北から2.15、2.38、2.20mである。梁行全長は3.86mで、柱間は東から1.86、2.00mである。柱穴は径31~62cmの円~梢円形プランをなし、深さ24~41cmである。柱痕跡はない。

SB-128出土遺物 Fig.73

327は土師器小皿で、外底は糸切りである。口径8.4cm、器高1.1cm、底径6.8cmを測る。土器片15点が出土した。

SB-131 Fig.60 PL. 6

SB-127の南東に1m離れて位置し、これに方位が等しく、桁行方位はN-40°-Eである。桁行3間、梁行2間で、妻柱のひとつを欠く。桁行全長は5.54mで、柱間は北から1.82、1.87、1.85mのはほぼ等間である。梁行全長は3.32mで、柱間は東から1.79、1.53mである。柱穴は径33~57cmの円~梢円形プランを呈し、深さ46~77cmである。柱痕跡は確認できない。土器片が10点出土したが、図化できるものはない。

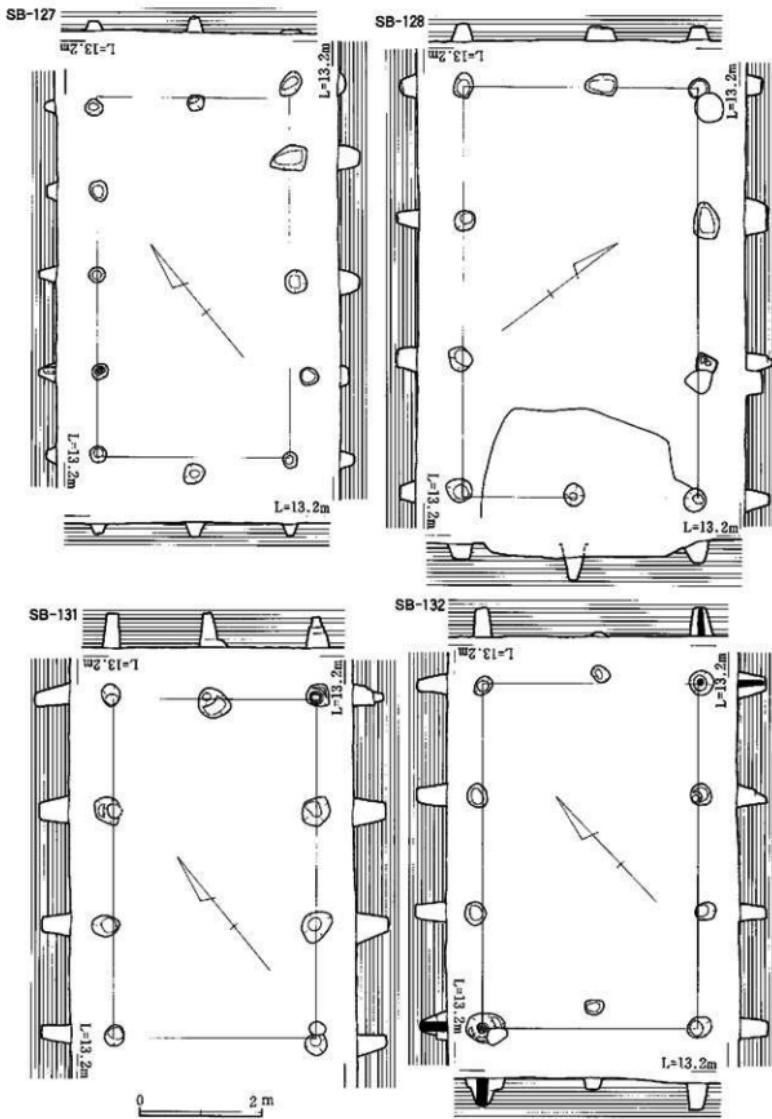


Fig.60 振立柱建物実測図Ⅲ (1/80)

SB-132 Fig.60 PL. 6

SB-131に重複する掘立柱建物である。桁行3間、梁行2間で、桁行方位はN-44°-Eである。桁行全長は5.61mで、柱間は北から1.86、1.85、1.90mのほぼ等間である。梁行全長は3.52mで、柱間は東から1.68、1.84m。柱穴は径28~62cmの円~橢円形プランを呈し、深さ7~48cmで、妻柱が浅い。柱痕跡は2つの柱穴に確認でき、径11~16cmである。土器片が18点出土したが、細片のため図化できない。

SB-135 Fig.61

調査区の北東の沖積微高地上に検出した、南北に長い1間×1間の建物である。主軸方位はN-11°-Eである。南北長3.32m、東西長2.81mを測る。柱穴は径50~66cmの橢円形プランを呈し、深さ18~31cmである。柱痕跡は1つの柱穴に確認でき、径は13~16cmである。土器片が6点出土したが、図化できない。

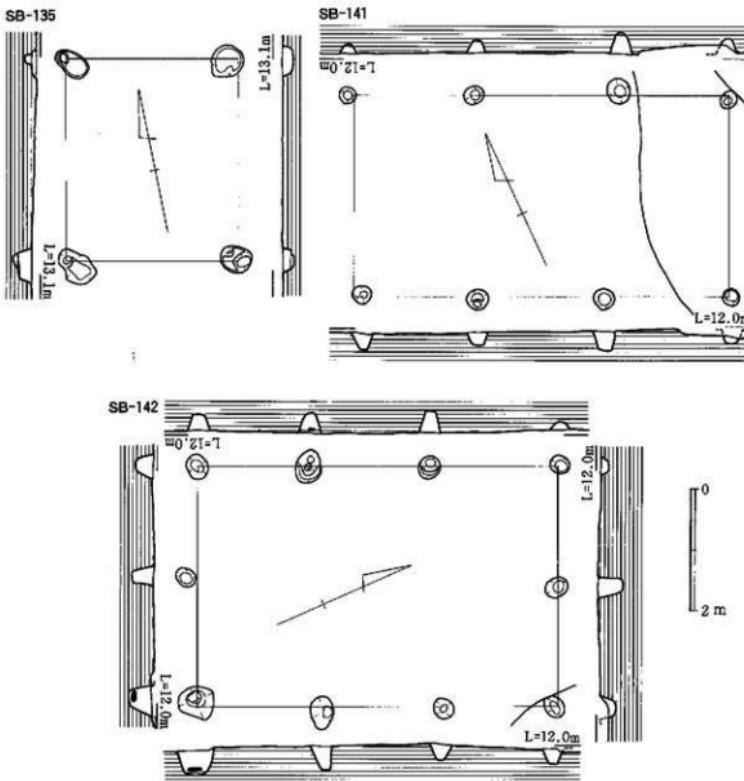


Fig.61 掘立柱建物実測図IV (1/80)

SB-141 Fig.61 PL.12

調査区南端から25m、西端から13mに位置する。東西に長い建物で、東側は土坑SK-65に切られる。桁行3間、梁行2間で、妻柱がない。桁行方位はN-65°-Wである。桁行全長6.13mで、柱間は東から1.89、2.21、2.03mである。梁行長3.80m。柱穴は径28~40cmの略円形プランを呈し、深さ14~35cmである。柱痕跡はない。土器片が2点出土したが、図化できるものはない。

SB-142 Fig.61 PL.12

SB-141の南に1m置いて並列する建物で、桁行方位はこれに直交し、N-24°-Eにとる。桁行3間、梁行2間。桁行全長は5.89mで、柱間は北から1.98、1.97、1.94mのほぼ等間である。梁行全長は3.94mで、柱間は東から2.04、1.90mである。柱穴は径31~53cmの円~梢円形プランを呈し、深さ13~40cmである。柱痕跡はない。土器片が4点出土したが図化できるものはない。

SB-143 Fig.62 PL.12

SB-142の南に4m置いて検出した。桁行6間、梁行2間の長大な建物である。桁行方位はN-27°-Eにとり、SB-141、142とはほぼ等しい。桁行全長は11.84mで、柱間は北から1.72、1.12、2.31、2.01、2.38、2.30mである。梁行全長は3.65mで、柱間は東から1.79、1.86mである。柱穴は径30~76cmの円~梢円形プランを呈し、深さ10~50cmである。柱痕跡は確認できない。

SB-143出土遺物 Fig.73

土器片が28点出土した。図示した遺物以外に土師質土器鍋、瓦質土器鉢、李朝陶器等が出土している。

328は同安窯系青磁皿である。素地は精良で淡灰白色を呈し、淡青白色の透明釉がかかる。体外面下半は露胎。内底は櫛描で施文する。口径11.4cm、器高2.2cm、底径4.9cm。329は近世国产黒釉碗である。淡褐色で軟質の素地に、暗黒茶色の不透明釉がかかる。口径12.4cm。330は瓦質土器の落とし蓋である。全体にハケ目調整を施し、焼成が不充分でやや軟質である。

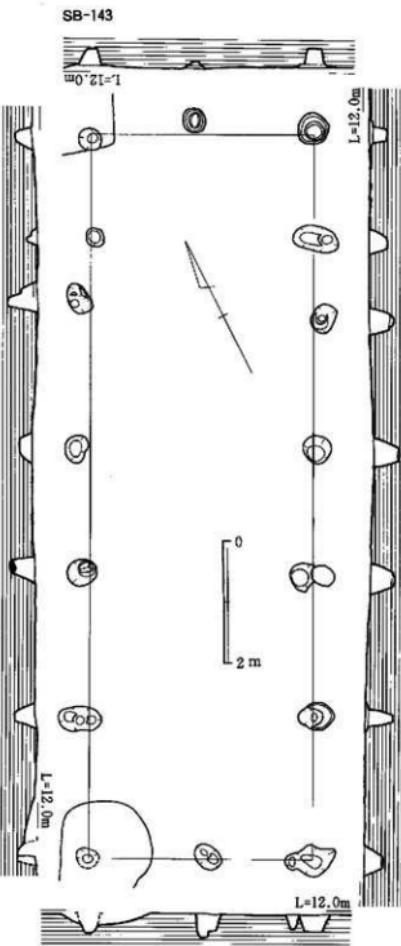


Fig.62 堀立柱建物実測図V (1/80)

SB-144 Fig.63 PL.12

SB-143の西に僅か0.3mを置いて近接する建物である。西側へ伸展しており、桁行3間以上、梁行2間を数える。桁行方位はN-61°-Wである。桁行全長は不明で、柱間は東から2.02、2.00、2.01mのほぼ等間である。梁行全長は4.92mで、柱間は北から2.42、2.50mである。柱穴は径22~50cmの円~楕円形プランを呈し、深さ25~38cmである。柱痕跡はない。土器片が4点出土したが、図化できるものはない。

SB-145 Fig.63 PL.12

SB-143・144と重複する建物である。桁行4間、梁行2間で、西側の妻柱は明確でない。桁行方位はN-61°-Wで、SB-144と同じである。桁行全長は8.57mで、柱間は東から2.07、1.80、2.50、2.20mである。梁行全長は3.82mで、柱間は北から2.00、1.82mである。柱穴は径22~50cmの円~楕円形プランを呈し、深さ22~46cmである。柱痕跡はない。土器片が1点出土したが、図化できない。

S-146 Fig.64 PL.12

SB-143~145などと重複する建物である。桁行3間、梁行2間。桁行方位はN-62°-Wで、SB-144・145にはほぼ等しい。桁行全長は6.89mで、柱間は東から2.18、2.45、2.26mである。梁行全長は3.96mで、柱間は北から1.92、2.04mである。柱穴は径20~56cmの円~楕円形プランを呈し、深さ14~50cmである。柱痕跡はない。土器片が1点出土したが、図示できない。

SB-147 Fig.64 PL.12

調査区南西隅に位置する掘立柱建物で、SB-143・146と重複する。桁行4間、梁行2間。桁行方位はN-59°-Wで、SB-144~146に近い。桁行全長は8.74mで、柱間は東から1.94、2.28、2.08、2.44mである。梁行全長は5.20mで、柱間は北から2.50、2.70mである。柱穴は径31~68cmの円~楕円形プランを呈し、深さ6~56cmである。柱痕跡はないが、柱穴のひとつには底面に偏平石を置いて礎板をしているものがある。

SB-147出土遺物 Fig.73 PL.21

土器片が23点出土した。331は土師器壺で、底部は糸切り。底径は6.7cm。332・333は染付である。332は淡黄白色の素地で、釉薗は乳白色の不透明釉。呂須の発色が悪く黒藍色を呈する。中国福建省か広東省産の可能性も考えられる。333は肥前系の皿と思われる。高台疊付けの釉剥ぎが充分でないのか、熔着した痕が見られる。334は瓦質スリ鉢である。外壁は全体に指頭痕が残り、底部付近のみハケ目調整を行った痕跡が認められる。内面は丹念にハケ目調整を行い、5本組のスリ目を入れる。使用による磨滅などは認められない。口径33.0cm、器高12.5cm、底径14.3cm。

出土遺物から16世紀末~17世紀代の遺構と思われる。

SB-148 Fig.65 PL.12

調査区南西隅でSB-143・147と重複する建物である。西側の妻柱が井戸SE-75に切られて無く、調査区の西側へ更に伸展する可能性もある。調査区内で桁行3間、梁行2間である。桁行方位はN-61°-Wで、SB-144~147に近い。桁行全長は6.95mで、柱間は東から2.42、2.38、2.15mである。梁行全長は5.10mで、柱間は北から2.53、2.57mである。柱穴は径40~64cmの円~楕円形プランを呈し、深さ20~52cmである。柱痕跡はない。

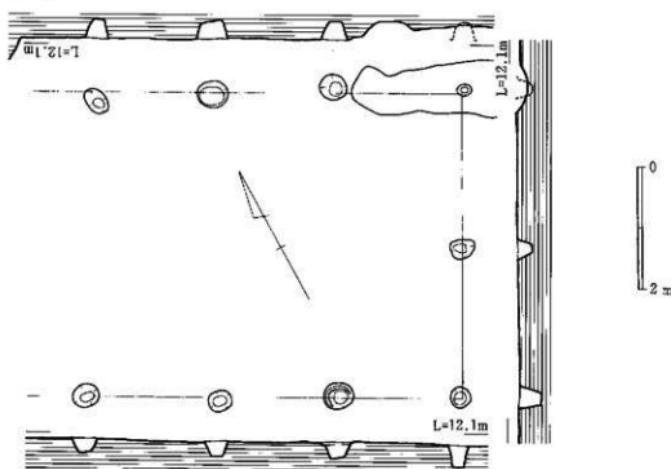
SB-148出土遺物 Fig.73

3点の土器片が出土した。図示した遺物以外に土器器小皿、国産陶器の小片がある。335は上部質土器鉢の小片である。口縁は若干内湾気味で、上端は平坦である。内面にハケ目調整を行う。

SB-149 Fig.65 PL.12

調査区南西隅でその一部を確認した。調査区の西及び南へ伸展する建物と見られる。調査区内では

SB-144



SB-145

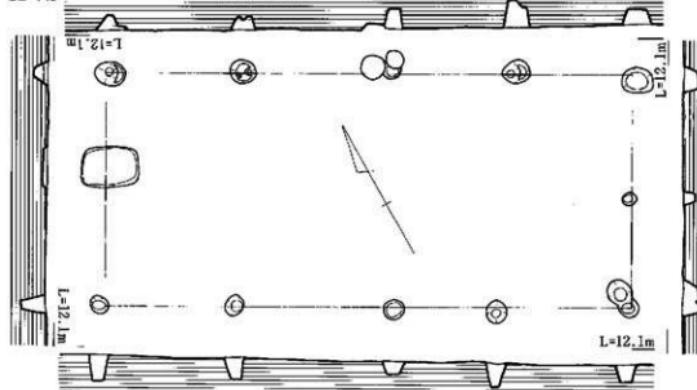


Fig.63 挖立柱建物実測図VI (1/80)

4つの柱穴が並び、主軸方位はN-21°-Eである。柱間は北から1.92、1.94、2.06mである。柱穴は径24~53cmの円形プランを呈し、深さ10~42cmである。柱痕跡はない。土器小片1点が出土した。

SB-150 Fig.65 PL.12

SB-149同様、調査区南西隅で東西に並ぶ4つの柱穴を検出し、南区外へ伸展する掘立柱建物と考

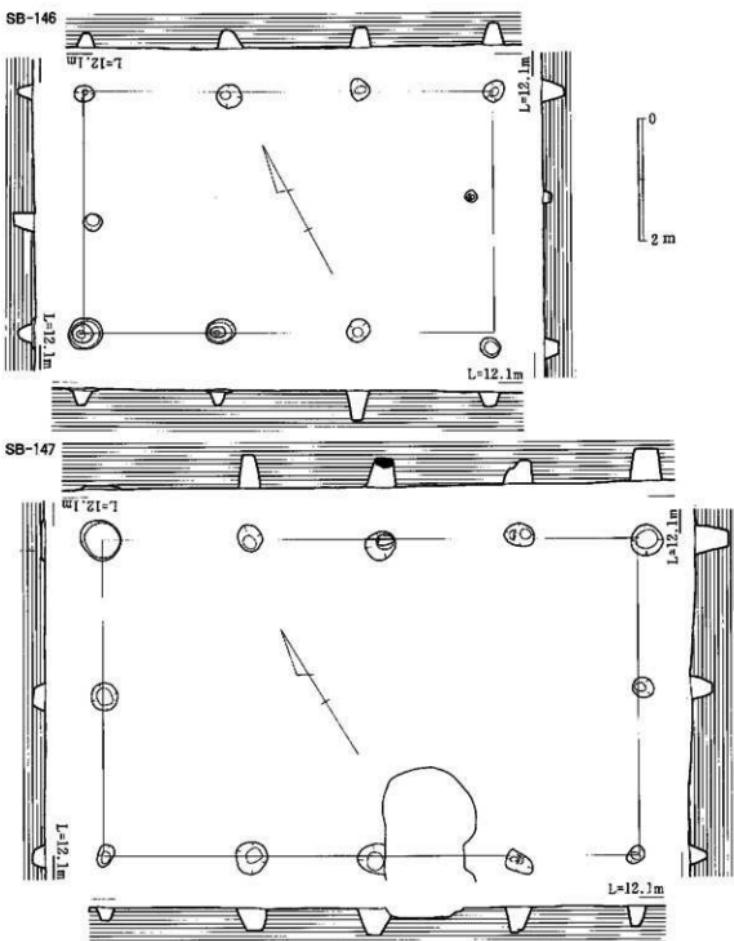


Fig.64 掘立柱建物実測図VII (1/80)

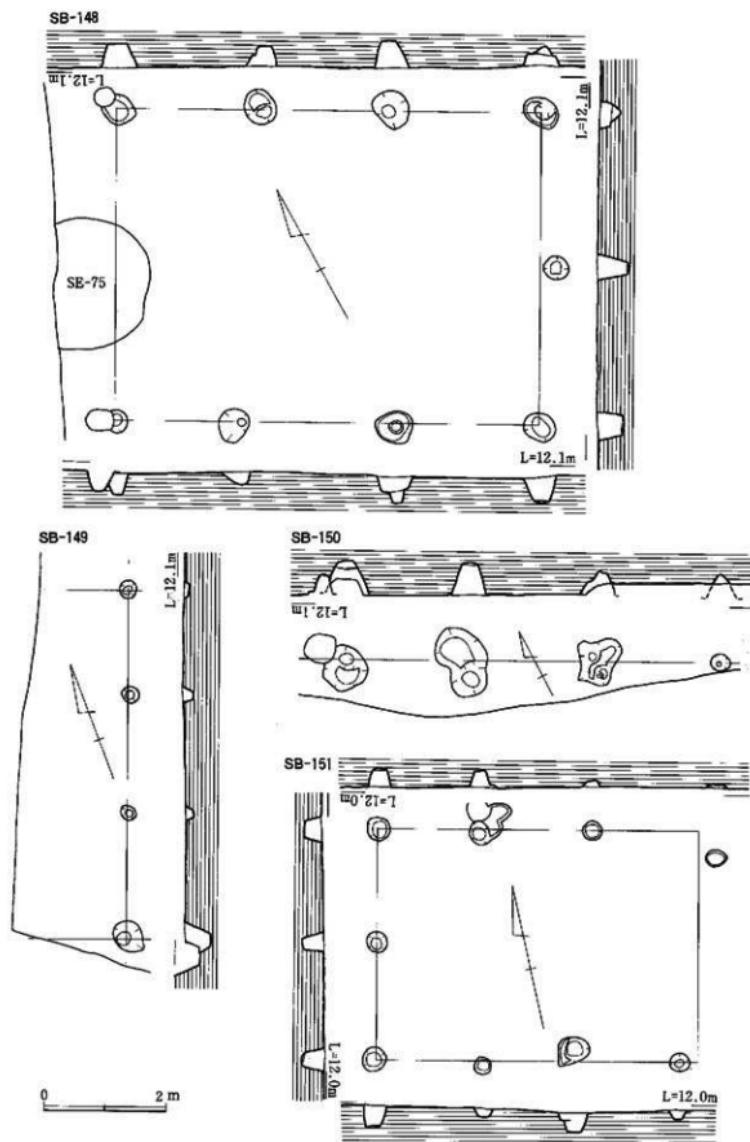


Fig.65 据立柱建物実測図面 (1/80)

えた。4つの柱穴はいずれも2つずつが切り合っており、2棟の建物の建て替えを示すものと見られる。主軸方位はN-62°-Wで、柱間は東から1.98、2.10、2.04mである。柱穴は径32-74cmの円形プランで、深さ40-53cmである。柱痕跡はない。土器小片1点が出土した。

SB-151 Fig.65 PL.12

調査区南端から23m、西端から23mに位置する東西棟の掘立柱建物である。桁行4間、梁行2間で、妻柱のひとつを欠く。桁行方位はN-78°-Wにとる。桁行全長は5.27mで、柱間は東から1.88、1.67、1.72mである。梁行全長は3.78mで、柱間は北から1.88、1.90mである。柱穴は径28-49cmの円形プランで、深さ6-38cmである。柱痕跡はない。土器片6点が出土したが、図示できない。

SB-152 Fig.66 PL.12

SB-151の南西に1.5m離れて位置する。桁行3間で、妻柱がないが梁行2間であろう。桁行方位はN-64°-Wにとる。桁行全長は5.54mで、柱間は東から1.82、1.90、1.82mで、ほぼ等間である。梁行長は3.64m。柱穴は径33-56cmの略円形プランを呈し、深さ30-52cmである。柱痕跡は確認できない。柱穴覆土から合わせて10点の土器片が出土したが図示できない。

SB-153 Fig.66 PL.12

SB-152と一部が重複する南北に長い掘立柱建物で、柱穴のひとつを土坑によって失う。桁行3間、梁行2間で、桁行方位はN-24°-Eにとる。桁行全長は8.32mで、柱間は北から2.46、3.33、2.53mである。梁行長は5.24mで、柱間は東から2.88、2.36mである。柱穴は径32-78cmの円-稍円形プランを呈し、深さ30-60cmである。柱痕跡はない。

SB-153出土遺物 Fig.73 PL.21

12点の土器片が出土した。336は土師器小皿で、底部は系切り。口径9.0cm、器高1.8cm、底径6.7cm。337・338は白磁である。337は肥前系の碗で、口径9.3cm。338は中国明代の小壺で、端反り口縁で、高台外縁を斜めに釉剥ぎする。口縁内面に圈線、内底に「寿」の字を染付する。割れ口には漆繼ぎの痕が残る。口径6.0cm、器高3.9cm、高台径2.0cm。遺構の時期は遺物量が少なく不明確であるが、概ね17世紀代に位置づけられよう。

SB-154 Fig.67 PL.12

SB-152の南に1m離れて位置し、SB-153と重複する東西に長い建物で、妻柱のひとつを欠く。桁行3間、梁行2間で、桁行方位はN-64°-Wにとる。桁行全長は6.72mで、柱間は東から2.24、2.07、2.41mである。梁行全長は4.38mで、柱間は北から2.30、2.08mである。柱穴は径32-60cmの円-稍円形プランで、深さ36-49cmである。柱痕跡はない。6点の土器片が出土したが図示していない。

SB-155 Fig.67 PL.12

SB-153・154と重複する東西に長い建物である。桁行3間、梁行2間で、桁行方位はN-63°-Wにとる。桁行全長は6.56mで、柱間は東から2.19、2.10、2.27mである。梁行全長は3.71mで、柱間は北から1.72、1.99mである。柱穴は径28-67cmの円-稍円形プランで、深さ20-60cmである。柱痕跡はない。5点の土器片が出土したが図示していない。

SB-156 Fig.68 PL.12

SB-155の南に接する東西に長い建物で、桁行4間、梁行2間。桁行方位はN-62°-W。桁行全長は8.01mで、柱間は東から1.97、1.52、2.50、2.02mである。梁行全長は5.13mで、柱間は北から2.57、2.56mである。柱穴は径26~66cmの円~横円形プランで、深さ13~60cmである。柱痕跡はない。

SB-156出土遺物 Fig.73 PL.21

19点の土器片が出土した。図示した遺物の他に、土師器小皿、瓦質土器スリ鉢、李朝陶器等がある。

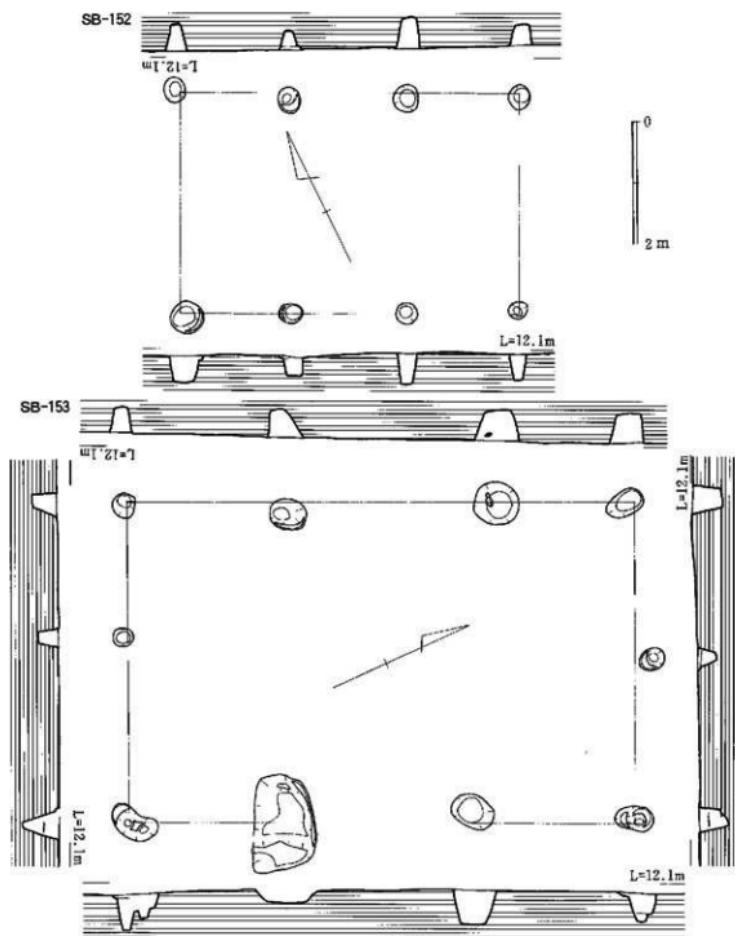


Fig.66 据立柱建物実測図Ⅸ (1/80)

339は雜釉陶器で、口縁端部を上方へ引き上げる溝縁皿である。灰褐色の素地に、灰白色の不透明釉がかかる。唐津と思われる。口径25.2cm。340は土師質土器鍋である。口径46.0cm、器高7.5cm。内外面に丁寧なハケ目調整を行い、外面には煤が厚く付着する。17世紀初頭～前半に位置づけられよう。

SB-157 Fig.68 PL.12

SB-156と重複する東西に長い建物である。桁行3間、梁行2間で、桁行方位はN-64°-Wにとる。桁行全長は5.77mで、柱間は東から2.00、2.14、1.63mである。梁行全長は4.02mで、柱間は北から1.86、2.16mである。柱穴は円形、楕円形、隅丸方形プランを呈し、径30～82cm、深さ23～48cmである。柱痕跡はない。

6点の土器片が出土したが図化していない。

SB-158

Fig.69 PL.12

SB-156・157と重複する。桁行3間、梁行2間で、桁行方位はN-57°-Wにとる。桁行全長は5.63mで、柱間は東から1.78、2.00、1.85mである。梁行全長は3.41mで、柱間は北から1.95、1.46mである。柱穴は径22～82cmの円～楕円形プランを呈し、深さ8～50cmである。柱痕跡はない。出土遺物はない。

SB-159

Fig.69 PL.12

SB-143・145、156～158など多数の建物と重複する。2間×2間で、東西に若干長い。主軸方位はN-65°-Wにとる。

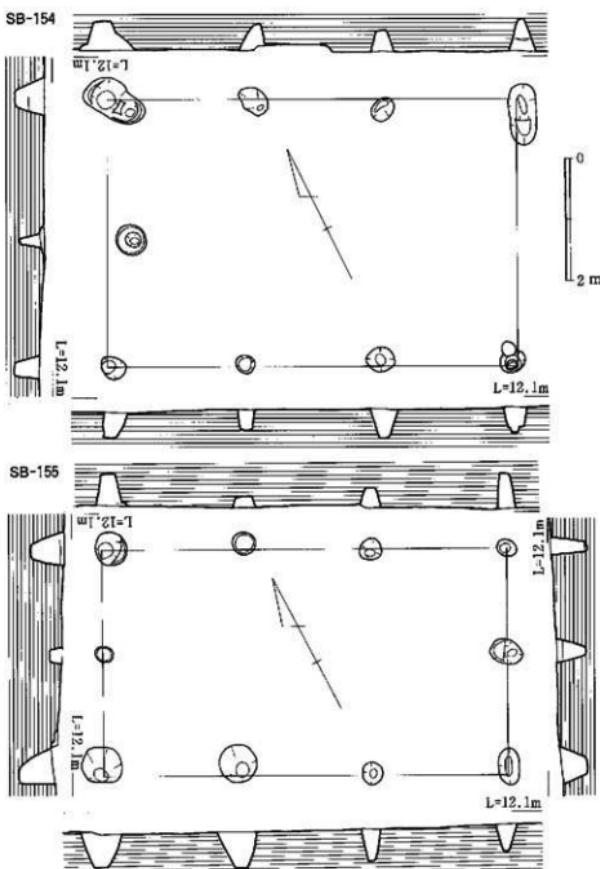


Fig.67 据立柱建物実測図X (1/80)

東西全長は4.54mで、柱間は東から2.34、2.20m。南北全長は4.35mで、柱間は北から2.17、2.18mである。柱穴は径46~88cmの不整な楕円形プランを呈し、深さ25~58cmである。柱痕跡は確認できない。

SB-159出土遺物 Fig.74

土器小片が5点出土した。341、342は瓦質土器スリ鉢である。341は口縁が内渦する。342は体部が直線的に開き、口縁端部を面取りする。3条1組のスリ目を入れる。342は口径31.6cm。

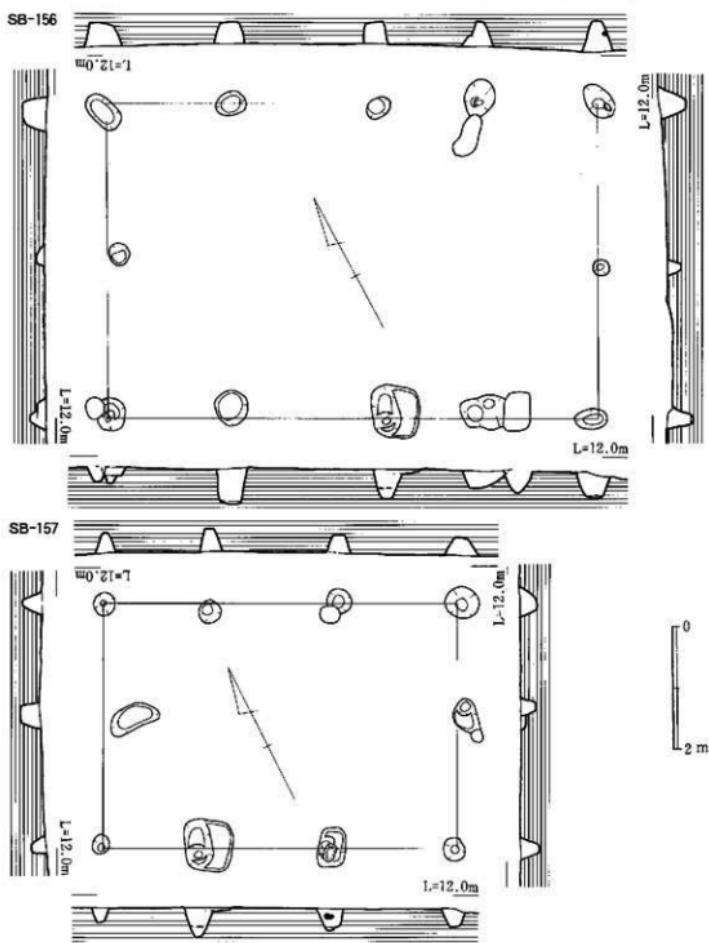


Fig.68 挖立柱建物実測図XI (1/80)

SB-160 Fig.69 PL.12

SB-158の南東に1.5mの間をおいて位置する。2間×2間の建物で、南東側の柱穴2つを土坑SK-85に切られて失う。主軸方位はN-56°-W。東西全長は4.51mで、柱間は東から2.32、2.19m、南北全長は4.14mで、柱間は北から1.92、2.22mである。柱穴は径39~50cmの楕円形プランを呈し、深さ25~42cmである。柱痕跡はない。

SB-160出土遺物 Fig.74

4点の土器片が出土した。図示したもの以外に瓦質土器スリ鉢、土師質土器鍋片がある。343は土師器壺である。底部糸切りで、口径11.0cm、器高2.1cm、底径6.5cmを測る。

SB-161 Fig.69 PL.12

調査区南端から20m、西端から34mに検出した。1間×2間の南北にやや長い建物で、主軸方位はN-2°-E。南北長は3.68m。東西全長は3.58mで、柱間は東から1.70、1.88m。柱穴は径34~46cmの円~楕円形プランを呈し、深さ18~33cmである。柱痕跡はない。

SB-162 Fig.70 PL.12

SB-156~159と切り合う南北棟の建物で、桁行3間、梁行2間である。桁行方位はN-2°-Eにとる。桁行全長は6.68mで、柱間は北から2.55、1.90、2.23mを測る。梁行全長は4.16mで、柱間は東から1.90、2.26mである。柱穴は径30~80cmの円~楕円形プランを呈し、深さは12~50cmである。柱痕跡はない。2点の土器片が出土したが、図化していない。

SB-163 Fig.70 PL.12

SB-159・162と重なる建物で、桁行3間、梁行2間である。桁行方位はN-56°-Wにとる。桁行全長は5.92mで、柱間は東から2.00、1.87、2.05m。梁行全長は3.91mで、柱間は北から1.98、1.93m。柱穴は径20~46cmの円~楕円形プランで、深さ20~42cm。柱痕跡はない。

SB-163出土遺物 Fig.74

3点の土器片が出土した。344は土師器壺で、底部糸切り。底部が小さく、体部が大きく開く器形をなすタイプと考えられる。底径4.8cm。

SB-164 Fig.70 PL.12

調査区南端から8m、西端から33mに検出した。1間×2間の南北にやや長い建物で、主軸方位はN-26°-Eにとる。南北全長は3.82mで、柱間は北から1.77、2.05mである。東西長は3.60m。柱穴は径21~44cmの円~楕円形プランを呈し、深さ8~16cmを測る。柱痕跡は確認できない。土器小片1点が出土したが図化していない。

SB-165 Fig.70

調査区中央やや南寄りに検出した建物である。桁行3間、梁行2間で、桁行方位はN-30°-Eにとる。桁行全長は5.54mで、柱間は北から1.77、1.95、1.82mである。梁行全長は3.32mで、柱間は東から1.92、1.40mである。柱穴は径31~52cmの円~楕円形プランで、深さ15~43cmである。柱痕跡は確認できない。11点の土器片が出土したが、図示できるものはない。

SB-166 Fig.71

SB-165の東にこれと1mの間隔を置いて位置する。搅乱坑により残りが悪い。桁行3間、梁行2間を数える南北棟建物で、北側の妻柱は検出できなかった。桁行方位はN-33°-Eにとる。桁行全長は5.66mで、柱間は北から1.88、1.94、1.84mを測る。梁行全長は3.96mで、柱間は東から2.08、1.88mを測る。柱穴は平面プランが円～楕円形を呈し、径32～50cmを測る。深さは23～50cmの間にある。柱痕跡は確認できない。

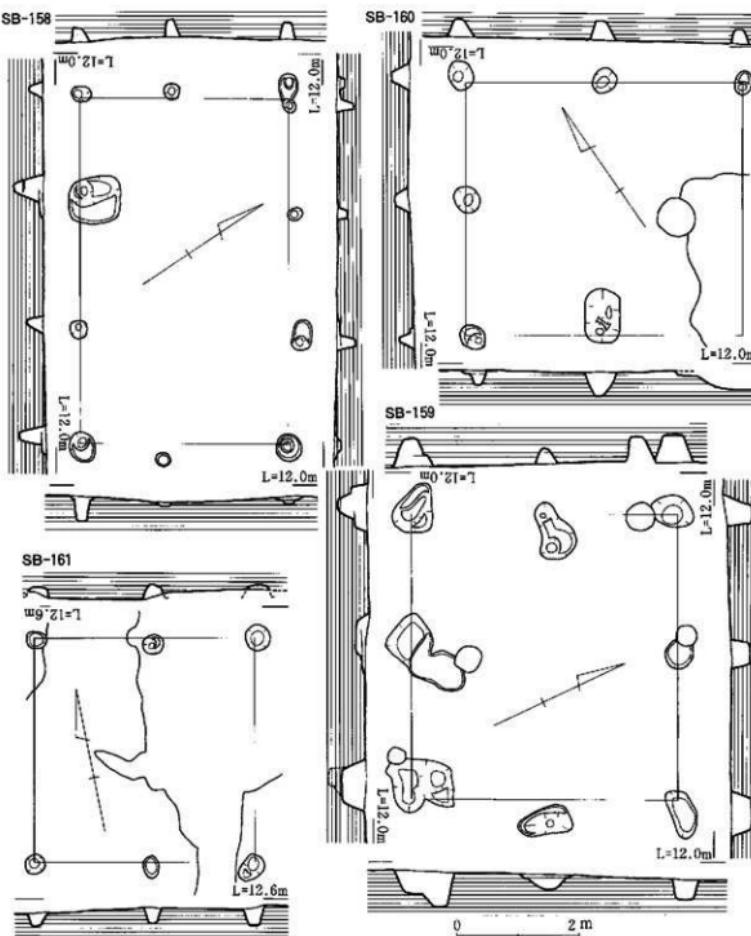


Fig.69 挖立柱建物実測図 XII (1/80)

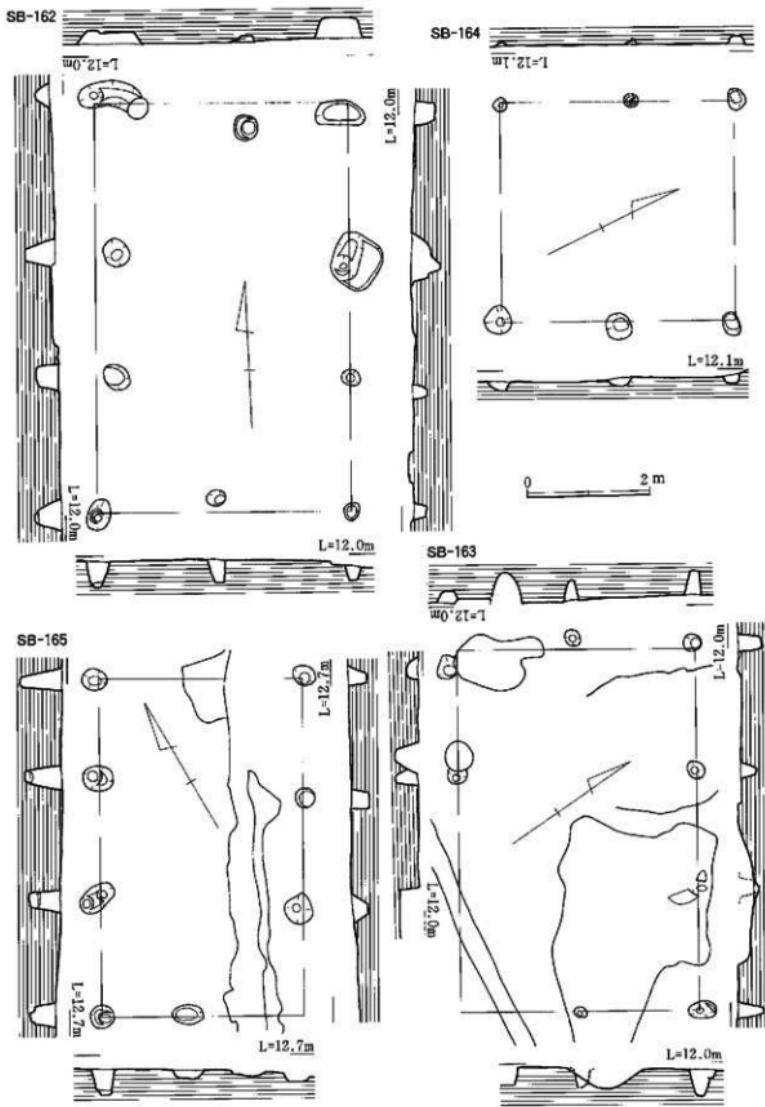


Fig.70 掘立柱建物実測図 XIII (1/80)

SB-166出土遺物 Fig.74

9点の土器片が出土した。図示した遺物の他、土師質土器鍋、近世国産陶器の破片がある。345は土師質土器の容器で、蓋の可能性もある。全体に煤が付着している。口径13.2cm、器高1.8cm、底径14.5cm。346は動物形の土製品である。

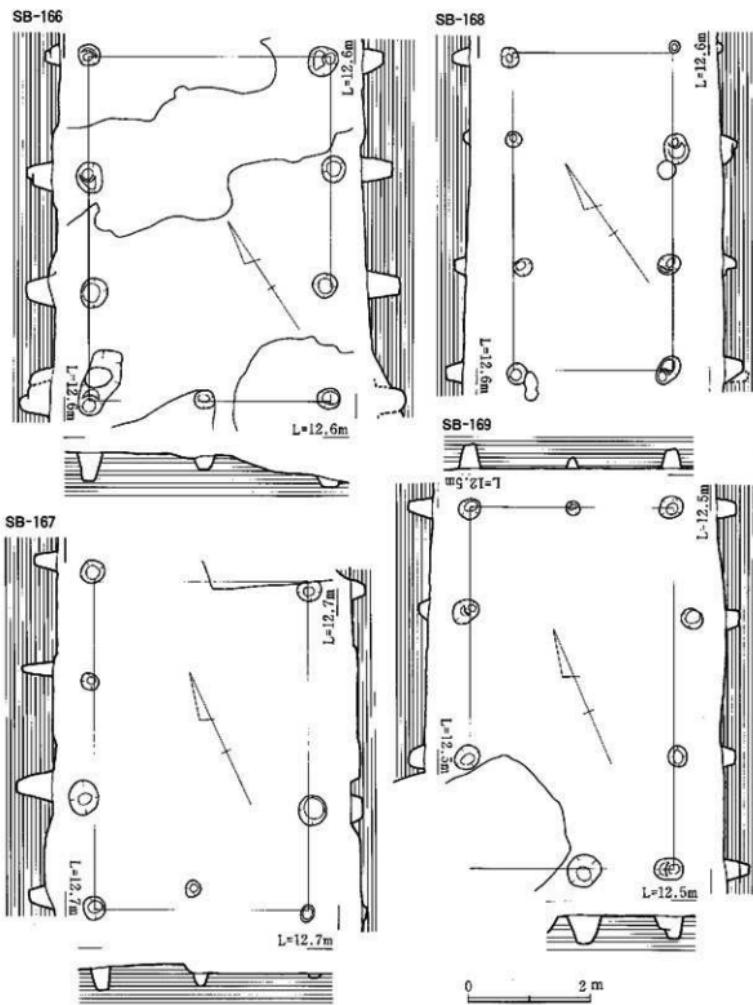


Fig.71 捩立柱建物実測図IV (1/80)

SB-167 Fig.71

SB-166の東に1mの間を置いて検出した、桁行3間、梁行2間の南北棟建物である。北側の妻柱がなく、東辺の偶柱のひとつを搅乱によって失う。桁行方位はN-25°-Eにとる。桁行全長は5.40mで、柱間は北から1.62、2.02、1.76mである。梁行全長は3.51mで、柱間は東から1.87、1.64mである。柱穴は径17~57cmの円~楕円形プランで、深さ8~29cmである。柱痕跡は確認できない。

SB-167出土遺物 Fig.74

13点の土器片が出土した。347は瓦質土器の火鉢か。低い脚が3ヶ所に付くものと思われる。内面はハケ日調整、外面は丁寧なナデ調整により平滑に仕上げる。

SB-168 Fig.71

SB-165の南東に隣接し、桁行3間、梁行1間で、桁行方位はN-35°-E。桁行全長は5.20mで、柱間は北から1.43、2.03、1.74m。梁行長は2.62m。柱穴は径20~50cmの円~楕円形プランで、深さは10~31cm。柱痕跡はない。出土遺物はない。

SB-169 Fig.71

SB-168の南に位置し、一部がこれと重複する。桁行3間、梁行2間で、南東の偶柱を井戸SE-70に切られる。桁行方位はN-23°-E。桁行全長は6.09mで、柱間は北から1.92、2.36、1.81m。梁行全長は3.33mで、柱間は東から1.56、1.77m。柱穴は径24~56cmの円~楕円形プランで、深さ17~48cm。柱痕跡はない。土器片3点が出土したが固化できない。

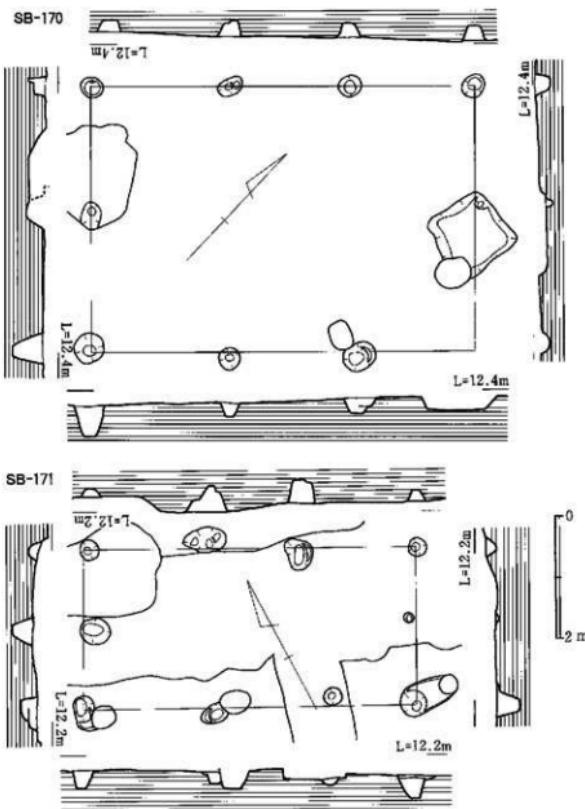


Fig.72 捩立柱建物実測図XV (1/80)

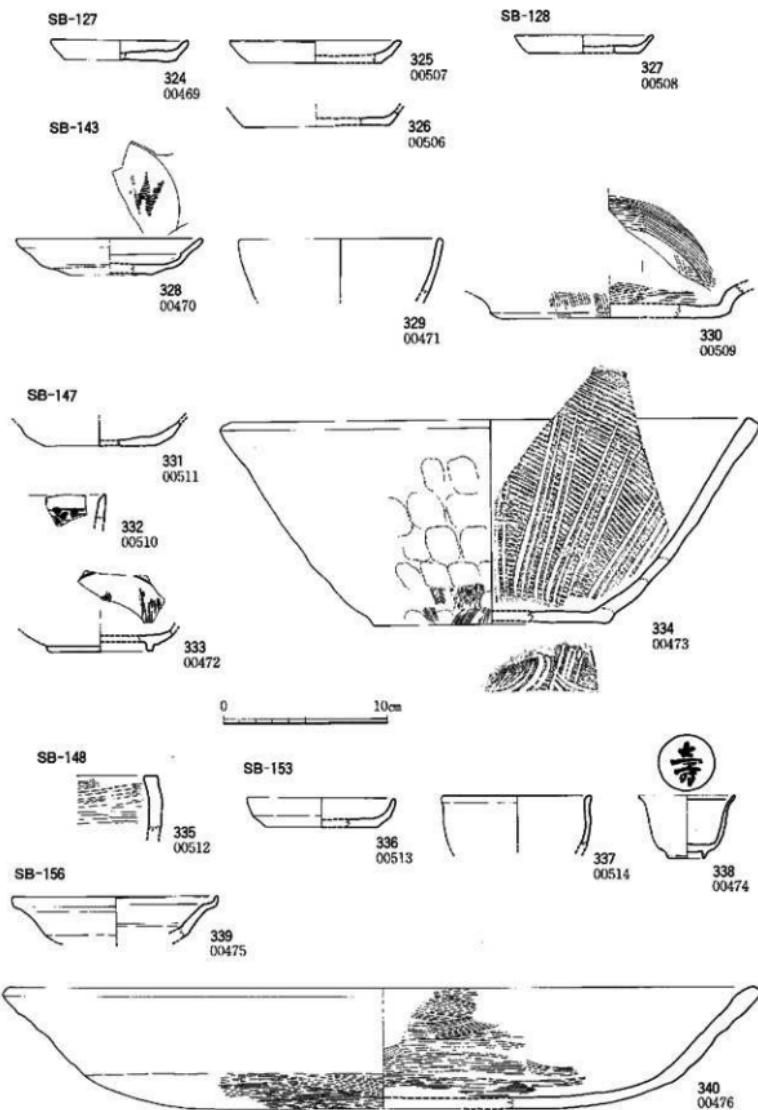


Fig.73 SB-127·128·143·147·148·153·156出土遺物実測図 (1/3)

SB-170 Fig.72

SB-169の南に位置し、これと重複する。隅柱のひとつを搅乱溝によって失う。桁行3間、梁行2間で、桁行方位はN-47°-Eにとる。桁行全長は6.28mで、柱間は北から2.00、1.96、2.32mである。梁行全長は4.36mで、柱間は東から2.35、2.01mである。柱穴は径18-52cmの円～稍円形プランで、深さ24-53cmである。柱痕跡は確認できない。

SB-170出土遺物 Fig.74

14点の土器片が出土した。図示した以外に、瓦質土器スリ鉢片がある。348は土師器小皿である。底部糸切りで、口径は7.6cmに復元できる。

SB-171 Fig.72 PL.12

SB-170の南東4mに検出した、桁行3間、梁行2間の建物である。剖面や擾乱により遺構の残りが悪い。桁行方位はN-62°-Wにとる。桁行全長は5.40mで、柱間は東から1.66、1.64、2.10mである。梁行全長は2.58mで、柱間は北から1.24、1.34mである。柱穴は径15-50cmの円～稍円形プランで、深さ4-40cmである。柱痕跡は確認できない。

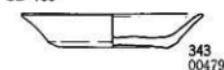
SB-171出土遺物 Fig.74

土器片17点が出土した。図示した以外に、瓦質土器スリ鉢、土師質土器鍋がある。349は灰釉皿である。素地は淡黄白色を呈しやや軟質で、淡黄緑色の透明釉がかかる。口径9.8cm。350は瓦質土器深鉢の小片である。口縁内外にハケ目調整を行う。

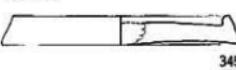
SB-159



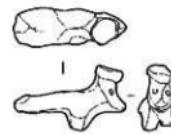
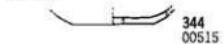
SB-160



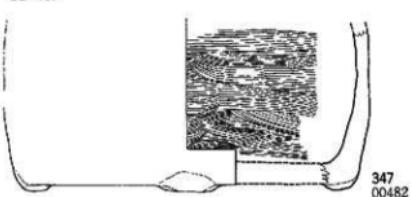
SB-166



SB-163



SB-167



SB-170



SB-171

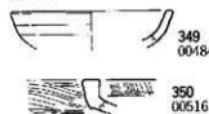


Fig.74 SB-159-160-163-166-167-170-171出土遺物実測図 (1/3)

(2) 溝状遺構

SD-30 Fig.75 PL.10

調査区北西を弧状に巡る水路である。段丘面の落ち際に沿って掘られており、西側は後世の開田時に削平されている。調査区内で長さ80mを確認した。溝の幅は0.9~3.8mで、深さは0.9~1.1mである。横断面形はV字形をなし、底面には狭い平坦面がある。底面は西側では緩く、東側ではやや急に傾斜している。溝の覆土は、ヘドロ状の粘質土が主体で、落ち際に薄く砂層が堆積しているが、顯著に水の流れた痕跡は認められない。

SD-30出土遺物 Fig.76,77 PL.22,30

コンテナ11箱の遺物が出土した。土師器小皿・壺、土師質土器、瓦質土器、中国産陶磁器、近世国産陶磁器等の遺物がある。

351は土師器小皿である。底部糸切りで、口径7.1cm、器高1.4cm、底径5.8cm。

352~357は龍泉窯系青磁である。352は平底皿I類で、外底の釉を搔き取る。353~357は碗で、いずれも高台から外底にかけて露胎である。353は碗I類、354~356は体外面に鏽蓮弁文を施す碗II類である。357は碗IV類で、内底に草花文のスタンプがある。

358~361は白磁である。358は高台付き皿II類、359・360は明代皿で、いずれも素地が淡黄白色を呈し軟質で、乳白色の不透明釉がかかる。359は切り高台で、内底の4ヶ所に目跡が付くものと思われる。口径9.3cm、器高2.5cm、高台径4.3cm。360は輪状高台で、高台径1.8cm。361は李朝碗である。淡灰白色のきめの細かな素地に、やや青味のある淡灰白色の半透明釉がかかる。体外面下半は露胎で、内底に胎土目の跡が4ヶ所残る。高台径5.6cm。

362は明代染付皿である。胎土は淡褐色を呈し陶質で、呉須の発色は悪い。基苟底で、外底は露胎である。疊付けには砂粒が付着する。口径10.6cm、器高3.0cm、底径4.0cm。中国福建省産と思われる。

363、364、367は雜釉陶器である。363は皿で、やや赤味を帯びた淡褐色の素地に、黄味のある淡灰褐色の不透明釉がかかる。体外面下半は露胎で、内底の4ヶ所に砂目跡が残る。高台径4.8cm。364は溝縁皿で、淡灰褐色の素地に、淡オリーブ色の不透明釉がかかる。疊付けから外底は露胎で、内底の

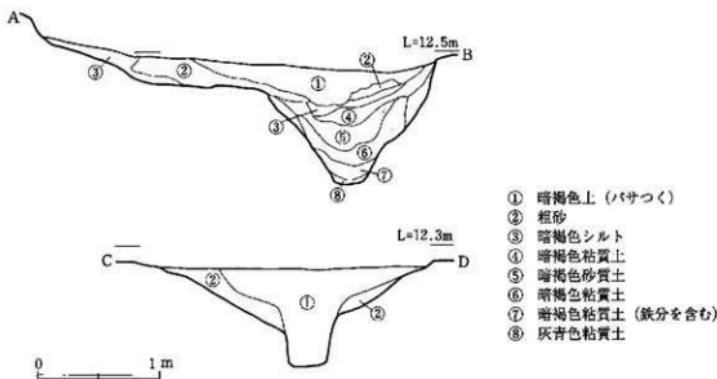


Fig.75 SD-30土層断面図 (1/40)

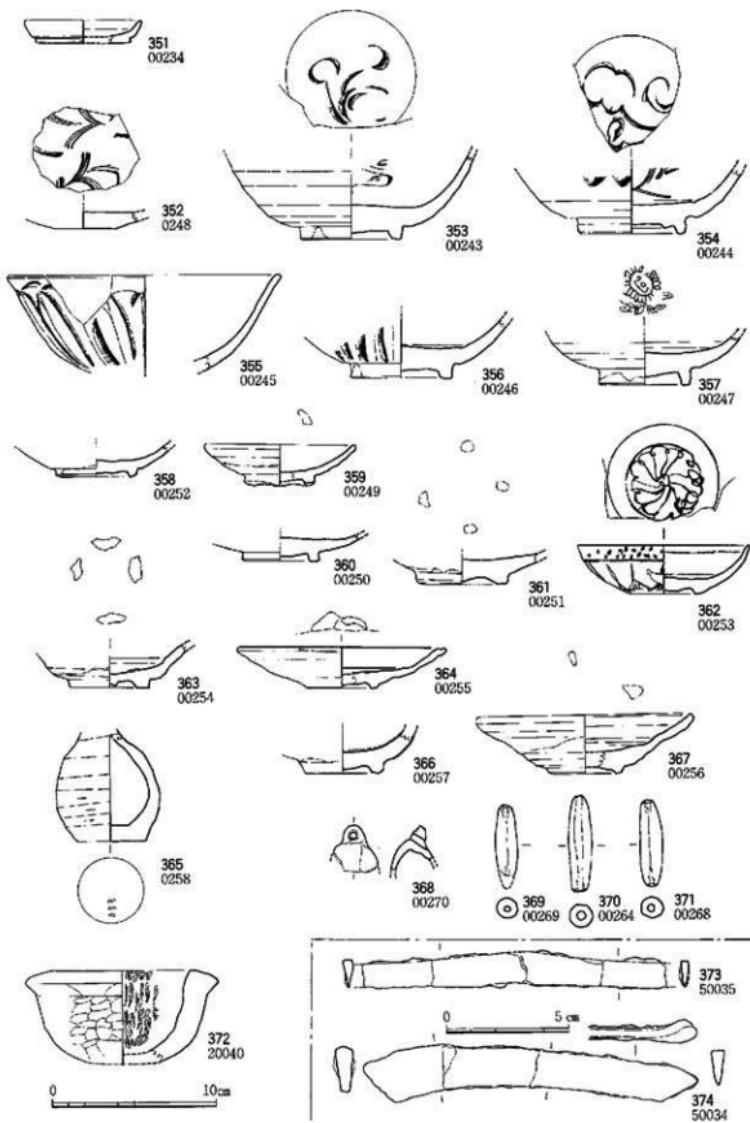


Fig.76 SD-30出土遺物実測図 I (1/3-1/2)

目跡は胎土日である。口径12.8cm、器高2.5cm、高台径4.3cm。367は皿で、淡橙褐色の素地に、灰白色の不透明釉がかかる。体外面下半は露胎で、内底には目跡が残る。口径13.0cm、器高3.6cm、高台径4.4cm。366は黒釉陶器の小碗である。黒灰色の素地に、暗緑黒色の不透明釉がかかる。高台径4.6cm。いずれも磨津である。

365は無釉陶器の小壺で、外底に櫛状工具による刺突の痕が3ヶ所ある。色調は赤褐色。底径4.2cm。

375～377は瓦質土器である。375は口縁が内側に折れており、火鉢であろう。口縁部に突帯で帶状の区画をつくり、その中に連続する印化文を施す。口径37.4cm。376は深鉢で、口縁端部が肥厚し、断面が四角形を呈する。内外面とも丹念にナデ調整を施す。口径27.4cm。377は小形の容器で、梢円筒形を呈しており、曲物を模したものであろうか。短径12.7cm、器高5.1cm。体外面と内底にハケ日調整を行う。378、379は土師質土器の火鉢で、口縁内に突起を貼付する。380は土師質土器のスリ鉢で、6本1組のスリ目を入れる。底径15.0cm。381は陶器のスリ鉢で、口縁部が内側に屈曲し、内面には7本1組のスリ目を刻む。

368～371は土製品である。368は土鉢の一部で、鉢が残る。369～371は紡錘形の土鉢で、369を除き完存する。重量は順に9g、15g、10gを量る。

372は滑石製品である。鍋を模し、口縁部を鋸状につくる。口径11.7cm、器高5.8cm。

373、374は鉄器で、373は刀子、374は鎌と見られる。

出土遺物から見て、遺構の時期は概ね16世紀後半から17世紀前半代と思われる。

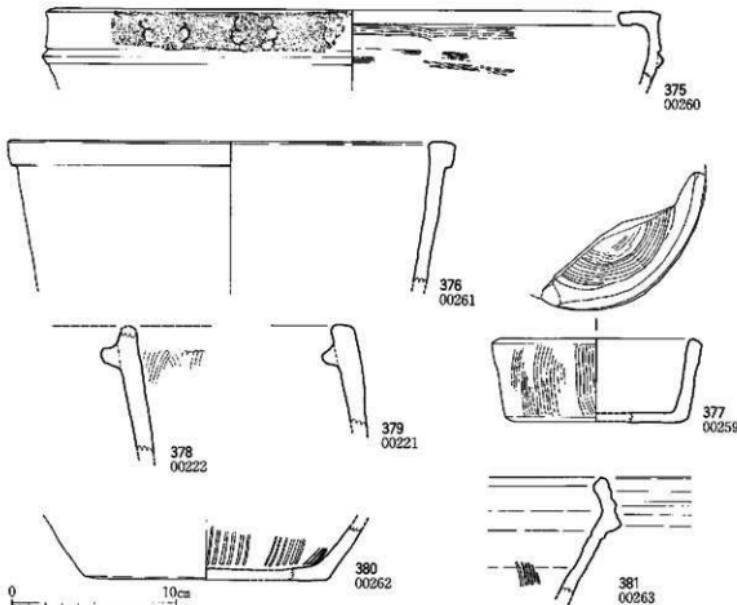


Fig.77 SD-30出土遺物実測図 II (1/3)

SD-24 Fig.78

調査区中央のやや北西よりに検出した東西方向の溝状遺構である。東を溝状遺構SD-30に切られ、西は削平され消失している。15mの長さを検出し、最大幅2.0m、深さ0.7mで、横断面形は逆台形を呈する。溝底面は東へ下る。段丘面崖に造られた小規模の登坂道と考えられる。

SD-24出土遺物 Fig.79

76点の遺物が出土した。図示した以外に、瓦質土器スリ鉢、周防型足鍋の脚等がある。

382は須恵器蓋坏の身で、底部はハラ切り後、ナデ調整を加える。口径10.6cm、器高3.8cm。383は明代染付皿で、疊付けは釉剥ぎされ、砂粒が付着する。高台径6.6cm。384は雜釉陶器の瓶で、灰褐色の細かな砂粒を含む素地に、暗緑褐色の不透明釉がかかる。内面にはアテ具痕が残る。385は瓦質土器の火鉢であろう。2条の突帯を有し、突帯間に菱形の文様を、突帯下には花弁形の文様を、それぞれスタンプする。

周防型足鍋片が出土していること等から遺構の時期は16世紀後半から17世紀代に位置づけられよう。

SD-37④～⑦ Fig.78 PL.13

調査区の東端に検出した溝状遺構SD-37のうちSD-50以前の部分を指す。搅乱坑に切られ、4つに分断される。北端はSD-50の手前で削平され消えている。ほぼ南北に軸を取り、緩く蛇行している。調査区内で長さ37mを確認した。幅は0.6～1.7m、深さは0.5m前後である。横断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で、南に緩く下っている。底面にはヘドロ状の粘質土が堆積していた。

SD-37④～⑦出土遺物 Fig.79 PL.22

コンテナ1/2箱分の遺物が出土した。図示した他に、土師質土器、瓦質土器スリ鉢、明代染付皿片等がある。

386～388は瓦質土器である。386はスリ鉢で、口縁を内側に肥厚させ、端部の平坦面に3条の浅い沈線を刻む。スリ目は6本1組である。口径30.4cm。387は碗で、内外面にハケ目調整を施す。焼成が悪く、かなり軟質である。口径44.6cm。388は火鉢と思われる。口縁を内側に折り返す。口縁外側には断面三角形の突帯を回して区画をつくり、この中に櫛状施文具の押圧文を充填する。内面はハケ目調整。

出土遺物から16世紀後半以降にあてられよう。

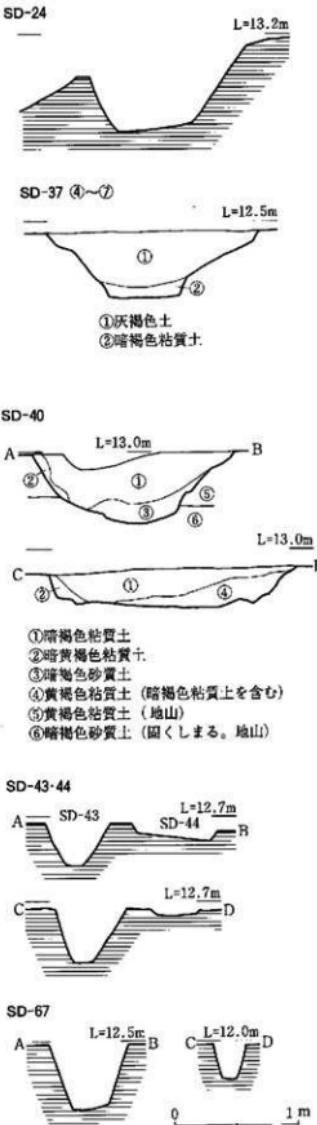


Fig.78 SD-24・37④～⑦・40・43-44-67
横断面図・土層断面図 (1/40)

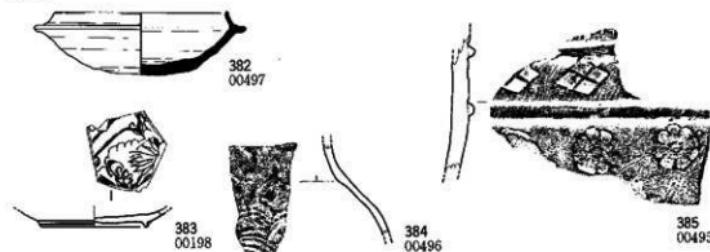
SD-40 Fig.78 PL.13

調査区の北東に検出した溝状遺構である。軸をN-49°-Eにとり、SD-30と平行して北東へ流れる。北東端で右に曲がるが、攪乱坑に切られてその先は不明である。南西端は削平により浅くなっている。長さ36mが残る。直線的に掘られており、幅は1.0~2.4m、深さは最大0.6mである。横断面形は逆台形ないしはU字形を呈し、底面は北東に緩く下る。

SD-40出土遺物 Fig.80

コンテナ1箱の遺物が出上した。中国産の白磁・青磁（龍泉窯系、同安窯系）・明代染付・陶器、近世国产陶器、土師器坏・小皿（底部糸切り）、土師質土器鉢類等がある。

SD-24



SD-37

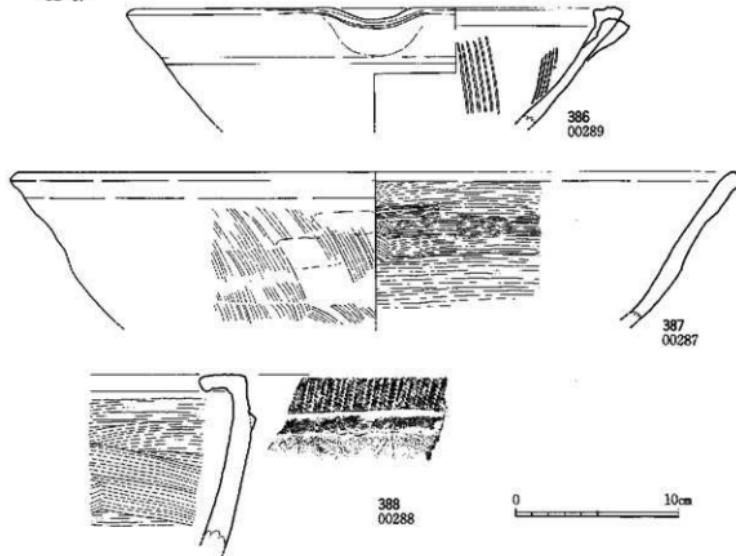


Fig.79 SD-24・37④～⑦出土遺物実測図 (1/3)

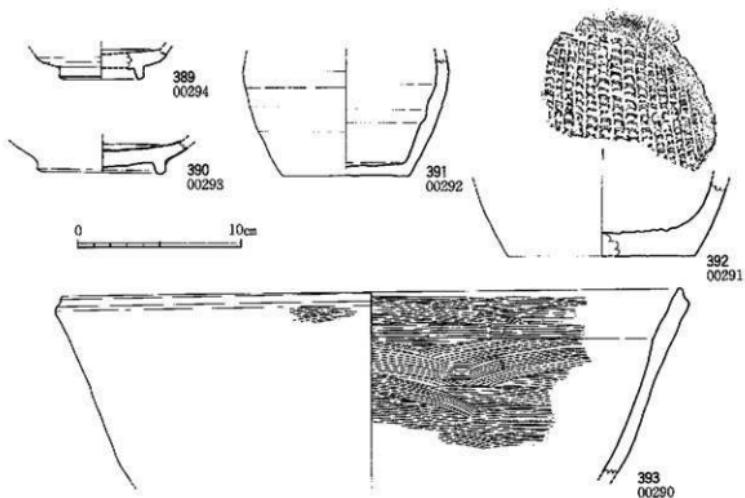


Fig.80 SD-40出土遺物実測図 (1/3)

389・390は青磁である。389は碗で、素地は灰色を呈し、微細な砂粒を含む。暗青灰色の不透明釉がかかり、豊付けから外底は露胎である。高台径5.2cm。390は龍泉窯系青磁の碗V類である。内底には沈圈線が巡り、線内には印花文が施されるが文様は不鮮明である。釉は高台内側までかかる。高台径7.9cm。391・392は無釉陶器である。391は壺で、赤褐色を呈し、胎土に細砂粒を少量含む。底径7.8cm。392はおろし皿で、横ナナ無しナナ調整し、底面に格子状のおろし目を入れる。橙褐色を呈し、胎土に白色の粗砂粒を多く含む。底径11.2cm。393は土師質土器鍋で、口縁がわずかに外反し、内面に稜がはいる。口唇部には浅い沈線を巡らす。内面にハケ目調整を行い、外面の一部には煤が付着する。焼成が良好で、かなり硬質である。口径37.6cm。

SD-30に並行する時期のものと考えられる。

SD-43 Fig.78

調査区の中央部に検出した小規模の溝状遺構である。後述の溝SD-44を切る。軸は北北東を向き、北端を溝SD-30に、南端を土坑SK-73に、それぞれ切られて終わっている。長さ19mを検出した。幅は0.4~0.8m、深さは最大0.5mを測る。横断面形は逆台形を呈し、底面は北に緩く下る。

SD-43出土遺物 Fig.81 PL.22

75点の遺物が出土した。図示した遺物の他、土師質土器鍋、瓦質土器鉢類がある。

394は肥前系染付の筒碗である。全面施釉の後、豊付けの釉を搔き取る。口径10.0cm、器高7.1cm、高台径6.0cm。395は雑質陶器の鉢である。淡赤褐色の陶胎で、白濁釉が体外面下半までかかる。高台径10.3cm。396はガラス小玉である。コバルト色を呈し、径0.4cmを測る。

以上の遺物は、17世紀前半代に比定される。

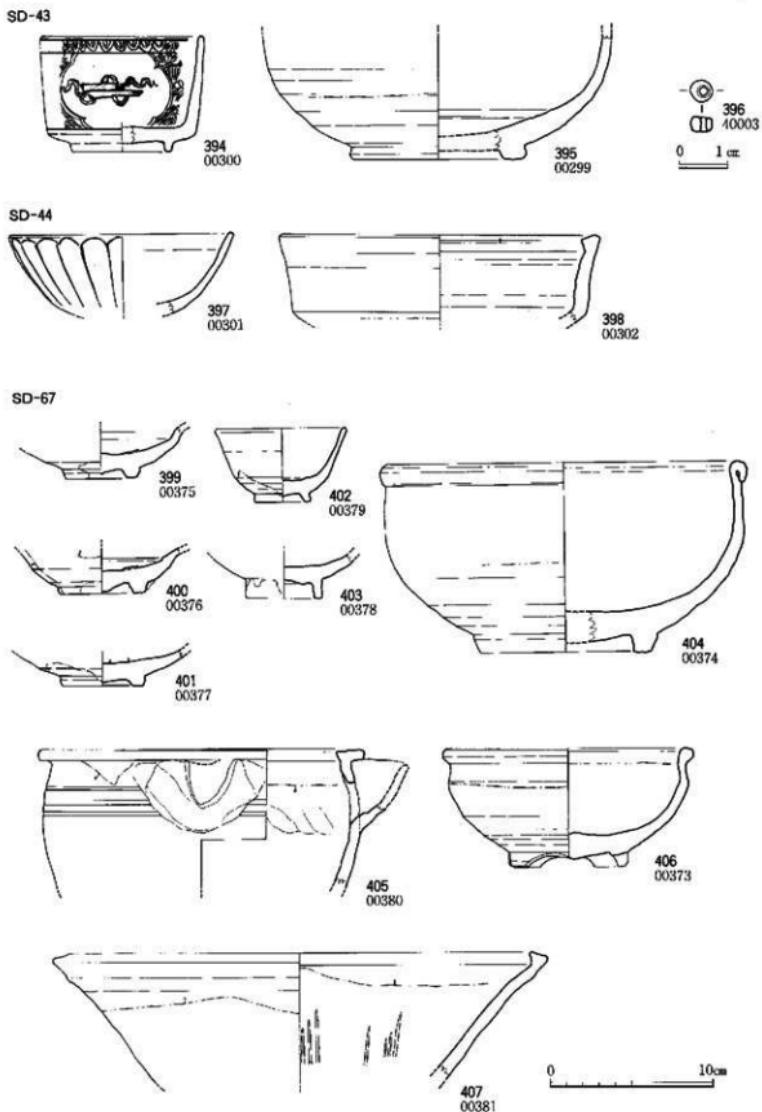


Fig. 81 SD-43·44·67出土遺物実測図 (1/3·1/1)

SD-44 Fig.78

調査区の中央に位置する溝状遺構である。軸を北北東に取り、北側を溝SD-43に切られ、南側で土坑SK-68と切り合う。南北端は西に凸がる。後述の溝SD-67との間に2.5mの距離をおいて平行に掘られており、この間が道路になっていた可能性が高い。長さ43mを確認し、幅は0.3~0.8m、深さは0.05~0.4mである。横断面形は逆台形ないしはU字形を呈し、底面は南に緩く下る。

SD-44出土遺物 Fig.81

34点の遺物が出土した。図示した遺物以外に、近世国産陶磁器、土師質土器鉢、瓦質土器スリ鉢がある。

397は龍泉窯系青磁の碗V類で、体外面に刻先蓮弁文が施される。口径13.7cm。398は灰釉香炉である。淡灰色のきめ細かな素地に、黄緑色釉がかかる。内面と体外面下半は露胎とする。口径19.6cm。SD-43およびSD-67との関係から見て、17世紀前半を下らない時期に比定されよう。

SD-67 Fig.78.

調査区中央から南側にかけて、溝SD-44と並走する溝状遺構である。SD-44との間、約2.5mが道路であったと考えられる。北端は調査区の中央部で土坑に切られて消失し、南端は土坑SK-68と切り合う。長さは17.5mを確認し、幅は0.2~0.9m、深さは0.3~0.5mである。横断面形は逆台形を呈し、底面は南に下る。

SD-67出土遺物 Fig.81 PL.22

204点の遺物が出土した。近世国産陶磁器、土師器壺・小皿（底部糸切り）、瓦質土器鉢がある。

399~401は雜釉陶器の皿で、唐津である。胎土は淡褐色~淡赤褐色を呈し、比較的きめが細かく、淡灰褐色の不透明釉がかかる。399のみ全面施釉で、他の2点は体外面下半が露胎である。3点とも内底と疊付けに3ないし4ヶ所の砂目跡を残す。高台径は順に4.4cm、5.2cm、5.0cmを測る。402は肥前系白磁の小壺である。素地はきめが細かく、淡青灰色の不透明釉を体外面下半までかける。口径8.0cm、器高4.5cm、高台径3.4cmを測る。403は肥前系磁器の碗で、高台がやや高めである。外面には黒釉、内面には淡青色の不透明釉をかけ分けている。高台径4.8cm。404~406は施釉陶器である。404は鉢で、口縁を外に折り返して玉縁状につくる。淡灰白色を呈する陶胎で、胎内は淡青灰色で不透明である。体外面下半から内面にかけて施釉し、口縁端部を釉剥離する。口径22.4cm、器高11.6cm、高台径10.3cm。405は片口鉢で、口縁は逆L字形に外に折れ曲がる。胎土は赤褐色で細かく、釉の発色は極めて悪い。口縁端部から内面上部は露胎となる。口径22.0cm。406は鉢で、3ヶ所に抉りが入る切高台である。赤褐色の細かな胎土に、乳白色の釉をかける。口縁内外面のみに施釉している。口径15.4cm、器高7.2cm、高台径7.3cm。407は唐津系铁釉スリ鉢で、口縁内外にのみ施釉する。口径30.0cm。肥前系陶磁器の時期からみて17世紀前半代におくことができよう。

(3) 井戸

SE-32 Fig.82

調査区中央やや西よりに検出した。溝SD-30の脇にあり、2つが切り合っているが、先後の関係は明らかにし得なかった。他の2基の井戸に比べて浅く、また井戸側もないことから、土坑の可能性がある。

北側の井戸は平面プランが略円形を呈し、径は1.0~1.2mを測る。検出面から底面まで1.2mで、円筒形に直に掘り下げている。底面はほぼ平坦である。

南側の井戸は不整な楕円形プランを呈し、長径2.0m、短径1.3mで、深さは1.1mである。断面形は逆台形をなし、底面は浅皿状に中央が窪む。

SE-32出土遺物 Fig.83 PL.22

49点の遺物が得られた。近世国産陶磁器の他、少量の瓦質土器片が出土している。

408は国産雜釉陶器の碗である。釉調は黄褐色不透明で、全面に施釉した後、内底を輪状に掻き取り、疊付けも釉剥ぎしている。高台径5.2cm。409は肥前系白磁の湯呑で、高台疊付けを釉剥ぎする。高台径4.8cm。

遺構の時期は遺物量が少なく不明確であるが、出土陶磁器から見て、17世紀後半以降に下るものと考えられる。

SE-70 Fig.84 PL.13

調査区南端から北へ11m、西端から東へ45mの位置に検出した井戸である。井戸側には土師質の焼き物を使用している。井戸側の土器は外径71~77cm、厚さ4cm、高さ60cmを測り、下方へやや開く円筒形を呈する。上下両端は面取りされ、内外面には粗いハケ日が施されている。壺等が転用されたものではなく、井戸側専用に作られた土器と見られる。井戸側は2段目までが残り、2段目の中途以上は井戸の廃棄時に破壊されている。掘り方は略円形プランを呈し、径2.2~2.5mを測る。検出面から底面まで2.3mを残しておらず、断面形はスリ鉢状を呈し、検出面近くでラッパ状に開く。底面は小さな平坦面をなし、0.3m浮いた位置に井戸側を置いている。覆土は①暗褐色土（遺物を多量に含む）②淡褐色砂（遺物を少量含む）③粗砂（遺物を極めて多量に含む）④粗砂（無遺物）で、基盤土は砂礫層である。①~③層は井戸の廃絶後に堆積した層で、スリ鉢を主体とする遺物が大量に投棄されていた。

また、井戸側の底には、1段目の井戸側の上面まで小児頭大から拳大の大きさの円碟が詰まっていた。水の浄化をねらったものとも考えられるが、井戸の側面には湧水による崩壊が見られないことから、廃棄時における祭祀の痕跡の可能性もある。

SE-70出土遺物 Fig.85~89 PL.22~24,30

コンテナ19箱の遺物が出土した。近世国産陶磁器を除き、大半が瓦質土器の鉢類である。特にスリ鉢の量が多いが、これらのはほとんどには使用された痕跡が認められない。

410~412は肥前系染付である。410は皿で、疊付けを釉剥ぎしており、高台外縁に少量の砂粒が付着する。口径15.0cm、器高4.3cm、高台径5.2cm。411は丸碗で、高台から外底にかけて露胎とする。発色の悪い呉須が若干認められるが、文様は不明である。高台径4.5cm。412は筒碗で、口径は9.5cmである。413は李朝の白磁である。高台疊付けと内底に4ヶ所の胎土目跡が残る。高台径5.0cm。414

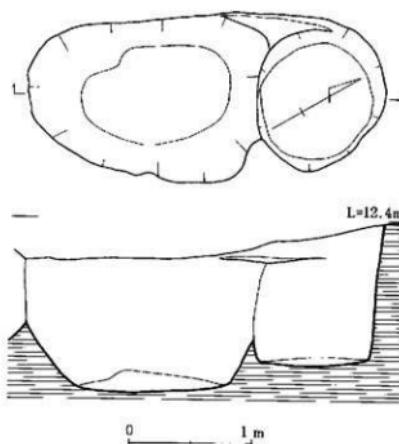


Fig.82 SE-32実測図 (1/40)

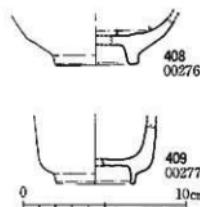


Fig.83 SE-32出土遺物
実測図 (1/3)

~416は雜釉陶器の皿である。414は唐津で、黄褐色できめ細かな素地に、淡灰白色の不透明釉をかける。基筋底状を呈し、外底は露胎で、内底と底部外縁に4ヶ所の砂目跡が残る。415は李朝か。素地は灰色を呈し、胎土に白色砂粒を多量に含む。淡青灰色の透明釉を全体に施し、内底と疊付けに砂目跡を残す。416は唐津と思われる。灰褐色の細な胎土で、釉調は暗灰緑色の不透明。体外面下半は露胎で、赤く発色する。疊付けに4ヶ所目跡が残る。417、418は唐津黒釉である。417は皿で、体外面下半は露胎となり、内底に4ヶ所の砂目跡が残る。418は丸碗で、体外面下半は露胎となる。419は唐津黄緑色釉陶器皿で、胎土は褐色の陶胎である。体外面下半露胎で、内底に目跡がある。口径13.0cm、器高3.0cm、高台径5.7cm。420、421は雜釉陶器の鉢である。420は赤褐色の細かな素地に、白濁釉をかけ、口縁端部は釉剥ぎする。口径19.0cm。421は褐色の陶胎で、全体に煤が付着しており、二次的な加熱を受けている。釉調は不明で、内底の4ヶ所に目跡が残る。422は唐津系の鉄釉スリ鉢である。口縁内外にのみ施釉する。口径15.3cm。423・424は無釉陶器のスリ鉢である。424は内面と破断面に煤が厚く付着しており、破損後に煮沸具として再利用したものか。

425~454は瓦質土器である。還元焰焼成され硬質を呈するものと、土質質に近い軟質のものがある。425~437はスリ鉢である。内面に丹念なハケ目調整を行うものと、行わないものとがある。数本単位でスリ目を入れる。外面にもハケ目調整を加えているが、調整が不充分で指頭痕の残るものが多く見受けられる。いずれにも使用による器面の磨耗等は認められない。425は口径30.0cm、器高11.5cm、底径12.0cm。426は口径30.0cm、器高10.5cm、底径13.5cm。427は口径33.2cm、器高12.7cm、底径12.8cm。438~440は浅鉢である。438、439は火鉢で、口縁を内側に折り返す。口縁部外面に突帯を貼付し、口縁端部と突帯間に櫛状工具で施文している。内面は丁寧なハケ目調整、外面はミガキである。440は口縁の返りがなく、端部は面取りされる。内面は丁寧なハケ目調整で、外面には指頭痕が残る。口径32.0cm、器高7.5cm、底径23.0cm。441、442は深鉢で、直立する口縁が付き、体部は肩が張る。内外面にハケ目調整を施す。口径は順に30.8cm、28.2cmである。443は小型の浅鉢で、橢円筒形を呈する特異な器形の土器である。外面はハケ目調整で、底部付近には指頭痕が残る。内面はナデ調整。胎土は橙褐色を呈しやや軟質で、内面は黒色を呈する。短径11.4cm、器高5.4cm、底径9.5cm。444は小型の火鉢と見られ、口縁は内湾して、そのまま収まる。外面は丁寧なミガキを施し、内面はハケ目調整である。口径8.0cm。445、446は鉢の底部で、円柱状あるいは半円状を呈する脚が付く。447、448は口縁部で、ともに波状口縁をなす。449は鍋か。口縁端部の相対する2ヶ所に外耳を付け、

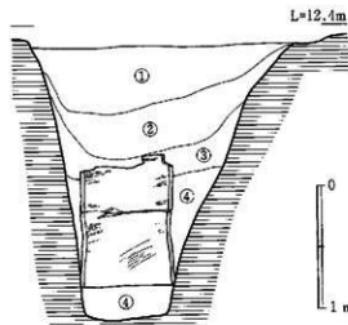
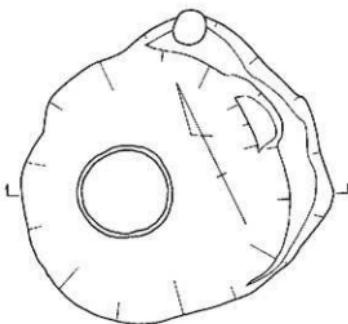


Fig. 84 SE-70実測図 (1/40)

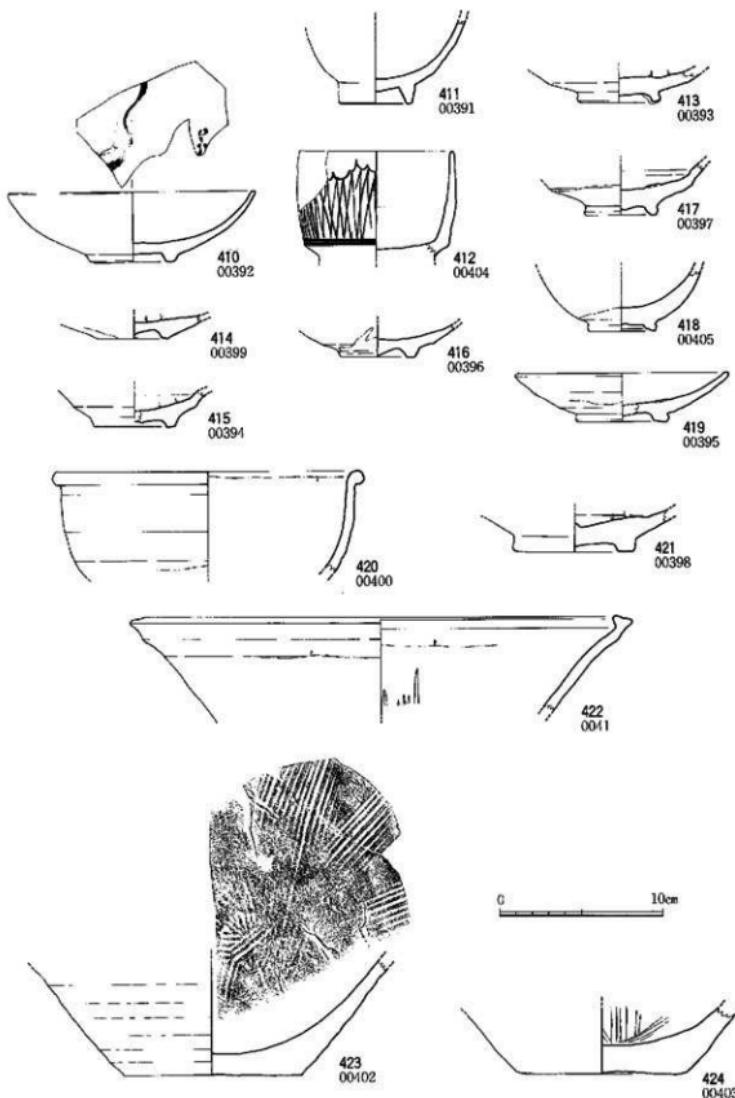


Fig. 85 SE-70出土遺物実測図 I (1/3)

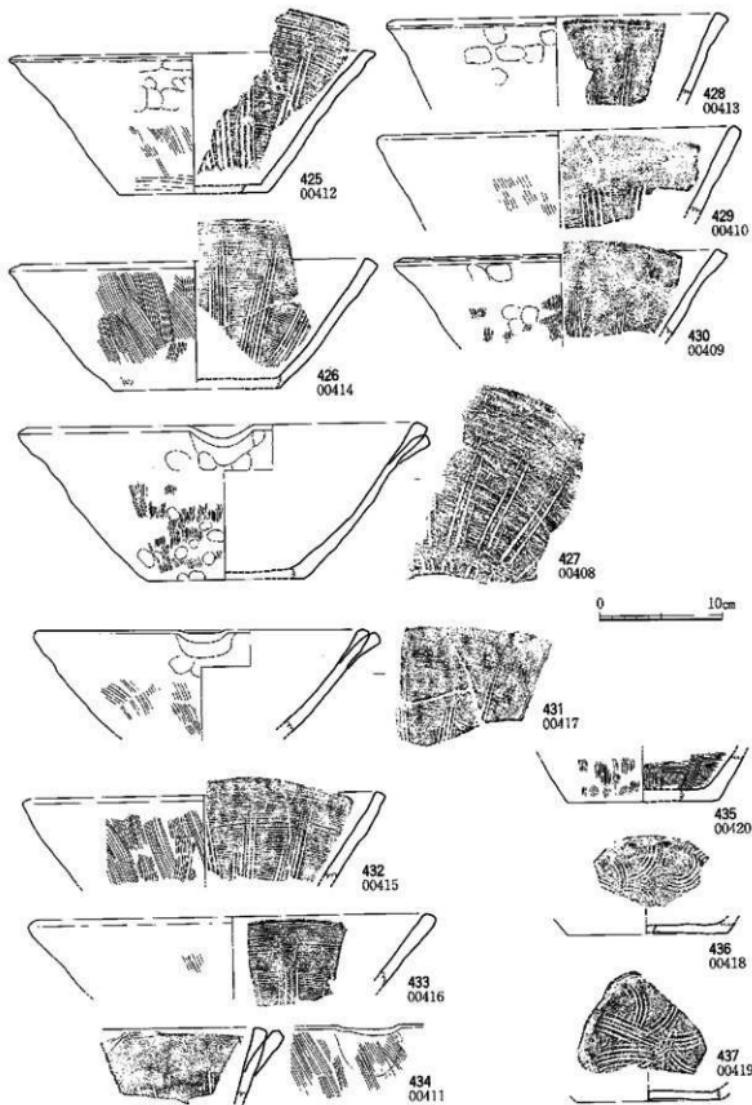


Fig.86 SE-70出土遺物実測図Ⅱ (1/4)

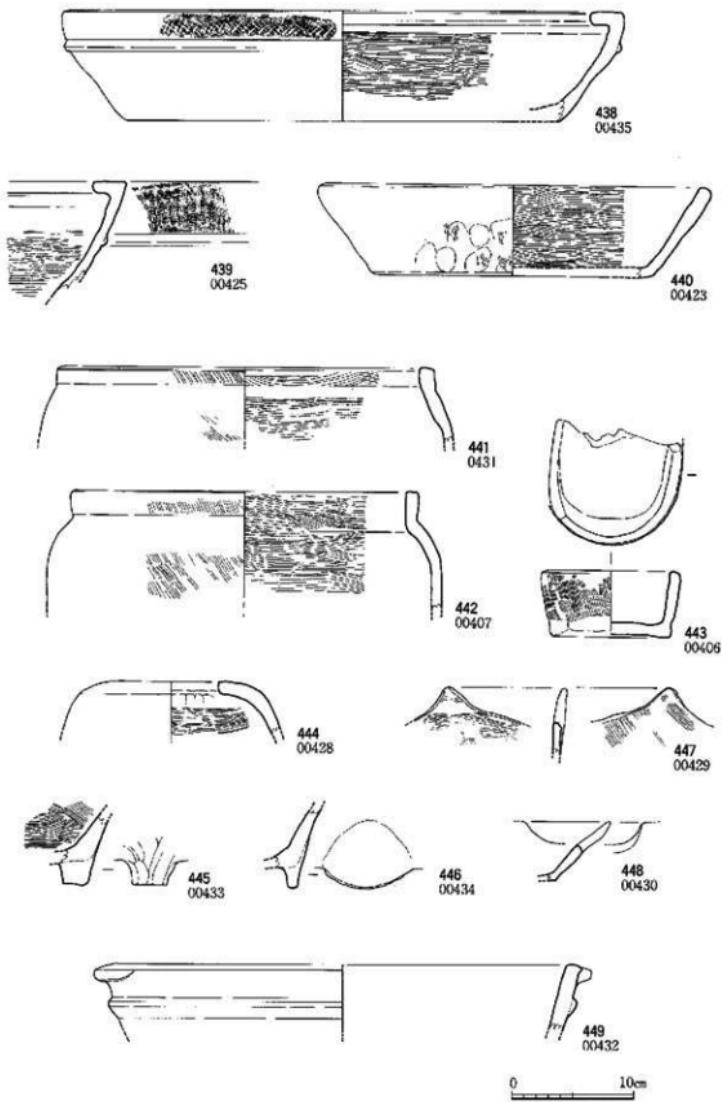
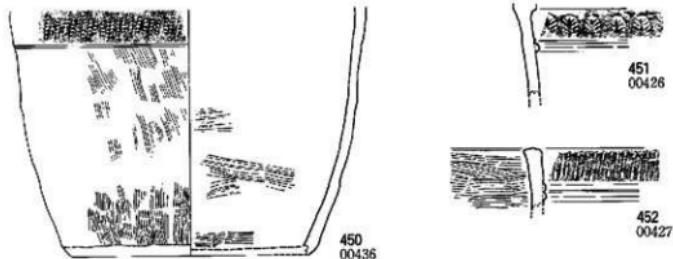


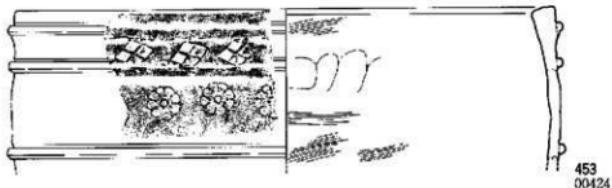
Fig.87 SE-70出土遺物実測図Ⅲ (1/4)



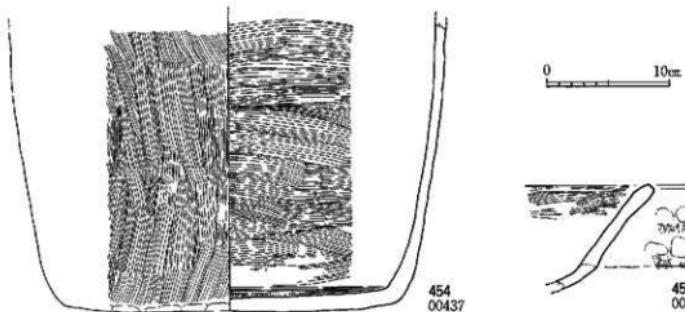
450
00436

451
00426

452
00427



453
00424



454
00437

0 10cm
455
00422



456
00421

Fig.88 SE-70出土遺物実測図IV (1/4)

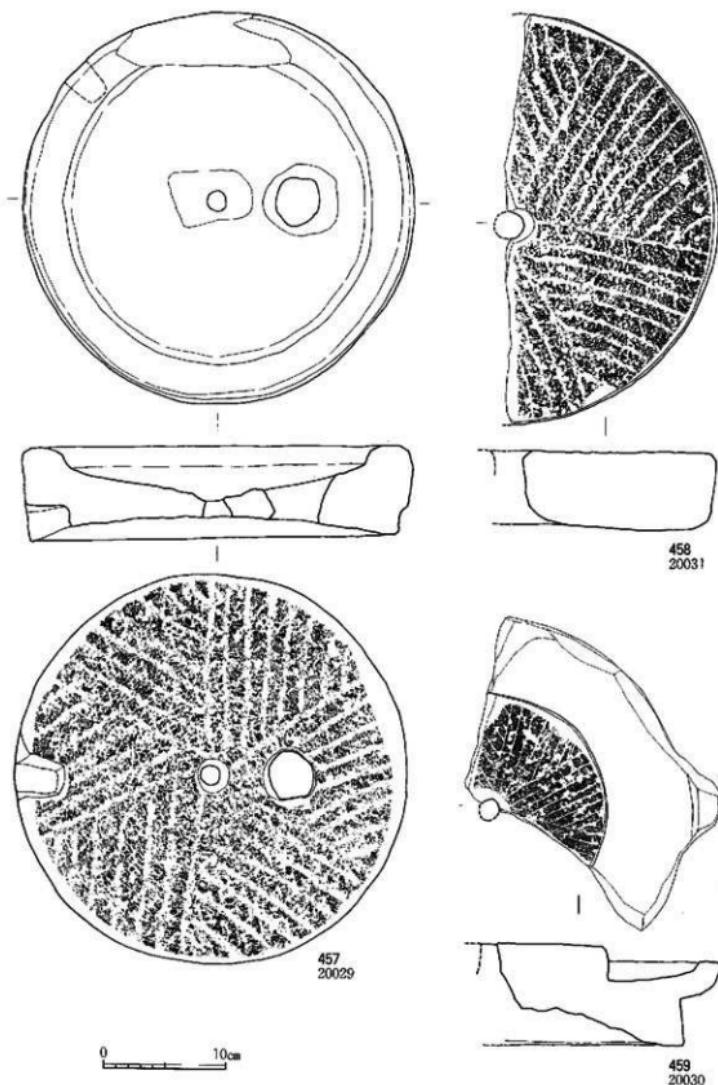


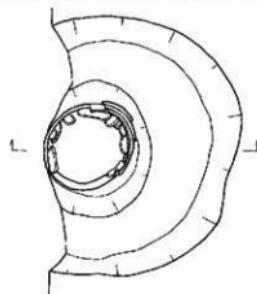
Fig.89 SE-70出土遺物実測図 V (1/4)

口縁下には突帯を巡らせる。口径39.0cm。450～453は深鉢で、火鉢と思われる。450は口縁外面に沈線を巡らせ、口縁端部と沈線間に輪状工具による刺突文を充填する。451～453は口縁から頸部にかけて2～3条の突帯を回し、この上下に連続する印花文を施す。文様は451が木の葉文、452が縦目文、453は菱形紋と梅花文の2種類がある。453は口径44.0cm。454は臺で、内外面とも丹念にハケ目調整を行う。

455、456は土師質土器の鍋で、455は焼成が良好かなり硬質である。456は内面と外面下半にハケ目調整を行い、口縁端部を面取りして浅い沈線1条を回している。外面上半から内面にかけて煤が厚く付着する。口径50.2cm、器高9.3cm。

457、458は挽臼である。457は下臼で、芯棒孔・こぼれ目とも円形で、側面には把手用の孔がある。孔は中程にひとつ、下端に半欠のものがひとつある。臼の頻繁な使用により薄くなり、孔を空け直したものと見られ、後に空けた中程の孔の方が小さい。スリ目は6分画で、幅5mm、間隔15mm。直径31.5cmを測り、石材は凝灰岩のような気泡の多い石である。458は上臼で、スリ目は6分画と見られ、幅4mmで、間隔は15mmである。457と同様の石材を用いている。459は茶白の下臼である。芯棒孔は方形か。スリ目は細かく、幅1.5mmで、間隔は0.6～0.9mmと不規則である。

遺構の時期は肥前系陶磁器や土師質土鍋の出土から見て、17世紀初頭～前半代にあてられよう。



SE-75 Fig. 90 PL.13

調査区南西隅の壁際に検出した井戸である。井戸側にはSE-70同様、土師質の土器を使用している。井戸側は外径65～68cm、厚さ3cm、高さ54cmを測り、SE-70のそれに比べてひとまわり小さい。下方が若干開く円筒形を呈し、上下両端は面取りされ、内外面に粗いハケ目調整を加えている。井戸器専用の焼き物と見られる。井戸側は3段目までがほぼ完全に残り、4段目の下端も一部が残っていた。2段目と3段目の間に瓦礫を挟んで隙間をつくる。湧水の便を意図したものであろうか。掘り方は西側が調査区外に伸展するが、略凹形プランを呈すものと見られ、径2.1mを測る。検出面から1.1mまで円筒形に掘り下げて一度平底面をつくり、中央に円形孔を掘って井戸側を

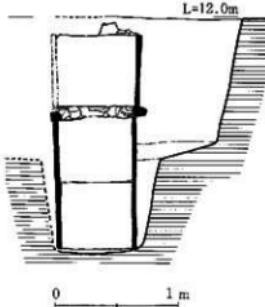


Fig. 90 SE-75実測図 (1/40)



Fig. 91 SE-75出土遺物実測図 (1/3)

置いている。円形孔は径1.1m、深さ0.8mの円筒形で、底面に接して井戸側を置く。覆土は自然に埋没した状況を呈しており、SE-70のような遺物の廃棄行為は見られない。埋没後、上部を削平されたものと考えられる。

SE-75出土遺物 Fig.91 PL.24

井戸側内から5点の遺物が出土した。

460は唐津灰釉陶器の溝縁皿で、素地は淡灰白色で細かく、淡青灰色の半透明釉を全面にかける。内底に4ヶ所の、疊付けに3ヶ所の砂目跡が残る。口径13.7cm、器高4.9cm、高台径4.4cm。461は施釉陶器の片口で、淡褐色のやや粗い素地に、やや黄味がかった白濁釉をかける。体外面上半から内面にかけて施釉しており、口縁端部は釉刺ぎする。口径17.3cm、器高10.7cm、高台径7.3cm。

出土遺物が量的に少なく不明確ではあるが、出土陶磁器は17世紀前半の様相を呈する。

(4) 土坑

SK-19 Fig.92

調査区北端から南へ23m、西端から東へ26mに位置する土坑である。平面プランは不整な楕円形を呈し、長径1.3m、短径1.0mを測る。深さは0.25mで、断面形は逆台形を呈する。底面には浅く小さなピットひとつがある。20点の遺物が出土したが小片のため図化できない。

SK-20 Fig.92 PL.14

調査区北端から南へ25m、西端から東へ33mに検出した土坑である。平面プランは不整な隅丸長方形を呈し、特に北東辺はややいびつな形をなす。長径3.4m、短径2.4mを測り、深さは0.3mで、底面は平坦である。

SK-20出土遺物 Fig.93

79点の遺物が出土した。

462、463は土師器壺である。ともに底部は糸切り離して、底径はそれぞれ7.2cm、6.8cmである。464は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。465は上師質土器の鍋で、口縁が逆L字形に屈曲し、上端面に綱目文を押圧する。内外面にハケ目調整を行う。口径32.0cm。

遺物出土量が少なく時期を決定するのは難しいが、土師質土器鍋は概ね12世紀後半～14世紀前半に位置付けられるものである。

SK-21 Fig.92

SK-20の南約1mに位置する土坑である。平面プランは不整な隅丸方形を呈し、長径1.9m、短径1.6mを測る。深さは0.06mで、遺構の残りが悪い。

11点の遺物が出土したが、小片のため図化していない。覆土等から見て、SK-20と同時期の遺構と考えられる。

SK-22 Fig.92

調査区北端から南へ28m、西端から東へ25mに検出した土坑である。溝状に細長い楕円形プランを呈し、長径2.9m、短径0.8mを測る。深さは0.1m強を残し、底面は平坦で、浅く小さなピット2つがある。

遺物は6点が出土したが、小片のため図化できない。

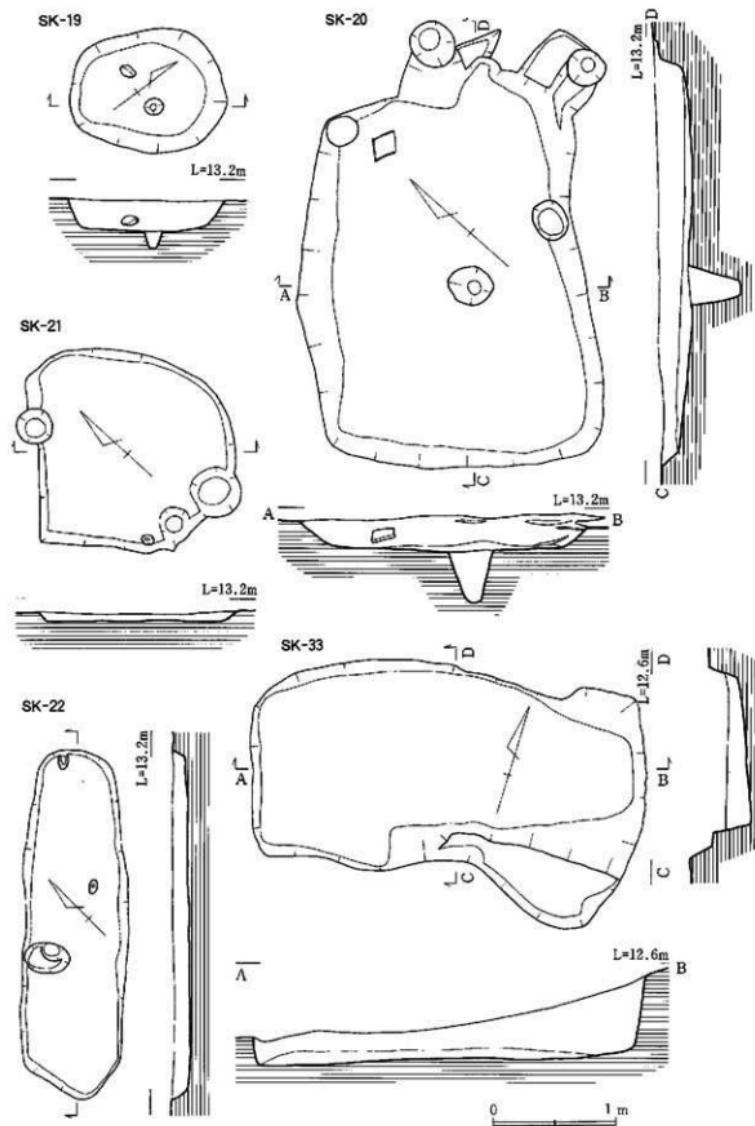


Fig.92 SK-19·20·21·22·33実測図 (1/40)

SK-33 Fig.92 PL.14

調査区のはば中央部に位置する。開田時に削平を受け、特に西側の残りが悪い。平面プランは東西に長い隅丸長方形を呈し、東西長3.2m、南北長1.6mを測る。深さは最大0.7mを残し、底面は平坦で、南東壁の一部を段状に掘り下げている。

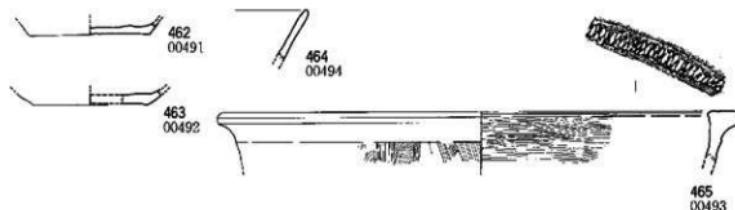
SK-33出土遺物 Fig.93 PL.25

図示した遺物以外に5点の土器小片が出土した。

466は青銅製の柄杓である。体部は扁平な半球形を呈し、口縁部がやや厚く2mmを測るが、底部は紙のように薄い。体部は口径8.1~8.4cm、高さ4.5cmである。柄は直線的で、把手部分で緩く外反させ、やや幅広にしている。柄は断面長方形で、把手部では薄い蒲鉾形をなす。端部で折り返して輪状につくる。長28.4cm、幅0.6cm、厚さ0.4cmで、把手部幅0.95cm、厚み0.2cmをそれぞれ測る。表面はなめらかで、光沢がある。

5点の土器片はいずれも土師質の土器であるが、細片のため時期を決めがたい。中世の造構としたが、古く遡る可能性もある。

SK-20



SK-33

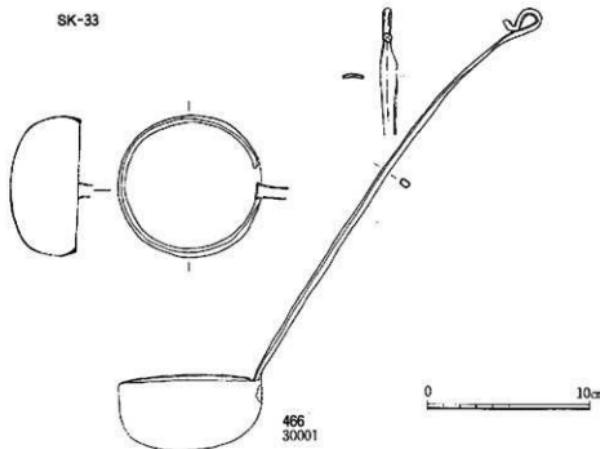


Fig.93 SK-20・33出土遺物実測図 (1/3)

SK-34 Fig.94 PL.14

SK-33の南西側に2mの間を置いて位置する。南北の調査区境にかかるため、調査用の排水溝で一部を破壊した。後述のSK-64と細い溝でつながっており、一連の遺構と考えられる。溝状に東西に細長い平面プランをなし、東西長11.7m、南北幅3.0mを測る。深さは最大0.5mを残し、土坑の中心に向かって段状に掘り下げており、断面形は皿状を呈する。

土器の小片が多数出土しており、これらを廃棄するための土坑と考えられる。

SK-34出土遺物 Fig.95 PL.24,25

コンテナ1箱の遺物が出土した。大半が土師質・瓦質の土器で占められ、他に近世国産陶磁器等がある。量的には瓦質スリ鉢片が多い。

467、468は染付である。467は明代の饅頭心碗で、覺付けを釉剥ぎする。高台内に「大明年造」の銘がある。高台径4.7cm。468は肥前系の筒碗で、外面に施文し、全体に施釉する。

469、470は国産雜釉陶器である。469は碗で、淡灰色の陶胎に、白濁釉をかける。内底と疊付けに4ヶ所ずつ砂目跡が残る。470は鉢の口縁部片と思われる。口縁端部を短く外へつまみ出す。淡褐色の不透明釉をかける。471は筒型鉢で、二次的に火を受けたと見られ、釉調等は不明である。口径12.5cm。

472は土師質土器鍋で、口唇部に浅い沈線が入る。

473~476は瓦質土器である。473は釜で、肩部の相対する2ヶ所に外耳を付け穿孔する。外耳の上部には巴文をスタンプする。口径14.2cm。474は口縁が内側に折れる浅鉢で、火鉢と見られる。口縁部外面に突帯が1条付き、口縁端部と突帯間に連続する木葉文をスタンプする。内面にはハケ目調整を加える。口径36.2cm。475、476は深鉢で、ともに火鉢であろう。475は口縁下に突帯を2条貼付し、突帯と口縁端部の間に474と同様のスタンプを施す。口径31.6cm。476は口縁直下に穿孔がある。相対する2ヶ所に二つずつ穿孔している。内面と外底は丁寧にハケ目調整し、外面は比較的丁寧なヘラミガキを施す。口径23.5cm、器高16.9cm、底径19.8cm。

以上の出土遺物から、遺構の時期は17世紀初頭から前半代に位置づけられよう。

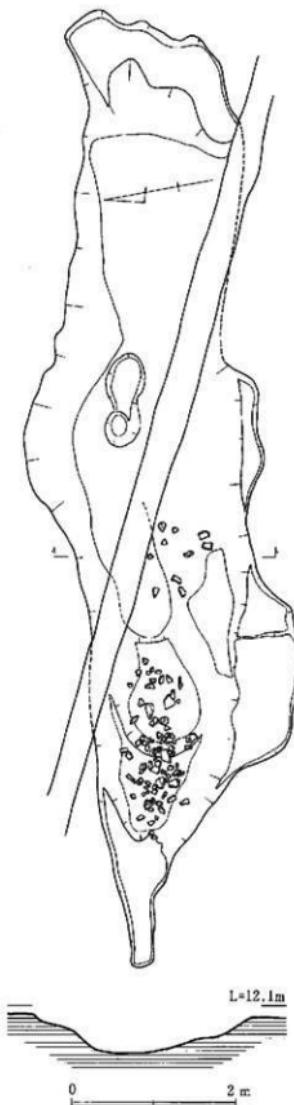


Fig.94 SK-34実測図 (1/60)

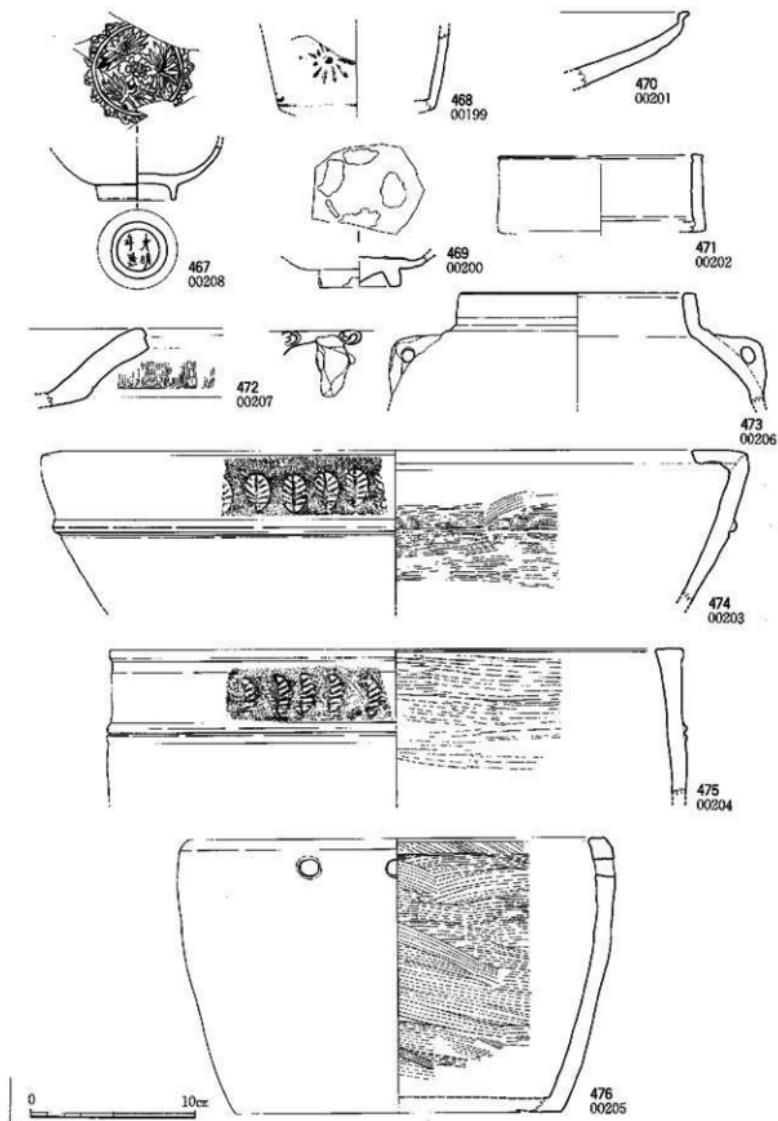


Fig. 95 SK-34出土遺物実測図 (1/3)

SK-63 Fig.96 PL.14

調査区南西の壁際に検出した。西側が調査区の外へ伸展するが、SK-34同様、溝状に東西に細長い平面プランをなすものと考えられる。現状で、東西長7.5m、南北幅3.2mを測る。深さは0.7mを残す。横断面形は皿状を呈し、覆土は①灰褐色土、②暗褐色粘質土である。土坑の中央付近から少量の土器がまとめて出土した。

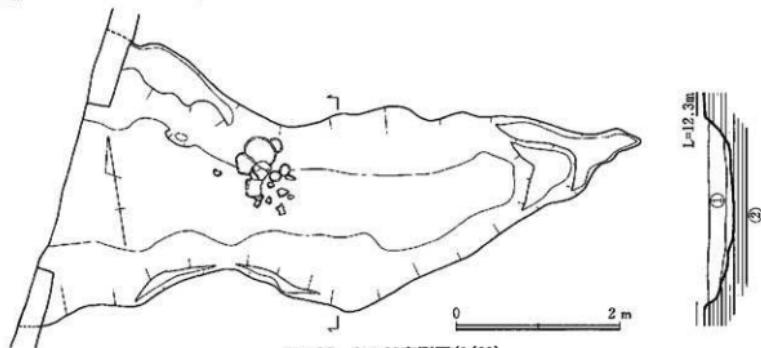


Fig.96 SK-63実測図 (1/60)

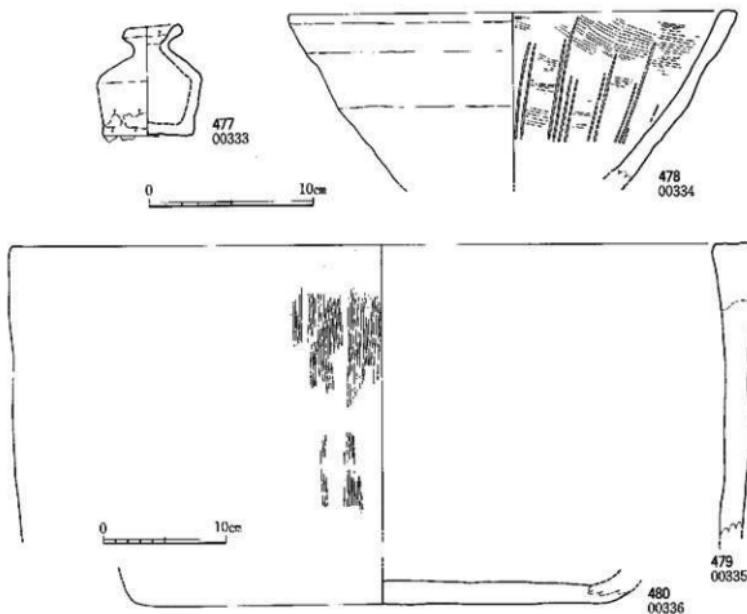


Fig.97 SK-63出土遺物実測図 (1/3-1/4)

SK-63出土遺物 Fig.97 PL.25

コンテナ1/2箱の遺物が出土した。

477は雜釉陶器の小壺である。素地は淡褐色を呈しやや粗く、ナマコ触を口縁内面から体外面下半までかける。口径3.1cm、器高6.7cm、底径5.6cm。478は土師質土器のスリ鉢で、内面にハケ目を施し、4本1組のスリ目を入れる。口径27.7cm。479、480は瓦質土器の大甕である。ともに胎土に白色粗砂粒を多量に含み極めて粗く、焼成が不良で軟質である。479は外面にハケ目調整を行い、口径は54.0cmである。

SK-64 Fig.98 PL.14

SK-34の西側に隣接して位置する土坑で、これと一連の遺構と考えられる。西側の一部を試掘トレンチに切られている。SK-34と同様、溝状に東西に細長い平面プランを呈し、東西最大長11.3m、南北最大幅3.0mを測る。深さは最大0.5mを残しており、土坑の中心に向かって段状に下がる。断面形は皿状を呈し、覆土は暗褐色粘質土の単層である。

SK-34同様、土器の小片や礫が出土しており、これらを廃棄するための土坑と考えられる。

SK-64出土遺物 Fig.99 PL.25

93点の遺物が出土した。

481・482は瓦質土器で、いずれも軟質である。481は深鉢である。安定のよい平底で、胴部は肩が張り、口縁部ははやや内傾して立つ。内外面にハケ目調整を行う。口径28.0cm、器高31.0cm、底径23.4cm。482は鉢の底部で、胴部に突帯を貼付し、底部の3ヶ所に半円形板状の脚を付ける。外面は丁寧にナデ調整する。

SK-34と同時期のものと考えられる。

SK-65 Fig.100 PL.14,15

SK-64の南側に1.5mの間を置いて検出した土坑である。掘立柱建物SB-141・142を切っている。南北に長い不整規円形プランを呈し、南北最大長8.4m、東西最大幅3.3mを測る。深さは最大0.5mを残し、土坑の南西側に向かって段状に深い。断面形は浅皿状を呈し、覆土は①暗褐色粘質土、②暗褐色砂質土である。

スリ鉢を主体とする土器の小片が多数出土しており、これらを廃棄するための土坑と考えられる。

SK-65出土遺物 Fig.101,102 PL.25,26

コンテナ3箱の遺物が出土した。図示した遺物以外は、全

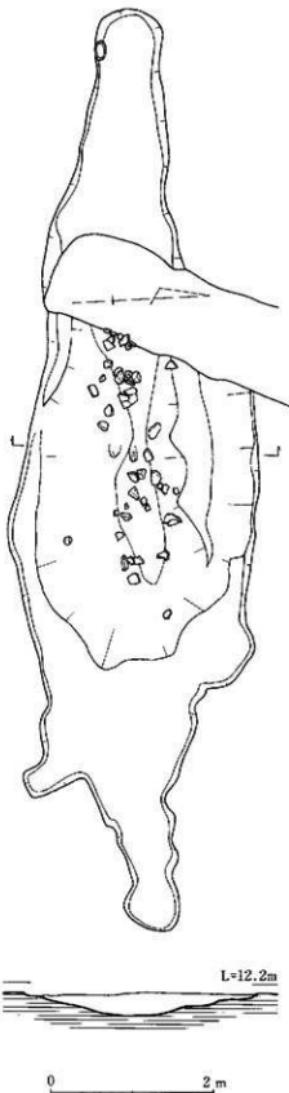


Fig.98 SK-64実測図 (1/60)

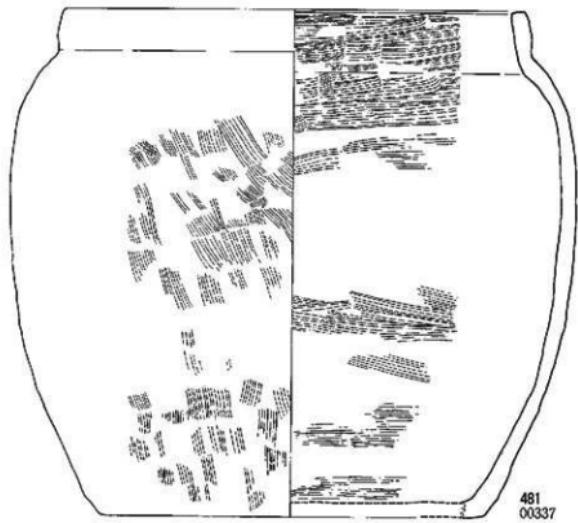


Fig. 99 SK-64出土遺物実測図 (1/3)

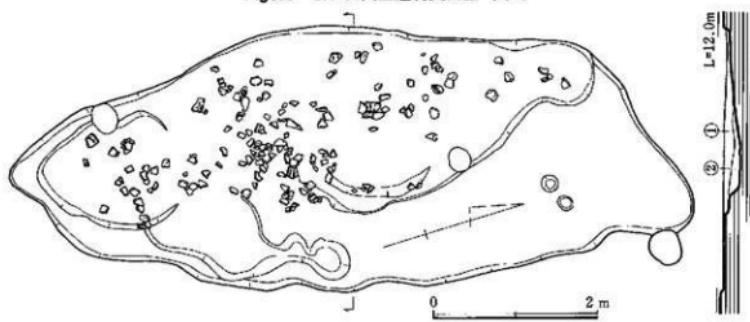


Fig. 100 SK-65実測図 (1/60)

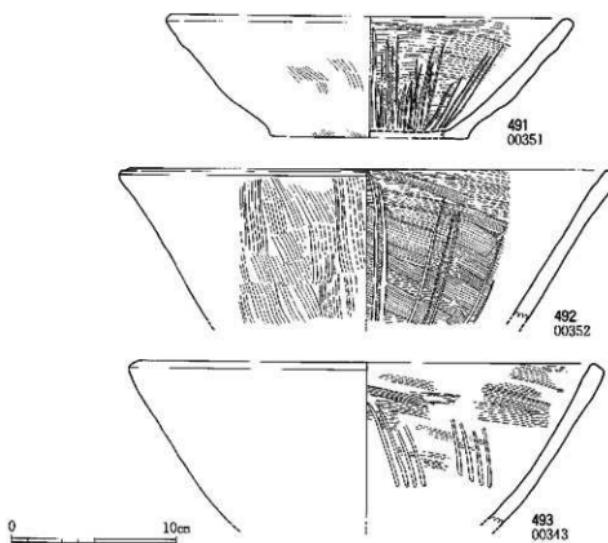
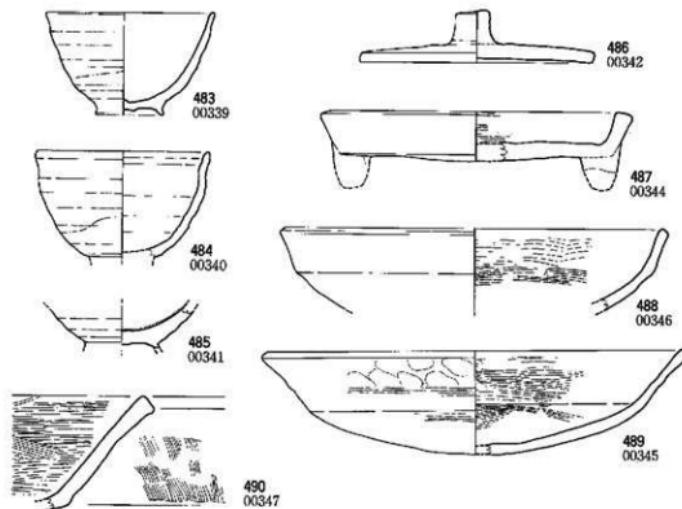


Fig.101 SK-65出土遺物実測図 I (1/3)

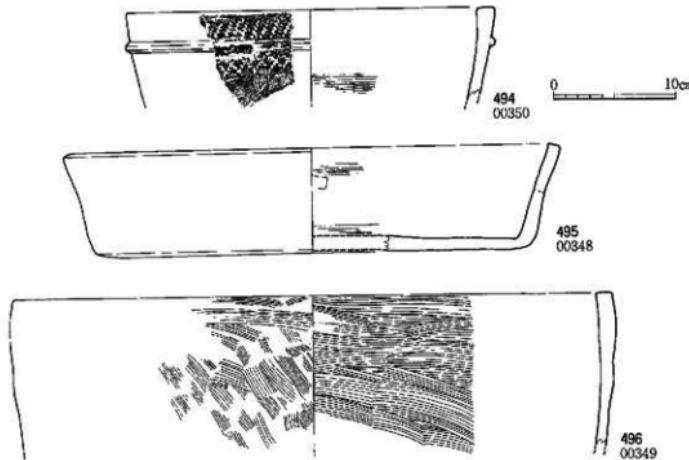


Fig.102 SK-65出土遺物実測図Ⅱ (1/4)

て土師質土器と瓦質土器である。特に瓦質スリ鉢の出土量が多い。

483～485は唐津黒釉碗である。ロクロ目がよく残り、体外面下半は露胎とする。483は口径10.4cm、器高6.2cm、高台径4.2cm。484は口径10.4cmである。

486～490は土師質土器である。486は鉢の付く蓋で、器面剥落のため調整が不明である。径14.2cm。487は脚付きの小形浅鉢で、円柱状の脚が付くが、脚の数は不明である。内面にハケ目調整を行い、口縁端部から内面にかけて煤が付着する。口径19.0cm、器高3.0cm、底径16.6cm。488～490は鍋で、他の土師質土鍋に比べると薄手で小形である。内面に密にハケ目調整を加えているが、外面は指頭痕を残している。488は口径23.6cm、489は口径26.0cm、器高6.3cmである。

491～496は瓦質土器である。491～493はスリ鉢で、いずれも内面にハケ目調整を行い、数本単位のスリ目を刻んでいる。いずれの器面にも使用による磨滅等は認められず、493は内面に煤が付着している。491は口径24.8cm、器高7.5cm、底径12.0cm。492は口径30.4cm。493は口径29.0cm。494は深鉢である。口縁外側に突帶を貼り付け、この上下に刺突文を施す。内面にはハケ目調整を加える。口径30.0cm。495は浅鉢で、外面に丁寧なナデ調整、内面にハケ目調整を施す。口径40.6cm、器高8.6cm、底径35.4cm。496は甕で、内外面にハケ目調整を行う。口径49.0cm。

出土遺物から造営の時期は16世紀末～17世紀初頭と考えられる。

SK-66 Fig.103 PL.15

調査区中央部のやや南寄りに検出した土坑である。北端が一部南北調査区境にかかる。南北に長い不整な隅丸長方形プランを呈し、南北最大長7.2m、東西最大幅4.0mを測る。深さは最大0.4mを残し、土坑の北西よりに向かって段状に掘り下げている。土坑底面の中央には径1.4～1.6mの円形坑を掘る。検出面からこの円形坑の底面までは0.9mを測る。

スリ鉢を主体とする土器の小片や礫が多数出土しており、これらを廃棄するための上坑であろう。

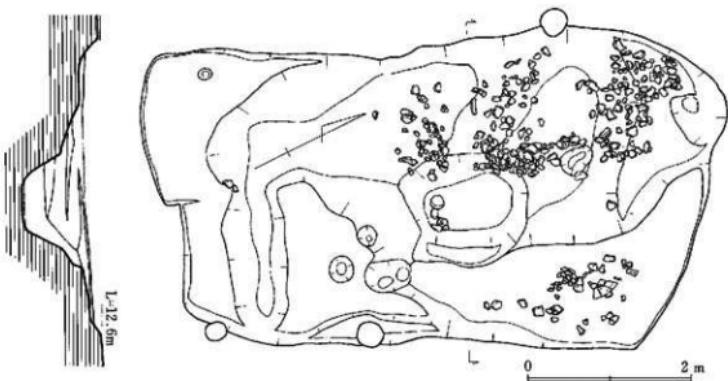


Fig.103 SK-66実測図 (1/60)

SK-66 出土遺物 Fig.104,105 PL.26,30

コンテナ7箱の遺物が出土した。土師器壺・小皿（底部糸切り）、近世国産陶磁器の他、大量の土師質七器・瓦質土器の鉢類があり、特に瓦質土器スリ鉢が圧倒的な量を占める。

497～499は土師器である。497、498は小皿で、底部糸切り。497は口径7.8cm、器高1.7cm、底径5.2cmを測る。499は壺で、底部糸切り。口径13.2cm、器高2.5cm、底径8.0cm。

500は龍泉窯系青磁の碗V類である。全面に施釉した後、外底の釉を輪状に掻き取る。体外面に剣先端弁文、内底に印花文を施す。高台径5.8cm。501～503は明代の柒付碗で、中国福建省産と思われる。いずれも陶質胎土で、呉須の発色が悪い。501、502は高台から外底にかけて露胎で、501は内底を輪状に釉剥ぎする。503は疊付けを釉剥ぎしており、砂が付着する。504は唐津灰釉陶器の溝縁皿である。灰白色の比較的精良な素地で、淡青灰色の半透明釉を全面にかけ、疊付けには砂目跡が残る。口径13.2cm、器高4.5cm、高台径4.4cm。505、506は雜釉陶器である。505は唐津皿で、口縁が内湾して開く。淡赤褐色のやや粗い素地に、緑黄色の透明釉をかける。外面下半は露胎である。口径10.6cm、器高3.5cm、高台径5.0cm。506も皿で、李朝か。口縁は直線的に開く。素地は褐色を呈し、白色砂粒を含み粗く、釉調は淡灰白色を呈し不透明で、釉上には褐斑が浮く。内底と疊付けに砂目跡が4ヶ所残る。507は肥前系白磁の筒碗で、精良な素地に、淡青灰色の不透明釉をかける。

508～510は土師質土器である。508は小型の筒形容器の肩部片で、外面には亀甲文をスタンプする。体部が六角柱状になるものであろう。509、510は鍋で、外面には葉が付着する。509は片方に把手が付き、外面ハケ目調整である。口径24.6cm。510は器壁が比較的薄く、内面にはハケ目調整痕がよく残る。口径35.4cm。

511～515は瓦質土器である。511、512はスリ鉢で、内面にまばらにスリ目を入れる。511は外面のハケ目調整が充分でなく、指頭痕が残る。512は外面のハケ目調整が丁寧で指頭痕を消しており、内面にも丁寧なハケ目調整を行う。口径は順に29.6cm、32.0cmである。513は火鉢で、口縁が内側に屈曲し、内面にハケ目調整を施す。口径36.0cm。514は深鉢で、口縁端部と頸部に突帯を付け、突帯間に鋸歯状の刺突文を施す。内面ハケ目調整。口径38.2cm。515は壺で、胎土は粗くかなり軟質である。内外面にハケ目調整を施す。口径34.2cm。

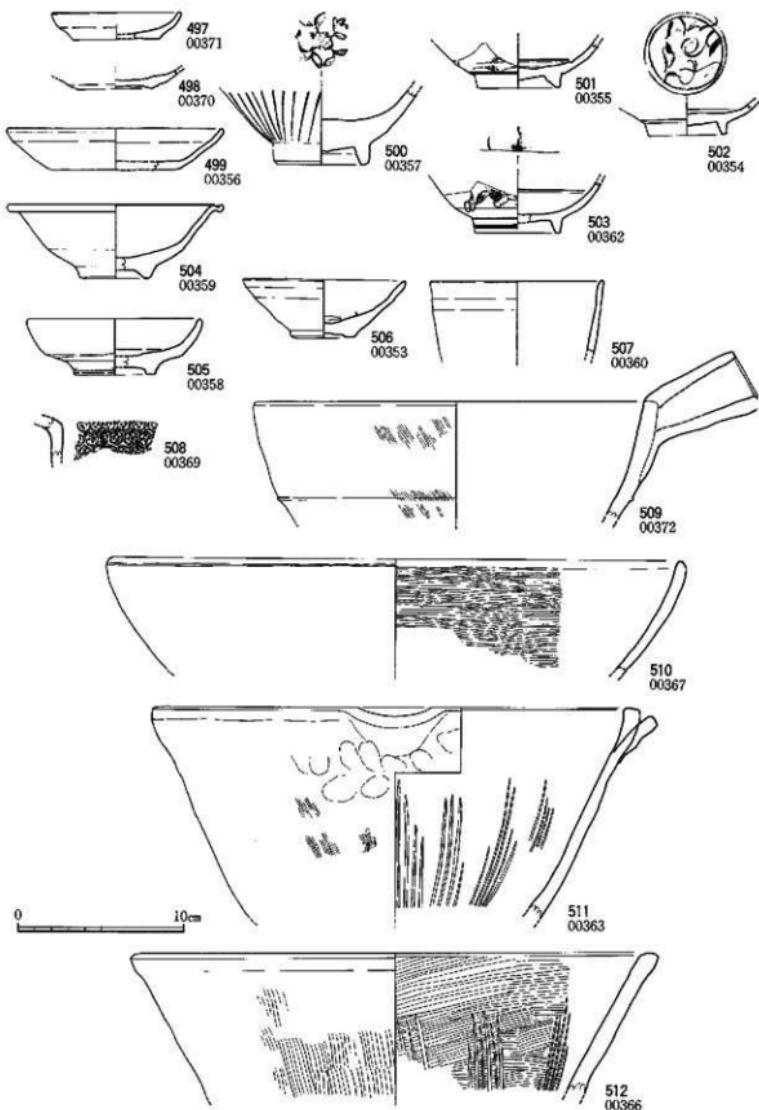


Fig.104 SK-66出土遺物実測図 I (1/3)

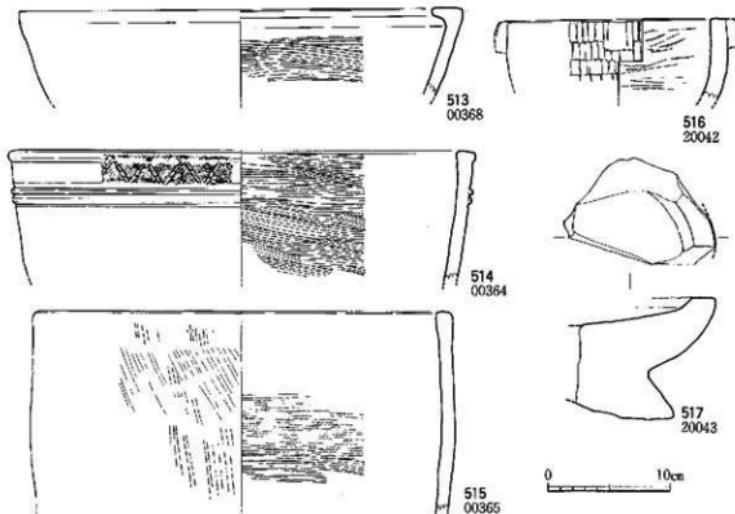


Fig.105 SK-66出土遺物実測図 II (1/4)

516は小型の滑石製石鍋で、口縁の相対する2ヶ所に縱長の外耳が付く。口径18.0cm。517は茶白であろう。皿の部分の破片で、表面には使用による磨滅が認められる。

造構の時期は、陶磁器や土師質土鍋等から、16世紀末～17世紀初頭におくことができよう。

SK-68 Fig.106 PL.15

調査区南端の中央部に検出した土坑である。SD-44・67等の溝状造構と切り合っているが、これらの先後関係は明確にできなかった。南側は調査区外に伸展する。南北に長い不整な長方形プランを呈し、調査区内で南北長5.2m、東西最大幅3.8mを測る。土坑底面の北西に偏して不整梢円形プランの浅い坑がある。坑は長径2.0m、短径1.1mを測り、検出面からこの坑の底面までは0.3mを測る。

土坑の南側で列状の礫群を検出したが、これは溝状造構に伴うものである可能性が高い。

SK-68出土遺物 Fig.107 PL.27

遺物はコンテナ1箱分がある。少量の土師器壊・小皿（底部糸切り）の他、瓦質土器鉢類、近世国产陶磁器がある程度まとまって出土している。

518～520は肥前系染付である。518、519は皿である。全面に施釉した後、高台疊付けを釉剥ぎする。疊付けの縁には砂粒が付着する。518は口径15.1cm、器高3.2cm、高台径6.0cm。520は徳利である。内面は露胎で、高台疊付けは釉剥ぎする。

521は鉄釉陶器の鉢である。胎土は淡赤褐色を呈し、砂粒等は含まない。外面は露胎である。高台径8.3cm。522は黒釉碗である。淡赤褐色の素地に、緑黒色の不透明釉をかける。体外面下半は露胎とする。高台径3.6cm。523は瀬戸黄釉菊花皿である。口径12.1cm。524～526は陶器のスリ鉢である。524、525は口縁が内側に返り、口縁内外にのみ鉄釉を施す。唐津系と思われる。526は備前焼である。

口縁は断面三角形を呈する。備前焼攢年のV期にあたる。

出土遺物から17C前半代～中頃の遺構と考えられる。

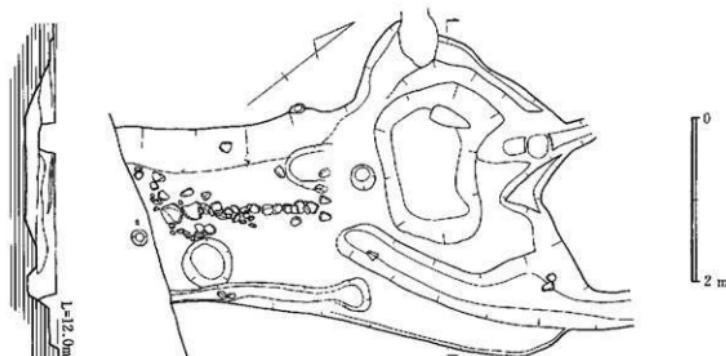


Fig.106 SK-68実測図 (1/60)

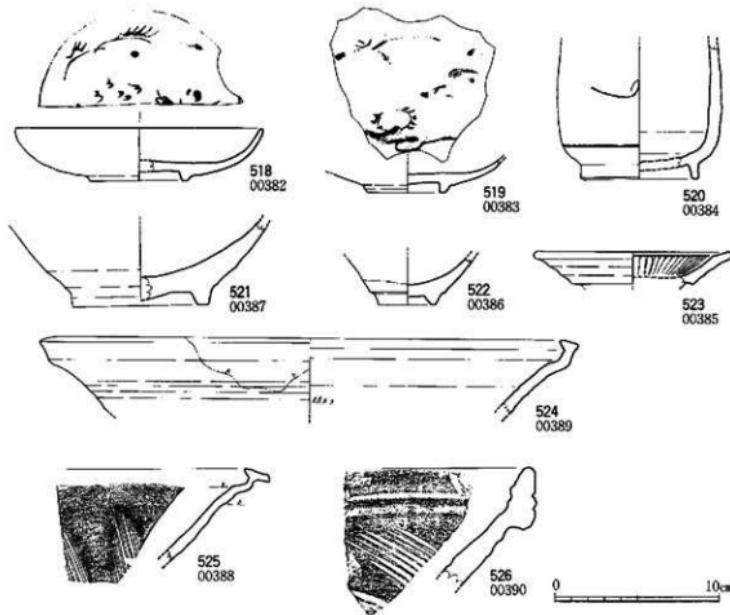


Fig.107 SK-68出土遺物実測図 (1/3)

SK-69 Fig.108 PL.15

SK-66の東隣に位置する土坑である。平面プランは南北に長い隅丸長方形を呈し、南北長1.9m、東西幅1.2mを測る。深さは0.2mで、断面逆台形を呈し、底面は平坦である。

底部糸切りの土師器坏1点が出土したが、小片のため図示していない。

SK-71 Fig.108 PL.15

SK-66の南に位置し、これに切られている。東西にやや長い不整な梢円形プランをなし、東西長2.6mで、南北幅は2.0m以上である。深さは0.1mで、東側を段状に掘り下げている。底面は平坦で、小さく浅いビット3つがある。

SK-71出土遺物 Fig.109

29点の土器片が出土した。1点を図化したが、他に上師質土器、瓦質土器、国産染付・白磁の小片がある。

527は土師器小皿で、底部は糸切り離してある。口径7.8cm、器高1.3cm、底径5.2cmを測る。

SK-73 Fig.108 PL.15

調査区中央の南北調査区境に位置し、溝状構造SD-43を切る。不整な円形プランを呈し、径1.3~1.5m、深さ0.6mである。断面逆台形をなし、底面は中央が皿状に窪む。

SK-73出土遺物 Fig.109

52点の土器片が出土した。土師質土器鍋、瓦質土器鉢類、備前焼スリ鉢等を少量含む。

528は瓦質土器の深鉢である。口縁部は直立気味に立ち上がり、胴部は肩が張る器形をなす。内面から口縁外面にかけてハケ目調整を行い、胴部外面はナデ調整する。口径24.8cm。

SK-76 Fig.108 PL.16

調査区南西隅に位置し、掘立柱建物SB-143の柱穴を切り、SB-148の柱穴に切られる。南北に長い不整梢円形プランを呈し、長径2.1m、短径1.5m、深さ0.15mである。底面は平坦で、図中のビットはSB-143の柱穴である。

土師質上器鉢類の小片6点が出土したが、図化していない。

SK-77 Fig.108

調査区南端から北に6m、西端から東に12mに位置し、掘立柱建物SB-156の柱穴を切る。東西に長い不整梢円形プランを呈し、長径2.0m、短径1.1m、深さ0.2mである。底面は平坦で、南西隅にビットひとつがある。

土器片5点が出土した。底部糸切りの土師器坏等があるが、図化していない。

SK-78 Fig.108

SK-77の南西に1m離れて位置し、掘立柱建物SB-159の柱穴に切られる。南北に長い不整梢円形プランを呈し、長径2.5m、短径1.4m、深さ0.2mを残す。底面は西に深く、小ビット2つがある。

土器片8点が出土した。瓦質土器鉢類、国産陶器、明代染付等があるが、いずれも細片のため図化できない。

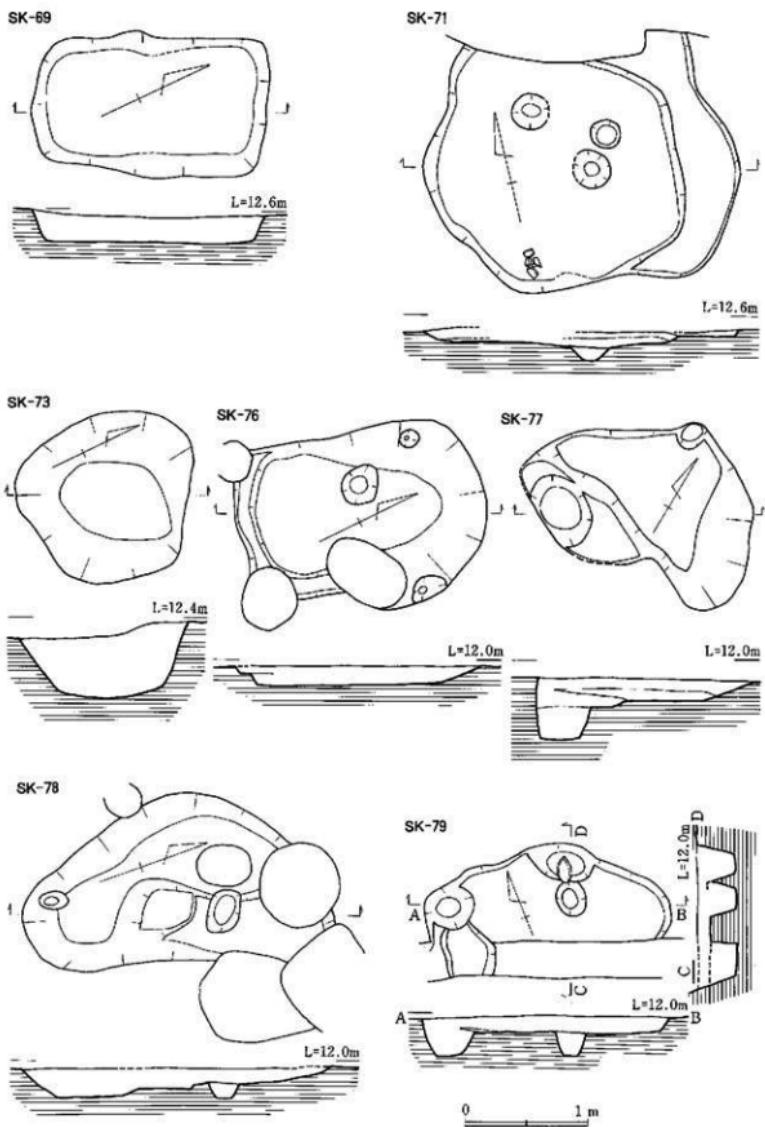


Fig.108 SK-69·71·73·76·77·78·79実測図 (1/40)



Fig.109 SK-71・73出土遺物実測図 (1/3)

SK-79 Fig.108

SK-78の南に1.5m離れた調査区壁際に検出した。南側は調査区外に伸展する。東西に長い梢円形プランを呈するものと考えられ、東西長は2.0mを測る。深さは0.15mを残し、底面は平坦で、小ピット3つがある。

土器片2点が出土した。瓦質土器鉢類等があるが、細片のため図化していない。

SK-80 Fig.110 PL.16

調査区南東の壁際に検出した。古代の溝SD-50を切る。溝状に東西に細長い土坑で、東西長6.4m、南北幅1.3mを測る。深さは最大0.2mを残し、土坑中央に向かって段状に下がる。

覆土からは土器片や礫が多数出土しており、これらを廃棄するための土坑と考えられる。

SK-80出土遺物 Fig.111 PL.27

105点の遺物が出土した。図示した遺物の他に、土師質土器鉢、瓦質土器スリ鉢・火鉢等がある。

529は肥前系染付碗である。全面に施釉したのち、高台剥付けを釉剥ぎする。口径11.7cm、器高6.4cm、高台径5.2cmである。530は唐津灰釉陶器の溝縁皿である。素地は淡灰褐色の陶胎で、白湯釉をかける。口径12.7cm。531は施釉陶器の皿で、低い高台が付く。二次的な加熱を受けており、釉調は不明である。体外面下半は露胎とする。高台径6.6cm。532は黄釉鉢で、口縁は逆L字形に短く屈曲する。体外面上半から内面にかけて釉を施し、口縁端部を釉剥ぎする。内面には一部露胎の部分が見られる。口径19.0cm。533、534は無釉陶器スリ鉢の底部片である。底部は糸切りで、内面には密にスリ目を入れている。

535は瓦質土器の鍋である。口縁端部の相対する2ヶ所に外耳を付ける。内外面にハケ目調整を行う。口径34.4cm。536は十師質土器の鍋である。比較的薄手で、口縁は内湾して開く。口径21.0cm。

出土陶磁器から見て、造構の時期は17世紀初頭～前半に比定できよう。

SK-81 Fig.110

調査区南端から北に10m、西端から東に11mに検出した。掘立柱建物SB-156の柱穴に切られる。東西に溝状に細長い梢円形プランを呈し、東西長3.0m、南北幅0.4mを測る。深さは最大0.3mを残し、横断面はU字形をなす。底面には緩い起伏がある。

SK-81出土遺物 Fig.111

5点の土器片が出土した。全て瓦質土器の破片である。

537は瓦質土器のスリ鉢である。口縁端部を面取りし、浅い沈線を入れる。内面にはハケ目調整を行った後、まばらなスリ目を入れる。

SK-82 Fig.110 PL.16

調査区南端から北に2m、西端から東に16mに位置する。掘立柱建物SB-162・163の柱穴に切られる。南北に長い不整な楕円形プランを呈し、南北長4.1m、東西幅2.4mを測る。深さは最大0.2mを残し、底面は浅皿状を呈する。土坑の南西隅から蝶がまとまって出土したが、焼けたもの等は見られなかった。

9点の土器片が出土した。土師器坏、土師質土器鍋等の小片があるが、図化していない。

SK-83 Fig.112

SK-82の東隣に検出した。掘立柱建物SB-162・163と切り合うが、これらの先後関係は明確にできなかった。平面プランは不整な隅丸三角形を呈しており、南東端は溝に切られている。長径5.2m以上、短径2.5mを測る。深さは最大0.5mを残し、土坑の北西に向かって深い。

SK-83出土物

Fig.113 PL.27

70点の遺物が出土した。図示した遺物の他に、土師質土器鍋、瓦質土器スリ鉢・火鉢等が少量出土している。

538-540は土師器坏で、全て底部は糸切りである。538は口径10.8cm、器高2.1cm、底径7.4cm。539は口径10.6cm、器高2.0cm、底径6.6cm。540は口径10.5cm、器高3.0cm、

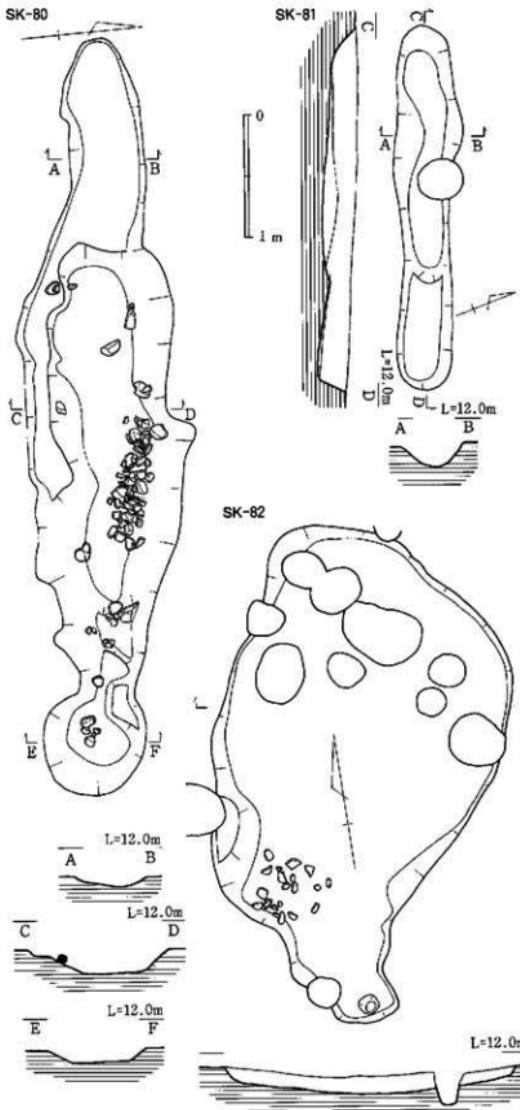


Fig.110 SK-80-81-82実測図 (1/40)

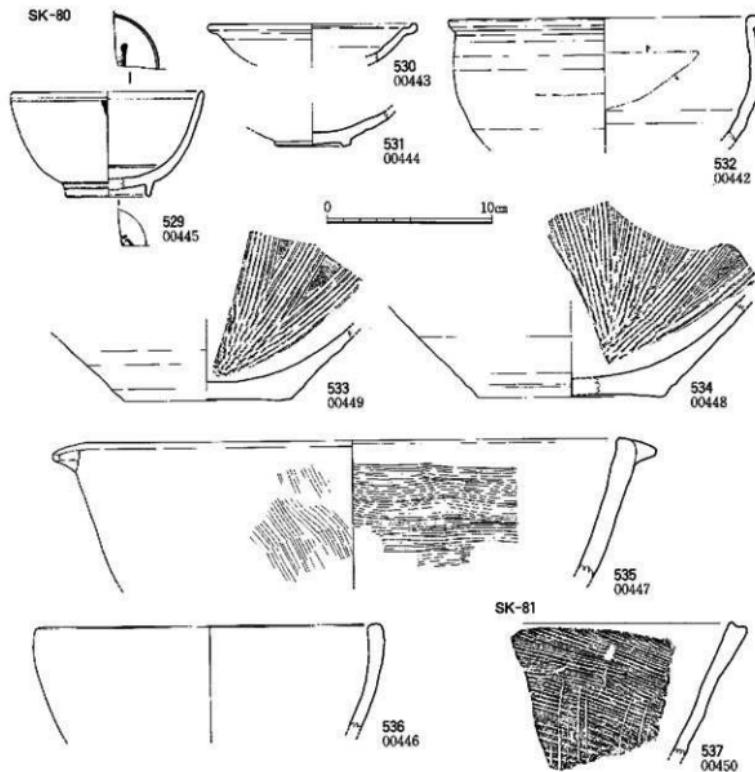


Fig.111 SK-80・81出土遺物実測図 (1/3)

底径5.8cm。540は底径が小さく器高が高いタイプである。

541は明代染付の端反り皿で、内外に花文を描く。豊付けは釉剥ぎしている。口径9.4cm、器高2.5cm、底径5.4cmである。

542は青銅製の板状の装飾金具である。花菱形を呈し、中央に鉄留めのための孔をあける。片面に細線刻による文様を刻む。4.0×5.6cmで、厚さ0.1cmである。

543はガラス小玉である。緑色を呈し、径3.5mm。

出土した明代の染付皿は16世紀前半～中頃に多く見られるものであるが、土師質土器・瓦質土器等を含むことから、遺構の時期は少し下るものと思われる。

SK-85 Fig.112 Pl.16

SK-82の東側に3mの間隔を置いた調査区壁際に検出した。東側は調査区外に伸展する。掘立柱建

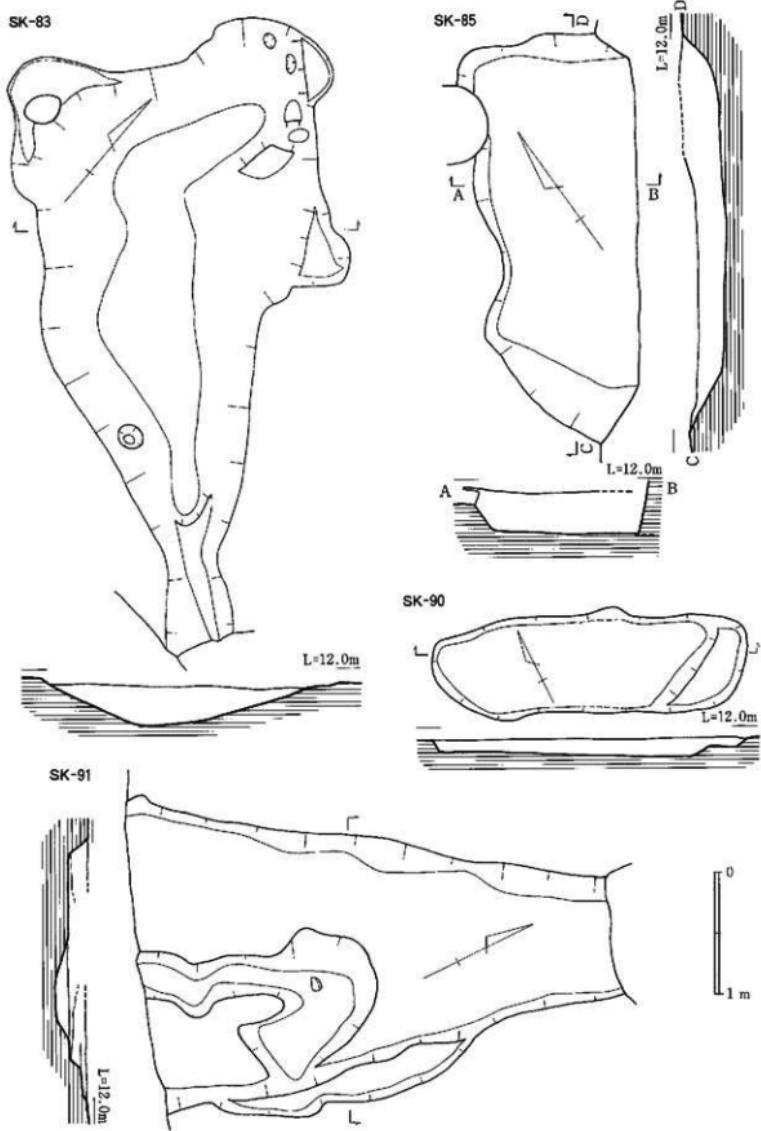


Fig.112 SK-83·85·90·91実測図 (1/40)

物SB-160の柱穴を切っている。平面プランの全容は不明だが、調査区内では不整な隅丸方形を呈しており、南北長は3.3mで、東西長は現状で1.5mを測る。深さは最大0.3mを残し、底面は浅皿状に中央に向かって深い。

SK-85出土遺物 Fig.113 PL.27

近世国産陶磁器、土師質土器、瓦質土器の破片が計27点出土した。

544は唐津雜釉陶器の皿で、内底に圓沈線を入れる。素地は淡黄白色を呈し陶質で、白濁釉を全面に施しており、豊付けの釉は掻き取っている。内底と高台豊付けに各々4ヶ所の砂目跡を残す。口径15.4cm、器高2.6cm、底径6.0cm。545は褐釉陶器の小壺で、口縁部を欠く。体外面下半は露胎である。底径5.5cm。546は唐津系鉄釉陶器のスリ鉢である。口縁端部を内側に折り返し、内面に14本1組のスリ目を入れる。口縁部内外にのみ施釉している。内器面が使用によりかなり磨滅している。

上記の出土遺物は16世紀末～17世紀前半に位置付けられよう。

SK-90 Fig.112 PL.16

調査区南端から北に3m、西端から東に36mに位置する。東西に細長い楕円形プランを呈し、東西長2.6m、南北幅0.8mを測る。深さは最大0.15mで、東壁が段状に落ちるが、底面は平坦である。

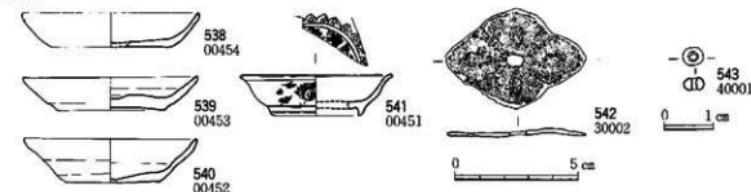
瓦質土器の小片などが5点出土したが、図化できるものはない。

SK-91 Fig.112

SK-90の西側に隣接し、南側は調査区外に伸展している。平面プランの全容は不明で、南側へ伸びる溝の一部である可能性もある。現状で南北長3.9m、東西長2.6mを測る。深さは最大0.2mで、底面は平坦で、南東側には蛇行する溝状の窪みがある。

22点の遺物が出土した。近世国産陶磁器、瓦質土器などの小片があるが図化できない。

SK-83



SK-85

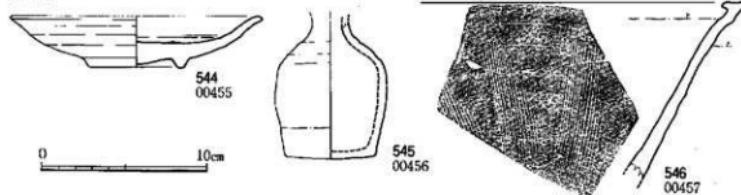


Fig.113 SK-83・85出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

SK-95 Fig.114 PL.16

井戸SE-70の南西側に約1.5m離れて位置する。掘立柱建物SB-170の柱穴を切る。平面プランは不整な隅丸三角形状を呈し、長径1.7m、短径1.5mを測る。深さは最大0.25mで、断面が浅皿形を呈する。南東壁に検出したピットは掘立柱建物SB-170の妻柱である。

瓦質土器の小片が3点出土したが、図化できない。

SK-96 Fig.114 PL.16

井戸SE-70の南東に約2m離れた位置に検出した。平面プランは南北にやや長い不整隅丸方形を呈し、長径3.1m、短径2.8mを測る。深さ0.1mで平坦面をつくり、底面の南側に不整円形プランの浅い坑を掘る。この坑は長径2.1m、短径1.6m、深さ0.15mを測る。

SK-96出土遺物 Fig.115

53点の遺物が出土した。近世国産陶磁器、上師質土器鍋、瓦質土器スリ鉢の他、銅製品があるが小片のため詳細は不明である。

547は肥前系染付の碗で、外面に施文する。口径10.0cm。548、549は土師質土器の鍋で、ともに口縁部の小片である。548は内外面をハケ目調整する。549は口縁端部に外耳を付け、その直下に断面三角形の突帯を貼付しており、全体に煤が付着している。17世紀前半代にあてられよう。

SK-97 Fig.114

調査区南端から北に30m、西端から東に28mに位置する。南北に長い不整な隅丸方形プランを呈し、南北長2.7m、東西長2.1mを測る。深さ0.2mで一度平坦面をつくり、中央に不整円形プランのピット2つを掘る。ピットは径0.7~1.0mで、深さは0.3~0.35mである。

底部糸切りの土師器小片などが5点出土したが、図化していない。

SK-98 Fig.114

SK-97の南に約5mの間をおいて位置する。南北に細長い楕円形プランで、長径3.1m、短径0.6mを測る。深さは0.2mで、南北両端は段状に掘り進めている。

11点の遺物が出土した。瓦質土器、唐津陶器などの小片があるが、図化できない。

SK-102 Fig. 114

調査区南端から北に18m、西端から東に52mに位置する。平面プランは東西に長い隅丸長方形を呈し、長径1.7m、短径1.0m、深さ0.1mを測る。底面は平坦で、円形プランのピット3つがある。ピットは径0.2~0.6mで、深さ0.1m前後と浅い。ピット内から礫が出土した。

SK-102出土遺物 Fig.115 PL.27

コンテナ1/2箱の遺物が出土した。土師器、近世国産陶磁器、瓦質土器、土師質土器などがある。

550は上師器小皿で、底部は糸切りである。口径8.2cm、器高1.4cm、底径4.2cm。551は雜釉陶器の鉢である。体部下半を回転ヘラ削りする。素地は暗紅灰色を呈する陶胎で、淡青灰色の不透明釉を体外面下半までかける。内面見込みには目跡が残る。高台径6.6cm。552、553は瓦質土器のスリ鉢である。552は内面にハケ目調整の後、スリ目を刻む。553は内底にハケ目調整の後、円弧状のスリ目を入れ、外底にもハケ目調整を行っている。554は瓦質土器の深鉢である。口縁部は短く直立し、端部が肥厚する。胴部は肩が張り、頸部の2ヶ所に刺突文を施す。内面のみにハケ目調整を行っている。口

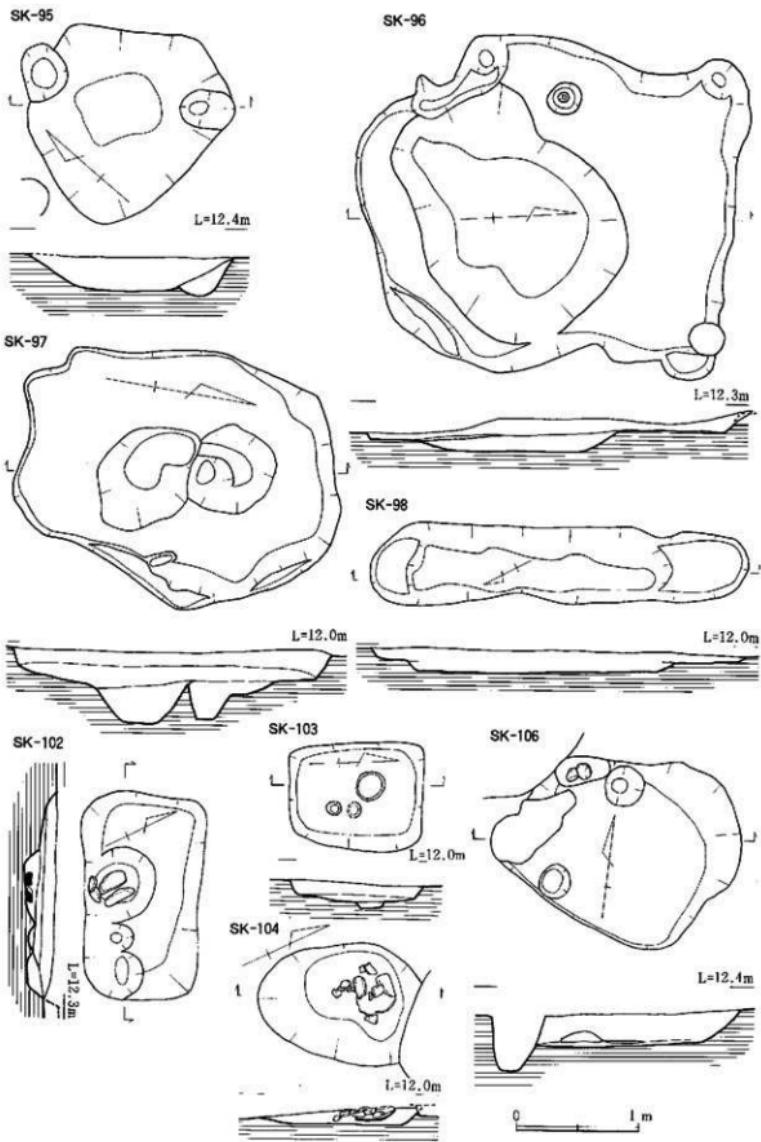


Fig.114 SK-95·96·97·98·102·103·104·106実測図 (1/40)

径37.6cm。555は土師質土器の鍋である。内外面をハケ日調整するが、外面の調整は雑で指頭痕が残る。小片のため法量は不明である。

SK-103 Fig.114

SK-80の北に約1mの間隔をおいて位置する。南北にやや長い隅丸方形プランを呈し、南北長1.1m、東西幅0.9m、深さ0.15mを測る。断面が逆台形を呈し、底面には浅い小ピット3つがある。

SK-103出土遺物 Fig.115

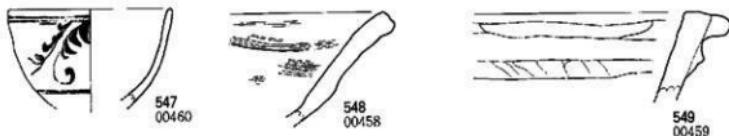
10点の遺物が出土した。図示した遺物のほか、瓦質土器の小片がある。

556は土師器小皿で、底部は糸切り離しである。口径10.1cm、器高1.7cm、底径8.0cmを測る。

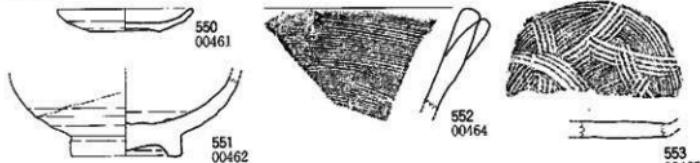
SK-104 Fig.114

SK-103の東約4mに位置するが、削平されて遺構の残りが悪い。平面プランはやや不整な梢円形を呈し、長径1.4m、短径1.0m、深さ0.1mを測る。底面に接して瓦質土器の脇部片が置かれ、これに疊が集積された状態で出土した。

SK-96



SK-102



SK-103

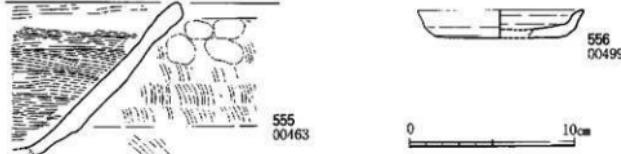


Fig.115 SK-96-102-103出土遺物実測図 (1/3)

9点の遺物が出土した。全て瓦質土器で、小片であるため図化していない。

SK-106 Fig.114 PL.16

SK-96の南東に接し、これに一部を切られている。掘立柱建物SB-171の柱穴を切る。平面プランは東西に長い不整精円形を呈し、長径2.0m、短径1.5m、深さ0.25mである。底面の北よりに検出したピットは、掘立柱建物SB-171の柱穴である。

5点の遺物が出土した。瓦質土器の破片などがあるが、図示していない。

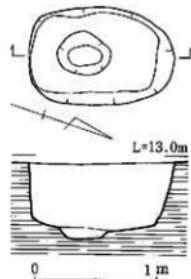


Fig.116 SK-05
実測図 (1/40)

7. 時期不明の遺構

SK-05 Fig.116

調査区北端から南へ36m、西端から東へ5mに検出した土坑である。南北に長い隅丸長方形プランを呈し、長径1.2m、短径0.8mを測る。ほぼ直に0.55m掘り下げて平坦面をつくり、底面の中央に浅いピットひとつを設けている。遺構の覆土は他とは異なり、深黒色の粘質土で、固く締まっていた。

覆土からは何らの遺物も得ることができず、確証はないが、縄文時代に廻り得る遺構の可能性がある。

8. その他の遺構と遺物

ここには近世の遺構から出土した縄文時代～弥生時代の遺物と、搅乱坑から出土した古代～近世の遺物を取り上げた。便宜上、各遺構・搅乱坑ごとに説明を加える。

SD-02-03

調査区の北西に検出した溝状遺構で、弥生時代前期末の溝状遺構SD-01および古墳時代初頭の溝状遺構SD-04を切っている。特にSD-02は大部分でSD-01と重複しており、本来SD-01に含まれるべき遺物が多量にSD-02に混入して出土している。

SD-02・03は2条が並行して掘られており、道路の側溝であると推定される。幅0.8m前後、深さ0.2m前後の溝で、両者間の1.5m前後の幅が道路であろう。遺構の覆土はシルトで、他の近世の遺構とは明らかに異なる。

縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺物の他、近世の遺物が少量出土しているが、詳細な時期は明確にし難い。覆土の状況と遺構の位置から見て、他の近世遺構よりも新しい時期のものであると考えられる。

SD-02出土遺物 Fig.117,118 PL.29

SD-02からはコンテナ2箱の遺物が出土した。大半が縄文時代後期～弥生時代の遺物で、他に近世の遺物が少量出土している。

557～561は縄文土器である。557～559は精製浅鉢形土器で、口縁が「く」字形に屈曲して外反する。

口縁外面に1～2条の沈線を施し、557と558は口唇部内面にも沈線を入れる。557は内外面研磨で、黒褐色を呈し、胎土に雲母粒・細砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。558は器面が剥落して調整が不明で、外面淡褐色、内面黒色を呈し、胎土に細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成は不良である。焼成後の穿孔があり、補修孔か。559は器面の残りが悪いが、内外面ともナデ調整か。外面淡黄褐色、内面暗赤褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成は良好である。以上3点は縄文時代後期後半の三方田式土器である。560は浅鉢形土器で、波状口縁をなす。口唇部内面に沈線を入れる。内外面とも丁寧にナデ調整し、淡褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成は不良である。縄文時代晚期の土器である。561は浅鉢形土器で、口縁が短く立ち、外面に2条の、内面に1条の沈線を入れる。器面が剥落して調整は不明である。外面橙褐色、内面灰黒色を呈し、胎土には砂粒・雲母粒を少量含むが比較的に精良で、焼成は不良である。縄文時代晚期の土器である。

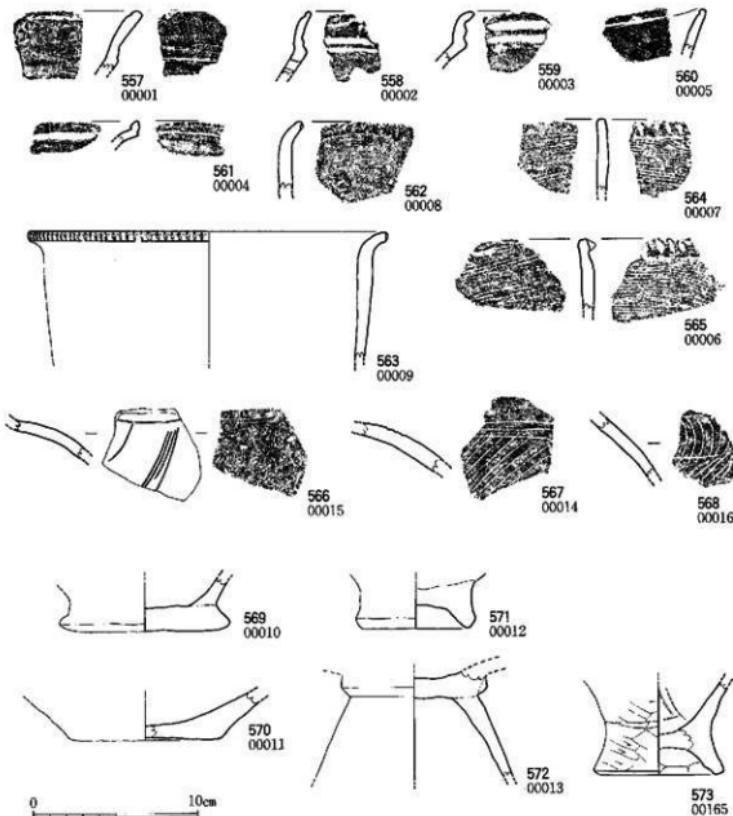


Fig.117 SD-02出土遺物実測図 I (1/3)

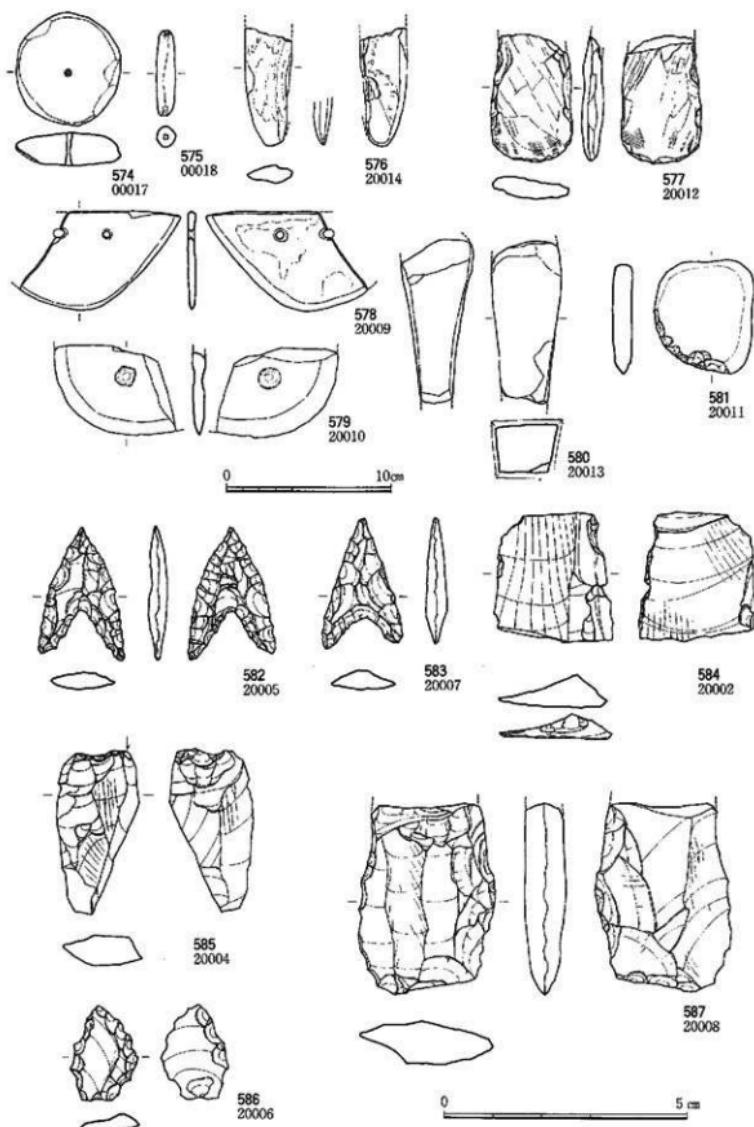


Fig.118 SD-02出土遺物実測図Ⅱ (1/3・1/1)

564・565は壺形土器の口縁部片で、口縁端部に接して断面三角形の突帯を貼付し、棒状工具で刻み目を押圧する。内外面とも貝殻条痕により調整する。ともに暗褐色～黒褐色を呈し、胎土に粗砂粒を多量に含み、焼成は514が不良、515は良好である。

562、563は弥生時代前期の壺形土器で、口縁は如意形に外反し、口唇部にヘラによる刻目を施す。刻目は、562が口唇部下端に、563が口唇部全体に加えられる。562は調整が不明で、外面暗褐色、内面橙褐色を呈し、胎土に雲母粒・砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。563は調整不明で、明橙褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成は良好で、口径22.0cmに復元される。566～568は同じく前期の壺形土器である。いずれも肩部に沈線文を施すが、小片のため文様は不明である。566は内面ナデ調整、外面調整不明で、外面淡黄白色、内面淡橙色を呈し、胎土に雲母粒・細砂粒・カクセン石を含み、焼成は良好である。567は内外面ともナデ調整で、暗橙色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成は良好である。568は内外面ともナデ調整で、淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成は良好である。

569は壺形土器の底部片で、端部が外へ張り出し、断面台形状を呈する。内外面ともナデ調整で、外面淡褐色、内面褐～黒色を呈し、胎土に粗砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成は不良である。底径10.4cm。570は壺形土器の底部で、平底をなす。内外面ともナデ調整で、淡橙褐色を呈し、胎土に粗砂粒・雲母粒を含み、焼成はやや不良である。底径9.1cm。571は壺形土器の底部で、外底を窪ませて脚状につくる。ナデ調整で、上面は接合面から剝がれている。赤褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成はやや不良である。底径6.6cm。572は高杯の脚であろう。上端部に断面三角形突帯が巡る。器面が剥落しており、調整は不明である。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。573は壺形土器の底部で、外底を窪ませて脚状につくる。板状工具によるナデ調整を施し、暗赤褐色を呈し、粗砂粒を多量に含み、焼成は不良である。底径7.9cm。

574、575は土製品である。574は鍤鉢車で、丸い円盤形につくり、中央に小さく穿孔する。直径6.4～7.8cmで、厚さ2.1cmである。575は棒状の土鉢で、近世以降のものである。重さ8gを量る。

576～581は磨製石器である。576、577は磨製石斧で、小型の横斧である。577は刃部が潰れている。ともに剥離しやすい片岩系の石材を使用している。578、579は石庖丁で、579は未製品である。578は三角形状、579は半円形状の特異な形にそれぞれつくる。穿孔と刃部の研ぎ出しが両面から行っている。ともに節理面のある頁岩質砂岩製である。580は砥石である。小型柱状を呈し、上下両端を欠く。4つの側面全てに研磨痕がある。砂岩製。

581～587は打製石器である。581はスクレイバーである。偏平な河原石の側辺の一部を加工して刃部をつくり出している。玄武岩製。582、583は打製石鎌である。582は良質の黒曜石製、583は安山岩製である。584は使用痕のある剝片、585は影器、586は二次加工のある剝片で、ともに良質の黒曜石製。587サイドはスクレイバーで、刃部が著しく潰れている。安山岩製。

SD-03出土遺物 Fig.119

588・589は縄文時代後晩期の精製浅鉢形土器である。588は器形が559に近似するが、沈線がやや幅狭である。器面の残りが悪いが、ナデ調整か。589は口縁端部内面に沈線があり、調整は不明である。ともに淡橙色を呈し、胎土に細砂粒を含み、焼成がやや不良である。588は後期後半の三方出式土器、589は晩期前半の土器である。

590は壺形土器の口縁部片で、口唇部に接して断面三角形の突帯を付け、棒状工具で刻目を押圧する。刻目は突帯の幅を超えて、粗く施される。外面淡橙褐色、内面黒色を呈し、胎土に粗砂粒を多量

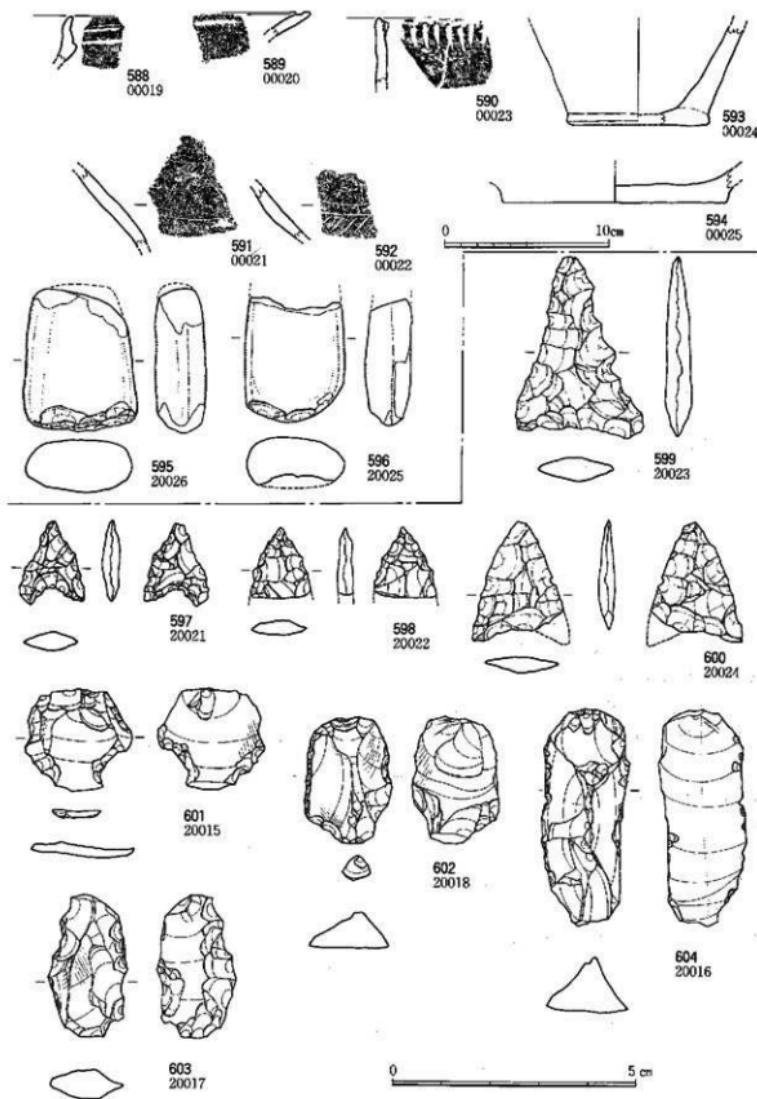


Fig.119 SD-03出土遺物実測図 (1/3・1/1)

に含み、焼成はやや不良である。

591～594は弥生土器である。591、592は弥生時代前期の壺形土器である。ともに肩部の破片で、沈線により施される。591は鋸齒文を描き、外面を丹塗りする。内面はナデ調整で、暗褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好。592は羽状文を描き、外面ナデ調整で、内面は調整不明。砂粒・雲母粒を少量含み、焼成は不良である。593、594は底部片である。593は内外面ともナデ調整で、外面淡褐色、内面暗褐色を呈し、胎土に粗砂粒を多量に含み、焼成は不良である。底径8.7cm。594は器面が剥落して調整が不明で、黄白色を呈し、粗砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。底径13.7cm。

595、596は磨製石斧である。595は刃部を欠いており、欠損後に叩き石として使用したものと見られる。玄武岩製。596は刃部が磨滅しており、皮なめし具として再利用したものと見られる。蛇紋岩に似た石材である。

597～604は打製石器である。597～600は石鎌で、いずれもつくりが粗い。599は片側を鋸齒状につくる。598は基部を、600は片脚を欠く。597、598は黒曜石製、他の2点は安山岩製である。601、602は黒曜石製のつまみ形石器である。折断面は601は抉りが浅く幅広で、602は棒状に深く抉りを入れて折っている。溝状造構SD-50などから剥片鎌が出土しており、これに伴うものである。603は二次加工のある剥片で、一側刃から下端にかけて使用による刃潰れがある。黒曜石製。604は使用痕のある剥片で、スパール状の厚みのある剥片を用い、両側刃に軽微な刃こぼれがある。黒曜石製。

SK-53出土遺物 Fig.120 PL.27

SK-53は、古墳時代後期の溝SD-50の中央部でこれを破壊していた搅乱坑である。中世末の土器を中心に比較的良好な資料が出土しているため、抽出して図化掲載した。

605は土師器小皿で、底部糸切りである。口径7.3cm、器高1.9cm、底径4.2cm。

606は李朝雜釉陶器の皿である。素地は灰色を呈し、胎土には白色と黒色の砂粒を含んで粗く、釉は青灰色の透明釉で、全面に施す。内底と壺付けに各々5ヶ所の砂目跡が残る。

607は軒丸瓦の瓦当である。中房には1対4対8の蓮子、内区には複弁八弁蓮花文を配し、外区には24個の珠文を配置する。連弁文は肉厚で、立体感がある。瓦当径16.7cm。鴻臚館式軒丸瓦である。

608、609は瓦質土器の釜である。扁球形の体部に鋸が付く。608は内外面ともハケ日調整する。609は肩部の相対する2ヶ所に孔のある外耳を付け、その直上を2ヶ所穿孔する。外面下半にハケ日調整を施す。

610は土師質土器の鍋である。口縁直下の相対する2ヶ所に外耳を付け、その直上に釣手を結わえる孔を2ヶ所あける。内面はハケ日調整を行う。

611は瓦質土器のスリ鉢である。胎土は砂粒を含まず精良で、他の瓦質土器スリ鉢とは一線を画するものである。外面にハケ日調整を行い、上半部には波状にハケ日を入れている。外面の一部に煤が付着する。口径26.0cm、器高12.0cm、底径12.8cm。

SK-107出土遺物 Fig.120 PL.27

SK-107は調査区南東部に検出した不整形の窪みである。遺構ではなく、水田造成等によって生じた整地層の一部であると見られる。

612は雜釉陶器の皿で、唐津と思われる。暗紅灰色の素地に、白濁釉がかかる。体外面下半は露胎で、内底には4ヶ所に砂目跡が残る。613は瓦質土器のスリ鉢である。焼成が甘く、かなり軟質であ

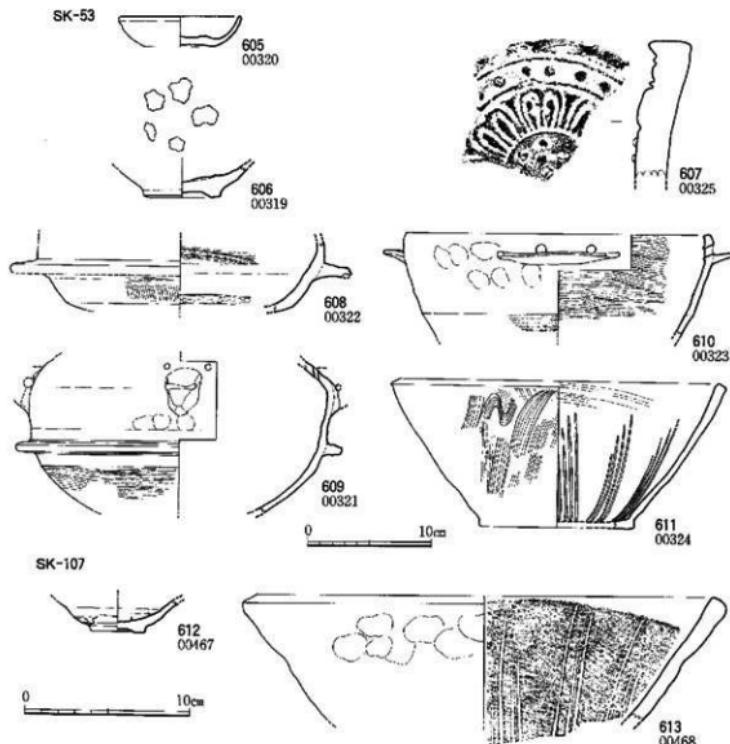


Fig. 120 その他の出土遺物実測図 (608~611は1/4、他は1/3)

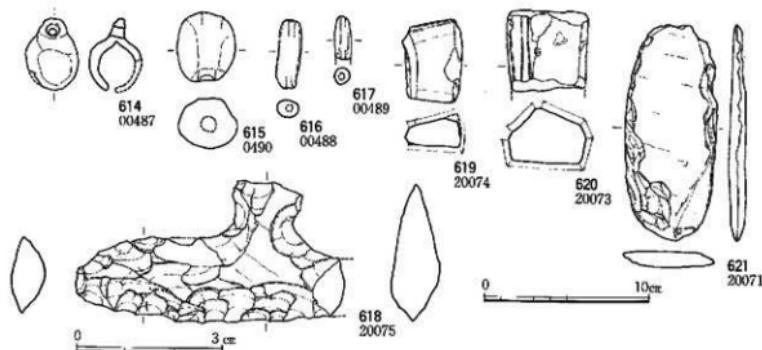


Fig. 121 その他の出土遺物実測図 (1/3・1/1)

る。口径29.5cm。

その他の遺物 Fig.121

掘立柱建物にまともないピットや、その他の搅乱坑から出土した遺物である。

614は土鉢である。Pit.-1288より出土した。615～617は土錘である。615はかなり大形で重さ40gを量る。Pit.-1654より出土。616はPit.-1305より、617はPit.-1643より各々出土した。

618は安山岩製の石匙である。一部を欠く。試掘トレンチ出土。619は小型柱状の砥石である。両平坦面を使用しており、砂岩製。試掘トレンチ出土。620はいびつな6角柱状の砥石で、下半を欠く。6側面全てに研磨痕がある。砂岩製。621は偏平打製石器である。刃部に使用によると見られる磨滅が認められる。結晶片岩製である。

IV. おわりに

野多目A遺跡群第4次調査では弥生時代前期末から近世前半期にまで及ぶ遺構を検出し、縄文時代から近世に及ぶ遺物が出土した。既に述べたように、調査区内は北西の1/4が段丘面、他は沖積微高地で、前者に弥生時代末～古墳時代初頭の、後者に中世～近世初頭の遺構が主に展開しており、時期によって住居適地の選択が行われたことを示している。以下、時代ごとにまとめてみたい。

1. 縄文時代

縄文時代の遺構は検出できなかったが、古河川の流域内的一部分に形成されたと見られる薄い包含層を検出した。また、遺物が全く出土せず時期不明の遺構とした土坑SK-05がこの時期まで遡る可能性を残している。この時期の遺物は、主に堅穴住居跡等の後世の遺構埋没土に流入した状態で出土した。縄文時代中・後期の阿高式系土器、同後期の三万田式土器、同晚期の土器などとともに、この時期に作られた剥片鐵を中心とする剝片石器群、偏平打製石器、磨製石器などが出土しており、小規模な集落があったことを示すには充分な量が得られている。当該期の遺構は南側の野多目C遺跡群（野多目括縫遺跡）を中心とした範囲に広がっており、この一部が当地点にまで及ぶことが明らかとなった。

2. 実蒂文土器期の遺構は、第2次調査で水出跡の存在を示す水路・井堰・水口等が検出されており、当地点付近まで水田の範囲が及んでいたものと見られる。

3. 弥生時代

弥生時代前期末～中期初頭の溝1条を検出した。該期の遺構としては野多目C遺跡群で堅穴住居跡・土坑等からなる集落の存在が確認されており、遺跡の範囲が当地点にまで広がっていることが判明した。遺物は主にこの溝を切る近世の溝から出土したが、肩部に文様を有する板付II式期の壺形土器、石庖丁などの石器、土製劔錐車等、一定量の資料がある。

4. 弥生時代末～古墳時代初頭

当該期の遺構はこれまで野多目遺跡周辺では調査例がなかった。検出した遺構は、堅穴住居跡8軒(SC-13が2軒の切り合いでいる)、土坑4基（うち2基は住居跡と同時に掘削）、溝状遺構3条、掘立柱建物6棟である。このうち、出土土器から見て最も古い遺構は堅穴住居跡SC-13で、弥生時代後期後半の下大隈式新段階に位置付けることができる。早良平野に位置する西新町遺跡出土土器による編年を行った常松幹雄氏の案によれば、Fig.122のような前後関係を想定することができよう。土

器の形式差や遺構の切り合いから、同時期に存在した竪穴住居跡は2~3軒程度と見られるが、竪穴住居跡群は調査区の北側に更に伸展することが予想され、集落全体の軒数や、同時に存在した住居数はこれより大きい数値になることは間違いない。溝状遺構SD-10は竪穴住居跡を切り、遺物にも新しい様相が見える等、住居跡の廃絶後に作られたことが明らかである。このSD-10で区画された中には総柱の掘立柱建物SB-134が位置している。SB-134は位置関係、主軸方位、出土遺物等から見て、SD-10と同時期の遺構であると考えられる。これは、竪穴住居跡からなる一般集落が、強い規制のもとに造られた溝で囲まれた建物からなる特異な集落へと変遷したことと示唆されるものと考えられ、興味深い。

以上のような遺構から出土した遺物には、弥生土器、古式土器類などの土器の他、砥石などの石器や、鉄片を中心とする鉄器などがある。土器は弥生時代の伝統を引く在来系の土器の他、畿内の伝統的五様式系、庄内系、布留系、吉備系、山陰系など各地方の系統の土器が出土しており、これらの外來系土器は、SC-12以降の時期に見られるようになる。製塗土器はSC-08を中心に出土しており、時期的には古墳時代初頭に置かれる。ミニチュア土器はSD-10を中心に出土しており、SD-10およびSB-134が祭祀に関わる特別な区画内の建物であったと推定することもできよう。製鉄遺物はSC-13を中心に出土しており、時期的には弥生時代後期後半に位置づけられる。鉄鏃、鉄斧など少數の鉄製品があるが、大半は鍛造時に生み出される鉄片であり、鍛冶遺構の存在を示すものである。しかしながら、炉体やフイゴ羽口などが出土していない点など、具体的な製鉄風景の復元には更なる検討を必要とする。

以上のような遺構・遺物から、遺跡の性格としては、製鉄・製塩に密接な関わりを持つ、那珂川西岸の拠点的な集落のひとつであると位置づけできよう。

また、当調査地点の南南西約500mに位置する野多目C遺跡群第1次調査地点では、5世紀から6世紀を主体とする集落が確認されており、当集落の廃絶後、集落が南へ移動したことが想定される。

5. 古代

古代の遺構には、水路1条、テラス状遺構1ヶ所などがある。水路SD-50は主軸方位をN-32°-Eにとる人為的に開削された直線的な溝である。テラス状遺構は段丘面崖の斜面を平坦に造成したもので、この上に形成された包含層よりフイゴ羽口や鉄滓などの製鉄関連遺物が出土しており、建物は検出していないが鍛冶工房の存在が考えられる。包含層からは越州窯系青磁や玄界灘式製塩土器等が出土し、他、攪乱坑から鴻臚館式軒丸瓦も出土しており、9世紀前半代の遺構と見られる。

当調査地点周辺でこれまでに確認された古代の遺構を見ると、南の野多目D遺跡（野多目古窯敷遺跡）で、幅3.0~6.2m、深さ1.0~1.4mの水路が確認されている。時期は奈良~平安時代であるが、覆土が砂で大量の水流のあった痕跡を残し、出土遺物の主体を古墳時代の土器が占めるなど、SD-50と良く似た状況にある。溝は3条が確認されているが、うち2条は一連の溝と見られ、位置的に見てこれがSD-50に連結するものと考えられる。この一連の水路の主軸方位は磁北から32°東に傾き、周辺の現地形にはこれと同方向の水路・道路がいくつか見られ、これらは古代の区画（条里？）の痕跡と考えられる。この他、南南西に位置する野多目C遺跡群（野多目拈波遺跡）第1次調査では古代の掘立柱建物24棟や直線的に掘られ

土器相 遺構	下大隈式		西新I式		西新II式	
	新段階	古段階	新段階	古段階	新段階	
SC-07					↔	↔
SC-08(焼失)					↔	→
SC-09	↔					
SC-11	↔	↔	↔			
SC-12			↔			
SC-13(2軒)	↔					
SC-14			? - - - →			
SD-10				↔		

Fig.122 出土土器の様相

た溝などが検出されている。掘立柱建物群は調査区の北東に集中し、7群以上に分かれ、総柱建物を主体としており、7世紀から9世紀にかけての倉庫群と考えられている。また、野多目A遺跡群第1次調査（野多日前田遺跡）においても小規模の溝状遺構が確認され、多量の瓦などが出土している。これらのことから、当地点周辺では、古代に倉庫を主体とする集落と水田が開かれ、集落の一部には瓦葺建物も存在した可能性があり、これらは北方にその位置が想定されている三宅廃寺との関連性を抜きに考えることはできないであろう。

6. 中・近世

中・近世の遺構は、大きく3期に分けることができる。第1期はおおまかに12世紀後半～14世紀前半の年代観が考えられる段丘面上の遺構群で、掘立柱建物9棟（SB-121～123、125、127、128、131、132、135）、及び土坑4基（SK-19～22）である。但し、これらの遺構には遺物が全く出土していないもの、出土しているものの細片ばかりで時期が決めがたいものがあり、一部第2期以降に下るもののが含まれている可能性がある。第2期は16世紀後半～17世紀前半に位置づけられる遺構群で、掘立柱建物31棟、溝状遺構7条、井戸2基、土坑29基がある。第3期は17世紀後半以降に属すると考えられる井戸状遺構SE-32のみである。

上記のうち、当遺跡の主体をなす第2期について少し述べてみたい。当該期の遺構は主に調査区の南西側に集中するが、出土遺物から見て、16世紀後半から17世紀前半に集中しており、集落の開始から廃絶まで長く見ても100年間の存続期間しかなく、短期間のうちに営まれている。掘立柱建物には最大5回の切り合いが見られることから、単純に考えて20年を最短期間とする建物の建て替えが行われていた計算になる。近世の福岡地方の状況を記した地誌に『筑前国統風土記拾遺』があるが、これの「卷の12 那珂群 野田村目」の項には「民居一所に在。むかしハ村の寅（南南東）の方三町斗に在。正保元年に今所に移せり。今其所を古村といふ。」とあり、同『照天神社』の項には「村の坤（南西）小山の上に在。産神なり。所祭伊弉諾尊（イザナギ）伊弉冊尊（イザナミ）なり。むかしの社は古村居の址に小森あり。是なり。社内に田天神社、頭人神社、觀音堂等あり。村の南に犬神山あり。此田天神の神田ならんか。村の西に大堤あり。水面八町三反あり。」と記されている。これによつて、遅くとも近世中期には野田目村（=野多目村）の住民は一ヶ所に集まって住んでおり、昔は村の東北東の一町（300m強）先あたりに村があつたが、正保元年（1644年）に今所に移し、昔の場所を「古村」と呼んでいた状況が分かる。この近世中期の野田目村は、文中の照天神社や水面八町三反の大堤（約83,000m²の池は周辺には野多目池以外には相当するものがない）の位置などから見て、現在の野多目集落を指すものと見て間違いない。（Fig. 1, 2 参照）1930年の古地図にも、野多目集落の位置は野多目池の東側の低丘陵上に記されており、現在野多目B遺跡群として周知されている丘陵上の集落がこれにあたる。本調査地点はこの集落から東北東約300mに位置しており、まさにこの「古村」に相当する位置にある。17世紀半ばを下る遺構が皆無に近く、この時期をもって集落が廃絶していることも文献上の記載とよく一致している。また、大量のスリ鉢（木使用品を含む）を中心とする日用品の廃棄や井戸の廃棄行為が行われていることは、以上のような強制的な集落の移動がなされたことに起因する事象と考えることができる。

参考文献

- 常松幹雄「西新町遺跡4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第483集 1996 福岡市教育委員会
青柳雅信「筑前国統風土記拾遺」
吉留秀敏「第2回野多目セミナー発表要旨」プリント 1996 野多目公民館

PLATES
(図 版)



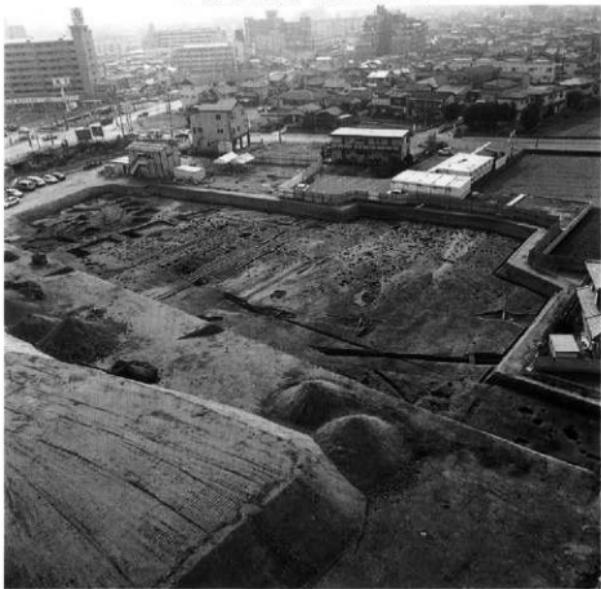
1. 調査区北半部（上空から）



2. 調査区南半部（上空から、上方が北）



1. 調査区北半部（南東上空から）



2. 調査区南半部（北西上空から）



1. 調査区北西部（上空から、上方が北）



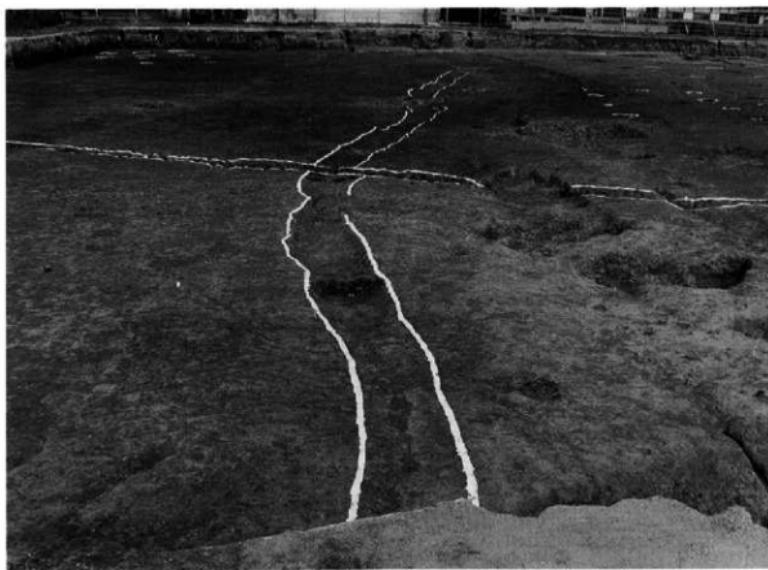
2. 調査区北東部（上空から、上方が北）



1. 調査区南西部（上空から、上方が北）



2. 調査区南東部（上空から、上方が北）



1. SD-01 (南西から)



2. 調査区北半中央部 (上空から、上方が北)



1. SB-124~133 (上空から、上方が北)



2. SC-07~09-11~14、SD-10(上空から、上方が北)



1. SC-07遺物出土状況（南から）



2. SC-07完掘状況（西から）



3. SC-08遺物出土状況（南西から）



4. SC-08完掘状況（南東から）



5. SC-09遺物出土状況（南西から）



6. SC-09完掘状況（南西から）



7. SC-11（東から）



8. SC-12遺物出土状況（南西から）

PL. 8



1. SC-11-12発掘状況（西から）



2. SC-11-12発掘状況（南から）



3. SC-13遺物出土状況（北西から）



4. SC-13発掘状況（北西から）



5. SC-13発掘状況（南東から）



6. SC-14（南西から）



7. SD-04（南東から）



8. SD-37①~③土層断面（南から）



1. SD-50北半部（南西から）



2. SD-50南半部（南西から）

PL. 10



1. SD-50土層断面A-B (南西から)



2. SD-50土層断面C-D (南西から)



3. SD-50土層断面E-F (南西から)



4. SD-50土層断面G-H (南西から)



5. SD-50土層断面I-J (南西から)



6. SD-30北半部・40 (南西から)



7. SD-30南西部 (西から)



8. SD-30土層断面 (西から)



1. SB-121~123 (上空から、上方が北)



2. 調査区南側の掘立柱建物群（上方が南）



1. 調査区南西の掘立柱建物群①(上方が南)



2. 調査区南西の掘立柱建物群②(上方が南)



1. SD-37土層断面（南から）



2. SD-40土層断面A-B（南西から）



3. SD-40土層断面C-D（南西から）



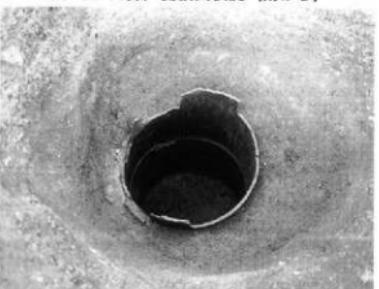
4. SE-70上層土層断面（南から）



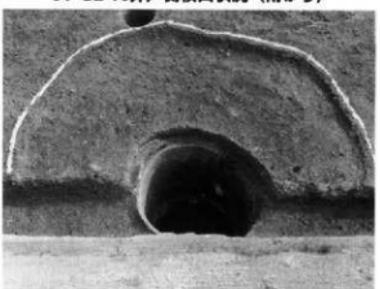
5. SE-70井戸側検出状況（南から）



6. SE-70井戸側検出状況（南から）



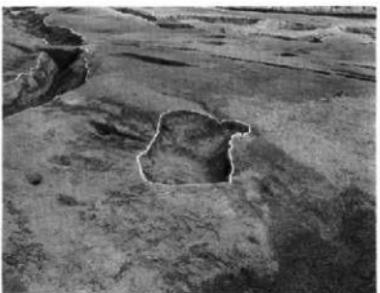
7. SE-70井戸側完掘状況（南から）



8. SE-75（北西から）



1. SK-20 (南東から)



2. SK-33 (西から)



3. SK-34 (南西から)



4. SK-34遺物出土状況 (南西から)



5. SK-63 (西から)



6. SK-63遺物出土状況 (西から)



7. SK-64 (北から)



8. SK-65 (南東から)



1. SK-65南半部遺物出土状況（南東から）



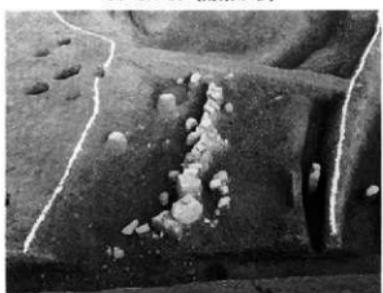
2. SK-65北半部遺物出土状況（南東から）



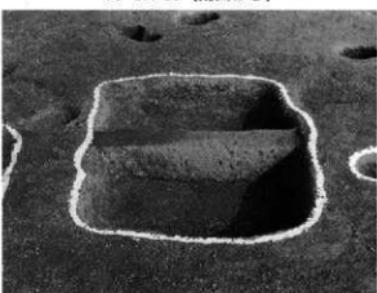
3. SK-66（南東から）



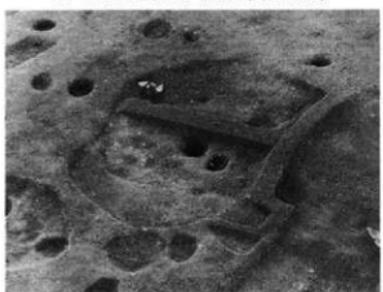
4. SK-68（南西から）



5. SK-68遺物出土状況（南西から）



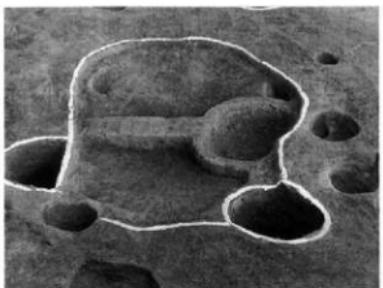
6. SK-69（南西から）



7. SK-71（東から）



8. SK-73（北西から）



1. SK-76 (南西から)



2. SK-80 (南から)



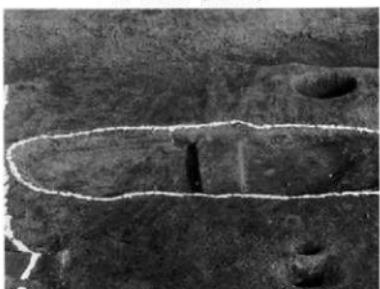
3. SK-80 (南西から)



4. SK-82 (南から)



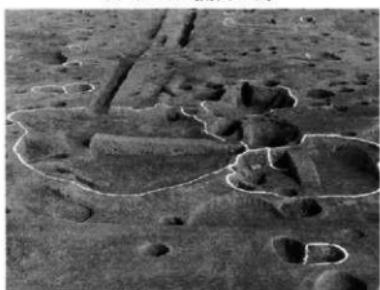
5. SK-85 (南西から)



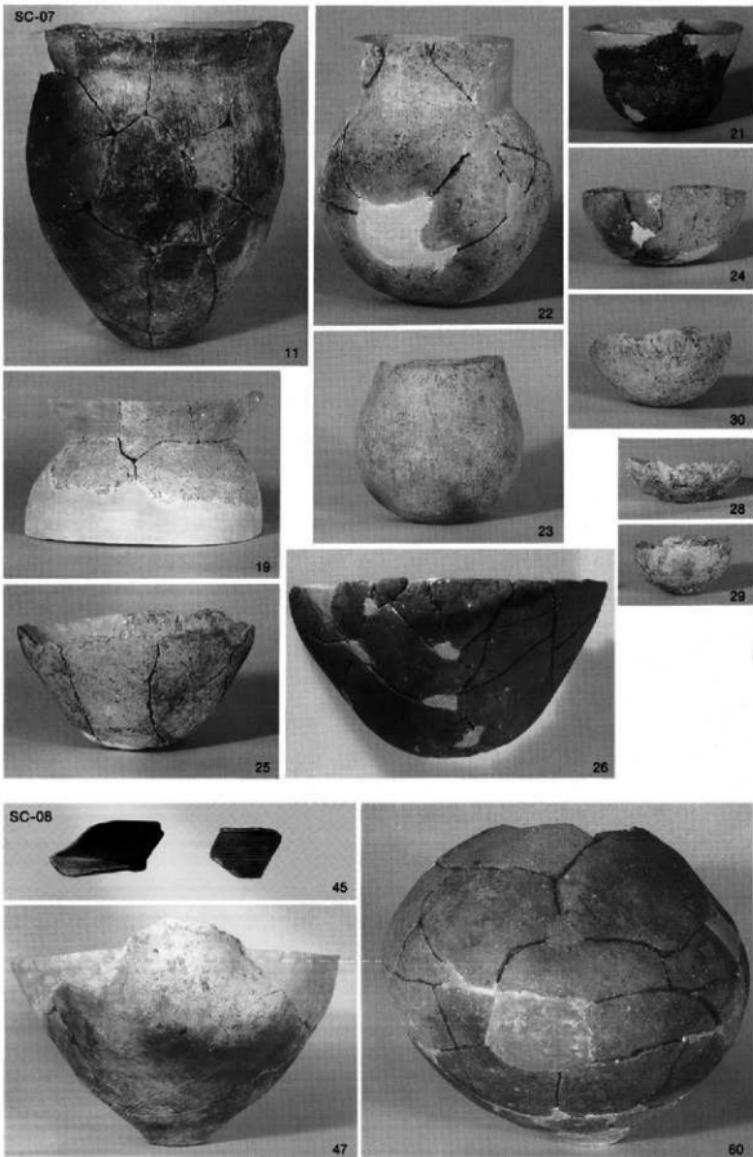
6. SK-90 (南西から)



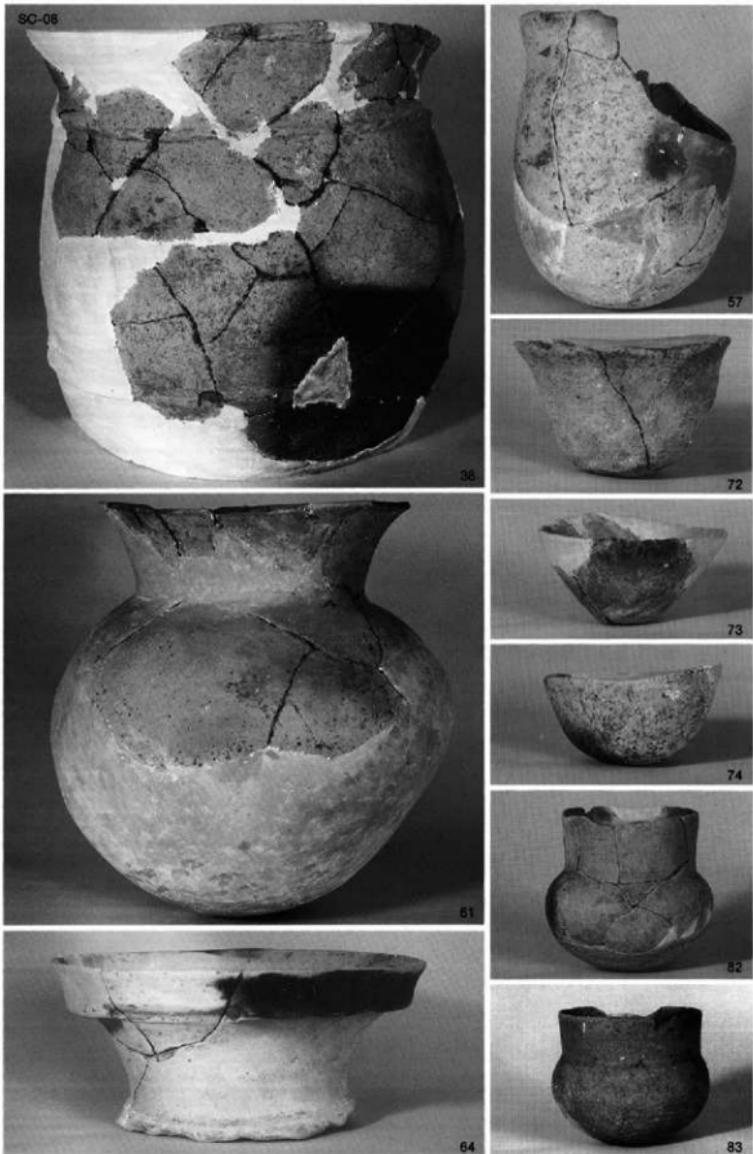
7. SK-95 (南西から)



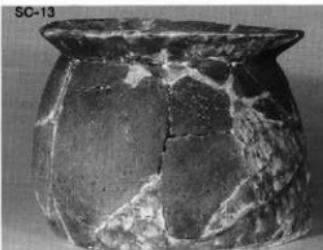
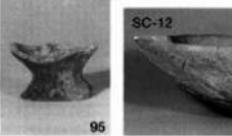
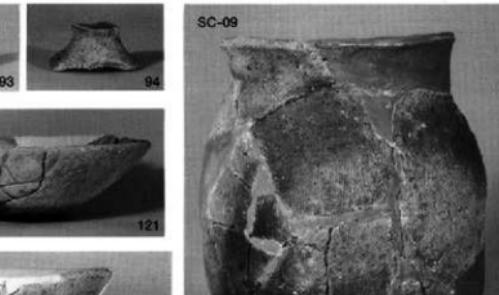
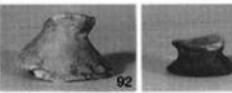
8. SK-96・106 (南西から)

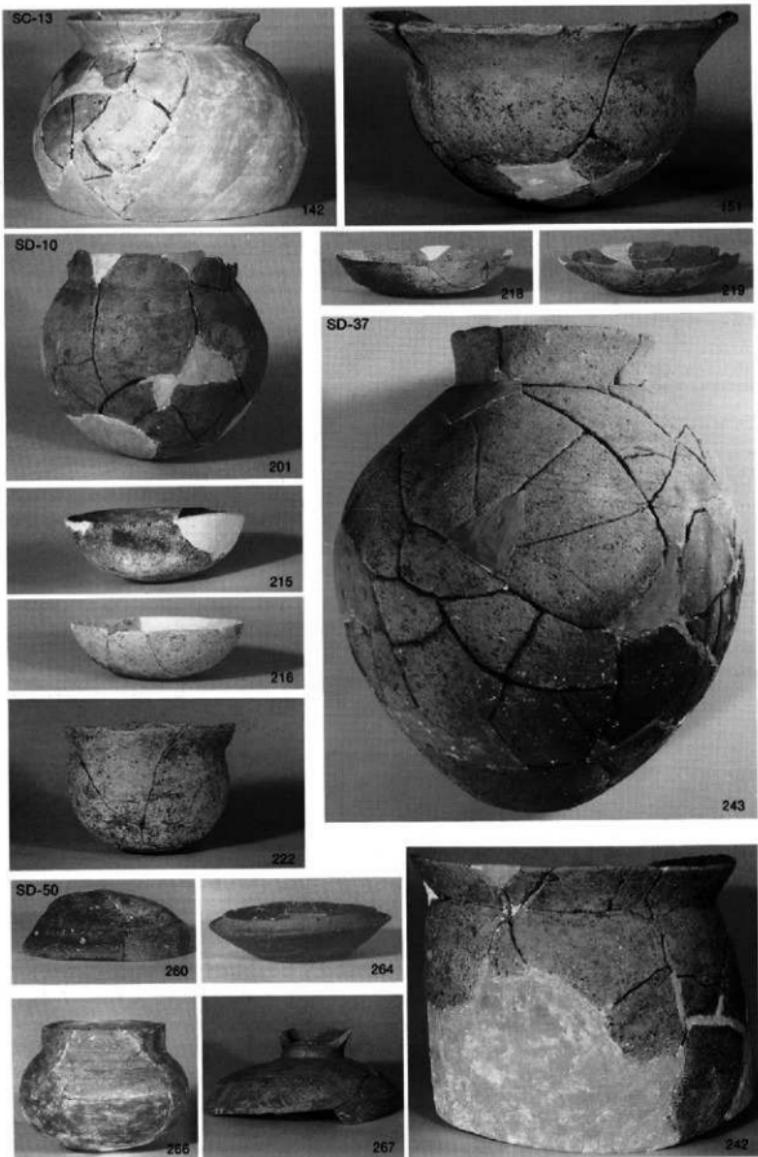


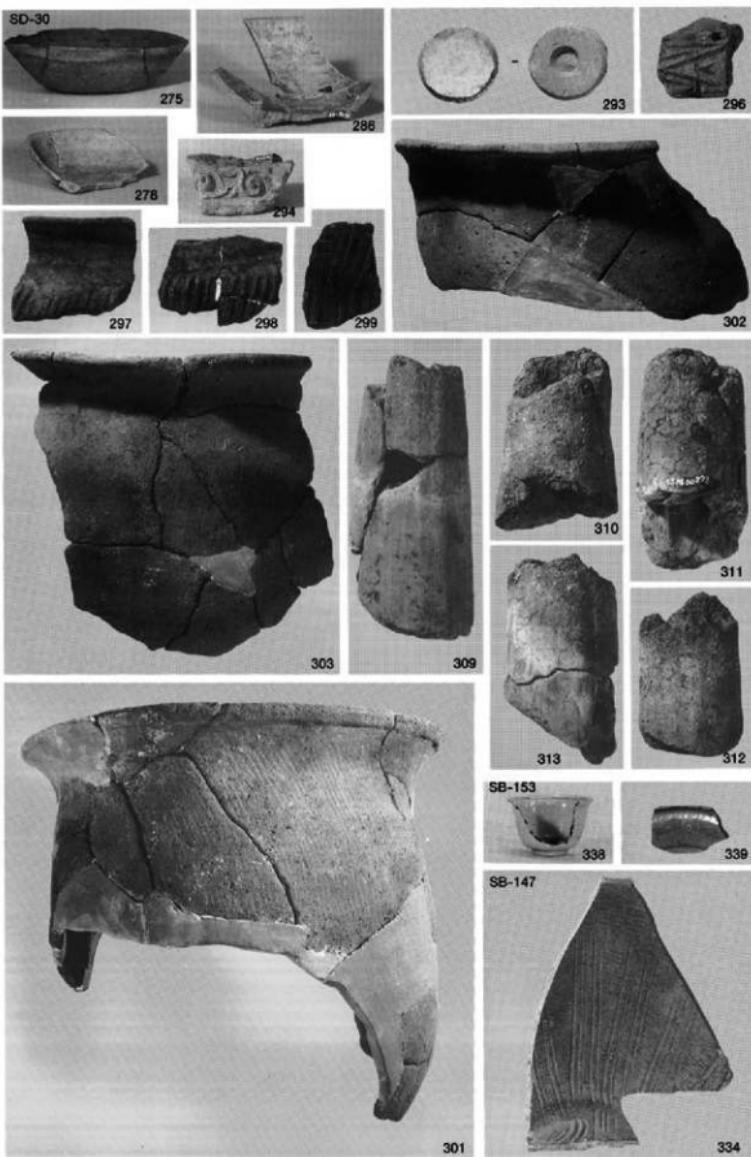
出土遺物 I



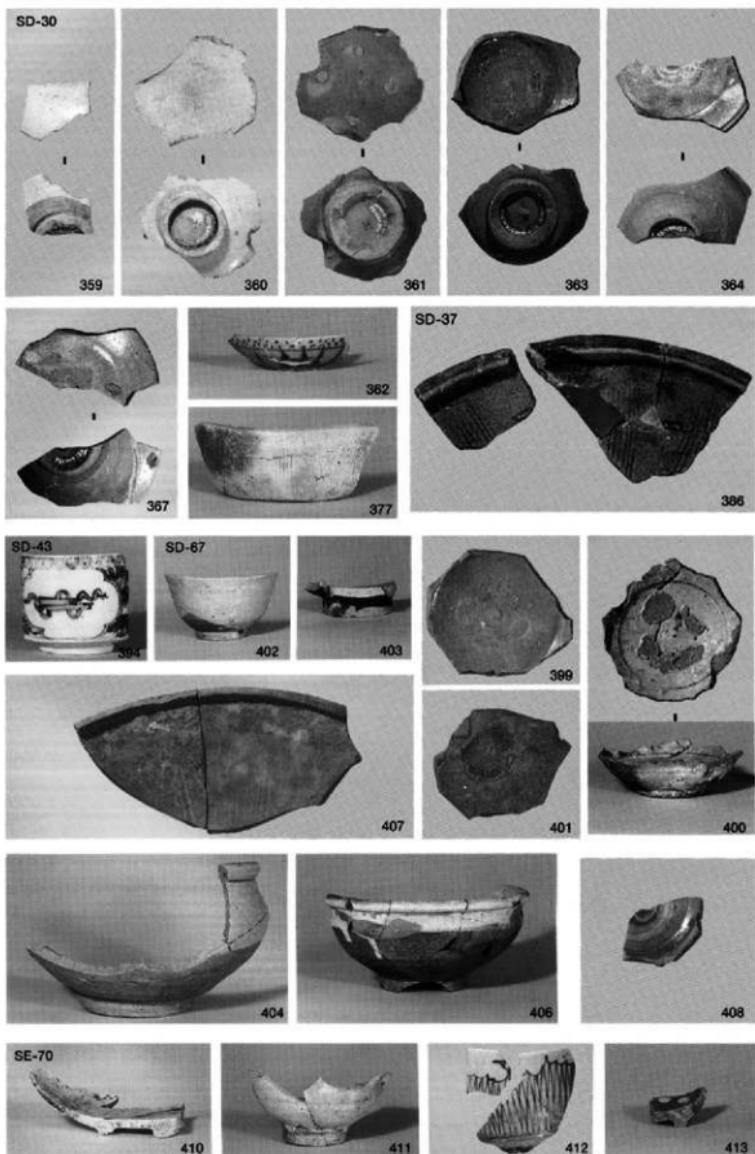
出土遺物Ⅱ

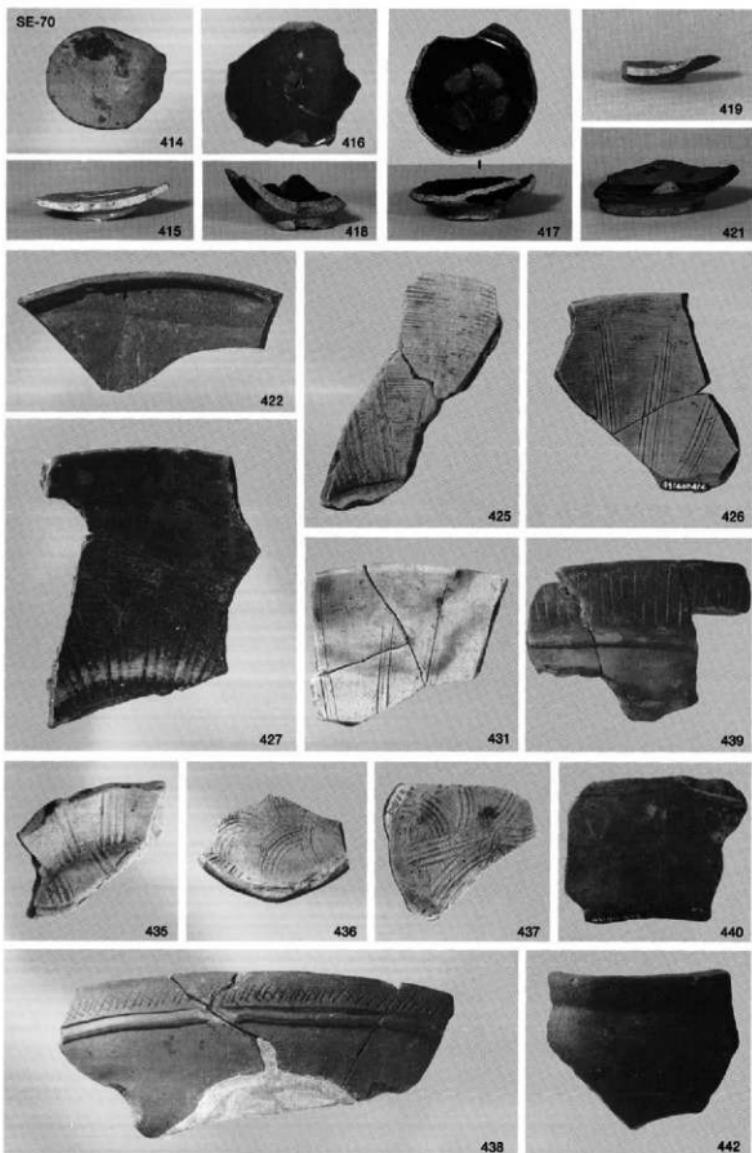






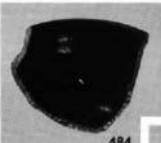
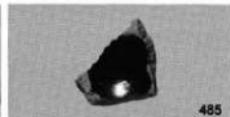
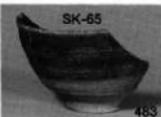
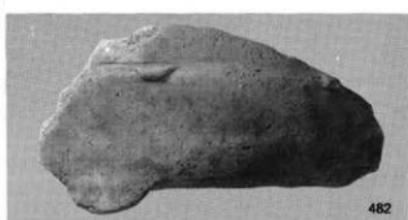
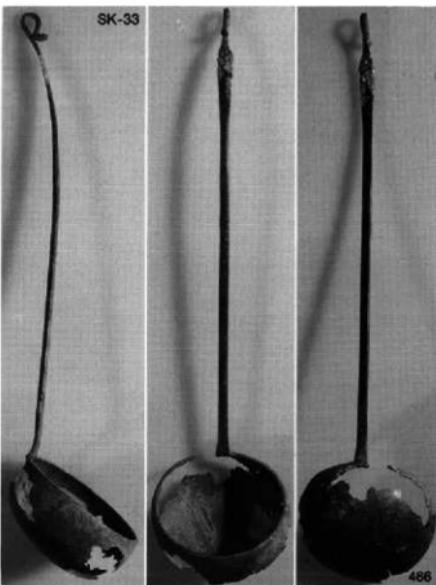
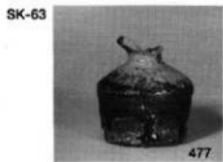
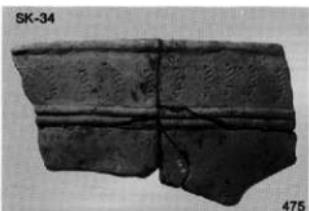
出土遺物 V

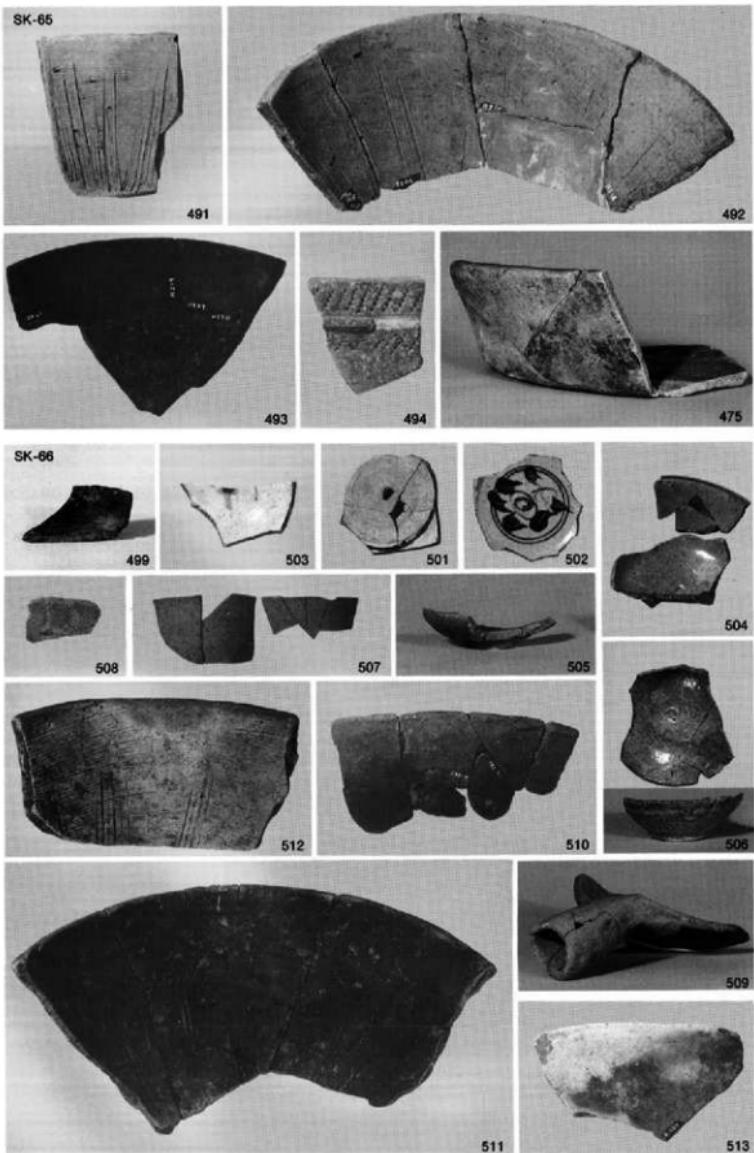




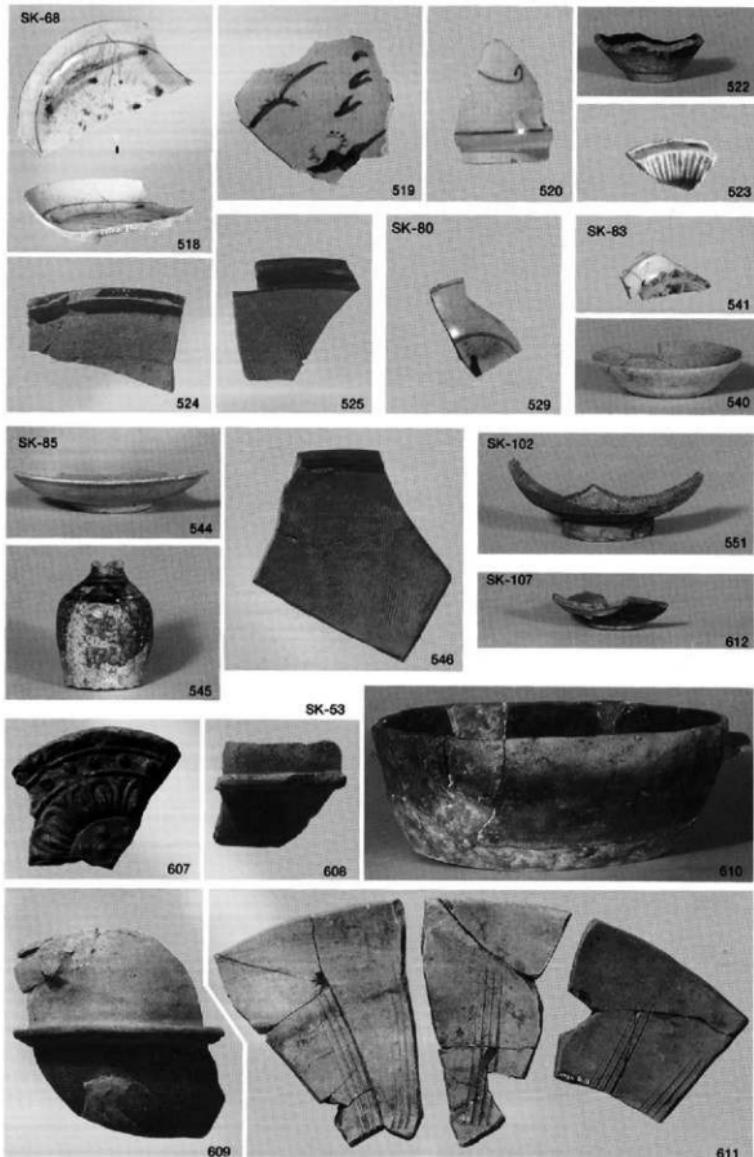


出土遺物

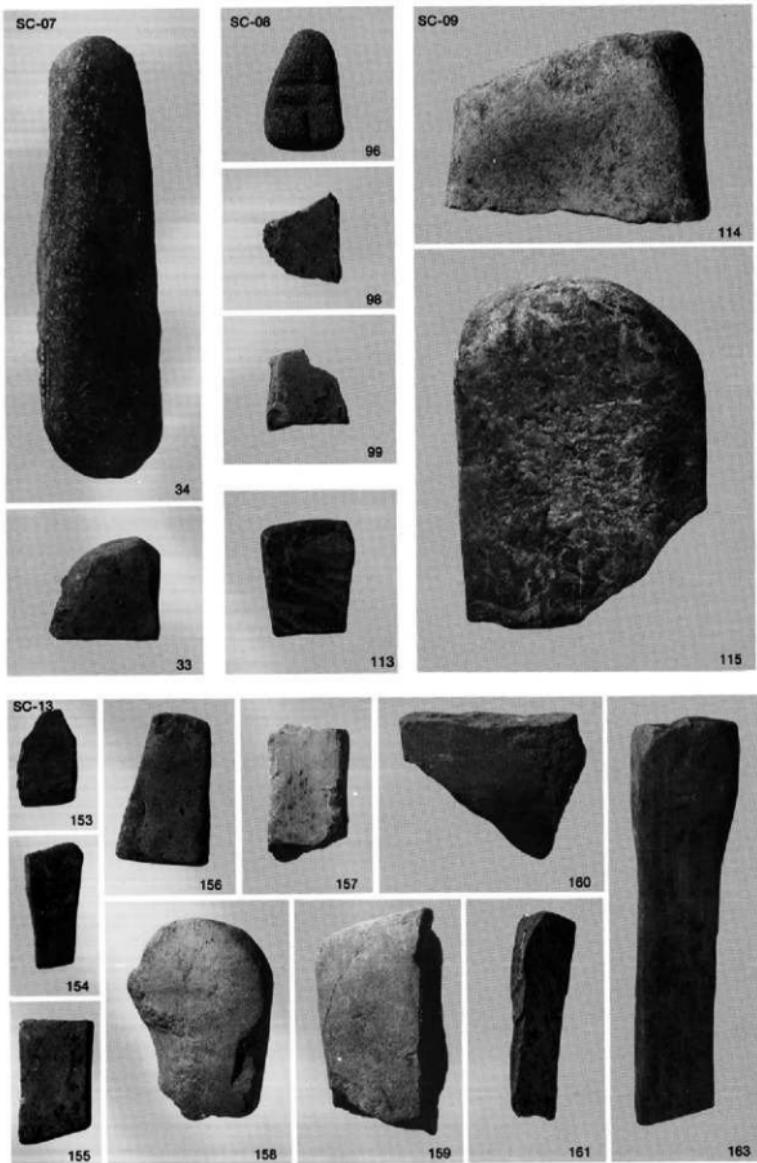




出土遺物X



出土遺物 XI



出土遺物 XX

SC-13



162



164



165

SD-10



233

SD-50



269

SD-37



249



250

SD-30

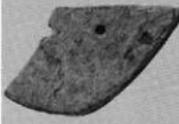


315



319

SD-02



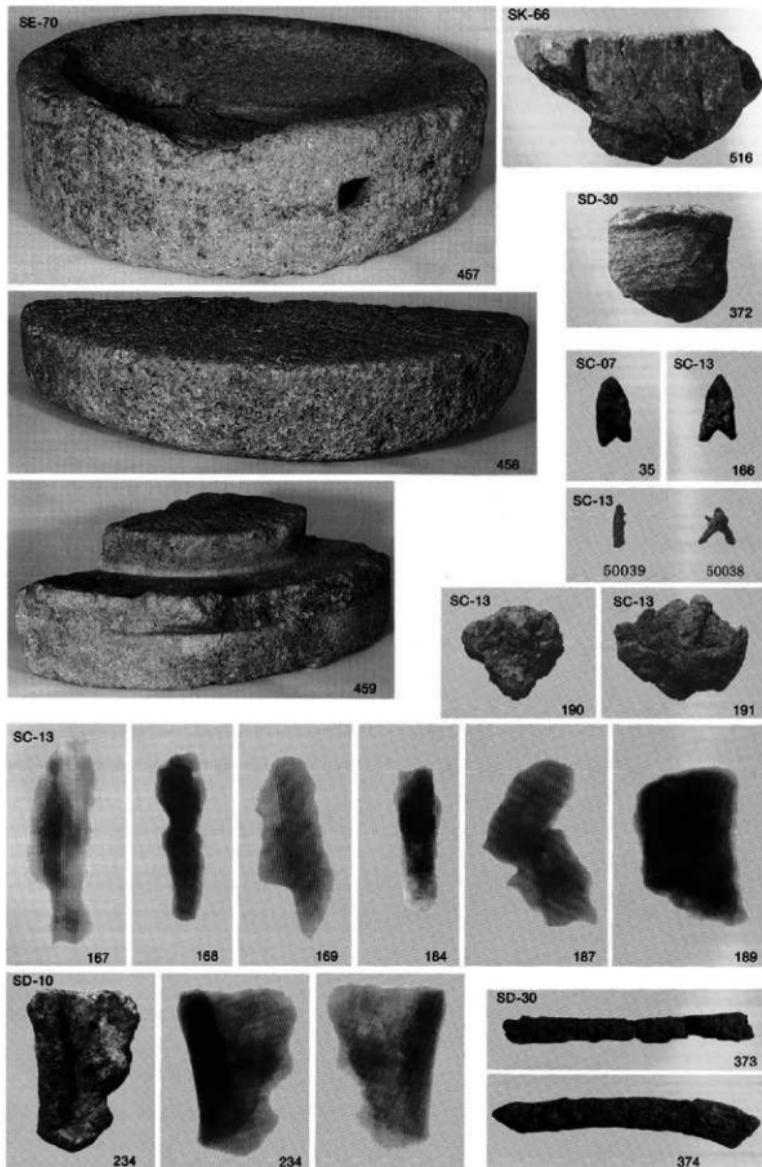
578



579



580



出土遺物W

野多目 A 遺跡 4

—野多目 A 遺跡群第 4 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第527集

1997年(平成 9 年) 3月31日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 丁目 8-1

印 刷 正光印刷株式会社

福岡市西区周船寺 3 丁目 28-1